

I S 《I Sの帝王：M
A D版》

只のカカシです

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一夏とその仲間達が「コマンドー！」的思考を巡らせる、IS学園ドンパチライフ！
とんでもねえ、待ってたんだ。

ISがお好き？結構。ではこれを読めばますます好きになる・・・筈か？残念だったなあ。当然だぜクソツタレ。元（から此処にいた）作家さん方に勝てるもんか！

※深夜テンションで書き上げたために2話以降が怪しい。連載の癖に、全くお笑いだ。運営がいたら、奴も笑うでしょう（無礼）。

1話は8月2日6時10分投稿！（見に戻ってくるのを）楽しみに待ってるぜ。

目次

第1話	コマンドー	1
第2話	お気に入り登録したら書くと言ったな・・・あれは、マジだ。	9
第3話	大戦だ!	17
第4話	逃げ!早く投稿しろってんだよ	24
このポンコツが!		24
第5話	ただの駄作ですな	32
第6話	セシリア・カルロツト	39
第7話	大惨事対戦!	47
第8話	まさに人間隕石か変態だ!	55
第9話	タフネス設計(主に胸)	63
第10話	潜入ミッション(段ボールじゃないよ!)	71
祝!10話記念	*本編には関係ありません	79
第11話	戦う食堂、攻略します	92
第12話	元○○な人達	101
第13話	待ってたんだ。	110
第14話	学友ってのは、いいもんだよ	118
なあ		118
第15話	男(トリック)と軍人(ガチ)	118

	通算一万U A達成記念	127
	第16話 こんな授業じゃないわ！た	134
	だのドンパチよ！	140
	第17話 ISでも乗って、リラックス	147
	しな	147
155	第18話 これぞセシリアの真髄	147
	第19話 美男子とマッチョマン	
164	第20話 美女と筋肉	173
	第21話 敵が変わる人達	183
	第22話 ただの打ち身ですな(大嘘)	183
	第23話 弾ける筋肉、飛び散れIS	191
	199	
	第24話 トマト祭り IN 111	207
	第25話 モーニングショット	215
	番外：このすば	224
	第26話 頭のイカした大男	231
	第27話 シュロの木陰でも焼くか	
240	第28話 飛び散れ！汗！弾ける！ポ	
	ル！	249
	第29話 脳筋と筋脳	258

第30話	お前は一体何だ？	266	けど、彼女まともじゃないの	338
第31話	バトルサマー	275	第39話	ISの訓練なんて面倒だ！早
第32話	弾けろ！テンション！飛び散	284	いとこ終わりにしようぜ！	349
れ、水！			第40話	冥土喫茶
第33話	偶にはショッピングでもする	292	第41話	IS過撃団
か			第42話	IS乗りの典型だな！過激派
第34話	バトル喫茶	300	もいい所だ	380
第35話	夏は花火に限る	309	第43話	軍には強いように見えても、
第36話	お宅砲門	319	一夏には勝てん	389
第37話	ああ駄目こんな生徒会長		第44話	あつらく？(ISの)アマチュ
じゃないわ！肩書きの付いた変態よ！			アだあ	400
329			第45話	急ごう！サツと行ってブチの
第38話	水色の髪の変態女がいるんだ		めそう	409

第46話	読者の腹筋一周忌	419	第53話	キャプテン一夏のワークアウトだ!	498
第47話	このISのボルト2、3個ぶつとんでんじゃねーの?	429	第54話	空母を爆破して帰る、丁度	506
第48話	どこの馬鹿だ、無人機寄越したの	440	第55話	死ぬときや芋づる式	514
第49話	E(えらい)O(漢らしい)S(装備ですね)	452	第56話	修学旅行って何だ?	524
番外編	アウトレイジ	462	第57話	何か匂うな?	533
第50話	子守は得意じゃない	470	第58話	おおい、怒ることたねえだろ!?	542
第51話	ようこそ! IS学園ドツタン☆ボタン☆大騒ぎ!	479	第59話	彼女に演技させる方が楽だもんな。違うか?	551
第52話	いたぞ! いたぞ! いたぞ!!!	487	第60話	何をするう! 何故撃った!	560

第61話 見たら絶対その気になるって

第67話 テキパキサクサクと | 621

第62話 特攻野郎? | 568

第68話 病気なんて私には関係ないも | 621

第63話 ホントにドイツ人は怒りっぱいんだから | 577

の | 631

第64話 フレンチはもてはやされすぎ | 585

第69話 怖いか? 当然、クソツタレ! | 642

だ | 593

い・・・・ | 651

第65話 小僧に口の利き方教えてやる | 602

第70話 銃弾や砲弾の傷じやな | 642

第66話 この世にある小説(要出展)番組の中で、何といつても一番面白いのは | 602

第71話 これぞアイリスの真髄 | 662

く? | 611

番外編: 暮桜が散るとき I S 学園は沈没する。 | 672

く? | 611

第72話 君を取り戻せ! スニーカーズ | 679

く? | 611

!! | 679

第1話 コマンドー

黒板、いや無駄にハイテクなこの学園はスクリーンを採用している。その前で、副担任の山田先生が微笑みながら話す。

「全員揃ってますねー。それではSHRを始めます。」

しかし、小柄な先生だ。クラスの女子と比べても、頭一つ分小さい。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

「……………」

何故、黙っている。俺も言えたタチではないが。

「で、では、自己紹介をお願いします。出席番号順で。」

小柄な副担任は狼狽えている。教員の割りには、面白い奴だ。

今日は高校の入学式。しかし、クラス、いやIS学園に女子しかいないのは何故だ？

共学（驚愕）だろ？

「……………くん。織斑一夏君！」

「何だー！」

そんな大声で呼ばなくなっちゃって聞こえている。高く大きな声のせいで、頭の中がドンパ

チしてやがる。

「ご、ごめんね。大きな声で呼んじやつて。お、怒ってますか？聞こえてましたか？自己紹介して貰っても良いですか？」

「分かつてます。」

「い、何時の間に立ち上がって!!」

「静かに、素早くです。姉が教えたんですよ。」

全く、あの姉は何処で何の仕事をしてるんだ。

「そ、そうですか。あ、それでは自己紹介をお願いします。」

後ろを見ると、女子女子女子。アイツだったら、カカシ揃いだと言いそうだ。

「俺の名前は織斑一夏だ。よろしく頼む。」

「何て時期に、何て所で試験をしやがる。」

二月の真ん中、俺は中学3年として受験まったただ中だ。

近所の高校を受験する為に11分先の駅まで行かんにやなんののだが、大雪のせいで電車は止まっている。

くそつたれが。全く誰だ、去年のテストでカンニングした野郎は。面白い奴だ。探し出して晒し上げるのは、受験の後にしてやろう。↑*まだ自分がネタにされるなんて知

りません

私立の受験には振り替え日がないので、仕方なくカバン片手に山越え中だ。

俺の志望校は、私立藍越学園。一番気に入ってんのは、学費だ。．．．ん？姉のスネを囓ってんだから、安いところを選ぶのは当然のことだ。幸い姉の稼ぎは良いので、金に困っている訳じゃないが．．．。

先のことは、受かってから考えるところとして．．．。この建物は一体何だ。部屋の付いた迷路じゃないか。

まあ良い。試してみるか（物理）。次に見つけたドアを開けてやる。OK？

（鍵「Wrong・And, NOoooooooooooo!!!」）

バキイイイイイイイン！

金属のへしやげる音が廊下に響く。この手に限（鍵）る。

何だ、この妙な空間は。IS？何故こんな所に？

「男には動かせん。．．．筈だよな？」

何故か起動を始めるIS。同時に、意識に無数の情報が雪崩れ込んでくる。

「何故だ！男には動かせん」

「筈か？残念だったな。3階！非常事態だ！操縦者は男性！髪は濃紺、身長170c

m！学ラン姿の筋肉モリモリ、マッチョマンの変態だ！」

何時の間にそこにいた。それに即座に通報とは、中々優秀な奴だ。最初の2言は余計だったが。

「それだけだ。」

それだけ言つて座ると・・・。

がたたつ！何故転ぶ。面白い奴だ。(真顔)

「あ、あのー・・・。」

パァン！【9998／9999】

「何だー！」

この叩き方！間違いない！

「ターミネーちゃん！」

バァンツ！【9996／9999】

「誰が抹殺者か！」

成る程、良いセンスだ！・・・んん？

「あ、織斑先生！会議、お疲れ様です。」

「ああ、山田君。コンサート・・・クラスへの挨拶、ご苦労だった。」

「山田君に何枚貰った！」

「10枚、ポンツとく・・・」

ズバン!!【9991／9999】

「・・・馬鹿者が！一夏あ、頭はどんなだ？」

「近くに寄って確かめろ。」

「いや、結構。ロクなことはない。」

つち、ダメか。

「さて諸君、私を覚えているかね。」

「当然だ、誰が忘れるものか。」

ズバン！【9989／9999】

「少し黙ってろ。」

次の瞬間、

「キヤー！千冬様！千冬様よー！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて、東南アジアかアフリカか越えてここまで来ました！」

最後の奴、随分と遠くから来たものだ。

「ここに入るのに、えらく苦労したのだ。」*・*ドヤア

「お姉様のためなら、私死ねます！」

まずいな、頭のドンパチがぶり返してきた。

「全く、これだけの馬鹿共カカシを良く集めるものですな。全く笑えない。」
少しは笑ったら・・・

「キヤー、もつと叱つて罵つて！」

「でも、時には優しく！」

「つけ上がったら「ばらばら死体にして飛ばすぞ？」はい・・・」
要らんな。凄え威圧感だ。悪くねえぜ。・・・んんん？

「で？お前は、ロクに自己紹介もできんのか？」

「悪いが千冬姉、俺は」

ズバアン！【9994／9999】 ↑時間が空いたので回復した

「織斑先生と呼べ！OK？」

「OK！」

ズバアン！！【9986／9999】

「返事は、『はい』だ！」

「はい。」

分かればいいと言うと、千冬姉は

ズバアン【9985／9999】

やっぱり叩きに來たか！流石だ、千冬姉！．．．んんん？

ズバァン！【9983／9999】

「あの、織斑君つて、織斑先生の「弟ですが何か？」」

「ああ！いいなあ！代わつて欲しいなあ！」

「この姉が欲しいのか？んー？あーげないwww（．．．ん×5？）」

スカッ【9984／9999】↑首を捻つたら躲せた。

「よく避けたな、一夏。長い付き合いだ、苦しませたかねえ！一発で眉間に叩き込んでやる！」

と、その時、チャイムが教室に鳴り響いた。

「つち、SHRは終わりだ。諸君らには、半年以内にISの基本を覚えて貰う。その後実習だが、半月で覚えろ！いいな！私の言葉には返事をしろ！良くなくと返事をしろ！いいな！」

「いや、結構！（．．．ん×6？）」

パァン！！【9970／9999】

うっかり考え事をしていたら、クリーンヒットしてしまった。くそつたれ。

「こーなりたくなければな！」

初日のSHRは、姉の半ギレと呆れ声の元に幕を降ろした。

さて、
1時間目の授業は何だったかな。

第2話 お気に入り登録したら書くと言ったな・・・あれは、マジだ。

授業中、隣からの視線に振り向く。

「・・・何だ。」

「おっと、そんな視線を向けないで。びびって会話も出来やしないわ。」

「・・・。」

観念したか？

「え、えつと・・・参考書見せてくれないかな。」

「駄目だ。」

「どうして!」

「知らない方が良い。理由を言うと、俺が死ぬ。」

「分かるわ、話して数分の私でも死ねばいいと思うの・・・ん?」

おい、今何を考えた。

ズババァン! 【9991/9999】 【19/100】

「次喋ったら口を縫い合わずぞ。」

「俺は良い。だが隣の女子は止めてやれ。死ぬほどダメージを受けてる。」

「私に叩かせたのは、お前等だ。」

・・・くたばりやがれ。

ズバァン！【9987／9999】

「・・・ちよつと良いか。」

「OK！（ボタン！）」↑机に伏せた音。

「おい！」

「安心しろ。冗談だ。」

「廊下に来い。」

「ああ。」

凄いな、モーゼの行進みたいだ。上級生まで分けていくんだからな。・・・何故教室内に上級生がいる。

「そう言えば」

「何です？」

「去年、剣道で全国優勝したらしいな。」

「当然です。Pr・・・どこで聞いた!？」

「新聞を読んだんだ。」（・・・んん？）

「何で読んだ！」

「秘密だ」

「もうやだ！・・・んん？」

コイツ、男口調だった気が・・・。

「鶏肉だお（ωω；）」

「!？」

「い、いや何でもない・・・／＼。」

「・・・何年ぶりだ。」

か、会話が続かない・・・。

「6年ぶりですなあ。昔を思い出さあ！」

「（髪型も）変わらんな。」

「お前に褒められたんだ。」

「箒、」

ちっ、時間か。クソツタレ。

「一夏あ、遅れるぜ、急ぎなよ・・・んんん？」

「今行く。」

まずい、ギリギリだ。

「怖いか？織斑。クソツタレ当然だ、元ブリュンヒルデの私に勝てるもんか。」

「試してみるか？俺（私）だって元篠ノ之流剣道者だ。」

教室内がドンパチ、賑やかになった。

【9000／20000】↑言わずもがな

【800／9999】↑同上

【300／1000】↑箒

【1／100】↑その他、全員。

「———ですの、ISの基本的な———であつて、その———すると・・・。」

鼻提灯がドンパチする中、山田先生はスヤスヤ・・・すらすらと読み進めていく。

プチ↑ターミネーちゃんがキレたお（*・〇・；）！！

ピッ（乾燥機、ON！）

「クラスメイトを起こさないでやってくれ。死ぬほど疲れてる。」

「もう遅い。」

ズドオオオン！↑鼻提灯が一齐に破裂した音。

「どうして起こした！」

「・・・参考書はどうした！」

「!!」↑枕にするものがなかったので起きてた。

流石だ千冬姉。やっぱり聞いてきたか。・・・んん？

「(机の上にある)これだけだ。」

「」

ベシツッ!【1017/9999】

「・・・起きていたことだけ評価してやる。で、参考書をどこへやった。」

「アンタが部屋でドンパチした後の片付けと一緒に捨てちまったんだよ!」(・・・んんん?)

「・・・後で再発行してやる。取りに來い。」

「資源を無駄に使うな。・・・必要ない。」

「何だと?」

「捨てる前に全部覚えておいたんだ。」

「流石だ一夏。やっぱり(予習を)やって來たか!」

「当然だ。使うのは・・・兵器だからな。」(・・・ん×4?)

「良い心懸^{セン}けだ。」

「お、織斑君、分からないところは無いですか?参考書無くても付いてきますか?放

課後、（補習）授業受けて貰って良いですか？」

「いや、結構！」（・・・使い勝手良いな。）

「ああ、そんなに言われたら私・・・。」

「あー、んんっ！山田先生、座布団はk・・・授業の続きを。」

「は、はい！」

流石だ千冬姉。余裕の迫力だ、威圧感が違いますよ。・・・ん×5？

威圧感に圧倒された山田先生は、教壇に上がって、落とされた電子ペンを踏んで転げた。

全くお笑いだ！・・・ん×6？

「ちよつと、よろしくて？」

「良くなあ〜い！」（・・・ん×7？）↑ジョン繋がりのあの人。

「な、何ですのそのお返事は!？」

「」

「」

（自分のキャラが）ワシにも分からん！・・・ん×8？

「聞いてますの？」

「当然だ、クソツタレ！」

「まあ！何ですのそのお返事は?! 私に話し掛けられるだけで光栄だと思わなくて!?」

「面白い奴だ。名前を覚えるのは最後にしてやろう。」

「あなた！私の自己紹介を聞いていませんでしたの!?!」

「部屋がドンパチ、騒がしかったから俺が最後だったろ。忘れたのか。」

「!!」

忘れてやがったなこのアバズレが。．．．ん×9?

「まあ、良いだろう。で、一体何の用だ。」

「ええ。忘れていましたわ。世界で初めての男性IS操縦者が現れたと聞きましたから、イギリスの代表候補生である私わたくしがわざわざ会いに来ましたのよ。」

「イギリスの代表候補?」

「ええ、何か?」

「代表候補生がなんだ?」

「で、ですから入試で唯一教官を倒した私わたしがあなたに直接ご教授差し上げようと言うのですよ!?!」

「お前は今、唯一教官を倒したと言ったな。」

「そうですわ！それが何か?」

第3話大戦だ！

「・・・この時間はまず、再来週行われるクラス対抗戦に出場する生徒を選出する。やりたければ手を挙げろ！OK?」

「OK!」↑ポケットに手を突っ込んでる。

ズバン! [1941/9999] ↑Critical Hit*筋肉装甲*

「真面目にやれ!・・・自薦他薦は問わん!誰かいなか?」

「はい!私は織斑君が良いと思います!」

「私もそれが良いです!」

「候補者は織斑一夏。男性、170cm。筋肉モリモリマッチョマンの変態だ。・・・

他にいないか?」

「俺は変態じゃない!(・・・ん?) 傍観側で静かに暮らすつもりです。」

「どこかの馬鹿(共)が、お前が適任だと推薦したんだよ。諦める。」

ふざけやがってえ・・・!

「そんなの認められませんか!クラスの諸君。あなた方には、1組のような学級のおかれた状況が、まったく理解できていらっしやらないのですわ!全員まとめて(私を)推

薦せんかい!」

どうした、何故もつと言わない。

「口だけは達者なクラスの代表には、この私が適任です。」↑お?自嘲かな?

「自覚はあるのだな、小娘。」

「当然ですわ!実力で言えば、クラス代表を張れるのは、・・・私だけです。」↑自分を指さしながら

「ブルーティアーズ」『え?私?』↑*誰にも聞こえていません!

「それマジでいつてんの?」↑クラスメイトのヤジ

良い返しだ。どこで覚えた。

「当たり前ですわ!」

「まったくお笑いだ。一夏が居たら、奴も笑うでしょう。」

箒、(お前の目に見えているもの)内容は何だ?

「1組には、圧倒的実力でクラスメイトを導く代表が、必要なのですわ!」

「何故あなたが?」↑クラスメイトのヤジ

「いいですか!?!私のクラスの代表に、日本のトーシローごときが選出されることは許されませんわ!文化的に英国に劣っている国で3年間も暮らすこと自体、耐え難い苦痛というのに・・・。」

「イギリスの代表候補、クラスメイトは関係ない。止めておけ。目的は俺だろう。」
「フツ、ウフフフフフフフフフフ……。」

「堪忍袋の緒をやられた。お前にも勝てる。……来いよセシリア。レーザーライフルでも何でも持ってかかってこい！俺が（クラス代表になりたくないから）苦しみがいて、勝つていく様を見るのが望みだったんだろう？そうじゃないのかセシリア。」↑やたら強気

「手前えを、倒してやる！」

「さあ、こつちを向け。一対一だ。クラスメイトに邪魔されて、楽しみをふいにしたくないだろう？……来いよセシリア。怖いのか？」

「きやー！」↑クラスの歓喜の声

「ハンデなんていらねえ！フフフエへへ……。」

「きやー！」↑クラスの悲鳴

「ハンデにもう用はねえ！……mk^{はじ}Ⅲ^きも必要ねえや、へへへへへっ。誰が手前なんか、……あなたなんか怖くありませんわ！」

〈へもどつた!?!〉

「……貴方、ぶつ殺して差し上げますわ！」↑日本語おかしいぞ！

「そこまでだ。それ以上喋ると、会話を縫い合わすぞ！」↑会話を縫い合わすって何!?

「提案があります!」↑勇氣あるな!

「なんだ?言ってみろ。」

「2人でI S戦を行って勝った方をクラス代表にしてはどうでしょう!」
「何でコイツがまともなんだ?狂ってりやスツキリするの。」

「・・・山田君、学内の通信とアリーナの使用状況を全て傍受しろ。」

「な、何が始まるんですか?」

「大惨事敗戦だ。」

「「ええええええええええ」」

ズパアン!!20hite【|99/100】↑お、1残ったな(錯乱)・・・ん?

「織斑先生、^{テレックス}回線に緊急の^{業務}メッセ^{連絡}ージです。」

「なんだ?・・・はい、分かりました。」

「何が始まるんだ?」

「勝負は一週間後の月曜日だ!放課後、第三アリーナでドンパト・・・勝負を行う。それだけだ。では、授業を(キーンコーン・・・)」

「何て都合の良いチャイムだ。流石だI S学園。・・・ん?」

「さて帰るか。」

「ああ、織斑君。帰ったかと思いました。」

「今帰ろうとしたところだ。何ですか?」

「あ、はい。織斑君の部屋が決まりました。」

「部屋!?! 決まってなかつたんじゃ……。」

「残念だったなあ。トリックだよ。」

「そう言うことです。」

「千冬姉! 会議に行つたんじゃ……。」

バコーン「9998/9999」↑教室に誰もいなかったので弱め。

「それもトリニ鶏ツク肉だ。」

「!?!」

「(部屋に) 乗り込むまでは監視カメラが見張ってる。部屋の中では作者が部屋替えまで一緒だ。投稿が途絶えたら、作者は死ぬ。」↑……ええ!?

「(今月に入ってから) ビール代に幾ら使った。」

「十万円ポンと注ぎ込んだぜ。……だけどな一夏。お前と住めるなら、ノンアルコールでも喜んで呑むぜ。」

ドベキシツ「オフウイ……」【1/20000】↑一夏がキレた

「お、織斑先生!?!」

「今度余計に酒を買ったら、財布を縫い合わすぞ。……山田先生、頼みがあるんだが、千冬姉に余計な金を使わせないでくれ。死ぬほど浪費が激しい。」

「りよ、了解です……。」

「ああ、それと、大浴場は使えないからな!」【2000/20000】
「!？」

「流石だ千冬姉。やつぱり回復してきたか!」……んん?

「当然だぜ、くそつたれ。」大浴場はOK?」

「OK!」↑お風呂セット抱えて

「お、織斑君!?!女の子とお風呂に入りたいんですか!?!」

「面白い奴だ。お前と入るのは最後にしてやろう。」

「え、ええええええええええ!?!だ、駄目ですよお!ああ、織斑先生がお姉さんにい。」

「止まれえ!」

ベキ【0/3000】

「(心肺が) 止まりました。」↑いかんでしょ

「まずいな。」

バチイ! 【2999/3000】↑高压電線から大電流。*焦げます

「この手に限る。」

「織斑君は、誰かに『野蛮だ』って言われたこと無い？」

「帰るぞ、急げ。」

「え、お、織斑君、お風呂の件は？」

「一緒に入ってやると言ったな。あれは・・・ウソだ。」

「ええ!?!織斑君は女の子に興味がないんですか!?!」

「今の聞いた!?!中学時代の交友関係の裏付けを取って!11時間後までにな!」

「はあ、山田先生。」

「何でしょうか、織斑先生!」

「バコーン【2/3000】」

「一夏、もう帰って良い。」

「もう（こんな学園は）お断りだ!」

「ババババシン!」【1/150】↑野次馬が肅正された音。ああ、大丈夫。明日には記憶も無くなってるでしょう。

第4話 急げ!早く投稿しろってんだよこのポンコツが

!

「1025号室。ここか。」

ガチャ↑鍵が開いていることに疑問なし

「べ(ネ) ット!?!何故、二つも?」

「トリックだよ。」↑廊下から。*千冬姉

「バツタアーン!」↑2000/200」↑ドアの耐久値

「!!」↑ドアを壊されて外へ出られない。

「誰かいるのか?!」

「!!」

ガチャッ

「影も形もない。気のせいか……。」

「……。」

バタン

「うっ」

「動くな！殺されたいか！」

「箒！洗面所に戻ったんじや・・・。」

「残念だったなあ・・・。トリックだよ。IS委員会に連れ回されてからずーつと想い続けてきた。よおやくその日がやって来た。・・・長かったぜ！」

「服はどこだ！」 ↑目を逸らしながら

「!?み、見るな!!」

「安心しろ、何もしない。」

「ふざけるなあ!!」 ↑音速で木刀を掴みながら。

ズドオンツッ！【0／100】 ↑枕

「木刀を放せ！」

「いや結構！」

ジリッ・・・

「!!」 ドアが壊れてて r y

「怖いか、クソツたれ。^夏当然だぜ、元篠ノ之流看板娘の私に勝てるもんか！」

「試してみるか？ 俺だつて元篠ノ之流だ・・・。フンツッ！」

ドゴオ、ベキイ、ガシャアーン!!

「くたばれクソツたれが・・・。」

パキッ【0/1000】↑木刀

「!?!」

「服を着るくたばんのはお前だ。」↑服一式を投げつけながら。

「どこで拾った?」

「タンスを調べた。」

「」

「更識!辺りを調べろ。」↑さぼり仲間。

「・・・一夏!中に居るんだろう。織斑出て来い!千冬だ!」

「千冬姉だ。部屋を戻すんだ。」

「開け!開けてんだ!」↑壊したのあなたです。

メギギョー!

「立て付けの悪いドアだ。」↑筋肉修理術

「奴は何だ?」

「生徒会長だ。」

「優秀ですか?」

「優秀だ。一夏ほどではないがな。」

「・・・会議はどうした。」

「・・・まあ落ち着け。竹刀を突きつけられてはビビッて」

ドンッ！【199／200】↑壁*石膏ボードなので音が良く響く

「びびって話も」

ドンッ！【198／200】

「は、はなしも出来やしねえ。・・・会議は大丈夫だ一夏。少なくとも今のところはな。この先どうなるかはあんた次第だ。会議に戻したければ、私たちに協力しろ。OK?」

「OK!」

ズドドンッ！【53／20000】【18／5000】

「サボリ魔は見つからんのか!」

「イエ、エエア、(事務員)3人の死体(死んでない)だけです!まだ他にもあると?」
「織斑千冬が生きていればまだ死体は増えるはずだ」↑つまり千冬はボコられた。

「お前は最後に帰すと約束したな」

「そ、そうだ一夏、た、助け——」

「あれは嘘だ!」

「うわぁーっ!!」↑元プリユンヒルデが引き摺られる悲鳴。

「ドアが亡くなっちゃたわ・・・。」

「・・・これで出来た。」↑タンス

「・・・そうねへどこが?」。・・・あいつ(ら)はどうしたの?」

「(会議室に) 放してやった。」

「・・・一夏、その、何だ。・・・同じ部屋で・・・暮らす上での線引きみたいなのは必要だと思わないか?」

「誰が思うか、この脳筋野郎。」↑野郎ではない。

「・・・一夏、お前には私達のおかれた状況が、全く理解できておらんのだ。」

「・・・。」

「私達には、厳正な区切りで私達の生活を守る規律が必要なのだよ。」

「なぜ、寮長にやらせない。奴等の仕事だろう?」↑千冬姉がそれって事を知らない

「それは、私が君を信頼しているからだ。私の心の英雄と言うほどに。一方の寮長は、

会議室から逃走を図った身だ。」

「・・・ああ。楽しんでドアを壊したからな。」

「君なら、まともな思考の元で厳正な決まりを作ることが出来るだろう。」

〈くたばりやがれ（千冬姉）〉

「じゃ、じゃあ、まずはシャワーだ。私は19時から20時。一夏は20時から21時だ。OK?」

「OK!」

シャワールーム、ガチャー!↑19時

「おい!・・・まあ、今日は私は使ったから良いか。」

「そう言えば一夏、男子トイレの位置は確認してるのか?」

「当然です。プロですから。しかしこちらには、切り札法律があります。」・・・ん?

「何の法律です?」

「(緊急なら) 男が女子トイレを使用しても問題ない。そう言うことだ。」・・・ん?

「お前は! 暫く会わないうちに(筋肉モリモリモリマッチョマンの) 変態趣味に走るとは! 流石だ一夏、見損なつたぞ。」

「晩飯で腹をやられた! 頼む助けてくれ、その女子トイレだけが頼りなんだ。残された時間は数分だけ。それが過ぎれば、** (自主規制) は殺されるんだ!」

「嘘をつけ! さつきまで平然と暴れ回ってただろうが!」

ツゴス! 【99999/99999】*No Damage!*

「……どうして怒ってる。」

「……生まれつきだ。」

「そうか。……ん? (味噌汁の) 中身は何だ? これ。」

「知らない方が良いわ。」 ↑ 厨房から

「……。」 ↑ 厨房付近の全員

「……どうした? 一夏。」

「お、織斑君、隣良いかな?」

「どうして俺の隣なんだ? 他の空いてる席に座ればスツキリするのに。」

「もう、織斑君ったら古いんだ。席は詰めるのが今のトレンドよ (大嘘)。」

「へえつ……。俺が中学校の頃に、友達の中華屋に行つて、席を詰めたら (座り方が)

(衛生的に) 破壊的だって説教されたんだ。その通りかもな。」

「へ、へー。そうなんだ……。」

「つて、うわ篠ノ之さん達、朝そんなに食べるんだ。」

「当然だぜくそつたれ。元剣道部の俺 (私) に (箸のペースで) 勝てるもんか!」

「……試してみるか? 私だってハンドボール部だ。」

テーブルがドンパチ、賑やかになった。

ズバババァン！【9998／9999】↑食事中なので即時回復

【1999／2000】↑同上

【1／100】↑残（念でもなく）当（然）

「食事は静かに、迅速に摂れ！」

「当然です学生ですから。」

「分かっているなら良い。貴様等！もし余計な遅刻したらグラウンドを十周走らすぞ。」

「じゃ、先に行くぞ。」

「え!?ちよ、2人とも（教室に行くには）早いよ〜！」

「グラウンドだ。」

「グラウンド？」

「走りに行くぞ。」

「食後の運動だ。」

「だって、一周十Kmあるんだよ!?!」

「ただの中庭ですなあ。俺（私）達なら瞬きする間に、十周できる。忘れないこと

だ。」・・・みんなん?

第5話 ただの駄作ですな

「と言う訳で——作られており——しています。また、——します。——な
どの機能があつて——」

「先生、何か体の中を弄られているみたいで怖いんですけど、大丈夫なんでしょう
か……。」

「大丈夫ですよ。そうですね、身の回りにあるもので言えば皆さんしているブラ
ジャーですね。あれはサポートをする訳で、人体には影響がありません。勿論、自分の
サイズにあつたものを選ばないと、織斑さんみたいにカッチカチの胸になつてしまいま
す。」↑女子しかいないと思つている。

「何でブラジャーなんか付ける必要があるんだ？鍛えればいいじゃないか。」

「……!?あ、あ、えー、えつと、そ、そうですね！織斑君はしませんよね。ええ、
で、でもその胸元に見えているのは？」

「残念だつたなあ……トリックだよ。」（……ん？）↑コルセットを見せながら。

「（昨日）てめえの授業の後ずーつと復習を続けていた。よおやくその疲労がやつて来
た……痛かつたぜ！」（……んん？）↑昨日殆ど授業してない。

「んん！山田君、織斑に座布団一枚やって！」↑ブラコン

「!?!」

「あ、それから大事なことがあって、ISにも意識に似たようなものがあります。一緒に過ごした時間に対して、ええっと、操縦時間に比例してISも操縦者の性格を理解しようとしています。」↑一周回って冷静になった。

「つまり、鍛えた分だけ筋肉モリモリになると言うことですか？」↑汚染されたクラスメイオ

「!?!?!」

「違います！より性能を引き出せることになる訳です！」

「あつてるじゃないですか！筋肉モリモリになれば身体能力も上がります！」

「うるせえ、少し黙ってる！このオカマ野郎（つまり女）。べらべら喋りやがって！次喋ったら、（一夏が座っている座布団のカバーを頭からかぶせて、カバーの）口を縫い合わせるぞ。」

「篠ノ之さん、怖い。」

「!?!?!?!」

「山田先生、何で俺を見てるんだ？」

「!!い、いえ、何でもないですよ？」

「(その程度のことでは狼狽えるようでは) トーシローですな。」

「織斑先生! 酷いですよ!」

「ねえねえ、織斑君さあ!」

「はいはい、質問でえーす!」

「今日のお昼空いてますか? 放課後暇ですか? 夜も暇して貰って良いですか?」

「?」↑*筋肉会話だったら、同時に多数と喋る事が出来る(つまり筋肉会話じゃない)。

「・・・(録音用の)マイクは縛ってる。その口も閉じとけ。」

「篠ノ之さん、怖ーい。ところで、織斑先生って、家ではどんな感じなの?」

「(生活しているだけで)部屋がドンパチ、賑やか——」

「パアンツ!」9990/9999 ↑Critical Hit!

「油断するな! 休み時間は終わりだ。散れ!」

「駄目だ。」

「ほお、口答えるか。また、ドンパチするか?」

「いや、結構!!」↑クラスの総意

良い返しだ、どこで身につけた。

「その手に持っている紙は何だ？」

「ああ、お前に用意されるISの準備が遅れている。」

「誰が手配したんです？」

「学園だ。何せ訓練機に予備がない。・・・(ISなんて)手前えには必要ねえだろうがな。」

「し、指定機!?一年生に!？」

「当然ですわ。プロ私(と戦うの)ですから!」

「面白い奴だ。お前を倒すのは、最後にしてやろう。」

「うるさい奴等だ。気に障った。お前等を叩くのは、最初にしてやろう!」

バコォーン! 【9980 / 9999】

【50 / 1500】

「何か言うことはあるか？」

「はい、先生!篠ノ之さんは篠ノ之博士の関係者ですか?」↑今関係ない

「そうだ、篠ノ之の姉だ。」

「篠ノ之さん!質問、質問!篠ノ之博士ってどんな人?」

「手先だけは器用な、ただの力カシうさぎですな。」

「実の姉に対して、それは酷くない?」

「事実を言ってるだけです。気が向かなければ、あいつはISを作らない。ISが求められていようがいまいが、そいつは関係ない。アイツはサボリ続ける。ISを作らせることが出来るのは、・・・私だけです。」

「尊敬しているのは、私達じゃなくて篠ノ之さんじゃないの？篠ノ之さんこそ篠ノ之博士を尊敬しているんだわ。」

「勿論です。姉妹ですから。・・・ただし、此方には大きな恨みりがあります。・・・I「さて、授業を始めるぞ。」・・・。」

「そう言えば。」【9999/9999】↑食事中

「・・・何だ？一夏。」【2000/2000】↑同上

「少しトレーニングに付き合ってくれ。お前だけが唯一の望みなんだ。このままだと、(力がコントロールできなくて)セシリアが(俺に)殺される。箒に頼むしかないんだ。」

「馬鹿セシリアが下らない挑発をするからだ。自業自得だろ。まあいい。」

「君を(トレーニングに)巻き込んですまないと思っている。」

「まあお茶でも飲んでリラックスしな。剣道の面倒(くらい)は私がしっかり見てやるよ。」

「ねえ。君が噂の男の子でしょ？」

「多分な。」

「代表候補生の子と勝負するって、本当なの？」

「ああ、本当だ。」

「でも君、素人だよな？ I Sの稼働時間はどれくらいなの？」

「10分だ。」

「ああ、駄目、こんなトーシロー初めてよ。」

「……」

「(代表候補生と比べて)稼働時間が丸きり違うわ！(向こうは)最低でも300時間は飛ばしてるわよ！」

「だったらI Sから引き摺りおろせば良いだろ！」↑暴論

「そんな……。それじゃ駄目よ、私がI Sについて教えてあげる。」

「いや、結構。私が教えるので。」

「ええ？でも君だつて新入生でしょ？教えられるの？」

「当然です。私の姉は……篠ノ之東ですから。」

「っ！そ、そう。じゃあ、私は必要ないかしらね。」

「……どこでI Sの操縦を習った？」

「はったりを使ったのよ。．．．ISから引き摺り降ろす手だてなんかあるのか？」

「ISから引き摺り下ろすと言ったな？．．．あれは嘘だ。」

「はったりを使っているのは、君の方じゃないのか？一夏。」

「当然です。(筋肉の)プロですから。(．．．んんん?)」

第6話 セシリア・カルロツト

「あれ？篠^{期待のルーキー}ノ之さん？どうしたの。」

「竹刀は降ろしてろ。その羨望の眼差しも仕舞え。……一夏のトレーニングです。お気遣い無く。」↑態度でかいな

「良いのか？あんな態度で。」

「大丈夫さ。心配ない。」↑それ大丈夫じゃ無かったんですが

「そうか、なら良い。……防具は？」

「(お前とやるには) ただのカザリですな。では行くぞ！」

(銃器も無いのに) 剣道場がバキバキ、賑やかになった。

【0／500】↑折れた竹刀の山×10

【1／15000】↑剣道場

【1／2000±50】↑巻き込まれた剣道部

【どういうことだ！】【350／2000】

【あの通りだ！】【2000／9999】

「どうしてここまで（力のコントロールが）弱くなっている。」

「この間まで、受験だったからな。その後も、缶詰にされていたしな。」

「・・・中学は何部にいた？」

「剣道部にいたが（すぐに）退部した。」

「それじゃあ、帰宅部と言うことか。」

「そうだ。」

「直す！ 鍛え直す！ このままではISを破壊しかねん！ 毎日3時間、私と稽古だ。」

「お前も3本は折ったろう！」

「うるさい！ 剣道にだらしないの、馬鹿マッチョマンが！」

「やるか！」

ドンッ！ 【0／15000】 ↑剣道場（防振ゴム）終了のお知らせ。

【9000／9000】 ↑剣道場（建物）残りライフ

「2人ともやり過ぎだわ！」

バキィ！バキィ！バリーンッ！ 【8571／9000】

ガッンッ！ 【800／9999】

【43／2000】

「次余計に暴れたら、剣道場の梁に縫い合わずぞ。」

「ちふ・・・織斑先生!?会議に出席したんじゃ・・・。」

「トリック（山田先生に押しつけた）だよ。」

「ウオオオオオ・・・。」

「今日（のトレーニング）は終わりだ!」

『ピンポンパンポンツとくれたぜ。』

変な放送だな。

『織斑先生、繰り返します織斑先生：会議室に帰ってくるのを楽しみに待ってるぜ。』

「ウワアアアアア!!」↑逃げる悲鳴

「ふざけやがってえ!!待てこのクソツタレ!」

「待て一夏!話せば分か」

ゴオン!【1/20000】*Critical Hit!*

「会議室に落ちろ千冬姉!」↑下の階

「又アアアアアアア!」

*床&天井が抜けたので、練習&会議終了。

「まだ誰か残っているか?」↑警備員

「イエ、アアアアア!2人だけです。」

メキッ！バキッ！【0／500】↑竹刀が以下略

「鍵を閉めたい！出て貰えないだろうか。」

「これが最後です」

ベキッ！【0／1000】↑木刀終了のお知らせ

「よくこんな時間まで騒ぐ体力があるモンですなあ。全く驚愕だ。しかし、この惨状をどうする気だね？」

「心配するな、片付ける。」

「直れ！直れてんだよこのポンコツが！」

ギギギギギイイイ【6000／9000】

「この手に限る。」↑スマツチヨハウジング

「む、無茶苦茶だああああああああ！」

「さて、帰るぞ一夏。（食堂の営業時間に）遅れるぜえ、急ぎなよ。」

「分かってる。今行く。」

「え？剣道場？ああ、大丈夫明日にはすっかり直ってるでしょう。」

—翌週・月曜日—

「なあ箒。」

「何だ？」

「ISが来てない。」

「知らん。．．．どこに行くんだ？」

「壊物だ。」

「買い物？」

「100番のコンテナ。これだ。」

ガツシヤアアアアン！↑スマツチヨキー

「ワアオ．．．。それは何？」

ロケットランチャー
「対IS兵器だ。」

「．．．。」

「よし！行くぞ！」

ガシヤツガシヤツガシヤツガシヤツ．．．．．↑100%OFF

「あ！織斑君来た！」

「きゃー！織斑くん！」

「えー？あれがIS？」

ガシャンッ!

デエエエエエエン! 【50000 / 50000】
ゴマンドー!

「あ、貴方その格好は一体・・・!?」

「ISが来てない。始めるぞ。」↑筋肉ごり押し

「えええ!?!」

『おい織斑、ちよつと戻ってこい。ISが届いた。』

「・・・アリーナがドンパチ賑やかになつたらな。」

『おい、織斑!ちよつと待て!』

「何か言うことは?」

「ふつ、精々私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊——」

ズドオオオオオン! 【26000 / 27000】

「キャアッ!あ、貴方無茶苦茶しますわね!」

ズドツズドオオオン!ズドオオオン! 【24500 / 27000】 3 Hit!

「獲物の前で舌なめずりは三流のする事だ!」(・・・ん?)

「くっ!行きなさいブルー・ティアーズ!」

ズバババババッ! 【0 / 500】 ↑BT

「なっ!?!」

ア
ヒューン、ピッ！ドオオオオンッ！【24000／27000】↑手投げクレイモ

「ビット操作中に動けないようではただ的カカシですな。」（・・・んん？）

「ちいつ！ティアーズはまだあつてよ！」

「むっ？ぬあつ！」↑太陽とBT（弾道型）が重なって見えなかった

ズドオンッ！【40000／50000】↑当たり所が悪かった

「くっ・・・。」↑衝撃でビットイン！

「よく帰ってきたな織斑。さっさとISを装着しろ。」

ガシヤツガシヤツガチャン！キュイイイイイン！

「あ、織斑君がISを着けて出てきた！」

「キヤーー！」

デエエエエエエエエエン！【99999／99999】↑雪片を肩に担いだ音。

「それが貴方のISですか？」

「そうだ。これで目一杯ドンパチ出来る。エネルギーもたつぷりあるしな！」

『何を下らないことを言ってる！』

「行くぞ！」↑*2回目

ギイイイイインッ！【0／500】↑BT

「そ、そんな馬鹿な!? 遠距離の私に近接武器で挑もうと!? 武器はありで無いので!」
「いや、コレだけだ。」

「そんな・・・!」

ガアアアアアアン! 【22000/27000】↑雪片Attack

「ええい! ブルー・ティアーズ!」

ビシッ! 【99998/99999】↑軽く当たった

「ふざけやがってえ!」

ゴンッ! 【2000/27000】↑雪片が突き刺さった音

「キヤアアアアア! な、こ、こんな・・・。」

【1000/27000】

「地面に落ちろセシリア!!」

【0/27000】

「アアアアアアアア!」

【1500/1500】↑IS解除(地面)

『し、試合終了! 勝者、織斑一夏! これぞTHE・肉体派! 織斑一夏の神髄だ!』

「きやあああああー! よく分かんないけどスゴい!」

「戦う一夏を応援します!」

第7話 大惨事対戦！

―試合後、ピットにて―

「織斑！そのままISに乗ってる！」

「何故です？」

「白式ですが、フォーマットとフィッティングがまだです。もうじき完了するので、待っていて下さい。」

「必要ない。」

「駄目ですよ！専用機は身につけていないと馴染みません!!」

「だったら、背負えばいいだろ！」

「無茶です!!」

「錘は俺の大好物。筋トレに丁度良いぜ。トレーニング量も減ってるしな！」

「何を下らないこと言っている！大人しくフォーマットとフィッティングをしろ。〇

K？」

「OK！」

バコーンッ！【99990／99999】↑条件反射

「返事は『はい』だ！」

「・・・はい。」

—翌日—

「皆さんご存じの通り、1年1組の代表は織斑一夏君に決定しました！」

「ああ、どうも・・・。マッ〇ーと紙を貰えるか？」

「はい。・・・どうぞ。」

「イエエーイー!!」 ↑盛り上がるクラスメイト

「一つ聞きたいんだが・・・。」 キュツキュツ

「何でしょう、織斑君。」

「勝った方が、辞退することは可能か？」

「そ、それは——」

「駄目だ!!」

「!?!」 【9988／9999】 ↑鼓膜をやられた

「ま、まあ、皆さんもそう言っていますし、何より・・・」

「私が辞退したからですわ!」

「何で自薦に辞退の権限があるんだ? 他薦が辞退できればスッキリするのに。」

「勝つたのは、貴方ですわ！」

「……くたばりやがれ。」

「そ、それに、ですわ。私のように華奢な体つきよりも、一夏さんのような筋肉モリモリマッチョマンの変態……紳士の方が相応しいのは決定的ですから！」

「（一夏を）変態だというのは、酷いんじゃないか？」

「変態だと思っっているのは私ではなく、貴方ではないのですか？ 篠ノ之箒。貴方こそ、一夏さんを（マッチョマンの）変態だと思っっているのですわ。」

「勿論です。幼馴染みですから。」

「見上げた度胸だ馬鹿者共。だがな、手前えらの命を張るほどの値打ちのある会話か？」

「ア、アアアアア……!!」

「（出席簿を）持つてんのは右手だ。かつて世界を取った手だぜ？」

「せ、先生、頼む、見逃してく——」

ズバァンツッ！【500/2000】

【5/1500】

「セシリア、大丈夫か？」

「一夏さんが話し掛けてくれるなんて……。死んでいるのではないのでしょうか？」

「何か廊下が騒がしいな……。見てこい一夏。」

「駄目だ！」

「何ぞ「一夏サアアアン？」……。セシリアか。」

「メツセージは知っているか？」

「寮長室、織斑先生、階・号室、施設だな。OK。」

「奴が俺を見つけるまでは、内線を使うな。」

「どうしてそれと分かる？」

「アリーナがドンパチ賑やかになるからだ。」

「気を付けろ。」

「ありがとう。」↑10階の窓から跳躍*タフネス設計

「そのの貴方！一夏サアアアアンの部屋はどこかご存じ？」

「し、知りません！。。。や、山田先生が知っている。」

「どうもですわ！」

「一夏サアアアアンを見ませんでしたか？」

「さ、さつきアリーナの方に……。散歩だつて。」

「!!」

「見つけましたわ!・・・よくも、よくもこの私、セシリア・オルコットに恥を掻かせてくれましたたわね!」

ビシユーン!!【0／10】↑ダミー

「一夏め!くそお、逃げたか!・・・ウオオ!」

バチィ!【0／5000】↑アリーナのシールド

「随分と探しましたわ!一夏さん!貴方に恥を掻かされてからずーつと復讐を思い続けてきました。よおやくその時がやって来ました。・・・長かったですわ!!」

「寮長室。繰り返します、寮長室。・・・こちらは10階の1025号室。織斑先生に緊急のメッセージがあります、どうぞ。繰り返す、織斑先生です、どうぞ。」

「ウイー。何だ?・・・何!?!すぐに行く!」↑3話を反省してない

「フー、フー・・・ゲホッ。」【1499／1500】

「どうした、疲れたのか?」【9999／9999】

が覚めたら)
は日曜日ですから。

第8話 まさに人間隕石か変態だ！

—4月下旬、授業時間—

「これから、基本的な飛行操縦を実戦して貰う。飛んでこい、織斑・オルコット。」

「ウラァー！」

「何を！負けませんわ！」

「ババァン！」【99997／99999】

【24500／27000】

「(ISの) 展開と収納の速度を競うな！・・・早く飛べ！OK？」

「OK(ですわ)！」

スカッ

「・・・必ず叩かれに戻ってこい。」

「お断りだ！」

「織斑、喋っている暇があるのか？置いて行かれてるぞ！飛ばせ！」

「オラァー！」

「キヤー！！」

シユバアンツ!! [15000/5000] ↑アリーナのシールド全損

「やり過ぎだ!馬鹿者!」

ガンツ! [99988/99999] ↑投げ出席簿

バスンツ! [14003/27000] ↑投げ山田先生*投げるものがなかったの

「・・・セシリア、ISが飛んでいる理由は何だ?」

「こういうことですわ!」

バコーン! ↑筋肉言語

「・・・良く分かった。」

「2人とも流さないで下さい!!」

ポヨオン [4000/4000] ↑胸部装甲で跳ね返った音

「(セシリアと二人で) 楽しそうだなあ、一夏!!・・・一夏あ、降りてきてみる!一発

で眉間を叩いてやるぜ!小学校からの剣道仲間だ。突き合い。苦しませたかねえ!」

「・・・篠ノ之。そのインカムは私のだ。放せ!」

ゴツ [1980/2000]

「織斑、オルコット!急降下と完全停止をやれ!地上から10cm以内でだ!」

「では一夏さん、お先に。」

「9cmか。上出来だ。次、織斑!」

「ヌオオオ！」

ドゴオオオーンッー！【9900／15000】

「誰が地面に突っ込めと言った！」

「完全停止と、（凹んだ）地面から10cm以内だ。」

タフネス設計の骨格と肉体を持った、人間隕石！

「・・・その筋肉は締m、仕舞ってる。穴も後で埋めとけ。」↑先日、貴方は大穴空けたでしょ！

「・・・はい。」

「織斑、武器を展開しろ！」

ガチャーン！デエエエエエエン！

「・・・（ロケットランチャーを）どこから持ってきた！」

「今出てきた。・・・貴方が（先月騒いだ時に）埋めたんですよ。」

「・・・そうか。・・・織斑、雪片を出せ！」

ガチャツ！デエエエエエエエエエエエエン！

「うるさ」「キヤー!!」「・・・。」↑クラスの歓喜に掻き消される千冬の声

「セシリア、武装を展開しろ！」

「はい！」

ガチャー↑ブルー・ティアーズ(ビット)

「・・・mkⅢを出せ!」↑嘘ではないので叩けない

「はい!」

「良い速さだ。だがな、オルコット。横向きに展開して誰を撃つつもりだ?」

「問題ありませんわ、織斑先生。私とブルー・ティアーズなら、どんな相手が来ようと怖くありません!」

「口だけは達者な代表候補生ですな。全くお笑いだ。一夏に聞かせたら、奴も笑うでしょう。」

「ちふ・・・織斑先生、俺は何です?」

「お前は私織斑の生徒班だ。一夏は家にいる。」

「「・・・。」」

「」

「・・・オルコット!近接武器を出せ!」

「ぶっ殺してやる!」↑インターセプター展開の掛け声

「「!?!」」

ズバァン!?!【3/27000】

「もつとまともな呼び出しを考えるんだな!」

『一夏サアアアン！貴方のせいですわよ！』↑個人間秘匿通信

「何だ、生きていたのか。」

『し、静かにして下さいまし！そ、それより、（筋肉言語を覚えさせた）責任を取って下さい！OK?』

「OK!」

ズドンッ！【1／1500】↑超電磁出席簿

「勝手に個人間秘匿通信を使うとは、良い度胸だ、オルコット。気に入った。叩くのは最後にしてやろう。」

「もう叩いただろ！いい加減にしろ！」（・・・ん?）」

ズバァン！【99979／99999】

「て、言うか皆さん！このグランドの惨状を見て、何とも思わないんですか!？」

「え?なに言ってるの、やまや?」↑マヒツてる

「そうだよ、何かおかしい?」↑同上

「うう、また始末書が・・・。」

「安心しろ、いま綺麗にする。」

「え?織斑君?此処に整備道具はありませんよ?」

「平坦に成れッてんだ、この凸凹があ!」

「整備道具がないな．．．。壊物に行くか。」

「買い物？付き合うよ！」

（整備に巻き込んで）悪いな。」

「115号室。ここだ、開いてくれ！」

ビー！

「ワアオ．．．。」

「これと、これと．．．それからコレだ。」

「コレなに？」

「砂利だ。」

「砂利い？」

「行くぞ！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ．．．．．↑台車（100%OFF）

「まだ、凹んでいるところはあるのか？」

「平坦だけです。」

「次の授業が始まる。織斑、戻ってこい。」

「(昼飯がまだなので) お断りだ！」

第9話 タフネス設計（主に胸）

「ここがI S学園……。ようやくその日がやって来ー——」

ドンツ！……。デエエエエエエエエエ！↑打ち上げ式筋肉花火

「!?……。今の音何？一夏？……。そんなことより、早く受付に行かなきゃ。……。つ

て、ここどこ？誰かー！」↑アクサ○イレクト*CM

「……………」

「返事なんか無いわよね……。手がかりは、政府高官のくれたメモ……。」

クシャツ【2／15】↑ポケットのメモ紙を広げた

「……。本校舎一階総合受付事務所。ああ、ダメ！こんなのメモじゃないわ！ただのガ

ム捨て用の紙よ！」

クシャツ【1／15】↑ポケットに突っ込んだ

「……。嫌んなっちゃう。」

へまずい、本気で迷子になった。……。誰もいな——

「だから、感覚をだな……。」

「!!」

「やっただろ！」

〈来た！一夏!!〉↑ガッツポ

「いっ——」

「あんなのは剣道じゃないわ！何本竹刀が折れた！」

「箒が、ロケットランチャーを撃つからだ！」↑突っ込むところが違う

〈あ・・・、あれロケットランチャーだったんだ・・・つてか剣道場つて、ロケットランチャーに耐えられたっけ?〉↑心配するところが違う

「そもそも、何処でロケット——」

〈ああ、ダメ！こんなの私の知っている人間一夏じゃないわ！ただの変態よ！てか、あの女は何!?アイツもやり過ぎだわ!〉

「あ、あったわ。以外と近くに・・・。すいません！転入生の風鈴音です。」

「はい、・・・確かにご本人様ですね。では、此方の書類に——」
デエエエエエエエエエン！

「何!?!」

「まあ落ち着け。そんなにビビられちゃ、焦って書類も出せやしねえ。」

〈・・・(こ)本当にIS学園?・・・はあ。〉

「以上です。お疲れ様でした。頑張ってくださいね。」

「ありがとうございます。．．．それから一つ聞きたいんですけど、織斑一夏って何組ですか？」

「二組ですよ。気になりますか？．．．ちなみに彼、一組の代表です。」

「二組の代表って決まっていますか？決まったら教えてくれませんか？」

「決まっていますけど．．．、聞いてどうするんですか？」

「譲って（物理）ってお願いするんです！」

—その頃、食堂では．．．—

「織斑君！クレイム．．．クラス代表就任、おめでとう。」

「ああ、どうも。皿と箸を貰えるかな？」

「どうぞぞ！」

「どうも。．．．何で、皆で持つんだ？一人で持てばすつきりするの。」

「もう、織斑君ったら古いんだ！今の流行は、皆で手渡すのよ。」

「へっ．．．。俺が中学校の頃に、友達のレストランの奴が妹と二人で運ぼうとして、（パランスが取りにくくて）破壊的だつて怒られてたぞ。．．．その通りかもな。．．．」

（前菜の）中身は何だこれ？」

「知らない方が良いわ。」↑作ってきたクラスメイト

「……。」↑その他クラスメイト

「そ、それではご唱和下さい！織斑君」「おめでとーう！」「」

ポンツポポポンポルツポポン↑クラツカー

「……。」面白いクラツカーだ。気に入った。使うのは最後にしてやろう。」

ゲエエエエエン！↑凰鈴音がビビツタやつ

「最後に使うと言ったな？……あれは嘘だ。」

「「「イエーイー!!」」↑慣れた

「いやー、これでクラス対抗も（筋肉が）盛りがるね！」

「ホントホント！」

「何で2組がいるんだ？1組の騒ぎのはずじゃあ……。」

「当然です。同級生バリビですから。」

「」

（大盛りの皿が）ドンパチ賑やかになった。

「……お前は誰だ。」

「まあ落ち着け。ペンを突き付けられてはビビって取材もできやしねえ。……新聞部だ、織斑君。少なくとも今のところはな。」↑今の所……は？

「安心しろ、何もしない。」

「本当に？」

「・・・信じろよ。」

「・・・分かったわ。私の名前は黛薫子。副部長です。では、本題。無事取材を終わらせて欲しいければ、私達に協力しろ。OK？」

「OK！」↑快諾

「ではまず、ずばり織斑君！クラス代表になった感想を！」

「アリーナをドンパチ賑やかにしてやる。」

「うん、良いねえ！適当に付け加え「たら、バラバラ死体にして飛ばすぞ？」・・・たりしないから、安心して。・・・うん。それから、セシリアちゃんも、何かコメント頂戴！」

「私ですか？そうですわね。一夏さんについては沢山話したいことがあるのですが、何故私が辞退し——」

「黛さん。頼みがあるんだが、セシリアに話を振らないでくれ。死ぬほど（話が）長いんだ。」

「分かったわ。捏造しとく。」

「（捏造させて）すまないと思ってる。」

「さてと、もうこんな時間ね。最後に写真撮らせて貰っても良い？」

「勿論です。」

「お、みんなノリが良いねえ！へホントはツーショットが欲しかったけど……。はい、寄って寄って!!」

「「イエローローイ！」」

「じゃあ、撮りまーす。笑顔だ、笑顔を出せ！ $35 \times 51 \div 24$ は？」

「2？」

「違う、74.3だ！」

パシヤ「17/5231」↑残り記録枚数

「箒、どうやって計算した。」

「（黛の）メモ帳（に書いてあるの）を見たのよ。」

―パーティー終了後、1025号室―

「疲れたかクソツタレ^夏。当然だぜ。女子の体力に勝てるもんか！」

「試してみるか？俺だつて元男子中学生だ。」

バシインツ！「50/9999」↑精神ポイント*ライフじゃないよ！

「ツ……。」

「一夏ア、体力はどんなだ？」

「もう一発殴つて、確かめろ。」

「いや結構。遠慮させて貰う。」

「怖いのか？」

「当然だ。剣道で暴れられる相手がいなくなったら困る。」

「・・・着替えて寝るか。」

「ああ、そうしよう。・・・一夏、糸が出てるぞ。」

「ん？・・・まて」

「キュッ！」

「デエエエエエエン！」

「・・・クラツカー!? 使い切つたはずでは!?!」

「残念だったな。トリックだよ。」(・・・ん?)

「織斑ア! 篠ノ之オ! 今の音は何だア!?!」

「「こつちへ来て確かめろ!」↑やけくそ

「遠慮させて貰う!! リア充・オブ・クラツシャー!!」

「ザッ! ↑クレイモア設置

「カチッ!」

ドオオオオオオンツ！*筋肉装甲*

次の日、織斑と篠ノ之は、何事もなく登校した。
・
・
・何も無かった！OK？

第10話 潜入ミッション（段ボールじゃないよ！）

「おはよー、織斑君！転校生が来るらしいんだけど知ってる？」

「転校生？誰が来るんです？」

「IS学園は世界中から生徒を集めているからな。転校生は大韓民国か北〇鮮か、それとも日本海を越えてやってくるか……。」↑つまり中華人民共和国

「入試が終わって直ぐのはずだが。」

「代表候補生は別らしいんだ。」

「全くお笑いだよね。私らは入学するのにえらく苦労したのに。」

「……（事実上の）入試免除で入ってすまないと思ってる。」

「「あつ……。」「↑やっっちゃたZE！」

「……と、ところで一夏さん、来月のクラス対抗戦は大丈夫でして？」

「まあな。」

「そうですね……。どのような戦法で行くのですか？」

「君は知らない方が良い……。俺だって、出来ることなら思い出したくない。」

「何をする気!?織斑君!」

「安心しろ、未来の話だ。俺にとって今が全てだ。」

「まあ、織斑君がそう言うなら。がんばってね!」

「フリーパスのためにも!」

「強靱な肉体とISを持った人間、デエエエエエエーン!／の織斑君なら、優勝間違いないしー!」

「自称情報通のトーシローばかりよく集めた物だわ。全くお笑いね。」

「鈴・・・? お前、中国に帰ったんじゃない・・・。」

「残念だったなあ。事実よ。親に日本から連れ出されてからずーっと来日を想い続けてきた。よおやくその日がやって来た・・・長かったぜ!」

「一夏、コイツは?」

「風鈴音。箒の転校と入れ違いで転入してきた。」

「2組も代表候補生の私がクラス代表になったから、その挨拶よ。」

「見上げた宣戦布告だ、鈴。だがな、手前えの命を張るほどの値打ちのあることか?」

「何が言いたい訳?」

「ドアを塞ぐとは、面白い奴だ。気に障った。叩くのは一度にしてやろう。」

「ドゴッ!」【1000／1600】

「ち、千冬さん!?!」

「織斑先生だ。．．．叩くのは一度と言ったな。」

「そ、そうだ．．．。」

「あれは、嘘だ。」

ドベキシツ「オフウイ．．．。」【1／1600】

「織斑、コイツを2組に持って行け。」

「気絶させたのは手前えだ！」

「(筋肉モリモリの) お前が適任だ！」

「．．．ふざけやがってえ！」

バババキイ！【18000／20000】↑3Hit

「ウオオ．．．。フンツ！」

ビシッ！【9951／9999】・

「ヌオオ．．．。」

「2人ともやり過ぎだ！」↑箒

バシインツ！バシインツ！【17893／20000】

【8897／9999】

「次暴れたら、廊下に立たせるぞ。」

へへ篠ノ之さん、スゲー．．．。<<<

え？鈴？2組の担任が回収していきました。

—昼休み、食堂—

「待ったわよ、一夏。」

ドベキシツ「オフウイ……」【1/1600】↑ラーメンはしつかり保持

「食券購入の邪魔だ。脇へどきな。」（……ん？）

「分かってるわよ。……それにしても、久しぶりね。直接合うのは、1年ぶりでさあ。」

「元気にしていたか。」

ツピ、カラン↑食券購入

「元気にしていたわよ。あんたこそ……、その筋肉だと元気だったみたいね。」

「当然ですわ！一夏さんが体を壊すことなど、あり得ませんから！」

「……アンタ誰？」

「な、このわたくし「トーシローに負けた金髪クルクルの変態だ。」一夏サアアアア

!?

「セシリア、そのライフルは仕舞ってる。ビットも戻しとけ。」

「つく、……篠ノ之さんが仰るなら。」

「ところで、鈴、そのラーメンは伸びてないのか？」

「タフネス調理の麺とスープを使ってあるらしいわよ。何を使ってるのかしら。」
「知らない方が良いわ。」↑厨房から

「……。」

「はい、Cランチ3つおまちどう。」

「ああ、どうも。」

「さあ、座りましょう。」

「……ああ。」

「ところで一夏、クラス代表なんだって？」

「何処で聞いた。」

「事務室。……あ、あのさ、ISの操縦見てあげようか？」

「いや、結構だ(ですわ)。」

「私は一夏に聞いてんの。部外者は黙ってて。で、どうなの一夏？」

「……鈴、クレイモアの使い方は知ってるか？」

「く、クレイ何？」

「(説明書を)見てこいカルロ。」^鈴

「」

「「ちそうさまでした。」」

「早!?!」

「当然だぜ、ムネツペタ。元（現）剣道部に咀嚼の早さで勝てるもんか。」（・・・んん?）」

「試してみる? 私だつてもと中華料りよ——何言わしとんじゃあー! 誰がまな板だア!?!」

「ゴンツッ!」【1421/1600】

「食事は、静かに、迅速に摂れ。OK?」

「ち、千冬さん」

「バゴンツッ!」【1323/1600】

「織斑先生だ!」

「先に行くぞ!」

「ちよ、篠ノ之さん!?! 抜け駆けは駄目ですわ!」

「ちよ、一夏! 待ちなさいよ! にゃー!!」

「一夏、何処へ行く気だ?」

「生徒の胃袋を捕とらえている場所だ。・・・箒、ここを見張っていてくれ。」

ガチャ↑換気口を空けた音

「分かった。気をつけて。」

―天井裏―

「………。〈これは……。〉」

「早かったな。どうだった？」

ガシヤツ↑換気口を閉めた

「料理道具から調味料までそろっているが、材料がどこにもない。」

「それで料理は？」

「エプロンも調理師もない。よそで作っているんだ。」

「手がかりは？」

「この近くだと、……第3アリーナだ。よし、この写真と照らし合わせて……と、第3アリーナの北にある家庭科室に印がつけてある。調理場はきつとこの部屋だ。」

「見ろ。この写真。校内作業車だ。」

「家庭科室での調理に使ってるんだ。……シツ。」

「はい。さっきの明日の伝票を――」

「搬入は明日の早朝。今夜中に調理させろ」

「……やっぱり。さっき拾ったこの領収書は作業車用よ。25・0リットルといえば、この作業車で家庭科室までの一週間分の往復にぴったりの量だわ。」

「しかしここにはないぞ。中は全部見たんだ」

「燃料の補給は教員駐車場で受けてる。前に見た。」

「家庭科室まで、時間にしてどのくらいだ？」

「約2分だな。今からいくのか？」

「いや、まだだ。」

「じゃあ、壊物か？」

「いや、授業だ。」

「!!むう、こんな時間だったか・・・。」

「行こう。千冬姉が帰ってくる。」

祝！10話記念 *本編には関係ありません

作者より挨拶

『I Sの帝王を読んで下さっている皆さん、おはようございます。（*投稿時間）』『只の力カシです』です。2話以降が怪しいと言いなながらも、何とか10話まで続けることが出来ました。そこで、誰得ではありませんが10話を記念して、『只の力カシです』の中の作A・Bが作品製作の裏側をお伝えします！↑興味ない人は飛ばして下さい（汗）

今回も腹筋を鍛えに来て下さった方！真面目な話しか書きません！ご容赦下さい。

始めに言っておきますが、全話深夜に書いていますので、誤字脱字は仕様です！（キリッ

投稿・コメ返しをしているのは作Bです。（アカウントが作Bの物なので。因みに、作Aは持っています）。作Bは以前からここへ作品を投稿していて、ランキング目指して書いていたんですよね。オリジナルとかオリジナルとかI Sとかで・・・ま、心意気に反してUA増えない。お気に入り来ない。それでも地道に続けていますが。

では本題に入ります。この作品ですが、基本的には二人で笑いながら書いて、作Bが編集をして皆様にお届けしています。滑っている回（部分）は、大体作Aが単独で書いて

たままを投稿している時です。(滝汗)

書き始めた切っ掛けですが、コマンドー「ディレクターズカット」を見ながら作Aが、『ISにジョン・メイトリクスを突っ込むか、作B。』が始まりです。書き始めたら原作キャラのみでコマンドーネタのオールスターでしたけど。

この作品の特徴としては、状況描写が殆ど無いことですかね。あれ、ノリで書いたせいです。もつとも、タグに『状況描写も必要ねえ!』と『正に外道の帝王』を付けて、ISとコマンドーの分かる人相手に、一日当たりのUA(以下「UA/日」)が200弱の作品をのんびり書いていくつもりでした。しかし、蓋を開けてみてビックリ。初日に300「UA/日」を越え、投稿をしなかった6日(休日)こそ二桁でしたが、何があったのかその翌々日に『ルーキー日間』に掲載。更にその翌日夜には『日間』に。気が付けば1000「UA/日」越え。予想外です!(歓喜)

ここからは、各話書いていた時を振り返っていきます。

1話。これ、原作が一夏視点で書かれているので会話が少ないです。書き方を確立していなかったと言うのも大きな要因ではありますが。2話も若干迷走気味ですね。矢印(↑○○)を使つての補足を使いこなせるようになったのは、3話ですかね。個人的には、3話から格段に読みやすくなりました。そうそう、この話の後書きで「次を書いて欲しければ、(高)評価を付けるんだな。OK?」ってありましたよね?あれ、本当に

高評価を下さる方がいらつしやるなんて思っていませんでした。マジで。・・・あ、勘違いしないで下さい！高評価の方が嬉しいです！勿論です、作家ですから。しかも、評価9×5、調整平均9。見た瞬間「!?!」です。

で、うれしさ絶頂の中書いたのが4話。そりやもう、状況描写なしの完成版が書けたと思いました（個人の感想）。

そして地獄の5話。『ルーキー日間』に載る直前に書いたこれは、頑張ったんですけどネタもマンネリ化して書いていても面白くなかったです。全くお笑いだ。事実、UAも伸びてないですけど・・・。

んで、6話。『このままではいかん！』と、打破しようと足掻きました。

結果、滑る！没寸前！

*というか、状況描写なしで戦闘シーンを書くこと自体間違っているんですけど。

でもまあ書いたし、一応しとくかかって感じて投稿。UAも減ってきたし、そろそろ不定期更新にしようかなーと思っていた昼頃、突然伸びるUA。そしてルーキー日間で見つかる我らの作品。

正直、焦りました。いや、だって文章無いんですよ？全く。1位〜50位、どれを見ても有名どころ。文章もそれなりに洗練されている作品群の中に《ISの帝王：MAD版》の文字。タグとかもう、場違い感MAX・・・。バグかと思いました。

んで、『もうヤケクソだ! 吹っ切れたろ!』つと、書いたのが7話です。5話までは、ネタを忠実に使うことに拘ってました。けど、6話に出そうと作Bがずつと練っていたロケツトランチャーに意外と反響があつて、『あれ? 改変しても許される?』と思つて書いたら、・・・当たりましたね(ドヤ顔)。

8話以降は、もう完全にリズムを取り戻しました。で、この時には、ルーキー日間から消えていて、寂しさを感じながらも「最初みたいにUA200位で緩く書けるな」と思つたら、・・・まさかの日間にランクイン。この時は、真面目に焦つて「良いんか? こんなのが載つても?」と作A・Bともに言っていました。ま、本心ではメツチャ喜んでいたんですけど。そりゃ、多くの人に読んでいただけなのは、作家冥利に尽きます。でも、まあ・・・「ランキングなんて知るか! 読解できる人だけ読んでくれ!」つて言う構えは崩しません!

最後になりますが、何度もコメントを下さった【光り物2人】!(↑学習してない)安心しろ! どこにも行かないさ。約束する!

番外編

デエエエエエエエエエン! 【99999/99999】

「キヤアアアアアアー! 織斑くーん!!!」

「どうしてこんなに人がいるんだ？ 私たちだけならすつきりしたのに。」

「箒つたら古いんだあ。」

「ふっ、私が小学生だった頃 I S が入ってきたけど、（中2病的な意味で）破壊的だつて評判だったぞ。．．．その通りかもな。」

「あ、評判だったんだ。」

「箒、今から模擬戦をやると言ったな？」

「ん？ そ、そうだ！ 確かにそう言ったぞ！」

「あれは嘘だ！」

「ウワアアアアアアアアア！」 ↑ 絶望

デエエエエエエエエエエ！ 【1 / 2000】

「．．．一夏さん、それは何ですか？」

「第10話記念だ。」

「「?!?!?!」
!?!?!」

「で？ その記念すべきミツ^番ツシ^{外編}ョンの内容は？」（．．．ん？）

「うむ、実はな．．．これをやつと見つけた。」

「これは．．．箒!? 絶望して倒れた．．．」

「筈か? 残念だったなあ。」

「・・・俺に何をさせたい。」

「篠ノ之救出!」↑スマツチヨブラザーズ

「一夏さん、これは何ですか?」↑アリーナに障害物

「(千冬姉の) キツイジョークだ。」(・・・んん?)

「ええ・・・。」

「おっと、そんな目で見られちゃビビって話も出来やしねえ。・・・(俺の) 頭は無事だ。少なくとも今の所はな。この先千冬姉がどうなるかはあんたら次第だ。無事これを片付けたければ、俺たちに協力しろ。OK?」

「OKですわ!」↑脱兎の如く逃げ出す。

「・・・くたばりやがれ。」

「くたばんのは、あんたの方よ!」

「!? 鈴!?!」

「家の事情で国に帰ってからずっと想い続けて来た・・・。ようやくその時がやって来た。長かったわ・・・。」

ピシッ! [999999/99999] *No damage*

「うっ……。」

「……()は？」

「麻酔弾よ。……本物じゃなくて良かったあああああああ！」

「確認せずに撃つたのか!!」

「いや、千冬さんから渡されて……。」

「……(千冬姉が) お前を巻き込んで済まないと思ってる。」

「ええ、良いわ……。」

「で、此処はどこだ？」

『アリーナの中だ。……一夏ア、体はどんなだ?』

「こつちへ来て確かめろ!」

『いや結構。遠慮させて貰うぜ。……篠ノ之の所までは各部部长がいる。箒の所では生徒会長が待つてる。全員からの連絡が途絶えたら、コースは死ぬ』

「……昨夜何本飲んだ。」

『1000dLポントと飲ん……ま、待て一夏!落ちt』

「I l l b e b a c k .」
必ず叩きのめしに戻るぞ

』

「行ってくる。」

「・・・行つてらっしゃい。あ、ちよつと待って。」

「何だ!」

「制限時間は11時間だつて。」

「・・・くそつたれが!」

メギイ!【0/1500】↑ドア

「この手に限る。プレハブ小屋だったのか・・・ん?これは・・・」

ズボツ!↑土から抜いた音

ガシヤツガシヤツガシヤツガシヤツ・・・ガチャン!

デエエエエエエン!【50000^ゴ000^マ/50000^{ド!}000】

「退け!退けつてんだよこのポンコツ^{デカブツ}が!」

ドゴオオオオオン!【0/2500】↑障害物の壁

「これで(道が)出来た。」

「!?!」

「ちよ、ちよつと横から来るなんて——」

「邪魔だ退け!」(・・・んんん?)

ズドオオオオオオン!【0/2000】

「キヤアアアアアアアアア！」

「すまない」

ガシヤツガシヤツガシヤツガシヤツガシヤツ……

「織斑君！」

「此処は通さないよ！」

「ちっ」

「逃げる!?でもそっちは壁よ！」

「ふんっ！」

ドンッ！【2400／2500】

「!?壁キツク!?そんな無茶な！」

ズドオオオオオオン！【0／2000】

カチャツ↑クレイモア

「く、転がって逃げようだったって！」

Pi!チュドオオオオオオン！【0／2000】

「(クレイモアの上を通った)不運を憎むんだな。」(……ん×4?)

「」

「……急がないと……。」

「……何だこの妙なドアは。」(……ん×5?)

「くそっ!開け!開けてんだよこのポンコツが!……ん?何だこれ?」

ガラツ!／＼デエエエエエエン!／↑引き戸

「……。」

「いらつしやい一夏k」

ガチャツ

「ま、まあ落ち着けロケットランチャーを突きつけられちやビビって」

ドンツ!↑マシンガン

「ビビって話も」

ドンツ!

「は、話も出来やしねえ。」

「箒はどこだ。」

「篠ノ之さんは無事だ。少なくとも今のところはな。無事取り戻したければ、生徒会私たちに

協力しなさい。OK?」

「OK!」

ズドオオオオオオン！【480000/500000】

「きやあ！ちよ、ちよつと待ちなさい！一夏君！」

「何だ！」

「制限時間は11時間だと言ったわね？」

「ああ、そうだ。確かにそう言ったぞ。」（・・・ん×6？）

「あれは嘘だ。」

〈3:00〉↑制限時間（分）

「ふざけやがつてえ！」

ズドドドドン！【400000/500000】*4HIT!*

「ちよつと！それ何発詰まってるのよ！て言うかロケットランチャーつてそう言う撃ち方するものじゃ無いでしょ！」

「（ロケランの使い方は）知らない方が良い。」

「そんな・・・。」

「そら行くぞ！」

「待ちなさい。一夏君。君には、今君の置かれている状況が全く理解できておらんのだ。・・・何だか暑いとは思わない？」

「何!?!」

パチンツッ!ズドオオオオオオン!

「ふ、まだまだ甘いわね・・・ん?」

ガチヤンツ!

「ま、まさか!?!」

デエエエエエエエエエエエエエン!
【99999 / 99999】

「そんな!白式!?!」

「フンツッ!」

ズガアアアアアアアアン!
【100 / 50000】
↑
投げ雪片零落白夜

「生徒会長(の座)から落ちろベネツト」
更識

「ウウワアアアアアアアアア!」

【5000 / 5000】
↑IS解除

「箒、箒はどこだ!」

「そ、その通路の奥に。」

「OK!後は寝てろ!」

ドベキシ!
【1 / 5000】

「オフイツ」

「箒！」

「む？一夏か？何が起こったんだ？」

「どこかの馬鹿が（遊びに丁度良いと）推薦したんだよ！・・・帰るぞ。」

「う、うむ。」

—その後—

「ま、待て一夏これには訳が・・・。」

「うるさい！この酒にだらしない馬鹿女が！」（・・・ん×7？）

メギギョー！【10000/20000】

「オフイ・・・。」

「済まない、その清掃係。織斑先生を起こさないでやってくれ。死ぬほど疲れてる。」

「は、はあ。分かりました。」

第11話 戦う食堂、攻略します

—放課後・第3アリーナ

「し、篠ノ之さん!? どうしてここに!? ISは貸し出しがなかった筈なのに……」

「残念だったな。トリックだよ。」

「ま、まさか専用機ですよ!?!」

「……筈、どこでISを調達してきた。」

「壊物だ。」

「か、買い物ですか? ……いいえ、そんな筈はありませんわ!! ISは国際条約によってその取引が制限されているはずですよ!」

「次余計なことと言うとブルー・ティアーズに縫い合わすぞ。」↑威圧

—10分前・整備室—

「打鉄は日本で生まれました。篠ノ之東の発明品じゃありません。倉持技研のオリジナルです。少々、時代遅れのISになってきましたが、今や巻き返しオーバーホールの時です。」

「打鉄は好きだ」

「打鉄がお好き? けっこう。ではますます好きになりますよ! さあさあ、どうぞ! 精

密調整済みの打鉄です。・・・快適でしょう？んあああ、仰らないで。(コクピットの)シートがビニール。でも純正部品なんてカタログスペックだけで、生地は厚いし、よく狂うわ、衝撃は伝わるわ、ロクなことはない。胸囲の長さもたつぷりありますよ。どんな巨*(自主規制)の方でも大丈夫。どうぞ噴かしてみてください。・・・いい音でしょう？余裕の音だ、信頼度が違いますよ」

「一番気に入ってるのは・・・。」

「何です？」

「値段だ！」

「わーっ、何を！わあ、待って！ここで動かしちゃ駄目だよ！待って！止まれ！うわーっ!!」

——今に至る——

「く、まさか一年生に訓練機の使用許可が下りるだなんて・・・。」

「さあ、一夏あ！始めるぞ。雪片を出せ。」

「かかってこい！」

「ムウン！」

ガッ！【5007／5500】↑打鉄のブレード

【48999／50000】↑雪片

「又オオオ！・・・フンツ！」

「ツ！まだだあ!!」

「!!ウツ！」

「気分いいぜえ！昔を思い出さあつ。フツフツフツ。チェストオオ！」

「ウオオオツ」

へい、行けませんわ！行ったら逝きます！こんな化け物に……。い、いえ、怖いのですかオルコツト！そうですわ！私に恐れるものなどありませんわ！「踊りなさい！私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

ビビビビシユンツ [18946/20000] 7Hit↑箒+打鉄

「!!我々の勝負の邪魔をするとは、面白い奴だ。気に入った。転がすのは最後にしてやろう。」

へや、やってしまいましたわ……。こうなったら、やられる前にやってやりますの!!
「・・・ぶつ殺してや——」

ゴゴオン！ [20000/27000] 2Hit↑インターセプター出せず

「ウウウウオオオウアアア・・・。」

「グラウンドに転がってろ、セシリア。」

【1000 / 1500】

『おい、その生徒！（ISを解除して）何をやっているんだ！』↑担当の先生

「すまない、大声を出さないで貰えるか？休んでるだけだ。」

『ああ、そうか。悪かった。』

「おい、箒。行くぞ。」

―第3アリーナ横、家庭科室前―

「向こう側へまわって俺の合図を待て。」

「わかった。」

「一夏、ここだ。」

「入れ。・・・間違いない、ここで調理をしていた。」

「何故だ？調理室の方が設備が良いはず。」

「それは、分からん。だが、これを見ろ。」

「これは・・・、消費期限が今日じゃないか。」

「そうだ。そしてこれが今撮ってきた写真だ。」

「!?何だ、この在庫の山は！・・・おい一夏、これ。」

「差出人が料理部の注文書。奴等、注文数を間違えたんだ。それに、廃棄の依頼書・・・。」

早くしないと、材料が捨てられてしまう。」

「だが昼休みに聞いた限りでは、今夜調理で、搬入は明日の早朝のはず。」

「これ（自動車用燃料の領収書）の日付を見る。一週間前の日付だ。」

「!!つまり、明日の朝食分から業者に手配する言うことか？」

「間違いないだろう。今、見てきたんだが、（家庭科室には）誰もいなかった。今夜分は、既に運んであるんだ。」

「何て勿体ないことを・・・。」

「・・・今、3時半だ。調理するぞ。」

「無理だ。この量は食べきれん。」

「まだ諦めるには早い。今日は、購買が閉まっていたな。」

「・・・そうだ。それが何k・・・、まさか、食堂が混むとでも？」

「ああ、そうだ。昼に見た限り、あれでは足りん。」

「だとしても、どうやって運ぶ？車でも奪うのか？」

「何のためのISだ。」↑条約無視（筋肉式）

「!!」

「始めるぞ！」

「待つて！ああ、駄目！」

「どうした？」

「こんなの包丁じゃないわ！柄の付いた鉄板よ！」

「だったら、研げばいいだろ！」

「研ぎ方が全く違うんだもん！日本刀しか研いだことがないんだ！」↑あるのかよ！

「貸せ！切れる！切れるッてんだ！」↑筋肉研磨

「シャツ!!」【500/500】↑切れ味

「この手に限る。」

「・・・OK。始めよう。」

—5時半過ぎ、家庭科室前—

「購買が休みとは・・・。」↑食堂のオバさん・お姉さん

「全くだ。今から調理して、間に合いますかしら・・・。」↑料理部

「無理だと思う。」

「厄日だわ・・・。ん？いい匂いがする。」

「ホントだ。(家庭科室に)誰かいるのかしら？」

「・・・織斑君!?!でも、第3アリーナで練習中のはず・・・。」

「訓練していると言ったな。アレは、(半分)嘘だ。」

「!?どこから!」

「静かに素早くだ。それより、(出来上がった料理を)持って行け。俺達も(ISで)運ぶ。」

「まだ、材料は残っているのか?」

「料理だけです。」

「!!調理師を再編したい!君さえ入ってくれば——」

「今日が(最初で)最後です。」

料理? 勿論、大好評でした。

—9時、1025号室前にて—

「と言う訳で、篠ノ之さん!部屋変わんなさい!男子と同室なんて嫌でしょ?」

「(一夏と同室だと)どこで聞いた。」

「フロアマツ説明書を読んだのよ。」

「」

「一夏とはあ、小学校で一緒だったらしいなあ。私も一夏と同じ中学校にいたことがあ。学友つてのはあ、いいもんだよなあ。それに一夏。昔の約束があるでしょ?」

「酔豚か?」

「そうよ。」

「毎日、酢豚を食べてやるといったな。」

「!!・・・そうよ／＼」

「アレは、嘘だ。」

「ウワアアアア!?と、とにかく、私も住ませなさい!」↑ヤケクソ

「ふざけやがって!!」

「バシインツ!」〔15000／16000〕↑竹刀by箒

「危ないじゃない!」

「流石だ、代表候補生。やっぱり（ISを）展開してきたか。」

「鈴、箒は関係ない。突っかからないでやれ。」

「古い付き合いだ、見苦しいところは見せたかねえ。・・・一夏、私をこk」

「見上げた反射神経だ、凰。だがな、（条約と学則を破ってまで）てめえのISを出すほど値打ちのある話か? さあ頭を冷やして、よく考えてみろ!」

「ダバア!」〔1480／1600〕↑酒（ウォッカ）

「千冬さ・・・ああ!（アルコールが蒸発して）寒iiiiiii!!」

「どこで買ってきた。」↑雪片を突き付けながら

「!!しまっ!誰が喋るかよ!」

「見上げた忠誠心だ千冬姉。気に入った。財布を縫い合わせるのは給料日にしてやろう。」

その後、千冬と鈴の悲鳴が寮に響いたとか、響かなかったとか・・・。

第12話 元〇〇な人達

—放課後、第3アリーナ

「一夏、いよいよ来週からクラス対抗戦だな。」

「何時からだったかな？」

「丁度一週間後からですわ！それにしても、一夏さん。随分とI Sの操縦も板に付いてきましわ。」

「どういう意味だ？」

「初めて私と戦われた時、生身で挑んでこられたのですもの。あの時は、驚きましたわ。」

「何が言いたい。」

「クラス対抗戦でI Sを使わないなど、ふざけたことをするのはと心配でしたもの。」

「!!」↑やろうと思っていた

「・・・？一夏さん、どうかされましたか？」

「いや、何も・・・今日は、もう終わりにしよう。」

「ん、そうだな。少し早いが、アリーナの準備も始まることだし切り上げよう。」

—更衣室前—

「一夏、反省した？」

「鈴、いきなりなんだ。」

「はあ!?!いきなりとは何よ!いきなりとは!アンタのせいで、どれだけ泣かされたと思つてんの?」

「(その事については)すまないと思つている。」

「謝ったら許してやると思つてんの!?!頭来た!もう良いわ!アンタに、酢豚を毎日作つてやると言つたわね!」

「そうだ。」

「地獄へ堕ちろ、一夏!」

「待て、鈴!ウオオオオオオオ。。。」

—1025号室—

「。。。。。」

「。。一夏、もう事情を話してくれても良いんじゃないか?嵐と何があつた。」

「これを見てくれ。」

「これは、凰の家族の写真か？」

「そうだ。」

「優しそうな両親だな。」

「ああ、優しかった。」

「・・・かった？」

「中学の時に離婚したよ。」

「・・・そうだったのか。」

「アイツが転校してきた時、俺は剣道を続けていた。だが最初は日本語が話せなくて、クラスで虐められていた。・・・アイツの為に剣道を辞めた。だがその頃から（千冬姉が）留守がちで、一緒にいてやれたのは学校と登下校だけ。中学に入ってからは、バイトを始めた。アイツが中国に帰った時も、バイトで空港まで見送りにも行ってやれなかった。今回の喧嘩だって、俺のせいだ。」

「どうして（中学で）バイトを？」

「特殊事情だ。」

「家計のためって事ね。」

「・・・まあな。」

「」

「だがもう過去の話だ。アイツも、俺にとって大切な友達なんだ。」

――一週間後、第2アリーナ――

『さあ、クラス対抗戦第1試合。両クラス代表の入場だあ!』

『1組はあ!?!強靱な肉体と、I Sを装備した織斑一夏!』
人間武器庫

『さあ、注目の2組はあ!?!胸囲ツルツル、ペツタペタの変態(凰鈴音)だ!』

「ちよつと実況!その紹介は無いでしょお!?!もうつ・・・一夏、今謝ったら少しぐらい手加減してあげても良いわよ。」

「・・・来いよ鈴。情けなんか捨てて、かかってこい。俺に楽をさせる勝負なんかつまらんだろう。武器を突き立て、俺が苦しみがいて、シールドエネルギーを削られていく様を見るのが望みだったんだろう。そうじゃないのか鈴。」↑口角ヒクヒク

「・・・いいわ一夏。死なない程度にいたぶってあげる!」↑怒

「ビーツ!」『試合開始!』

ガツ! 【500000/500000】↑雪片*No damage*

【350000/350000】↑双天牙月*No damage*

「ふうん、やるじゃない。」

「・・・。」

「今のは挨拶代わりよ！これでも喰らいなさい！」

パチツ・・・ズガアアアン！【99989／99999】↑衝撃砲

「ヌオオオオ・・・。」

「残念ね一夏あ・・・ジャブよ。」

「ふぎけやがつてえ・・・。フンツ！」

ガゴオオオン！【15000／16000】↑雪片Attack！

「チイツ！こんのおおおおおおおおお！」

「ヌオオオオオオオ！」

ズドオオオオオオオンツ!!!【0／5000】↑アリーナのシールド

「何だ!!」

「一夏！侵入者よ！あやまつt・・・じゃない、逃げるわよ！OK？」

「OK！」

怒ッ(ッ)おおおおおん！【800000／999999】↑零落白夜

「ちよつと、一夏！地面に叩き付けちや砂煙で見えないじゃない!!」

「いたぞおおおおお！」

ズドオオオオオオオン！【750000／999999】↑ロケットランチャーby

ズババババババババ！【730000／999999】↑チェーンガンbyセシリア

「ちよ、イギリス！何でIS仕舞ってんのよ！」

「はっ！そ、それは……。」

デエエエン！【27000／27000】

「何誤魔化してんのよ！つか、IS出すのおっそ！」

「……今度余計なこと言いますと、む＊を縫い合わせますわよ。……はっ！ありませんでしたわ！」

「あんた、後で覚えときなさいよ……。」

「……攻撃をしない時は仕掛けてこないとは、面白い奴だ。気に入った。壊すのは最後にしてやろう。」

ベキイツ！【14000／16000】↑左パンチfor鈴

「ちよつと、なにすんのよ！危ない！」

ビシユン！↑無人機介入＊回避＊

「……お前を壊すのは最後だと言ったな。」

「……（ウイイイイイイン、ウインウイン）」↑訳：怖いかクソツタレ。当然だぜ、無人ISの俺に勝てるもんか。

「試してみるか?・・・アレは嘘だ。」↑何故通じる・・・
ベベベベキイツ!【10000/999999】↑ダルマ

「これは・・・無人機?! ISは人が乗らないと動かないんじや・・・」

「・・・(ウイーン、ウイイーンー、ウイーン)」↑訳：残念だったなあ、トリックだ
よ

「くたばりやがれえ・・・。」

ドベキシ!【0/999999】

「・・・(ウイイイーン)」↑訳：オフイ・・・。

ドカアアアアアン!↑自爆

「ぬおおおお!」【0/99999】↑もろに喰らった

「・・・。。。」

「一夏、起きた?」

「確か、自爆を喰らって・・・。」

「・・・麻酔破片だよ。本物の破片使いたかったぜ!」↑お前の(破片)ではないだろ
!

「鈴はどこだ!」

「嘘よ。本物よ。」

「そうか……。鈴、試合はどうなった。」

「気にしなくていいわ。無効だから。」

「……。すまない。」

「言わなくていいわ。もっp、篠ノ之さんから聞いたから。」↑臭いを嗅いだ。

「風下じゃn——」

「よく鼻が利くモンですなあ!」

「げ、モツピー!じゃ、一夏、バイバイ!!」↑脱兎

「待ちやがれ!クソツタレ!」

「保健室でドンパチするとは気に入った。ポコポコにして、ベ(ネ)ツトに放り込むのは最後にしてやろう。」

「ち、千冬さん!!」

「そのアルコールはどこで買った!」

「……。消毒用アルコールだよ。本物の酒買ったかったぜ!」

「山田先生はどこだ!」

「!!……。用を思い出した。一夏、ISの解析に協力しろ。OK?」

「OK!」

ドベキシシ！【1／20000】

「オフウイ……。」

「箒、鈴。（山田先生の所まで）運ぶのを手伝ってくれ。」

翌日、燃え盛るIS学園の地下50メートルの部屋から不死鳥の如く蘇る織斑千冬が発見され、同室内ごと無人機を焼き尽くした翌日、IS学園の地下50メートルの部屋で冷たくなっている山田先生が発見され、派手に静かに息を引き取った。

（……あれ？何か違う……。）

第13話 待ってたんだ。

— 夜9時、1025号室 —

「就寝時間に遅れるぜえ、急ぎなあ。」 ↑ 一夏、帰室

「随分と急かすな。何があつたんだ？」

「私は空腹なんだ。」

「晩飯は、喰つたものだと思つたよ。」（・・・ん？）

「とんでもねえ、（一夏の帰りを）待つてたんだ。」

「・・・待つていた？何故。食堂はもう閉まつたぞ？」

「いや、まあ、・・・待つてたんだ。」

「待つてたつて・・・、どうするんだ？」

「だから、作つて待つてた。」

「なるほど、何か良い匂いがすると思つた。」

「・・・返事を聞くのが怖いんだけど、晩飯は食つたのか？」

「いや。」

「『食つた』つて言うわけないわよね。」

「食べてない。」

「本当に？」

「・・・信じろよ。」

「チャーハンを作ったんだが、・・・どうかな？」

「どれ、いただきます。」

「ど、どうだ？」

「・・・味付けはなんだこれ？」

「知らない方が・・・、私も知らん。」

「・・・。」

「いや、味付けを忘れた。」

「消灯時間までどれくらいだ？」

「・・・11分くらいだな。」

「塩と胡椒をかけてもらえるか？」

「何を言っているんだ？チャーハンには醤油だろ？」

「なぜ、醤油なんだ？塩胡椒なら、味がスツキリするのに。」

「一夏、古いぞ。醤油こそ、日本人の魂！」

「古いのは手前えの方だ！」

「やるか!」

デエエエエ——

ゴオンツ! 【9000/9999】

【1100/2000】

「やつかましいわあ!半分ずつにせえ!!」 ↑隣の部屋の生徒(1組)

「!!」

「じゃ、帰るね。」

「メイグラシアス。」

「・・・箒、何語だ?」

「知らない方が良いわ。」

「・・・醤油も良いな。」

「塩胡椒もうまいぞ。」

「(こちそうさまでした)」

「さて、時間だ。」

「歯磨きして、クソして寝な。」(・・・ん?)

「!?!」

「・・・で、ではなくてですね。あ、あの、篠ノ之さん、お引越です。」

「何故、箒が引つ越す必要があるんです？」

「そ、それはですね、部屋に都合が付いたからです。」

「随分と急だな。」

「そうですね。あ、でも安心して下さい！私も手伝いますので。」

「待つて下さい山田先生。それは今からではないといけませんか？」

「当然です。学園の決定ですから。」

「・・・クソツタレがあ！」

「アエエエエエエ！」

「し、篠ノ之さん！竹刀を仕舞って下さい！早く荷物もまとめて下さい！」

「ところで山田先生。消灯時間はもうすぐですが？」

「(山田先生も)今日は(もう)休め。」

「ダメ できえゝス。」

「↑↑困惑

「それに、身長170cm、筋肉モリモリ、マッチョマンの変態の織斑君がいるんだから、OKです！」↑人の意見ガン無視

「山田先生、一夏は死ぬほど疲れてるんだ。起こさないで貰えるか？」

「!?お、織斑君!?何時の間にベットに……。起きて下さい！でないと、織斑先生が私

のお姉さんに——」

ゴンツッ！【103/3000】

「山田先生、仕事をしろ。」

「ひ、お、織斑先生！」

「お前に仕事を押しつけるのは、これで最後と言ったな。」

「そ、そうです……。し、仕事して下さい……。」

「アレは嘘だ——」

ドベキシ！【1/20000】

「オフワイ……。」

「仕事に戻れ！千冬姉。」

「では、引っ越しましょう！」

「どうやって荷物をまとめた。」

「タンスに詰め込みました！」

「」

「では、織斑君！運んで下さい！」

「……。ふざけやがってえ！」

デエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！

「ひ、お、お、お、織斑君!!!ロケットランチャーは、し、締まつて、仕舞つて下s…
うわああああああ!!!」

ドドドオオオオオオン! 【0/7000】 ↑部屋のライフ

【1/3000】 ↑山田先生

「これで片付いた。」

「……筈か? 残念だったな。」

「な、織斑先生! 部屋は一夏が破壊したはず…。」

「トリックだよ。直ちに部屋を変えなければ、お前等は死ぬ。OK?」

「OK!」 ↑眠いので、もうヤケクソ。

ムキッ! ↑一夏がタンスを持ち上げた音

「……では、これで引越しは終わりです。お二人ともお疲れ様でした。」

「……必ず、仕返しに行くぞ。」

「ひっ! そ、それは学園にお願いします!!」

「どこにいる!」

「し、知りません! ……ひいいい。お、織斑先生が知っています! 先生と今晚呑む約束をしてるんです!」

「屋台でか。」

「!!ど、どうして!」

「この外出許可書がそうだろ。」

「!!う、うわあああ!」

「お前と風呂にはいるのは嘘だと言ったな。」

「そ、そうです織斑君……。」

「あれ本当だ!」

「うわああああああああ……。」

「山田のやつ遅いな……。」

「す、すいません。お待たせしました!」

「やっと来たか……。ようやくその時がやってきた。」

「財布を縫い合やすのは給料日にしてやると言ったな。」

「い、一夏!?!何故ここに!?!山田はどこに!?!」

「トリックだよ。(……ん?)」

「だがな一夏、時間外の外出は校則違反だ!お前はもう終反わりだ!省」

チラツ↑外出許可書*山田先生の

「!?!」

「……(晩飯に)ピザ食いやがってえ!?!」

ボコヲオツ! ↑ 1 Hit ・ 2 Hit ・ 3 Hit ・ Critical Hit ☆! 4 Hit

「ウヲオオオオオオオオ．．．．。ヌイイイイ．．．。」

チクチク〔200／150〕↑財布を縫い合わす音（補修もかねて）

「これで出来た。」

「．．．んん．．．朝か．．．目覚め酒でも買いに．．．!!．．．一夏め!．．．
くそお、縫ったかつ!．．．うおおおー!．．．ん!」

第14話 学友つてのは、いいもんだよなあ

— 6月頭、五反田家 —

カタカタチカタカタ・・・↑ゲームコントローラー

「IS学園てのは、いいもんだよなあ、一夏。」

「面白いことを言うな。」

「隠さなくたっていいぞ。へへ、美人に囲まれるつてのはどうだ？」

「学園に来て確かめろ。」

「いや結構。お縄に罹るのは御免だから遠慮させて貰うぜ。」

「守衛はポンコツだ。お前でも突破できる。・・・来いよ弾。」

「・・・そんなにいいのか？」

「ああ、良いぞ。毎日ドンパチ、賑やかだからな。」

「・・・お前のドンパチは、大抵ヤバイやつだからな。俺、IS学園行かなくて良かったと思う。」↑ひでえ

「

「・・・隙あり!!おっしや、俺の勝ち!」

「ウオオ・・・。クソツ、また負けか。」

「つーか、お前まさかボツチ？」

「いや、結構（筋肉で）話すぞ。それに、鈴まな板も転校してきたしな。」

「まな板!? 奴は本国に帰ったはず。」

「ああ、そうだ。だが、来日した。」

「ふうん・・・。まあ、アイツにとつておまえh——」

「お兄いイイイッ！ お昼出来たつてんだろ！ 早くこい!!」

ドコンッ！・〔201／300〕↑ドア

「い、一夏さん!? IS学園にいるはずでは・・・。」

「残念だったな。トリックだよ。」

「お兄、その口は閉じてろ。そのゲームも仕舞つとけ。」

「」

「それで、一夏さん。いつ、いらっしやったんですか？ 全寮制ですよ？ IS学園つて。」

「家を掃除しに帰ってきたんだ。ここには1、1時間前に来た。」

「なあ、蘭。ノックの一つぐr——」

「殺されてえか。」

「

「あ、あの、一夏さん。よかったらお昼食べていきませんか？」

「いいのか？」

「はい、喜んで!!」

ボタン↑蘭退室

「(昼飯食わせて貰って)すまないと思っている。」

「いいって事よ。どうせ、定食の売れ残りだろ。」

「厳さんに聞かれても知らんぞ。」

「なあに。お前と蘭がいれば余裕よ。それよか、飯食ったら街にでも行こうぜ。」

「ああ。」

「・・・ツゲ！」

「何?文句ある?馬鹿兄。嫌なら一人で食べな。そ・と・で！」

「面白い提案だ。気に入った。食べるのは室内にしてやろう。」

「いや、うちの店、外席無いぞ?」

「だったら、作ればいいだろ！」

「うるせえ!食堂で騒ぐな！」

ビュッーゴンー! 【9998/9999】

【13／50】 ↑お玉

「ふざけやがってええ!!」

ギョーンッ!ガッ! 【3／50】

「いい返した。だがな、お前等の空腹を賭けるほど価値のある話か？」

「試してみr——」

「ごめんなさい、直ぐに食べます！」

「・・・何故、謝った。」

「お前と爺ちゃんが戦ったら口クなことがない。」

「」

「早く食べ。爺ちゃんの怒りが俺に向く前に。」

「二「いただきます。」」

「・・・ところで蘭。その派手な服は何だ？さっきの方がスッキリしt——」

「今度余計なことを言ったら、口を縫い合わすからね。」

「」

「そ、それで一夏さん。私、来年IS学園を受験しようかと思ってるんですけど・・・。」

「!?フオイ、ラハアン!ふあみみつて——」 ↑訳：おい、蘭。何言つて

ゴオオン！「1/500」↑中華鍋直撃

「うるせえぞ、この馬鹿孫が。」

「弾。次、食いながら喋ったら、その椅子ごと室外追放だ。」

「だ、ダブルアタックは反則だろ・・・。」

「で、どうでしょうか？」↑慣れてる

「いんじゃないかな。」

「いや、だけど蘭。お前筆記試験はいいとして、実技はどうするんだ？」

「ただのカカシですな。」

ピラッ

「こ、これは・・・適正試験!?何時の間に!?!」

「忘れないことだ。お兄が瞬き(昼寝)している間に、(適性試験に)行ってきたんだよ。」

「・・・幾ら貰った。」

「A評価PON☆とくれたぜ。・・・それに、気に入ってるのは。」

「な、何だ？」

「値段だ！」

「!?まさか、タダなのか!?!」

ゴオオオオンツ!!【0/500】↑気絶

「少し黙ってる……。ですので一夏さん、入学できたらISの乗り方、教えて下さい。」

「いいだろう。」

「ありがとうございます!」

「ごちそうさまでした。」

「……!!あ、おい!何で先に食い終わってんだよ!!」

「咀嚼の速さで、勝てると思うなよ。」

「クソツ!」

「ごちそうさまでした。……よし、一夏!街へ行こう!」

「いいだろう。」

「うひょー!お前と来るのは、久しぶりだなあ!」

「ずっと学園内に閉じ込められていたからな。」

「よし、まずあのエアホッケーでもしようぜ!」

「ダメだ。」

「ダメ!?何で!?負けるのが怖いのか?当然だぜクソツタレ。10連敗中の俺がもう負

ける訳ねえ!」

「試してみるか?だがな、俺は敵を作りすぎた。ホッケー、ストラックアウト、パンチ

ングマシン。全部壊してきたんだ。」

「!!・・・忘れてたぜ。」

「だが、もう過去の話だ。」

「いや、ダメだろ!・・・帰ってゲームの続きでもしようぜ。」

「(こんな目に遭わせて) すまないと思っっている。」

— 17時、1025号室前 —

コンコン

「一夏いる?」

「こつちだ!」

「・・・何で廊下にいる訳?どこに行ってたのよ。」

「弾のところだ。」

「へー。じゃあ、あの声は弾だったんだ……。ちよつと後ろ向きなさい。・・・これ、

何だと思う?」

「これは、まさか・・・髭剃り?」

「違うわ!マイクよ、マ・イ・ク!これで、アンタを盗聴してたの!」

「盗聴を堂々と宣言するとは。面白い。気に入った。」

「・・・よくも『まな板』って言ってくれたわね！」

「(まな板と言って) すまないと思っっている。」

「ふん。まあいいわ。ちよつと、弾のところに行つてくる。」

「ああ、行つて・・・待て鈴！弾は関係ない！許してやれ！」

ビューン！

「クソツタレ！」

— 再び弾の家 —

「よ、よお、鈴。久しぶりだなあ・・・。ま、まあまで！落ち着け！は、刃物を突きつけられてはビビッて話もできやしねえ！・・・あ、頭は無事か鈴。」

ズイ！

「少なくとも今のところはね。この先どうなるかは弾次第よ。無事、帰つて欲し蹴れば、素直に謝まんない。OK？」

「OK！」

ズバァン！【300/500】

「ふざけるとはいい度胸だ。気に入った。弾、首出してみろ。一発で刎ねてやる。古い付き合いだ、苦しませたかねえ。」

「や、止めろ鈴！しゃ、洒落になら——」

ゴオオオンツ！〔0/500〕

——翌朝、弾の家——

「……あれ？生きてる。……これは？」

『弾へ。安心しなさい。峰打ちだから。……刃の方で叩きたかつたぜ！』
もう二度と、まな板発言をすするまいと誓った弾であった。

第15話 男（トリツク）と軍人（ガチ）

— 1年1組、SHR前 —

「デザインこそ至高！ハズキこそTHE・ISスーツの神髄だあ！」

「は！タダのカカシですな。性能重視のミューレイに勝てるもんか！」

「試してみるか。価格競争で敗れたミューレイよ！」

「あ、織斑君だ！おっはよー！織斑君のISスーツはどこ製？見たこと無いけど。」

「俺のは、イングリット社製だ。」

ガラガラ・・・↑ドアを開けた音

「皆さん、メーカーで決めるのもいいですが、ISスーツは飽くまで操縦者の肌表面の微弱な電位差を検知して、ISへ操縦者の動きを伝える役割をしています。それから、一般的な小口径拳銃程度なら受け止められますよ！衝撃は抑えられません。」

「てことは、山ちゃんのダブルS u i c aなら衝撃を受け止められるってことですか？」

「さっすが山ちゃん！」

「見直したよ！山ピーー！」

「勿論です、そのためのですk・・・ち、違います！これは、そんなんじゃないやありません！そ、それに、や、山ちゃん!?山ピー!?だ、ダメです！先生にはちゃんと先生を付けて呼んで下さい！」

「まーやんは、真面目すぎなのだ！」

「ういー、マヤマヤ！おはよう。」

「もうHR始まりますよ、布仏さん！・・・じゃなくてですね！マヤマヤはダメです！いいから、皆さん先生を付けて下さい！」

「諸君、おはよう。・・・どうした山田君。」

「ううう・・・。誰も先生を付けてくれません・・・。」

「・・・まあ、ビールでも飲んでリラックスしな。クラスの面倒は私がしつかり見てやるよ。」

ポスツ↑10000円渡した

「どこから10000円持ってきた。」

「ここだ。」

財布チラツ

「財布!?!縫い合わしたはずじゃ・・・。」

「残念だったな。新品だよ。てめえに財布を縫い合わされてからずーつと禁酒を続け

てきた。よおやく飲める日がやって来た・・・長かったぜ！」

「ふざけやがってえ！」

「デエエエエエエ！」

「「ワアアアアア!!待って、織斑君!ここでそんなもん出しちゃ駄目だよ!早く仕舞って!」」

「一夏、雪片を仕舞え。・・・バックからチェーンガンを出しなよ。」↑何で持ち歩いてるんですかねえ

「「!?」」

「箒、竹刀を仕舞って、バックからロケットランチャーを持ってこい。」↑お前も何で持ってたんだ!!

「私も加勢いたしますわ!」↑スペツナズ・ナイフ

「ま、まて一夏!私が悪かった!昨日出したばかりの綺麗なスーツを台無しにしちゃ、勿体ないだろ?それに今日は、転校生が来るんだ!」

「知ったことか。」

ドドドドドドゴオオオンツ!・・・ビヨン【550/25000】

「これで腐った記憶も抜ける——」

「はずか?残念だったなあ。」↑出席簿シールド

「なっ！出席簿！教卓に置いてたはずじゃ・・・。」

「残念だったな。ダミーだよ。・・・さて、諸君。今日から実戦訓練を開始する。ISを使用しての訓練となるので、毎日ドンパチ賑やかな教室にいる諸君等には、かなり安全な授業になると思う。各人、ISスーツが届くまでは学園指定のものを使用する。忘れたものについては、学園指定の水着で訓練を受けて貰う。それすらないものは、壊物に行かせる。OK?」

「「OK!」」↑例の3人

ズドドドド！ドツ！ドゴオオオオンツ!・・・ピヨン【2/25000】

「不意打ちとは、・・・やるな。・・・山田k——山田先生。HRを始めてくれ。・・・

?おい、山田先生は?」

「さつき、10000円渡しただろ。忘れたのか。」

「!!」

「だ、大丈夫ですよ。いますから。流石に勤務中には行きません。」

「行ったかと思っただよ。」

「とんでもねえ。隠れてたんだ。・・・ではHRを始めます。今日は、転校生を紹介します。なんと2名です!」

「「ええー!?!」」

「では、入ってきて下さい！」

「失礼します（する）。」

ガラガラ・・・↑ドア閉

「では、自己紹介をして下さい。」

「シャルル・デュノアです。仏から来ました。日本は初めてなので、色々分からないことがあるので皆さんよろしくお願いします。」

「キヤー、美形！」

「でも、美形なんて女を集めるから夏は暑いわ、女を集めるからうるさいわ、女を集めるから場所は取るわ、ロクなことはない。」

「見て！筋肉無い！魅力もない！」

「・・・何か僕、デイスられている気が・・・。」↑慣れてない

「でも、筋肉なんて夏は暑いわ、場所は取るわ、ロクなことはない。」

「・・・しれつと俺がデイスられているのは気のせいか？」

「「気のせいだよ!!」」

【9989／9999】↑鼓膜が以下略

「み、皆さん静かに〜！まだ終わってませんから！」

「……………」↑眼帯娘

「・・・ラウラ、自己紹介をしろ。」

「はい、教官！」

「ここでは先生だ。」

「了解しました。・・・ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「・・・。」 ↑クラスメイト呆然

「お、終わりですか？」

「以上だ！」

「・・・」 ↑クラスメイト啞然

「・・・！貴様が織斑一夏か！」

「そうだ。（ドイツでは）別人になりきっていたはずだが？」

パシッ！ユツサユツサ ↑肩ゆすり

「久しぶりだなあ、大佐！元気にしていたか!?教官も元気そうで安心したぞ！」

「ラウラ、その銃は弾を抜いとけ。腰のナイフもケースに仕舞ってろ。ここは日本だ。」 ↑貴方の生徒にもつとヤバイのがいるんですがそれは・・・

「ハッ！教官！」

「今度、教官と呼んでみる。口を縫い合わずぞ。」

「ハッ！教官！」

ドベキシ！「オフワイ．．．」【1／8000】

「んん！ではHRを終わる。各人、直ぐに着替え第2グラウンドに集合のこと。本日は、2組と合同訓練ドンパチを行う予定だ。解散！」

「遅れるぜえ。急ぎなよ！」（．．．ん？）

グイッ！↑シャルルを引つ張つた音

「特殊事情により、教室では着替えられん。覚えとけ。」

「あ、うん。分かった．．．。」

生きてフランスに帰れるかなあ．．．。と思つたシャルルであつた。

通算一万U A達成記念

読者の皆様、おはようございます。作Aです。この度、一万U A達成記念と称しまして、番外編（一夏と五反田食堂の最初）を作成いたしました。当然、深夜テンションで書き上げたため、15話のように『衝撃』を『襲撃』と打ち間違えるようなミスをしている可能性があります。それは仕様なのでご了承下さい。（*ほ、報告してくれてもいいんだからね！）

さて、今回の一万U A達成記念ですが、短時間で書き上げたため、非常に短いです（汗）。いい訳をさせていただきますと、ふと通算U A数を見ると、いつの間にか1万を超えていた感じです。原因ですが、10回記念で書いたように一日U Aが200前後を予想していたため、一万U Aを達成するのは遙か先（寧ろ無い？）のことだと高をくくつていた私の失態なのです。しかし、熱心な組合員コモンドーファン且つISファンの方から沢山の高評価を頂き、一時ではありますが、日間、ルーキー、週間にランクインさせていた以上、『書かない訳にはいかん！』と2時間ほど書きました。一応、本編との繋がりはありますが、特に読んでいただく必要のある内容ではないです。OK？

話は変わりますが、10話記念で作Bがオリジナルを投稿していると書ききましたよ

ね。あれも結構長いこと続いているんですけど、その総合UAを一日で越えるとは夢にも思っていないませんでした。

・・・何故かって？そりゃ、小説投稿サイトにMAD若しくはネタ集みたいなのを勢いに任せてぶちまけたんですから。完成度自体は高い物を作っていると言う自負はありますが、文章の無い作品です。コマンドーとISを大佐アーレベルで熟知した人しか読解は不可能。

でもですね、一つだけ本音を書かせて頂くと、状況描写を書かずに、会話だけで誰が話しているかを分かって貰えるように書くつてのは、非常に疲れますね。毎日、ウンウン唸りながら書いてます。当然、深夜に。いつそ、『状況描写入れてやろうか！』と想う時もあります。勢いが無くなるので何とか我慢しています。

ま、こんな感じで続けていくので、応援よろしくお願いいたします。・・・あ、それから、IS《ISの帝王：MAD版》ですが、一旦、原作2巻終了時点で更新停止にする予定です。理由ですが、作Bの夏休みが終わるためです。まあ、年末（＝冬休み）頃に復活する予定ですので、ご安心下さい。

あと、これは宣伝ですが、MAD版が更新停止後に、IS《ISの帝王：小説版》を出します。詳しい時期は、追って連絡します。

番外編 一夏と五反田食堂の最初

— 中学1年、4月。五反田弾の家 —

「おーい、一夏！こつちだ！」

「そこか。」

「待ってる、今降りる。」

— 引き続き五反田家（2階）、12時 —

「なあ、一夏。そろそろ昼だし、飯食わないか？さつき、下に食堂があつたら？あれ家がやってるんだ。よかつたら、食ってけよ。」

「いいのか？」

「おう、良いぜ。じゃ、下に降りるか。」

「おい、蘭！（一人でそんなに皿を持ったら）危ない！半分持つ。」

「大丈夫、お兄。一人で持てる！」

「無理するな！ほら、半分持つてやる！」

「大丈夫だつて!!」

「おい、弾！余計なことして、皿割ったら承知しないぞ!!」

「わ、わかつてるよ！爺ちゃん！・・・一夏。悪いが座つててくれないか？」

「いや、飯を食わせて貰うんだ。手伝いぐらいする。」

「いいから、いいから。お冷やでも飲んでリラックスしな。昼飯の配膳は俺がしつかりしてやるからよ。」

「弾！タダ飯を食わせる気か？」

「勿論です、友達ですから。それに、（昨日の）売れ残りがあります。」

「弾、儂の料理は、みな美味だ。」

「残り物は大好きだ。味も染み込んでいるしな！」

「!!お前、脳筋みたいな体つきの癖に、料理が分かるとは……面白い奴だ。気に入った。おい弾！早く配膳してやれ。」

「お、おう。一夏、どうぞ。」

「どうも……。」

「冷めるぜえ。早く食べな。」

「いただきます。」

「……どうだ一夏。」

「……食わせて貰って何だが、何でこれがカボチャの煮物なんだ？甘露煮なら名前がスツキリするのに。」

「俺の料理にケチを付けるとは、見上げた度胸だ。だがな、手前の胃袋を張るほど値打

ちのある評価か?」

「試してみるか?俺だって、毎日料理してんだ。」

「お、おい、一夏、そのへんでやm——」

「うおらあああ!」↑お玉投げ

「フンツ!」

ガツ【2/50】

「俺のお玉を止めたのは、手前えが初めてだ。だがな!」

グオオオオオンツ!【9980/9999】

「又オオオ・・・。」

「どうだ、あつつ熱の中華鍋の威力は。」

「ふぎけやがってえ!」

ガアオオン!【7980/8000】

「ウオツ!・・・年のせいか・・・。これでも喰らえ!」

ゴオオオオオオ!↑火炎放射器(ガスコンロ)

ブチイツ!↑ガスを引きちぎった音

「お次はターザンか!やるな小僧!フンツ!」

ガランガランガラア・・・↑プロパンガスボンベ(中)投げ

「逃げるおおおお！．．．．．」↑居合わせた人達

「爺ちゃんも、一夏さんも止めて！」

ドオオオンツ！↑ロケット花火

「やだあ。」↑反対方向に飛んだ

その後、2人の戦闘に因り、町一つ消えたとか、無くなったとか．．．。

第16話 こんな授業じゃないわ!ただのドンパチよ

!

— 1時間目前、廊下にて —

ダダダダダッ!↑廊下ダツシユ中

「いたぞ!あそこだ!」↑上級生

「クソツ。もう来たか。」

「ね、ねえ、織斑君?」

「何だ!」

「何で、みんな追いかけてくるの?」

「ああ、ダメ。こんなのが分からないようじゃ男子じゃない。コルセットを巻いた女子だ!（・・・ん?）」↑ジヨーク*まだ気付いていません

「!?!」

「・・・どうしたシャルル?」

「え?いや・・・何でもないよ。そ、それよりも、恥ずかしいから降ろして貰えない?」

「駄目だ!」

「駄目え!? そんなあ．．．もうやだ! わあ、危ない!」

「筋肉×美青年! 行ける、行けるわ!!」

「パパパパシャッ! ↑ シャッター音

「どけっ! どけっ!」

「ドーンッ! ↑ 吹っ飛んでいく新聞部部員

「この手に限る。」

「織斑君は、誰かに『野蛮だ』って言われたことない?」

「無駄話は後で聞く。」

「— 数十秒後、更衣室 —

「ここまで来れば、追っ手は来ない。着替えるぞ。」

「う、うん．．．て、うわあ!」

「何だ!」

「え．．．、いや、何でもないよ。あ、あの、着替える間はあつちを向い．．．

「早っ! もう着替えたの!」

「急げ。少しでも遅ければ、あの出席簿紙の挟まった鉄板の餌食だ。」

「う、うん．．．。お待たせ!」

「よし、急ごう。」

— チャイム鳴る、第2アリーナ —

「遅刻するとは、見上げた度胸だ、織斑。」

「廊下が混んでたんだ。」

「ほう、口答えするか!」

バシツ、キイイン! 【9979 / 9999】

【0 / 25000】 ↑ 出席簿終了

「・・・職員室に行つて、替えの出席簿を取つてこなくては。山田先生・・・はいないから、・・・おい、2組の担任（*名前ト忘れ）!しつかり見張つてろ、アホ娘らが暴れるぞ。・・・いいか、こっちは逆光だ。動けば分かる。」

「どうやってです!陰から判断しろとでも?」

「ああ、そうだ。・・・よし、諸君。きちんと整列してろ。動くんじゃないぞ。すぐ戻る。」

ダッ!

「・・・一夏、今日は一段と遅かったわね。」

「シャルルさんと一緒だったとは言え、随分とごゆつくりされましたわね。」

「凰さん!オルコツトさん!次余計なことを話すと、きゅ、・・・口を縫い合わせますよ!」

「試してみる？代表候補生の私らに勝てるだけでも？」

「ひいつ！」↑弱ッ！

「・・・鈴、セシリア。無茶を言うな。包围網を敷かれていたんだ。」

「へえ、嘘を言うんだ。何時も吹っ飛ばしているくせに。」

「え？そ、そうなの織斑君。」

「アンタが仏の男子？良いわ、教えてあげる。織斑筋なら、人っ子一人抱えた位は誤差だから。」

「・・・鈴、織斑筋って何だ？」

「知らない方が良いわ。」

「」

「ほう、黙ってると言ったのに、喋るとは。うるさい奴等だ。気に入った。今日の格闘と射撃を含む実戦訓練の実演をさせてやろう。」

「バシッ！バシインッ！」【1241/1500】↑セシリア

【1311/1600】↑鈴

「くううう……。ことある事に、すぐ人の頭をPON☆PON☆と叩くなんて……。」

「・・・織斑筋のせい、織斑筋のせい、織斑筋のs——」

ズバンッ！【998/1600】

「少し黙ってる、このオカマ野郎。」↑まな板なので*何処がとは言わない

「ところで織斑先生、嵐さんをあまり弱らせないで下さいませ。倒し甲斐がなくなりますわ。」

「ふん、こつちの台詞ね。伊達に一夏と悪さしてた訳じゃないから。」

「はい、嵐さん質問!悪さって、具体的に何?」

「まあ、大したことはないけど、公園一個消したぐらい?」

「・・・え?」

「嘘よ。」

「二あー、よかった。」

「あ、でも一夏と友達の爺ちゃんが街を一つ消s——」

「ウワアアアアアアア!!皆さんどいてえええ!!!」

「落ちてくるぞ、山田^{あのパカ}先生。」

「潰す気だ!危ねえ!」

「はあ、・・・山田君。今から鞠突きをする。・・・お前、鞠な。(・・・ん?)・・・織

斑、いや、一夏。・・・やれ!」

「OK!・・・フンツ!」

バイン、バイン、バイン・・・↑筋肉式鞠突き

「お、織斑君！困ります！こんな所で、鞠突き・・・で、ではなくてですね！先生で遊ばないで・・・ああ、でもこのまま織斑君に傷物（物理）にされたら、織斑先生が義姉さんに——」

ドゴオオオオンツ！〔17000/30000〕↑山田先生*IS装備

〔17888/20000〕↑山田先生を叩きに行つて巻き添え

〔7989/9999〕↑鞠突きしてて巻き添え

「風、その（む〇に対する）敵意は仕舞つてる。衝撃砲も蓋をしとけ。」

「モツP・・・篠ノ之さんが言うなら・・・。」

「・・・さて、風、オルコット！出て来い。山田先生。起きろ。始めるぞ。」

「あ、はい。・・・え？織斑先生、2対1ですか？」

「安心しろ。今なら、まだ山田先生の方が優秀だ。2—1でも、まだ勝てる。」

「う、うう・・・。そうですかね・・・。」

「フツ、フツ、フツ・・・。ブツ殺してやる。」

「・・・鈴さん？」

「いいか？では始め！」

シユゴオオオオンツ！↑飛翔×3

「・・・暇だな。おい、風！さつきはよくも衝撃砲で・・・、実演中か・・・。そうだ

な、・・・デユノア。山田先生のISの解説をしろ。」

「はい。山田先生の使用されて——ですが、そのスペックは——ありながら——
——ライセンス生産——簡易性が——装備され——ことでも知られています。」
ガンツ!

「ああ、そこまでいい。・・・山田先生?」

「フツ、フツ、フツ・・・」。巨〇共。気分良いぜ!」↑巨〇に対する嫉妬心

「つく、まさかこの私が・・・」。

「ううう・・・。先生としての立つ瀬がありません・・・」。

「」

《《風さん、怖い・・・》》↑胸部を押さえながら

「・・・さて、これで諸君等にもこの授業が普段に比べ安全であることが分かって貰え
たと思う。但し、油断は禁物だ。必ず、細心の注意を払って授業に臨むこと。いいな。」

「「はい!」」↑1組

《《安全?何処が?》》↑2組&デユノア

「・・・2組、良いか?」

「「は、はい・・・?」」

第17話　ISでも乗って、リラックスしな

「よし、今から実習を行う。専用機持ちの5人。お前等がリーダーだ。1グループ人ずつで行う。いいか？では分かれる。」

ダダダツシュ！

「織斑きん……織斑君！一緒にやろう！」

「ISの乗り方、分かんないから教えてね。」

「デュノア君の、操縦テクみたいなく。」

「あく！私も見たい！同じグループに、入れて！」

プチッ！

「この馬鹿者共が！良いだろう、私が決めてやる！」

ドオン！〔14588／15000〕↑出席簿で地面を叩いた

「ウワアアアアアアアアアアッー!?」↑飛び散る生徒

ドドドドドドスッ……↑振り分け完了

「この手に限るな。」↑万誘筋力*万物を誘導する筋力

「よし！織斑君と一緒にの班。……ねえねえ、織斑君。織斑先生って誰かに野蠻だつて

言われたこと無い?」

「それは言わない方が良い。それを言うと、俺も死ぬ。」

「分かるわ、話して数秒の私でも死ぬばいいと思うの・・・。」

「おい、随分な言い方じゃないか。」

ズバァン! 【9/100】

「今度(私の)陰口をたたいたら、1学年に縫い合わずぞ。」↑要は留年

「2組の女子は止めてやれ。死ぬほどダメージを受けてる。」

「駄目だ・・・山田先生、説明を。」

「あ、はい。えつと、皆さん。訓練機を各班1機取りに来て下さい。訓練機は、打鉄が3機にリヴァイヴが2機です。班で決めて取りに来て下さい。早い者勝ちですからからね!」

「どつちが良い?」

「よし、織斑君!筋肉ルーレットしよ——」

「その必要はない。打鉄で良いか?」

「ああ、いいぞ。」

「ええ!?!篠ノ之さん!?!って、IS持上げてるし!!」

「嘘!?!私、箸より重い物持ったこと無い!」

「ふん、軟弱者が。一夏なら、ISより軽い物を持ったことがないわ！」

「・・・箒、俺だつて爪楊枝ぐらい使う。」

「それに、さつきデュノア君担いでたしね。」

「」

「それでは、各班の班長は——貰うので、——設定で——てあります。取り敢えず——下さいね。」

「・・・じゃ、始めるか。出席番号順で構わないか？」

「出席番号一番！相川清香！部活はハンドボー——」

「フンツ！」↑投げた

「ブツ!!」↑投げられた

「よし、起動してくれ。」

「・・・織斑君は、誰かに強引だつて言われたことない？」

「起動してくれ。」

「あ、え・・・えーつと・・・どうするんだっけ？・・・ええい！」

ガンガンツ！

・・・ウイイイイイ

「「ええ・・・」↑班員ドン引き

「・・・この手に限るわ!!」↑まぐれ

「面白い起動の仕方だな。気に入った。起動の仕方を採点してやろう。」

「さ、採点?」

「ああ、100点だよ!」↑脳筋としては

ドスンツ!↑引き摺り落とした*通称：引落ひきおとし

「教科書を読んでこい!」

「(起動操作の方法を忘れて)すまないと思ってるわ。」

「一夏、その位にしといてやれ。」

「そうだな。・・・次の人。」

「あの、織斑君・・・、届かない。」

「引き摺り落としたのが拙かったか・・・。」

「あ、やってしまいましたか。仕方ないですね。織斑君、乗せてあげて下さい!」

「山田先生、何故、俺が乗せるんです?踏み台を用意すればスツキリするのに。」

「もう、織斑君つたら古いですね。立ってるI Sは、バランスが悪いから踏み台は危険なんです。」

「俺達はI S乗りだ、踏み台じゃない。」

「「じゃあ、抱っこで!!」」

「ふざけやがってえ!!」

ベキツ、バキツ、ビシイ!

ドスウン・・・↑倒した

「これで乗れる。」

「む、無茶苦茶だわ・・・。」

「よし、乗れ。・・・そうだ、乗ったか?」

「うん。」

「よし、起こすぞ!」

ムキイ!↑生身でISを起こした

「「・・・IS使ったら?」」

「・・・あれえ? 起動しないな?」

「お前等・・・。まず、メイン電源を入れる。」

「あつ・・・。」

「よし、いいぞ。電源を切つて。しゃがんで降りr——」

「あ、ごめん・・・。」

「クソツタレがあ!」

ベキツ、バキツ、ビシイ!

バシイイインツッ!【8900/9999】

「うおおおおお・・・。」

「馬鹿者が。ISを壊す気か?」

〈〈あー、ほらね。〉〉 ↑1組

〈〈いや、体の心配しよ?〉〉 ↑2組

「そこまで!各班、ISを持って来て下さい。」

「よし、分かった。」

「一夏、私が行こう。」

「いや、待っていてくれ。最近、筋トレが出来ていないんだ。」

「そうか、では任せた。」

「ふんっ!」

「お、織斑君?私を持ってこいと言いましたが、持ち上げてこいと言った記憶はないですよ?」 ↑慣れてない*2組の担任

「気にするな。トレーニングだ。」

〈〈軽くない?〉〉 ↑1組

〈〈ええ、苦行でしょ・・・〉〉 ↑2組

「よし、午前の実習は終了だ。午後は今使った訓練機の整備を行うので、格納庫に集合すること。専用機持ち、お前等は訓練機と自機の両方を見ること。では、解散！」

— 少し時間は戻って、ラウラの班 —

「……………」

「……………」

「おい、ラウラ。」

「はい、何でしょうか教官！」

「良い返事だ。採点してやろうか？」

「は、感謝します！」

「0点だ！ここでは、先生と呼べ！」

「はっ！失礼しました！」

「それよりも、ラウラ。授業の進捗に置いて行かれているぞ。とばせ。」

「はっ！おい、貴様等！さっさとISにn——」

ドベキシ「オフィ……………」【I／8000】

「ああ、駄目だ。これじゃ授業にならない。山田君、例の資料この班に配って。」

「はい、かしこまりました。(……………ん?)」

「・・・先生、これは何ですか？」

「ラウラの取扱説明書だ。」

「誰が作ったんです？」

「あそこの髪は濃紺、身長170cm！ISスーツ姿の筋肉モリモリ、マッチョマンの変態だ！・・・なぜ、ISをだした

ベキッ！

「・・・わああ!？」↑山田先生

「・・・安心しろ。あの程度では一夏は壊れん。」

「お、織斑先生!?!先に打鉄が駄目になります!」

「良いじゃないか。始末書書けば。」

「だ、駄目です!・・・あ、でも、この授業の責任者は織斑先生なので、先生が書かれるなら良いですよ?」

「おい、一夏アアアアアアア!」

〽〽〽変わり身、早ッ!〽〽〽

第18話 これぞセシリアの真髓

— 昼休憩 —

「・・・ねえ、織斑君？」

「何だ？」

「何で、僕たちは校舎の壁を上っているのかな？」 ↑当然素手

「屋上で待ち合わせをしているからだ。」

「いや、だったら階段を使えば良いじゃん！」

「駄目だ。」

「駄目え!!」

「あまり大きな声を出すな。野次馬と新聞部に見つかる。」

「そこ!?!心配するところそこ!?!」

「ああ、そうだ。明日の学内新聞のネタにされなくなかったら、黙ってる。それから、包囲網を敷かれたら、流石の俺でも人を背負って階段を上りながら突破するのは厳しい。」

「無理じゃないんだ・・・。だからって壁を選ぶのはどうなのかなあ・・・。って言う

ドサッ

「これで片付いた。」

— I S 学園、屋上 —

ドサ↑デュノア到着

「!？」

「……。」↑放心状態

「デュノアが来たと言うことは、一夏もそこまで来ているな。」

ストッ

「ほら、来た。」

「シャルル、大丈夫か？」

「僕、死んでるんじゃないかな？」

「大丈夫だ。生きてるよ。……待たせたな。」

「ね？言っただでしょ。織斑筋なら人っ子一人背負っても壁を上れるって。」

「き、筋肉バカだとは思っていましたが……、まさかここまでするなんて……。っ

く、私としたことが……。」

「……何を揉めているんだ？」

「セシリアが、アンタが見当たらないって言うから、『校舎でも上ってるんじゃない

「?」って言ったたら、信じなかったのよ。」

「ええ、そうですね!普通でなくても上りませんわ!そうですね、デユノアさん!」

「そうだよね……。僕も驚いたよ。織斑君が、食堂は混むから、秘密の場所に連れて行ってくれるってことで付いて来てみたら、まさか背負われて壁を登なんて……。最後は、投げるし。」

「ってか、そろそろ食べない?授業に遅れると千冬さんに叩かれるわよ。」

「そ、そうですね。あの出席簿は喰らいたくありませんもの……。」

「と言う訳で、はい。」

ドンッ!

「……。ドン?」

「酢豚か?」

「そうよ!久しぶりでしょ?時間がなかったから、少ししか作れなかったけど。」

「少し!?これは少しじゃないよ!大量だよ!ドンって言ったよ!?タツパだし!」

「タツパは少しよ。大量は、タライに作ってから言いなさい。」

「」

「一夏、私も作ってきたぞ。唐揚げだ。」

ドンツ！

「で、白ご飯。炊きたてだ。激旨だでえ！」

ドスンツ！↑炊飯器

「・・・シャルル、どうした？」

「いや、僕がここにいて良いのかな・・・。」

「それ、デュノア。皿とフォークだ。」

「あ、篠ノ之さん。ありがとう・・・。」

「「いただきます。」」

コツカツコツカツ・・・モグモグモグモグ！

「・・・何時もこんな感じなの？」↑◎鍋肉並感*某宣伝

「いや、普段はもつとドンパチ、賑やかだ。」

「」

「「「ごちそうさまでした」」」

「す、凄い・・・。あんなにあつたのに・・・。日本人って、みんな大食いなの？」

「私、国籍は中国よ。」

「実質日本人だろ。」

「んん、一夏さん。まだ足りないようでしたら、私、サンドイッチを作ってきましたわ。」

よかったらどうぞ。」

「ああ、いただこう。」

七ヨイ、パクッ

「?!?!」

「美味しそうね、私もh——」

「セシリアは、サンドイッチだと言ったな。」

「うん、そうね。どう見ても、サンドイッチよ。」

「あれは嘘だ！」

バタアアン！

「一夏！ 繰り返しします、一夏!! 箒だ！ 返事をしろ！」

ダダダッダダダダッシユ↑搬送中

「見ろ、あの織斑君が倒れてるぞ。スクープだ！」

「奴らしくもねえです。サンドイッチを食ってから様子が変になった。」

「それどこで聞いたの眼帯さん? . . . あれ? 眼帯さん . . . ?」

「黛、誰と話してんの?」

「見ました。(眼帯した女子を) 見たんです！」

「カカシには写らんぞ。」

「!?」

目だけが、光っていないかった↑銀髪＋眼帯

― 病院にて ―

「ここは、保健室か・・・。」

「残念だったな。クリニックだよ。」

「そうか・・・。」

「で、どんな味だったの?」

「君は知らないほうがいい・・・。俺だつて、出来ることなら忘れたい」

「下らん、恐怖でおかしくなったか? 相手は只のサンドイッチだ、どうつてことはない。」

「腐るよなあ」

「まったくですわ。サンドイッチ一つにこれじゃあ、大げさすぎます。」

「大佐、何をビビってんだ。」↑どつから来た!

「試してみるか? 俺が意識ほどを失うほどのサンドイッチだ。」

「いや、結構ね。遠慮させて貰うから。」

「・・・食えよ、鈴。怖いのか?」

「食してやる。」

「ええ!?!」

「胃薬なんて必要ねえ! あはははは。腸薬にはもう用はねえ! ふふふふつ。下剤も必要ねえや、へへへへつ。誰がサンドイツチなんか、サンドイツチなんか怖かねえ! . . . 野郎、セシリア製サンドイツチ持って来いやああ!!」

パクツ!

「ウウウウウオオオ。オオオウ。アアア。」

「これで昼に食った飯も抜けるだろう。」

「ウオエ*** (自主規制)」

「次は命がないぞ。」

「こんなサンドイツチは、一度きりよおオオオ!! . . . オ*** (自主規制)」

「セシリア、お前は! 自分がしたことは何にも分かっていない! よくこんなサンドイツチを作ったな!」

「貴方が食べ(させ)たのですわよ!」

「食わせたのは、手前だぜ。 . . . ウオ*** (自主規制)」

後に凰鈴音は、『普通の飯つてのはあ、いいもんだよなあ。 . . . 気をつけて食いなさいよ。いい飯をね。酒でも飲んで腹を消毒しな。衛生の面倒は私がしっかり見てや

るから』と語った。

第19話 美男子とマッチョマン

― 夜、1025号室 ―

バタン

「あ、おかえり。」

「誰だ?・・・シャルルか。」

「うん、先生と同じ部屋だつて。それより、織斑君。大丈夫だった?」

「ああ、今は何とか。」

「お風呂準備してくるよ。待ってて。」

「いや、調子が悪いんだ。とてもじゃないが入れない。・・・着替えたら、今日は休ませてくれ。」

「ほ、本当に大丈夫なの?」

「安心しろ。変なものを食べただけだ。食中毒とかじゃない。」

「いや、変なものって十分ヤバイよ!」

「寝れば直る。」

「」

「じゃ、おやすみ。」

「ボタン・・・↑病院着のままなので

「うーん。いいのかなあ・・・。」

— 翌朝 4時半 —

「一夏！起きてるか!?!」

「うわ!?!何!?!」

「少し待て。今行く。」

「お、織斑君、お風呂入ったの!?!大丈夫なの!?!」

「安心しろ。もう直った。」

「そ、そうなんだ。」へ早っ！昨日あんなに疲れてたのに!?!」

「じゃ、行ってくる。」

「ど、どこに?」

「トレーニングだ。シャルルも来るか?」

「トレーニングって・・・。昨日、体壊して人のする事じゃないよ!!」

「体を壊したから、壊れないように鍛えるんだ!」

「」

「じゃ。・・・それより箒、今はルームメイトが居るから、明日からはもう少し静かに来てくれ。」

「む、そうだな。すまなかった、デユノア。以後気を付ける。」

「いや、いいよ。」

「それより、一夏。ノックしたら直ぐに返事をしてくれ。叩き疲れたぞ。」

「え?」

「いや、すまん。風呂に入ってたんで聞こえなかった。」

「ま、待って!ノック聞こえなかったけど?」

「当然だ。このドアは防音性能が高いからな。俺でも一枚ドアを挟めば聞き取るのは困難だ。」

「」

「じゃあ、行ってくる。」

バタン

「・・・本当に叩いたのかなあ?」

スタスタ、ガチャ

「人感センサーか何か取り付けた方が良いのかな。でも勝手に取り付けたら――」
「うわ!」へ、ノックってこんなにドア凹むっけ!」

コツコツ↑試し叩き

へええ、こんなの凹む!?無理だよ!狂ってるよここの人達!人間じゃないわ・・・

— 2時間後 —

へ・・・ん、ドアが凹んだままだったか。」「ただ今。」

「あ、お帰り一夏。ねえドアg——」

ドゴツ!

「これで直った。」

「ええ!?ちよつと、余計に凸凹になるよ!」

「自分の目で確かめろ。」

へ直らないよ、そんな乱暴にしたんじ——」つて、ええ!?綺麗になつてる。」

「いいか、シャルル。このドアの上から4/7辺り目掛けて、蹴りを入れるんだ。そう

すると、良い感じになる。いいか、よく覚えとけ。ドアとポンコツは叩けば直る。」

「む、無茶だ・・・。ま、まさか、毎朝やつてるの?」

「安心しろ。2〜3週間に一回ぐらいだ。」

「あ、それ位な・・・って十分多いよ!ドアなんて、滅多に凹まないよ!」

「ドアが無くなるよりマシだ。」

「」

「さて、朝飯を食いに行こう。遅刻すると、千冬姉の制裁が待ってる。」

— 4日後、土曜日 —

「ええつと……、一夏達は軍人じゃないんだよね？」

「そうだ。……何で何回も聞くんだ？」

「いや、おかしいよ！一夏達は、一体何なのよ！……ああ!!チェーリングを引つぱり出す、ロケットランチャーはブツ放す、僕を投げる（↑根に持っている）、IS（訓練機）を強奪するのを手伝えなんて突然メチャクチャは言い出す。かと思ったら人を騒ぎに巻き込んで怪我人は出す、拳銃はISを持ち上げる。本当に人間なの!?整備科が、一夏を撃とうとしたから助けたよ。そうしたら僕まで追われる身だ！一体、何なのか教えてちょうだい!!」

「駄目だ。」

「駄目エ!?何でさ!」

「アレを見ろ。」

「誤魔化さないd……、あ、あれはドイツの第3世代型!」

「私の本国からの情報では、まだ試作段階と聞いていましたが……。」

「大佐あ!調子はどんなだ?」

「俺は軍にいたことはないぞ。その呼び方は止せ。」

「つふ、頑固だな。・・・メイトリクス！私と勝負しろ！」

「・・・俺は、織斑一夏だ。」

「まあ、いいだろう！だが、私達『シユヴァルツェ・ハーゼ』にとつて貴方は大佐でありメイトリクスだ！」

「今度ホラを吹いて見ろ。口を縫い合わすぞ。」

「ふん、剣道しか知らん女が何を言うかと思えば。滑稽だな。気に入った。殺すのは、最後にしてやろう。」

「今の言葉、そっくり帰してやろう。」

「ま、待って！生身の人n——」

「ま、見てなさい。大丈夫だから。」

「ええ!? だつて!!」

「・・・いいだろう。今すぐ死ね！」

ドンツ！バシヨツ

「・・・なっ！」

「へ？し、篠ノ之さん？し、竹刀だよね、それ・・・。」

「む、折れたか。私もまだ、鍛錬が足らんな。」

「いや、それ物理法則越えてるから！普通、レールガンに当たった瞬間に竹で出来た物なんか木つ端微塵になるからね!」

「うん、確かに鍛錬不足かもね。一夏でも、ロケットランチャーぐらいなら竹刀で撃ち落とすし。」

「凰さん!?一夏、ホント!」

「シャルルさん、一々驚いていらしたら、体が持ちませんわよ。受け流すのが一番ですわ。」

「チエーンガンを撃つオルコットさんに言われても・・・。」

『その生徒、何をしている!』

「・・・ふん。今日のところは引いてやる。大佐、また来る。」

『学年とクラス、出せk・・・おい、その黒いの!何処に行く!待ちなさい。ガチャ・・・』

「うっさいわね、まったく。何よ、ただ遊んでるだけでしょ、あんなの。」

「あ、遊び!?ISが生身の人間に発砲して、遊び!」

「シャルルさん、仕方ありませんわ。一夏さんは、私に生身で挑んできましたから。」

— 夕方 —

バタンツ

「つ、疲れた……。」

「さて、メに行くか。」

「し、メ？」

「ランニングですわ。一夏さんと篠ノ之さんは何時も終わる前にアリーナを走られるのです。」

「い、今から!? 一週が10kmあるのに!?!」

「そうよ。見てみなさい、もうあそこまで行つてるから。」

「え、どこ?!! 速!?!」

「疲れていらつしやるのかしら。普段より遅いですわ。」

「お、遅い!? アレで!? もう、ランニングじゃないよ! ダツシュだよ!」

「はいはい。アンタは早く慣れなさい。」

「」

— その後、更衣室 —

プシュー……

「あ、織斑君。ここにいましたか。」

「山田先生。今から帰るところです。何か？」

「はい。今月下旬から、大浴場が使えるようになります。」

「だ、そうだ、シャルル。」

「え、あ．．．そうですか。」

「?!」

「え、い、いやあ、楽しみです。」

「そうか、ならよかった。」

「あ、それから織斑君。白式の登録に関する書類があるので、職員室まで書きに来て下さい。」

「そうだな。先に一旦部屋に帰って風呂に入ってきてからでもいいか？」

「えー、職員室の鍵のことがあるので、出来るだけ早く来て欲しいのですが．．．。少々枚数も多いですし．．．。」

「そうか．．．。分かりました。シャルル、そう言うことだ。先に帰っていてくれ。」
「う、うん。分かった．．．。」

第20話 美女と筋肉

— 夜、1025号室 —

へはー……。疲れた……。あ、そうか。一夏は暫く帰ってこないし、シャワーでも浴びてこよう。

— その10分後、職員室にて —

「はい、以上で終わりです。」

「……これだけか？」

「はい、そうです。お疲れ様でした。」

「何で、今日なんだ？明日の昼休憩でも出来るのに。」

「私の机の上がスッキリするからです！」

「ふざけY「ああ、山田先生。よかった。この書類を頼m……。一夏!?!」……。ふざけやがってえ!!」

「ま、待て、酒は飲んでない!!」

ズドドオオンッ↑↑↑クーゲルシュライバー・ドイツ・ヴェルフエン*訳：ボールペン
ニッポン
2本投げ

へど、ど、どうしよう・・・。

ガチャン

へ・・・ええ？無視!?

— 5分後 —

『あ!!』

ビクッ!「!?’

ガチャ

「シャルル、すまないがダンスの中から石鹼を取ってくれ。」↑何でダンスに仕舞う?

「え?あ、いいよ・・・はい。」

「ありがとう。」

バタン

「・・・。」

『あ!!』

ビクッ!「!?’

ガチャ

「シャルル、タオルを落とした。すまないが、棚からタオルを出して貰えないか?」↑

タオルと石鹼逆でしょ

「あ、いいよ。．．．はい。」

「ありがとう。」

バタン

「．．．。」

— 3分後 —

ガチャ

「なあ、シャルル。今、体を拭いていて気が付いたんだが、お前のこの辺り．．．（胸筋ピクピク）に付いているのは胸筋ではなく鈴にはないアレか？（．．．ん？）」↑遅い

「り、鈴？あ、凰さんか。．．．そ、そうだよ。」

「ならいいんだ。」

「．．．何がいいの!？」

ガチャ

「あー、サツパリした。よし、シャルル。飯食いに行こう。」

「あ．．．、いや、待って!」

「冗談だ、安心しろ。誰にも言わん。異性への擬装は、諜報の世界では古くから行われてきた。それを分かっているとは、デユノア社、やっぱり大したもんだよ。（．．．んん

「？」

「流石だね一夏。その通りだよ……。」

「目的は、これだろう。」↑胸筋ピクピク

「ち、違うよ！そんなもの……いや、そんな言い方は失礼なんだけど、違うよ。僕が指示されたのは——」

「ああ、腕こぶちか。」ポーズを取りながら*お好みのポーズで回想して下さい

「だから 違うって!!」

「ん、そうか。やはりこれだったか！」

「アエエエエエエーン↑ロケットランチャー」

「全然違う!!」

「……じゃあ、これか？」

「……何それ？」

「織斑千冬の（縫い合わされた）財布だ。」↑何で持つてるんですかねえ

「い、一夏、ふざけてるの？」↑こめかみピクピク

「ああ、そうだ。」

「はあ……、僕が指示されたのは、白式のデータを盗んでくることだよ。」

「この近接だけが取り柄の欠陥機ボンゴツだろ？くれてやる。」

ポイツ

「!?わ、わ、わ、わあ!!」↑キヤツチ

「それに、防弾チョッキの方が動きやすいしな!」

「だ、駄目だよ! 持つて帰るのはマズインだ! それに、学年別トーナメントはどうするの!?!」

「冗談だ。俺もそれぐらい分かってる。」

ヒョイ↑白式回収

「安心しろ、IS学園なら、外部から干渉（物理は除く）されることはない。」

「・・・え?」

「特記事項第2-1だ。覚えてないのか? 今すぐ見ろ。」

「あ、うん。・・・成る程。凄いね一夏は。55個全部覚えてるの?」

「当然だ。・・・何がおかしい?」

「いや、だつて一夏、何時も筋力にものを言わせて押し通してるのに、こんなことを覚えてるなんて。ギャップが凄いよ。」

「2ヶ月もいれば、覚えられる。難しいことじゃない。・・・誰か来る。」

「え?」

ポフツ! ↑ベットに放り投げた

「ゲホッ。」

「静かにしてろ。」

ピンポン、ガチャ

「二夏さん、いらっしやいますか？入りますわよ？」↑もう入ってる

「セシリアか。何のようだ。」

「二夏さん、夕食は摂られましたか？」

「いや、まだだ。」

「そうですか。よろしければご一緒しませんか？」

「ああ、いいだろう。」

「あら？シャルルさんは？」

「セシリア、頼みがあるんだが、シャルルを起こさないでやってくれ。今日の訓練で死

ぬほど疲れたんだ。」

「まあ、そうでしたか。では、仕方ありません。私達だけで向かいましょう。」

「ああ・・・、ちよつと待ってくれ。靴が違うんだ。」

「はい、分かりましたわ。」

「・・・シャルル、これ以降返事はするな。動くんじゃないぞ。誰か来ても、無視で良

い。いいな。・・・待たせた。」

「では、行きましょう。」

ガチャ・・・、ガチャ↑施錠

「優しいね、一夏・・・。」

— 30分後 —

ガチャ、バン!

「!?」

「おい、一夏、デュノア! いるか!?! ペパロニのピッツアを作ってきたぞ! 激旨だぞえ

!」↑箒*合鍵で入った

「・・・。」

「む、しまった。デュノアが寝ていたのか。起こすところだった。・・・また明日会おう。」

バタン、ガチャ

〈怖っ! 何っこ!〉

— 更に30分後 —

ガチャ、ガチャ

「シャルル、出てきていいぞ。・・・何処のバカだ? ピザ頼んだのは。」↑ピッツアです

「あ、一夏おかえり。それは篠ノ之さんが持ってきてくれたペパロニ？のピッツアよ。」

パカッ

「確かにペパロニだ……。!?ばれなかったか!？」

「うん、話し掛けられなかったよ。」

「ならよかった。・・・そうだ、シャルル。今、カタツムリを捕まえてきたんだが、食べるか?」

「食べないよ! エスカルゴじゃないし! それデンデンムシだし! (怒) 第一、エスカルゴ嫌いだし!」

「そうか、違うのか。じゃ、捨てよ。」

ガラガラ、ポイツ

『ウーワアアアアアア!!』↑カタツムリ

ジャー↑手洗い*除菌

「待ってろ、今(ピッツアを)暖める。」

「あ、ありがとう。」

チン

「どうぞ。」

「いただきます。．．．ん！美味しい！フランスの味は違うけど、美味しい！篠ノ之さん、凄い！」

「よかったな。」

後にあのカタツムリは、セシリアに料理されたとかされなかったとか．．．。（なつてたら恐怖）

第21話 敵が変わる人達

— 休憩時間、I S学園、廊下 —

へくそつ、何でトイレが近くにないんだ……。あれは……。↑トイレ帰り

「教官！何故こんな所で教師を！大佐もです！」

「ラウラ、何度も言わせるな。私は教官ではないし、一夏も大佐ではない。それに、日本で静かに暮らすつもりだからだ。ま、ドイツの軍より賑やかなことは否定しないがな。」

「あなた方は、こんな極東の地に何の役目があるというのです！」

「何も無い。」

「大佐!!・・・お願いです。教官、大佐。我が隊、シユヴァルツェ・ハーゼにもう一度ご指導を！ここにいては、あなた方の能力は生かされません！」

「何故だ？」

「この学園の生徒は、皆力カシです！あなた方と釣り合う人間ではないのです！I Sをファアツションか何かと勘違いしている力カシ如きに、あなた方の時間を割くだけ無駄

d——」

「それ以上喋ってみろ。口を縫い合わすぞ。」

「!!」

「きよ、教官、わ、わー——」

バシイン!

「教官ではない。先生だ。……授業が始まる。さっさと教室へ戻れ。」

「ま、まだ話g——」

ドベキシ【1／8000】

「オフワイ……。」

「子ウサギを黙らせるには、この手に限る。」

「すまん、一夏。」

ヒヨイ↑ラウラ回収

「……気にするな。遅かれ早かれ、はじめを付ける必要があった。その時期が近付いてきただけだ。シュヴァルツェ・ハーゼに俺達の良い印象を植え付けすぎた。ラウラの今の発言だって、俺達のせいだ。」

「ああ。……織斑、時間がない。急いで教室に戻れ。廊下は走るなよ。OK?」

「ああ、分かっている。」

ダツ!↑壁ダツシュ

— 20分後 —

へ．．．んん．．．!!いい、いかん。私としたことが。教官は．．．、教官と大佐と何か話していた気が．．．。いや、思い違いか．．．。ゝ

— 放課後 —

「やつぱり、一夏達が居ないとアリーナが静かね。」

「ええ、そうですね。慣れたと言つても、やはり毎日、あの2人がいては、気が休まりませんわ。」

「それにしても．．．静かね。」

「ええ、よく音が聞こえますわ。例えば、こちらに照準を合わせている音とか。」

ドンツ!

「ラウラ・ボーデヴィツヒ．．．。ドイツの子ウサギがあたし等に、何のよう?」

「中国の甲龍、英のブルー・ティアーズ．．．。つは、データで見た時はどれ程強いのかと思つたが、実物はEOS並だな。」

「はあ?何言つてんの?カタログスペックなんて、下駄履かしてるからスペック高くてなんぼでしょ?」

「その程度のこともご存じないなんて、ドイツの軍はさぞかし世間を知らないのです

わね。あ、失礼しましたわ。ドイツは完璧主義ですから、誤魔化すことなど、なさいませんものね。」

「ふん、口の利き方を覚えるんだな、数が取り柄の国と、古いだけが取り柄の国にはトーシローしか居ないようだがっかりだ。」

「セシリア、じゃんけんしよ。勝った方が行く、いい?」

「ええ、良いですわ。」

「は! 舐められたものだ。2人がかりで掛かっ t——」

「最初はグー。」

「聞けえ!」

ドオン! ↑レールガン

「!?」 ↑ 躲された

「じゃんけんPON☆!」

「つく! コケにしゃがって!」

「あ、負けちゃったわ。」

「おほほほ、私の勝ちですわ! では、私がお相手いたします!」

「怖いのか中国?」

「怖がつてんのは、アンタでしょ?ら・・・何とかウサギ。」

「ラウラだ！2人まとめて掛かってこい！」

「はー。面倒くさいですが、仕方ありません。鈴さん、2人で行きましょう。」

「OK。」

ドン、ビシューーン！【16011／24000】

「つく!!」

「あらあ!?先程までの威勢はどちらに?」

「止めなよ、セシリア。みつともないから。所詮ウサギよ。」

「ふぎけやがって!来い、ポンコツ!」

「お黙りなさい!まな板!」

ドゴン!【26000／27000】

「な!り、鈴さん?何を!!」

「ふふふふ……。誰がまな板、貧○だあ!」

「あ、貴方に言つた記憶は……。つく!!」

「ハツハツハ!よくも言つてくれたな!イギリス!」

「キヤアアアアー!」

「り、鈴さん!落ち着いて下さいませ!」

「地獄へ堕ちろ!巨*!」

ドン！【12000/27000】

「つくー！」

「良い働きだったぞ。中国。」

ドン、ドン、ドゴゴオン！【11000/16000】

「つな、小ウサギ！アンタ、裏切る気!？」

「裏切る？手を組んだ覚えはないぞ！」

ドドドドオオオオン……

——アリーナ、観客席入り口——

〈賑やかだな、一夏達、もう始めてるな——〉

「シャルル、良いところにいた。今から特訓をしようと……。賑やかだな。見てみるか。」

「……!!いい、一夏あれ！」

「鈴、セシリア。……ラウラに負けるようでは、話にならんぞ。」

「い、いや、そんな呑気なこと言ってる場合!？」

「安心しろ、怪我は寝れば——」

「直らないこともあるから！急いで助けなきや！」

「必要ない。」

「何で！」

「見てろ。」

ゴソゴソ、スツ

「何それ？」

「スイツチだ。」

「スイツチ？」

「ああ。」

「どうするの？」

「押す。．．．．行け！」

チュドオオオオオオオオオオオン！ 【12000 / 15000】

【2213 / 24000】

「!？」

「．．クレイモアにしてはイマイチだな。」

「い、イマイチ!? オーバーキルだよ!! グランド凹んだし!! つて、言うか、何時の間に仕掛けたの!？」

「あれは、シャルルの来る前のことだ。知らなくて当たり前だ。」

「いや、だから何時!？」

「このアリーナでの授業で、俺がグラランドを凹ませた。その時、かさ増しするのに。」

「一夏は、テロリストか何か?! 普通じゃなくても、かさ増しに火薬は使わないよ!」

「俺が見間違えたんだ。袋には砂利って書いてあった。だが、正確には砂利型爆弾だった。気が付いた時には埋めた後で、掘り起こすのは無理だったんだ。」

「だからって埋めっぱなしはマズイよ!」

「大丈夫だ、今ので使い切った。」

「そう言うことじゃないよお・・・。」

「説教なら、後で聞く。ラウラが退く。鈴とセシリアを助けに行くぞ。」

第22話 ただの打ち身ですな（大嘘）

— 第3アリーナ —

「大丈夫か？ 鈴、セシリア。」

「……ツう、……い、一夏……。」

「だ、大丈夫でs……ツウグ！」

「無理に動くな。……担架を取ってこなくちゃ。」

「私が行こう。お前がいた方が良い。」

「ぼ、僕も行くよ篠ノ之さん。」

「頼む。」

ダッ

「ら、ラウラは？」

「退いた。」

デエエエエエエン！

「ラウラあ！ どこだ!!」 ↑効果音一緒かよ！

「千冬姉、もう奴は帰った。それから、ここには怪我人がいるんだ。静かにしろ。」

「

「おい、一夏！持ってきたぞ！」

「どうも。箒は、俺とセシリアを。シャルルと千冬姉は鈴を頼む。」

—— 一時間後、保健室 ——

「別に、最初からやられつぱなしだった訳じゃないからね。」

「そうですわ。鈴さんが仲間割れをしたせいです！」

「な！あんたがいらぬことを——」

っん

「ウギッ!!」

「今度余計に騒いでみる。傷口をぶつ叩くぞ。」

「し、篠ノ之さん、厳しいね……。」

「ふん、自業自得だ。」

「そのくらいにしてやれ。……しかし、ただの打撲程度で済んで良かった。」

「寝れば直るって言うんでしょ。」

「……何で分かった。」

「僕も、伊達に一夏と同じ部屋で生活してるわけじゃないからね。」

「……！何か来る。それも集団だ。」

・・・ドツドツドツドツドドドドドドドド！ドーン！〔0/2000〕↑飛び散る（ドア）ガ
ラス、吹っ飛ぶドア！

「わあ!?ど、ドアが!!」

「織斑（デュノア）君!!私とペアを組んで!!」

「駄目だ。」

「駄目え!?何で!?!」

「シャルルと俺が組むからだ。」

「何だ、なら仕様がねえ。他の女子と組まれるよりましだし。」

「!?」〈他の女子って、もしかしてばれた!?!〉

「じゃーね、織斑君!シャルル君!また明日!!」

〈あ、ばれてないみたい・・・じゃなくて!〉「ま、待つてみんな!ドアを直し」

サーッ

「逃げ足速っ!」

「・・・このドアはもう駄目だ。」

「一夏!幼なじみでしょ!私と組みなさい!!」

「い、一夏さん!ここはイギリスの代名詞、セシリア・オルコットと組むべきですわ!!」

「それは無理だ。」

「無理!?何でよ!」

「そうですね!説明を要求します!」

「お二人のI Sですが、ダメージレベルがCを超えています。ここで無理をすると、後々、重大な欠陥に繋がることもあります。急速も兼ねて、今回の出場は認めません!」

「俺はシャルルと組むからだ。山田先生、訓練機があるだ——」

「それは、候補生のプライドが許さない（ですわ）!!」
「」

「ま、しょうがないわね。」

「ええ、まったくですわ。」↑そんなに嫌か

「山田先生、一つ質問があります。」

「はい、デユノア君。何でしょう。」

「先生は今、二人と仰いましたが、ラウラさんは含まれていないのですか?」

「ぼ、ボーデヴィツヒさんですか?いえ、何も聞いてませんが……。」

「あいつは、必ず出る。」

「「ええ!?あの状態で!」」

「バシーン!!バシーン!!」[1102/1600]↑有言実行

[1057/1500]

「」

「よ、容赦ないね……。」

「我慢した方だ。」

「……続けるぞ。これが何か分かるか？」

「これは甲龍（ブルー・ティーズ）の装甲じゃない（ですわ）。」

「ああ、そうだ。さつきグラウンドを探してきたが、これ以外に破片は見つからなかった。」

「じゃあ、イマイチって言ったのも……。」

「そうだ。IS相手では、あの程度の爆破はただのクラッカーにしかならん。」

「生身で私に立ち向かった方に言われても、説得力ありませんわ！」

「イギリス、アンタもやったじゃない。」

「あ、あれは篠ノ之さんに渡されたからですわ！」

バゴゴオオオン!! 【1004／1600】

【857／1500】

「ヒグツ……。」

「次は、セシリアのサンドイッチだからな。」

「……まだあったのか。」

「ああ、冷凍保存してある。」

「それっておいしいですか？」

「食べてみるか？」

「……。」

「い、いえ、嫌な予感がするので遠慮しておきます。」

「怖いのか？山田先生。」

「勿論です!!相手があなた達ですから……。」↑必死

「」

――夜、1025号室――

「一夏、さっきの話は本当なの？」

「ああ、本当だ。」

「でも、僕なんかじゃ一夏の足手まといに……。」

「安心しろ。シャルほどの技術があれば、俺の足手纏いになることはない。」

「……篠ノ之さんは？」

「あいつは既に警戒されている。シャルの方が都合が良いんだ。」

「そうなの？」

「ああ。それに俺達は殲滅には向いているが——」

シャキン！ズドン！↑抜けた床の飛ぶ音

——ゴロゴロゴロゴロ……

「手加減が出来ない。……またつまらぬ物を切ってしまった。(……ん?)」

「し、篠ノ之さん、どこから来てるの!？」

「見ての通りだが？」

「」

「そういうわけでデユノア。私の代わりに頼んだぞ。」

「篠ノ之さんの代わりは無理だよ。」

「大丈夫だ。お前はかなり筋が良い。」

「……筋？」

「明日から、シャルルもロケットランチャーとチェーニングガンを練習してくれ。」

「来ると思ったよ!!一夏、それは無理！」

「大丈夫だ。説明書通りにやればできる。」

「」

「今日は遅いし、もう寝るか。」

「そうだな、失礼する。」

シユタ・・・

「・・・一夏、壊れるのはドアだけじゃないの？」

「グラウンド、アリーナのシールド、整備室、格納庫、コンテナくらいだな。」

〈結構壊してた・・・〉「ところで、この穴どうするの？」

「米粒でも付けとけ。」

「いや、耐えられないよ！」

「だったらお札でも貼ってろ！」

その後、床が抜けることはなかったそうなの。

第23話 弾ける筋肉、飛び散れIS

— 6月最終週、学年別トーナメント当日 —

「失礼します、山田先生。これ、トーナメントです。」

「はい、ありがとうございます。」

「失礼しました。」

ガチャ・・・ボタン

「・・・つて、ええ!?!何ですかこの組み合わせは!」

ガチャ

「ん?トーナメントが来たか。見せてくれ・・・おい、山田先生。」

「は、はい、何でしょう織斑先生・・・。」

「このトーナメントはどういうことだ?」

「し、知りません!私だって、今渡されたんですから!」

Bannon!

「おい、千冬姉!このトーナメントはどういうことだ!?!」

「私に聞くな!」

ドゴオン!

「おい、一夏!この組み合わせは何だ!」

「知るか!!俺に聞くな!」

ズバァン!

「おい、剣道娘!貴様がペアとは、どういうつもりだ!!」

「知るか眼帯ウサギ!」

コンコン、ガチャ

「誰だ!!」

「私です、先生……。トーナメントに誤りがあったので修正しました!」↑最初に出

て行った人

「ああ、そうか。ご苦労。」

「……おい!」

「は、はい、何でしょう……。」

「「一番大事なところが直ってねえじゃねえか!!」

「ひえ!?!」

チユドオオオオオオオオオオオオ!

— 開始直前 —

『さあ、注目の第一試合！まず入ってきたのは——』

ゴゴゴゴゴゴ・・・↑威圧感

『・・・篠ノ之箒さんと、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです・・・。つ、続いて入場してきたのは、シャルル・デュノア君と、我らが筋肉、織斑一夏君です・・・。』↑テンション低い

「・・・ねえ、一夏。何か空気重くない？」

「ああ、・・・そうだな。」

「・・・終わり!？」

「その通り!？」

デエエエエエエエエエエン! 【99999／99999】

『『『イエエエエエエエエエエイ!』』』

「大佐!ご苦労様です!」↑見たかった

「・・・。』シャルル、事前の打ち合わせ通りだ。』

『ラウラを抑えられるとでも?』

『お前なら出来る。』

『・・・やってみる。』

ピーッ!↑試合開始!

「じやまだ!!」

「ぐえつ。」↑シヤルル&ラウラ

ヒュン、ガッ!

「ぐあつ!・・・な、大佐!」

「ゲホ、ゲホ・・・。僕が相手だよ!!」

「カカシは引つ込んでろ!」

「ぬうううううう・・・!」

「ふんうううううあああ!」↑一夏&箒*顔芸しながら鏢迫り合い

「ええい、邪魔だ!」

「行かせないよ!」

バン、バン!ガッ!

「うをおおつおおらあ!」

「キエエツエエエエエエエエエ!」

ドゴン!ドゴオン!バキイ!デエエエエエエ!

「か、体が動かない!?!」

「フハハハハハ!A I Cの威力をとくと味——」

バキイイン・・・

「……よくやった！シャルル。」

「はあ、はあ……。それにしても、あの高さから落ちてよく平気だね……。」

「清水の舞台に比べればまだまだ。」↑今の、それより2.5倍高いです

「へえ、そうなんだ……。？」↑知らない

「……。こんな、こんな無様な負け姿を、大佐と……。教官に見せる訳には、見せるわけにはいかん!!」

『子ウサギよ。力が欲しいか？……。今ならPON☆とくれてやるぞ？。』

「!!カモオオオオオオオオオオン！（……。ん？）↑トツプギ○並み感

バシィッ！

「アアアアアアアイ！」↑某球審じゃないです

「な、何あれ!？」

「液体I Sだ。」↑VTシステムです

「見ろ！一夏！あの姿、千冬さんにそっくりだ。」

「……。来るぞ！伏せろ！」

「バキィー！——ゴロゴロゴロ……。」

「無茶だよ！I Sに当たり勝ちしようなんて!!」

「一夏、私も——」

「待て、これは俺の問題だ。一人でさせてくれ。」

「・・・了解した。」

「い、一夏。僕のリヴァイヴからコア・バイパスでエネルギーを——」

「必要ない。」

「ええ!?でも——」

「動け!動けてんだ、このポンコツが!」

「バシバシ!・・・デエエエン!」【10000/10000】↑雪片だけ*しよっぺえ

「うそおん・・・。」

「行くぞラウラアアアアアアアアアアア!」

「シューウウウウウウウ・・・」【9999/9999】

「!!ウラア!」

「ドベキシ!」【オフィ・・・】【1/44000】

「これで腐ったシステムも抜けるだろう。」

「めちやくちやだあ・・・。」

「どこのバカだ、VTシステム積んだのは。」

「そんなこと逝ってる場合か!医務室に運ぶぞ。」↑逝ってるんなら葬儀屋では?

「安心しろ、(まだ)生きてるよ。・・・チョコチョコと手先を動かすだけで、壊れちまつ

第24話 トマト祭り IN 1—1

— 夜、廊下にて —

「あ、織斑君、デユノア君、良いところにいました！」

「何だ？」

「今日から大浴場解禁です!!」

「!？」

「今日はボイラーの点検があつたので、元々使えない予定でしたが、終了したので特別に男子に開放します！鍵は私が預かっているので、脱衣所の前で待ってますね！」

ヒューンッ！

「待て、・・・クソッ！」

「ど、どうする？」

「行くしかない・・・。」

— 大浴場前 —

「あ、来ましたね。一番風呂です！」

「どうも・・・。」

「あ、ありがとうございます？」

「では、ごゆっくりどうぞ。」

パタン……

「シャルル、先に入らせて貰う。待ってろ。直ぐに上がってくる。」

ガラガラ、ビシヤツ！

へ……よし！入ってやる！

——1分後——

カチャ……

「二夏、入るよ？」

「丁度よかった。上がるところなんだ。ゆっくりして良いぞ。」

「エエエエエエエエエエエ！」

ガラガラ、バン！↑ドア閉め

「僕の話聞けえええ—————♪（……ん？）」

「良いだろう。」

パカツ↑天井板外し！

「ど、何処にあがってるの！」

「シャルル・デュノア、横から話すか、上からはナスカ。（……ん？）」↑何で地上絵

になつてんですかねえ．．．

「お、降りてきてよ！」

「．．．仕方がない。」

ストツ、ツルツバキイ！【0／200】↑タイル×3

「しまった、床を壊した．．．！隠れてろ！」

「ふえ!?」

ザッパーンツッ!．．．ガラガラ!

「一夏ア!今の音は何だ!」↑千冬

「こつちへ来て確かめろ!」

「良いだろう．．．なんだこれは!」

「天井が抜けたんだ。」↑壊した(外した)のお前や!

「修理の申請をしなくては．．．。点検係めえ!クソお、サボったか!ウオオオ!」

バキョオオオン!【0／1500】↑壁

「こ、これじゃあ、出られないよお。」

ガタン↑天井板

「これで(目隠しは)出来た。」

「何か一夏らしいな．．．何か慣れちゃったかな?」

「いいことだ。」

「でね、・・・一夏。僕の本当の名前、教えとくね。シャルロットだよ。」

「カルロット?」

「しゃるろつと!!」

「冗談だ。」

「笑えないよ!!亡くなったお母さんから貰った名前なのに。」

「・・・すまない。・・・じゃ、ゆつくりしてこい。俺は先に帰ってる。」

「あ、待って!それから僕、ここに残ることにしたよ。」

「風呂にか?」

「違うよ! I S 学園に!」

— 翌朝、HR —

「ねえねえ、織斑筋——」

「ほお、私の名前でふざけるとは良い度胸だ。」

「ち、違います! 織斑先生のことではないです!!」

「そのくらいにしてやれ。」

「冗談だ。」

「(変態2人以外) 笑えません! お、織斑一夏君!」

「何だ？」

「デュノア君は？」

「放してやった。」

「・・・何処へ？」

「知らん。遅れるぞと言ったんだが、何処かへ消えた。」

「あ、そう。」

ガラガラ・・・↑山田先生IN

「あ、あの皆さん、転校生・・・ではないけど転校生を紹介します。入って下さい。」

「失礼します。シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします！」

「はあ、部屋割りし直しです・・・。」

「へえ、デュノア君じゃなくて、デュノアさんだったんだ。」

「道理で、筋肉モリモリのマツチョマンにならないと思った。」

ドゴオンツッ！【0／1000】↑教室の壁

「フー、フー！一夏あ！昨日デュノアとお風呂に入ったんですって!?!ええ!?!4ねえ！」

ズドンツッ！↑衝撃砲

バチュツ【0／50】

「「「キヤー!?!」」」

「危ないところだった。」

「一夏!? 今殺したはず!？」

「残念だったな、鈴。トマト缶だよ。」↑トマト缶強ッ！

「頭来た!!」

ズドオオオオオンッ！【0/40】

「残念だったな。水煮トマトだ。」

「二いや、一緒だし!」

「・・・一夏あ！食べ物犠牲にしてまで命を守るとは、アンタふざけてんの!？」

「二いや、そっちの方が普通でしょ!？」↑珍しくマトモ

「うっさい、うっさい、うっさい!! いっぺん逝ってこい!!」

ズドオオオオオンッ！

バチュ【0】

パサッ・・・

「・・・あれ？何コレ?」

「ほおずき?」

「見て、手紙。」

「えーつと? 『みんなへ。ほおずきは、俺の墓にでも差しといてくれ。』だって。」

「・・・え？い、一夏？いちかあああああああああ!!!」
ガラッ

「すまない、遅くなった。・・・何か賑やかだな。」

「ああ、気にするな。・・・遅かったな。」↑千冬

「仕方ないだろ。ウサギ耳の変態に絡まれたんだ。」

「つち、あのバカ。ちよつと消える。・・・悪いが、(クラスを)静かにしといてくれ。」

「ああ。」

ガラ、バタンツ

「うあわあああああつあ・・・!!」

「・・・おい、鈴!静かにしろ。」

「・・・へ?一夏?アンタ、今・・・?」

「何だ、この惨状は!!・・・おい、ラウラ。出て来い!」

「ハッ!大佐!」

「俺がドイツに行ってる間に、何したんだ?」

「いえ、大佐の真似をしたまです!」↑眼帯クイツ

怒ベキシ!「ヒデブー!」【1/8000】

「お、織斑君。ドイツって外国のあれ?」

「そうだ。」

「昨日の今日で？何しに行ったの??」

「安心しろ。ただの惨歩だ。」↑*某研究所破壊

「字が怖いけど!？」

「気にするな。気にしたら、教室は死ぬ。無事授業を受けたかったら、教師に協力しろ

!OK?」

「「OK!」」ボタン↑机に伏せた音。

「み、皆さん起きてくださーい!」

・・・・仕業のベルが鳴る。今日も教室がドンパチ、賑やかになるだろう。

第25話 モーニングショット

「プリントを運ぶんだって？手伝おうか。」

「一夏!?セシリア達と街に行くんじや……。」

「残念だったなあ。トリツクだよ。」

「」

「プリントを受け取りに行くのに手っ取り早いやり方を教えてやるよ。」

ガラガラツ↑窓、OPEN!

「へ？まさか……考え直して！飛び降りれば地面に叩き付けられてグチャグチャだよ
！」

「その通り！」

ガシツ！ブオン！↑落下音

「うわあああああああああああああああああああ
!?!?!?!」

ガバツ！

「はっ!?……あ、悪夢だ……。あれ？ラウラは？ま、良いか。」

ぼふっ↑いや、寝るのかよ！

チュンチュンツ・・・ズババババ！デエエエエエエエン!!!↑!?

「むっ・・・。」

ぼふっ↑お前もか！

「!!・・・ふん！」

ドベキシ！「オフウイ・・・。」【1／8000】

「何故此処にいる!?!」

「どこかの馬鹿クラリツサが（スキンシップに）これが適任だと推薦したんだ！」

「そうか、よーし、良いか？今度俺の布団に潜ってみろ。もれなく、（ガチャンツ！）

チエーンガンが待ってるぜ？」

「む・・・了解した。」

コンコンツ

「むっ、誰か来た。脇へどいてろ。」

ガチャツ！↑遠慮なさ過ぎやしませんかね？

「一夏！朝食の時間だ！それとラウラ、お前の荷物だ、（朝食に）遅れても知らんぞ。」

「ああ、分かった。・・・良く気付いたな。」

「いやさっきのは実に見事だったよ箒。」

「何がだ？」

「ラウラの荷物だよ、俺も起きるまであいつに気付かなかつた。素晴らしい行動だ。俺の動きにそっくりだあ。(・・・ん?)」

「待て、あれはラウラが自分で持ってきたんじゃないのか？」

「何？私は荷物など持って行っていいぞ。お前が用意して持ってきたのかと・・・。」

「じゃ、一体誰が？」

カサツ

「ん？紙切れ？」

「何だ？・・・『男子部屋侵入は以後禁止だ。寮長。』？」

「間違いない、千冬姉だ。完全に気付かれてた。・・・次は命がないぞ。こんな事は一度つきりだ。」

―― 所変わり、食堂 ――

「わああああ！ち、遅刻するうううう!!」

「よう、(珍しく遅刻) やってるな。」

「あ、おはよう一夏、今日は冷えるね。(冷や汗)」

「冷えるなあ？寝言言ってるじゃねえよ。(・・・んん?)」

「あ、うん。なんかゴメン・・・。」

「いや、良いんだ・・・避けようとして、無いか?」

「・・・いやいやいや?そんな事は無いよ?」

「そうか?なら良いが・・・。」

「バァンツ!」【0/2000】↑食堂のドア

「貴様等!朝食は迅速に取れ!」

「よし、そう言うことだ。教室で会おう!」

「ええ〜!さ、3人とも待つてよ〜!」

ダダダダダツ!↑壁ダツシユ

・・・シューーーーン。

「ん?」

「これで、(1時間目まで)お別れだね一夏!」

「じゃあな!」

「へ?」

ガゴオン!「ぐぼあ!!!」【0/18000】

「ご苦労さん。．．．おい、織斑！廊下は走るなよ！」

「分かってる！」

ズバァン！【9998／9999】

「言葉を選べ全く。」

「さて、来週から校外特別実習期間に入るが、羽目を外しすぎないように。」

「先生！山田先生はお休みですか？」

「校外実習には、厳正な視点で現地を視察する下見作業が、必要だ。山田先生はそれに
行ってる。」

「ええ!?山ちゃんもう海に行ってるの!?!」

「良いなくずるーい。私も泳ぎに行きたーい。」

「お前達が行くか?それでも良いんだぞ?その代わりレポート10万枚PON☆と出して貰うことになるがな。」

「いや、結構!」

ズババババァン！【1／150】

「ようやっってるな（．．．んんん?）」

「ああ、一夏・・・どうしたの？」

「ああ、シャルに頼みがあるんだ。・・・付き合っただけだ。」

「・・・えっ？」

「買い物にはいい天気だね。」

「買い物には良い天気だね。」

「どうした、教室の机運びデスクワグで疲れたのか？」

「いや、うん。そうだね・・・。」

「疲れてるなら・・・帰っててもいいぞ？」

「お断りだね。・・・。」

「よし分かった。ホールケーキが必要だね、シェイクもいる。それから・・・でつかいパフェだね。例えば、俺の筋肉みたいな。(・・・ん×4?)」

「そんなに食べられないよ！もう。じゃあ、はい。」

「なんだ？腕相撲か？」

「そんなわけ無いでしょ！手、繋いでくれたら良いよ。」

「なんだそんなことか。ほれ。」

「・・・。」

「どうした、大丈夫か？」

「へ!?!いや?何も無いよ!?!平気平気。行こつ!」

「ねえ、あれ……。」

「手、繋いでる?」

「繋いでますわね。」

「あ、やつぱり?ふ、ふふふつ……ふぎけやがつてえ!」

「ぶつ殺してやる!」↑インターセプターじゃ無いよ!

「ほう?面白そうだな。私も混ぜて貰おう。」

「は?ちよ、待ちなさいよ(お待ちなさい)!ラウラ(サアアアアアン)!」

「大佐ア!私も行きます!」

「ラウラ!?!訓練に参加したんじゃ……。」

「残念だったなあ、トリックだよ」

「ビシッ、ガイイイイイイイイイイン!」【7990/8000】

「ラウラあ……訓練を申し込んでおいてサポータージュとは良い度胸だな。」

「ひい!?!た、大佐、助け……」

「そこに立ってろ。」

「うわああああああああ！」

「・・・危ない所でしたわね・・・。」

「ええ、そうね。」

「おい、2人ともいるんだろう？コンビ（鈴&セシリア）出てこい！・・・織斑だ。（・・・ん×5？）」

（（ばれた!?!）↑ばれいでか。

「どうした、大声出してたろ。忘れたのか？」

「!」

「ついてくる気か？」

「!!」

ビシッ！【9999／9999】*NO DAMAGE!*

「何だ！」

「・・・。」

「ま、まあ、私たちはお邪魔ムシのようですし？」

「か、帰るとしますかね？」

「そうか、じゃ、また会おう。」

「行つてらっしゃい。」

「ああ、シャル、行くぞ。」

「・・・さて、と。」

「じゃあ、つけますか。」

「シャルも水着を買うつもりか？」

「う、うん。一夏は僕の水着見たい？」

「いや結構！（・・・ん×6？）」

「エエエエエエエエエ!!!」

「冗談だ。ああ、早く棕櫚の側で肌でも焼きたいね。学園生活で白ぼけちまった。」

「あ、そこはシユロなんだね・・・。じ、じゃあ僕も新しいの買っちゃおうかな。」

「よし、じゃあこうしよう。男がこっちで女があっただ。30分後に会おう。OK
？」

「うん分かった。じゃあ、また後で。」

番外：このすば

「佐藤和馬さん、ようこそ死後の世界へ！あなたは不幸にも、死に損ないのクソツタレと入れ替わって亡くなりました。」

「死んだって？・・・冗談だろ、俺はトラックを撥ねただけだった。そうだろ？」

「・・・トラック撥ねたってあなたねえ・・・人間には限界ってものがあるんです。幾らなんでも過剰積載のトレーラー引いたトラックターに法定速度超えて突っ込まれて平気なはず無いでしょう？ていうか、トラックとトレーラーを見間違うなんて間抜けねー、ブークスクス！」

「面白い奴だな気に触った。殺すのは今にしてやろう。」

メキメキメキ・・・!!!【8000/90000】↑!?

「・・・ツイダダダダダ!!!ちよ、ちよつと、ごめんなさいごめんなさい！いろいろ謝るからその手を離してー!!!」

「それで、死に損ないのクソツタレってのは何だ。歩道に突っ込んで来そうだったから止めたのは覚えているが、周りにそんな死にかけの人間は見なかった筈だがな。」

「あら、見えてなかったの？あのトレーラーの運転手が死に損ないよ。心臓発作起こし

「ひあつ!?びつくりさせないでよ……。あのね……。」

—*—

「つまり、日本で死んだ若い連中を送り込んでそいつらで人口を補填しようって事か。上手いねえ、そういう転生者に命を懸けさせる方が元のこの世界の人間を説得するより楽だもんなあ。……違うか?」

「……。まあ、そういうことよ。それで、どう?悪くないと思うのだけど?」

「まあ、そこに行くのは良いさ。だが、向こうの言葉をどうする?」

「そこは問題ないわ。神様パワーで勝手に覚えるから。……悪くするとパーになるけど。」

「試してみるか?俺だつて頭の出来は悪くないぞ?」

ドンツ!「40/50」↑ダメメジ無効と言ったな、アレは嘘だ。(机)

「選びなさい。どんなものでも1つ、異世界へ持つて行く権利をあげます。はいこれ力タログ!」

パラパラパラ……

「おい、聖剣なんたらやら聖剣うんたらやら、使い道が見えない。剣と銃。どつちかなら銃が良い!そうだろ?……。だが無い。ロケットランチャーはどうした。」

「そんなもの無いわよ。ねー、早くしてー?まだ、導きを待つてる魂がいるのよー。どれ

選んだって変わらないんだから。早く決めてよー。」

「ビリイツ！〔0／1000〕↑カタログ

「アアアアアアアアアアアア!?何てことすんのよー!」

「面白い奴だな気に入った。連れて行くのはお前にしてやろう。」

「はーい、じゃあそこに立って・・・何て!？」

「承知いたしました。では、アクア様のお仕事は私が代行させていただきます。いつてらっ
しやいませ。」

「ええ!?ちよ、ちよつと待って!そんなの反そつー」

「ドベキシツ!〔1／90000〕

「オフィツ」

「少し黙ってるこのタコが。なあ、コイツはマトモか?」

「とつとと行けえ。駄女神の仕事は私が代行してやるよ。」

「また会おうぜ。」

「再転生でな。」

——*——

「ゴロゴロゴロ!!!〔49999／50000〕↑*墮天補正

「お前の所は部下まで口が悪いのか?」

「うわああああああああ!!!! やめてー! 引き摺らないでー! 衣があああああああ
!」

「うるさいぞ! この仕事にだらしないヴァカ女神が!」

「うるさいわよ! うるさいわよ! ねえどうしてくれんのだよ! 本当に帰れないじゃない
!」

「まあ、落ち着け。そんなに騒がれたんじゃ焦って話も出来やしねえ。とにかく、酒場な
りギルドなり行つてモンスターなり化け物なりを探して潰すんだろ? 急げよ、遅れても
知らんぞ。」

「ねえ、なんでそんなに落ち着いてるの? ねえ何で!? ゲームしてる所なんて見たこと無
いのはどうしてそんなに落ち着いて対処できるわけ!」

「げーむ? 何だそりゃ。それより、おいアクア。ギルドつて何処に行けば良いんだ?」

「知らないわよ?」

「何だつて?」

「だ、だつて、私この世界全体を納めてるのよ? その中のこんなちつぽけな惑星のしかも
更に小さい街の事なんて知らないわよ。」

「役立たずが・・・失礼、冒険者のギルドを探してるんだが教えて貰えないだろうか。」

「あら、この街のギルドを知らないなんて、他所から来たの?」

「ああ、実はつい先程街に墜落したばかりで……。」

「??? あらそう。ギルドを探すって事は冒険者を目指してるのね? なら、駆け出し冒険者の街、アクセルへようこそ。ギルドは、通りをどーんつと行ってな、ガツと右に曲がったらな、ウツツとしたドアがあるからな、それだわ。」

「ま、真つ直ぐ行つて右だな。分かった。」

「え、今の何? ねえ何だったの?」

「それを知ったら殺されちまうぞ。」

「え!?!」

—*—

「冒険者ギルドへようこそ! お仕事案内なら奥のカウンターへ、お食事なら空いてるお席へ座つて飯食つてクソして帰んな。」

「ねえねえ—」

「黙つてろ。……いいか、登録さえしまえば後はこつちのもんだ。後は、筋肉がものを言う。」

「はい、本日はどうされましたか?」

「ああ、冒険者の登録をしたいんだが、幾ら掛かる。」

「十万ドルPON☆つと……お一人千エリスとなります。」

「どうも。よし、アクア行くぞ。おっと、それと聞きたいんだがこの時期割の良いモンスタ―って何だ？」

「ええ、この時期でしたらジャイアントトードという大型のカエルが一匹5千エリスで買い取りされますが、あ、これは移送サ―――」

「いらん。これがある。」

ムキツ！【9999／9999】

「あ、そうですか……。では、いつてらっしゃいませ。」

「I, I I be back.」

第26話 頭のイカした大男

— 5分後 —

「随分早かったな。もう選んだのか？」

「あ、いや、ちよつと・・・一夏に選んで欲しいなーって・・・。」

「よし、任せとけ。すぐに行く。」

「ちよつと、そのあなた。」

「んん？（キヨロキヨロ）」

「手前しかいねえだろがよ、このタコ！その水着、片付けときな。」

「へっ、お断りだね。」

「ふうん。・・・君は、自分の置かれた立場が全く理解できていないようね。」

「それがどうした？」

「一々むかつく奴ね。いいから、その水着、片付けて。」

「お前の試着物だ。そんなことまで人任せにして、（嫁に行き）遅れても知らんぞ。」

「何ですってえ!?ちよつと警備員さああん！そこに緑のシャツを着た大男がいるん

だけど、彼マトモじゃないわ。暴言を吐かれたの、助けて下さい。」

「何!?!・・君、何処かで見たことあるぞ。・・ああそうか、はははつ、テレビに出てたアホだろ。」

「俺もアンタに同じことを言おうと思ってた。(・・ん?)」

「おいおい、冗談はよしてくれ。」

「何言ってるんだ? さつき監視カメラに映ってたぞ。」

「テレビだあ? 寝言言ってんじやねえよ。」

「面白い奴だな、気に入った。起こすのは最後にしてやろう。」

「・・ちよつと、警備員さん?」

「・・んん! カッコいいところ見せましょう。・・全警備員へ、3階で非常事態発

生! 容疑者は男性、180cm、髪は紺、筋肉モリモリマッチョマンの変態だ。」

「くそつ! 厄介な。」

「おい、一緒に来い。・・うおつ!」

ベキッ! 【10/250】 ↑警備員

「今の内に逃げ——!」

「いたぞ! あそこだ!」

「チイツ! クソツタレがあ!」

ドコッ! ベキッ! グシャッ! 「うおお!」 【10/250】

「えいもう！その銃貸しなさい！」↑何で警備員が持つてるんですかね
パンパン！！

「ぬおおつ・・・!?ふざけやがってえ！」

ガシッ！

「きやあ!!」

ガラッ↑窓、御開帳!!!

「空飛ぶか？そらっ！」↑ギャグか？

ポイツ

「あばよ！」

「キヤアアアアアアアアアアア!!!」

ボヨヨヨヨヨヨ↑トランポリン

「・・・(あばら骨が)逝ったかと思つたよ。」

「とんでもねえ。手加減したんだ。・・・迫真の演技だったな。」

「君もな。無駄にしたかねえだろ。さっさと行け。」

「ああ、助かった。また会おう。」

「・・・ニユースでな。」

――再び水着売り場――

「お帰り一夏。・・・あれ大丈夫なの？」

「心配するな。ただのアトラクシオンだよ。」

「あ、そう・・・。じゃあ、えっと・・・水着・・・見てくれるかな？」

「OK！」

シャツ！↑カーテン、オープン

「うわあ!？」

「何だ、まだ着替えて無いじゃないか。」

ザツ、ザツ、ザツ!!!↑織斑&山田先生COME!

「!!」

「じゃあ、外でま——」

「こつちに!!」

「うおっ!？」

シャツ！

「何しやがる!!」

「だ、大丈夫！手間は取らせないから・・・。」

ヌギヌギ・・・

「急げ、奴らが来た。」

「ま、まっつて。．．．いいよ！」
クルッ

「．．．いいじゃないか、似合ってるぞ。」

「ホント!!実は、もう一つあつて。」

「すまん、シャル。もう限界だ．．．。」

「え／＼」

「ムン！」

「バッキヤーン!!」【0／500】↑更衣室終了

「お、織斑先生．．．。」

「良い水着だな、デユノア。」

「．．．お、織斑、何をしてたんですか!？」

「山田君。今度、店の中で騒いでみる。口を縫い合わすぞ。」

「で、ですが——」

「ドベキシッ!」【0／3000】

「シャル、悪いがコイツが起きないように見張っていてくれ。」

「い、いいけど、．．．山田先生コイツ呼ばわりするのは．．．。」

「ゴミよりマシさ。」

「ゴミって……何処に行くの？」

「千冬姉の水着を選びに行く。おっと、更衣室を直さなきゃ。」

「バアンツッ！【450/500】

「これでよし。」

「よくは……ないかな？」

「じゃあ、行ってくる。」

—— 小移動 ——

「一夏、この色なんてどうかな？」 ↑ 金色

「百式か？」

「……採点してくれ。」

「安心しろ、文句なしの0点だ。」

「じゃ、じゃあ、この色なんてどうかな？」

「色が変わるのか！まるでカメレオンだな。」

「何点だ？」

「馬鹿には見えない○^{シリース}○が通用すると思うなよ？この筋肉は、飾りじゃないんだぞ。」

「メキッ！【18999/20000】

「イダダダダダダダ！悪かった!!」

「千冬姉には、この色がお似合いだよ。」

「採点して欲しいか？」

「是非ともお願いしよう。」

「百点だ。それも、植木鉢付きの花丸のな。」

—— レジ前 ——

「待たせた。シャル、悪かったな。」

「ううん、別に大丈——!? 一夏!? そんなに水着買うの!?」

「水着は道具さ。それも使い捨てのな。」

「普通は、2・3年は使える物じゃない!?」

「どうかな?・・・おい、鈴。いるだろ?出てこい。」

「何?呼んだ?」

「ふあ、ファー!? 嵐さん!? 何処から出てきてるの!？」

「? こういうときって、普通は天井から登場するものでしょ?」

「いや、出ないよ!! っていうか、どこから入ったの!？」

「換気口からよ。」

「嵐だけにつてか?」

「一夏、寒いわよ。あと、寒い。」

「鈴。降りてこい。俺の筋肉で暖めてやる。遠慮するな。」

「いや、結構。遠慮させてもらうぜ。」

「怖いのか、鈴? どうした、降りて来いよ。」

「誰が、筋肉なんか、筋肉なんか怖くねえ! ・ ・ ・野郎、ブツ——」

「ねえ、凰さん! 一夏って、そんなに水着破れるの?」

「・ ・ ・シャル、空気を読んでくれ。」

「ごめん、でも気になって・ ・ ・。」

「——コロツシャアアアアアアアアアア!!!」

「ふんっ!」

メギッ! 【1000 / 1600】

「ウオオ・ ・ ・。」

「これで、腐った冷気も抜けただろう。」

「うっさいわよ!」

ベキッ! 【9998 / 9999】

「む、やったな!」

ベキッ、ドゴッ、メシッ! 【10 / 1600】 【5000 / 9999】

「貴様らしい加減にしろ!」

第27話 シュロの木陰でも焼くか

「ああ!!見えたぞおおおお!!」

「でかい水たまりだな。」

「違うよ、この織斑筋!」

「違うのか?じゃあ、小っさい池だな。」

「それも違う!海だよ、海!」

「海?そりゃ丁度良い。学校生活で白ポケちまった——」

「肌を早く棕櫚の側で焼きたいねって言うんでしょ?」

「・・・シャル、何で分かった。」

「前に言ってたでしょ。」

「そうだったか。」

「あ、一夏!!見えてき——」

「シート・・・。」

「・・・何で皆静かなの?」

「旅館に着くからだ。」

「良い子にしてろってこと?」

「違う。・・・黙って(心の)準備しとけ。遅れても知らんぞ」

「??」

キーツ↑バス停車

「今だああああああああ!!」

ガラツ!↑窓☆OPEN

「ハッチ(荷物室)開けろおおおお!!」

ドサドサドサツ!!

「整列うううううう!!」

ザツ!

「見ろ一夏、あの間抜け面を。他クラスの連中、まだバスの中で風船膨らまして遊んでるぜ。」

「み、皆さん!バスはドアから降りてください!」

「山田君、何寝ぼけたことを?ここは幼稚園じゃないぞ。高校で!しかもIS^{兵器}を扱ってる。他クラスが相手じゃ訓練にならないと分かったら、他の分野を訓練するのは当然だろ?」

「バスを飛び降りることが我が校の教育なんですか!」

「我が校？私のクラス、だろ？」

「」

ワイワイ、ガヤガヤ

「見ろ、連中ようやく降り始めたぞ。」

「ただのカタツムリですな。」

「馬鹿言え、デンデンムシの方が速えよ。奴ら、角出したら外出だからな。」

「違えねえ。」

— 5分後 —

「揃ったか？・・・諸君が整列するまでに——」

「勿論、俺らはマツチヨになったで。筋トレで！」

「1組は少し黙ってろ。」

「」

「諸君、この旅館が3日間お世話になる花月荘だ。従業員に迷惑をかけるなよ。壊し

たら、直ぐ元通りに直せ。OK？」

「OK！」 ↑1組

「・・・織斑さん？今、何と？」

「よろしくお願ひします!!」

「元気があつてよろしいですが・・・、何か誤魔化されたような気が・・・。」
「乗り込めエエエエエエ!!」

「窓に鍵掛かつてるよ!？」

「馬鹿者共! 旅館ぐらい玄関から入れ!!」

「・・・まあ、何とかいうかパワフルですね。・・・こちらが噂の?」

「織斑一夏だ。よろしく。」

「いい男の子ですね。しつかりしていそうな感じを受けますよ。」

「(拳で) 試してみるか?」

「いえ、遠慮させて頂きますわ。骨が惜しいですから。」

「清洲さん。人間には215本も骨があります。1本ぐらいなんですか! ドカンと行つてみてください。」

「織斑先生のそれは当てになりませんので、丁重にお断りします。」

「千冬ね・・・織斑先生。そろそろ海に行かないか? こんな所に立つてちや、焦げちまう。こんがりと真つ黒にな。」

「では、ごゆつくりとどうぞ。」

「世話になる。」

スタスタ・・・

「しおりに書いてなかったが、俺の部屋は？ 屋根裏で寝ろつてのかい？」
「安心しろ、ちゃんと部屋だ。・・・私と一緒にのな。全く。上の連中、何を考えてるんだか。」

「ああ、ならいいんだ。」

「それより織斑。今日は自由行動だ。棕櫚の木の下で、肌でも焼いてこい。」
「そうさせて貰うよ。」

— 廊下にて —

「箒か。今から浜に行こうと思うんだが・・・どうだ？」

「いいな、乗った。・・・所で、そこに何か生えてないか？」

「生えてるな、ウサギの耳が。」

「・・・ほつとくか。」

キイイイイイーン！↑高速落下物

「フンツ！」↑漢・一夏、魂のスカイアッパー

「キエエエエイ!!」↑乙女・箒、魂の一閃

カキイイイイインツ！

「で、暫くしたら、この生えてるのから出てくるんだろ？ 全く、便利な体だ。変えて欲しいくらいだ。」

「馬鹿なこと言っていると、時間切れになるぞ。そうだ、中庭の小石でも積んどくか。どうだ一夏？」

「いい案だ。ちよつと待ってろ。拾ってくる。」

トットトット・・・

ズドツズドツズドンツ・・・ドオオオオン!!!〔0/100〕↑うさ耳

「これで良し。」

「随分と小さいな。もつと大きいのがなかったか？」

「贅沢言うな。コレが最大だ。さて、海に行くか。」

「いや待つて岩サイズですわよね・・・ですわよね？」

「篠ノ之束の残基は215もあるのよ？1回くらい何よ！」

「」

「ああ、ところでセシリア、今から海に行くんだが一緒にどうだ？」

「ええ、行きますわ。勿論行きますとも。そこで、ですわね。私の背中にサンオイルを」

「」

「奇遇だな。俺も持つてきたんだ。何かSW30って書いてあるけどな。」

「・・・それはエンジンオイルですわ。」

「ん？何が違うって？」

第28話 飛び散れ！汗！弾けろ！ボール！

「おりむー！ヴァーリボウしよー!!」

「よし、今行く。」

サツ、サツ、サツ――

「おりむー来たよ。」

「ルールは？」

「タツチは3回まで、殺人スパイクも禁止。10点先取で1セットね。」

「よいい、始め！」

「織斑君に、デュノア。それからラウラさん！相手にとって不足はないわ!!」

ドンツー↑1セット

「私は、7月の！」

バアンツー↑2セット

「サマーデビルで!!」

ドオオオオンツー↑3セット

「ビーチバレーなんだよおおおお!!」

バタアン・・・

「織斑チームの勝ち!」

「昼飯でも食いに行くか。」

「賛成。」

「おい、立ち上がれ。(日焼けで)炭になっても知らんぞ。」

「わあ!?!待ってえええ!!」

「昼食か?」

「あ、織斑先生。はい、食べに行きます。」

「織斑先生。午後、開いているな久しぶりに勝負しないか?サシで。」

「いいだろう織斑。掛かってこい。」

―― 昼食後 ――

「さて、腹ごしらえも済んだし、ビーチバレーでもして腹ごなしでもするか。」

「来たな織斑。野郎、ブツ倒しアアアアアアアアア!!!」

「始め!」

「バンツ!」【0/100】↑バレーボール

「おい、何だこりや。紙風船か?」

「替えを持ってこい!!」

「コレなんかどうですか？」

スツ↑バスケットボール

「良さそうだな。堅さもバッチリだ。・・・行くぞ！」

ボンッ！

「話にならないな。」

「織斑。ここにいい球がある。コレでやるとしよう。」

「望むところだ。」

ゴンッ！

ズコッ！

「ねえ、アレって。」

ガッ！

バチィッ！

「ボーリングの球・・・だよね・・・。」

「おおやだ、この人達人間じゃないわ!!」

ガシャアアアアアアン!!〔0/1000〕↑ボーリングの球

「お前、それでもボーリングの球か!!」

「お前ら、それでも人間か!!!」

「今度余計なことを言ってみろ。ボールにして遊ぶぞ。」

「「ひいつ!!」」

— 夕食 —

「うまい刺身だな。ワサビも、本わさか。気に入った。」

「ねえ、一夏。本わさって?」

「刺身の所に、緑色の練り物があるだろ? ソイツだよ。抹茶アイスみたいに、甘くてクリームだぞ。」

「へえ、そうなんだ。」

パクツ・・・

「か、か、辛アアアアアアアアアアイ!!」

「ほれ、水だ。」

「一夏!! 何だコレは!! この僕をこんな激辛の緑で苦しめやがって!!」

「この馬鹿! ヴアカ野郎! マヌケイ!」

「一夏のことなんぞ信用しやがって。このマヌケ! 今のは日本名物の薬味(激辛)だぞ
!」

「・・・ラウラと篠ノ之さん、酷くないかな?」

「そうだ、シャル。お詫びに良いことを教えてやろう。その、ご飯の上に乗っている赤

いのは酸っぱいから食べない方が良くもな。」

「ふん！もう騙されないよ！」

パクッ！

「しゅ、スツぱあああああああいいいいいい！！！！」

「・・・シヤル、お前、見た目より頭悪いな。」

「一夏、君もね！！」

「おい、アレを見ろよ。セシリアが（正座に）苦しんでる。」

「奴らしくもねえな。夕食前から様子が変だった。」

「こっから投げて当たるかな？」 ↑紙飛行機

「止してくれ！（織斑先生の）味噌汁に入るのがオチだ。」

ヒュッ・・・サクツ☆【1499／1500】

「イエエエエエアアアアアア！！！！」

「コレで足の痺れも抜けるだろう。」

「いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいかさああああああん！！！！なんですの、これは

！この私を、こんな安物の紙飛行——」

「黙って食え！！」

ぎゅッ！【1／1500】 ↑足踏まれた。

『アアアアアイ!』

「「な、何コレ・・・?」」

『じゃあ、次は・・・』

『待て!少し間を——』

ガタツ・・・バタアンツ!!

「「グエエツ!!」」

「何しに来た?」

「NO☆ZO☆KI。」

「よし、そこに直れ。」

「ひ、1つお聞きしたいのですが、貯まってると言うのは?」

「乳酸だろ?それ以外に何かあるのか?体幹始めるから、お前らも位置に付け。」

「今夜はシゴキまくるぞ!嫌ってほど鍛えてやるからな!お前ら覚悟はいいか?それ

では始めよう、キャプテン・一夏のワークアウトだ!!」

〈〈あ、コレ死んだ・・・〉〉

「ふむ、一夏とのトレーニングは久しぶりだな。剣道場以来か?」

「ああ、そうだな・・・一週間前のな。」

「じゃあ、始めるぞ!」

— 終了後 —

「どうした?この程度で筋肉痛にでもなったのか?」

「おかしい!絶対におかしい!大佐と教官は除くとして!篠ノ之!貴様一体!」

「随分と体力が有り余っているみたいだな、ラウラ。よし、もう一周するか。」

「おかしい……。絶対におかしい……。大佐と教官は除く……。として……。篠

ノ之、……。貴様一体……。」

「バタンツ……。」

「ふっ。ドイツ軍も大したことないようだ。」

「「あなたが……。あなた方が……。おかしいだけだよ(ですわ)……。」

「バタンツ……。」

「二夏、夜景でも見に行かないか?」

「いいねえ、偶にはロマンチックな気分になりたいもんだ。」

「ガシヤツ……。↑屋上のドア

「クソ、鍵が掛かってる!」

「任せろ!」

「ガシヤアアアアアン!!↑スマッチョッキー

「……。海に夜景であるのか?」

「おかしいな。この時期はイカ釣り漁船がいるはずなんだが……。オマケに曇りと来た。星空も見えん。」

「任せろ。」

＼デエエエエエエエエエ／

シユドオオオオオオオオン!!!ドオオオオン・・・

シューー・・・ガシヤアアアンツ!!

「よし、何もなかった。いいね?」

「よし、帰ろう!!!」

第29話 脳筋と筋脳

— 朝 —

「・・・おい、一組の連中、誰も来てないぞ。」

「これは、遅刻か？ 奴ららしくもねえ。」

シユルシユルシユル・・・

「時間でも間違えたんじゃないのか？」

シャツ、シャツ、シヤシヤーツ・・・

「そんなマヌケなこ——!?!おん!?!?」

「何だ?・・・は?いつの間に整列した?」

「俺たちなら、瞬きする間に整列できる。忘れないことだ。」

「」

「揃ったな。では、班ごとに分かれてI Sの装備試験を行え。専用機持ちは、専用パ-

ツのテストに当たること。では、始め!」

「「はい!」」

「篠ノ之、ちよつと来い。」

「何だ？重りでも付けて実習させようってのかい？」

「ああ、そうだ。」

「ちーちゃん！！」

ド、ド、ドド、ドドド、ドドドドドッ！

「私を覚えてるかねちーちゃん！」

「誰が忘れるものか、このゲス野郎。ISでどれだけ苦しめられたか……。」

「え〜？誰も苦しんでな——」

「「ISごときが俺（私）の動きに付いてこれると思うな!!!」」

「グフフフ……、相変わらず、容赦ない愛の表現だ——」

＼デエエエエエエエエン!!!／

「ごめんなさい！悪かったよ!!だからチェーンガンは仕舞って!!!……ぐへへ、久しぶ

りだね、いっくん。大きくなったね、胸が。」

「毎日、鍛えているからな。で？何のようだ？」

「お、織斑先生？ここは関係者以外の立ち入りは禁止なのでは？」

「気にするな。諸君、こいつが伝説の天災、篠ノ之束だぞ。失礼されないように気を付

けておくこと。」

「んも〜。ちーちゃんったら恥ずかしがあああああ!!!」

「口開けろ！あけやがれこのお！舌あ引っこ抜いてラボに送ってやるぜ、舌が授業の邪魔しないようになあ！」

「ぐぬぬぬ、相変わらず血も涙もない脅しだね。」

「姉さん。何しに来たんだ？」

「箒ちゃん！流石我が妹！よく聞いてくれた!!!コレを見よ!!!」

「箒、昼飯なに食う？」

「折角の旅館だ。チーズとペパロニのグッチョマイピツアがいいな。」

「聞いてー！お願いだから無視しない——」

グサツ〔1000／15000〕

「グボヘツ!？」

「突きますよ?」

「酷い！突いてから言った！しかも、日本刀の切っ先で突いた！」

「痛くないでしょ、このくらい。」

「むぐ、箒ちゃんが酷い!!東さんジェラシーだよ!よって、カモン!」

ドスッ!

「何だ?この金属製の棺桶は。」

バタンツ・・・

「コレが！箒ちゃんの専用機！その名も——」

「早く言ってくれ。待っている間に、（筋トレで）だいぶマッチョになったぞ？」

「・・・その名を『赤椿』。全スペックが現行のISを上回る、お手製のISさ！さあさあ、フィッティングとパーソナライズを始めよう!!」

「・・・随分と貧相な機体だな。」

「フツフツフ。驚くことなかれ！箒ちゃんの得意な近接格闘——」

「あれ？箒ノ之さんって、チエーンガンぶっ放してなかったっけ？」

「・・・だけじゃなくて万能型に調整したから安心だね。っと、話していたら終わっちゃった！流石私！」

「・・・あの専用機って、箒ノ之さんが貰うの？・・・邪魔にならないかな？」

「だよねえ。絶対邪魔だと思う。」

「フツ。歴史を勉強してみなさい。人類有史以来、平等になつ・・・邪魔？寝言言ってるじゃないわよ。東さんの最高傑作だからね！・・・とこでいっくん。白式見せて。」

「気が済むまで見ていっしてくれ。何なら持って帰ってくれて良いぞ？動きにくくしてほしい。」

「・・・不思議なフラグメントマップを構築して・・・あれ!?コレ筋繊維だ！え？なんでデータ領域にまで筋繊維が出来ちゃってるの!？」

「良い傾向だな。」

「良いわけないよ！まあ、自己進化するようには作ったけどさあ……。というわけで、箒ちゃん。テストフライとしてみよう！」

「ブワッ！」

「どう？感触は？」

「ただのカカシですな。」

「カカシな筈無いよ！！いいよ、見せてあげよう！『空裂』出して！行くよ！コレ撃ち落とすとして！！」

「ズバアアアアンツ！」

「やることが派手だねえ。」

「でしょ？コレで分かかって貰えたかな？」

「ああ。白式よりは使えそうだ。」

「バタバタバタバタツ！！」

「大変です！織斑先生！コレを！！」

「特命任務レベルA？ハワイ沖で行っていた実験機の暴走でか？」

「先生！機密事項です！」

「機密事項？コレが？寝言言ってんじゃねえよ。」

「す、すみません……。」

「織斑、ちよちよつと指先の運動をかねて行ってこい。メンバーは任せる。OK?」

「OK! 箒、ラウラ、それからセシリア。暇だったら、シャルも突いてきて良いぞ?」

「ダメだよいつくん。ここは、赤椿の高性能を生かして——」

「何、時間はあるんだ。皆でのんびり行くよ。」

—— 太平洋上 ——

『名前は銀の福音、スペックも、驚くほどではない。超音速飛行をしているのだけは気を付けろ。』

「……と言うことだ。ささっと片づけて昼飯にしよう。背中とお腹がくつついちまいそうだ。」

「まだいいじゃないか。私なんか出る前から空腹過ぎてお腹が痛いぞ?」

「はは、僕も……。」

「シャルのは緊張だろ? 違うか?」

「う、うん、多分そう……。」

「スクランブルは初めてか? ビビったっていいさ。私だって未だにビビってる。」

「ラウラさんも? 正直言つて……変な気分だね。恐ろしい事なのに……。」

「ああ、ワクワクしてるんだろ? なーに恥じる事はないさ。それはいたって自然な反

応だよ。筋トレに似てる。やると・・・病みつきになる。」

「それは一夏だけじゃないかな？」

「それはど——」

「見えてきましたわ!!」

「どこだ？雲が多くて見辛い！」

「右前方だ!!」

「よし、俺と箒が正面で足止めをする。後は好きなどころから回り込んで撃つてくれ。

散会！」

バシューンツ!!

「うおおおおおおお!!!!」

バキィッ! 【91999／99999】

「あいやあああああ!!」

ズドツ! 【89522／99999】

「La!」

「うおツ!？」

シュババババツ 【98999／99999】

「クソツタレが!」

バキイツ！【87888／99999】

ボチャーン……

「一夏、大丈夫か？」

「気にするな。掠っただけだ。」

「大佐！奴は何処へ!？」

「海の中だ。叩き落とした。油断するな。まだ——」

「い、一夏、あれ！」

「なんだ、あとに……ああ!?!なんで船が!？」

「ほっとくか？」

「いや、後から難癖付けられるのがオチだ。」

「クソツ！教師いねえのかい！用があるときは近くにいたためしがねえや。廊下で素

振りをしてりやすぐ現れるのによお！」

「ここまで救援には来ない。戦闘領域を超えてまで来るガッツは教師にない。」

「仕方ない、シャル。お前が一番防御が堅い。アレを守っててくれ。」

ババババババババババババツ！

「!!」

「クソツ！姿が消えた！そのくせ攻撃してくる。これは厄介だ。」

第30話 お前は一体何だ?

ピカッ!

「いたぞおおおおお!!!!」

ズドドドドドドドドドドド!

「どうして分かった?」

「光った。水面が光った。」

「成る程。・・・!!避ける!!」

シユババババババババツ!

「何て弾の数だ。奴はエネルギー切れ知らずか?」

「分からん。それに、ステルス状態で水中にいられては、攻撃されるまで何も見えん。」

「ですが、それも無理のようですね。水蒸気のせい、水面すら見えませんわ。」

ズババババババツ!

「何?」

ズドオオオオオツ! [23000/40000] ↑ 箒*赤椿

【8901/24000】

「大丈夫か!？」

「大佐! スラストに異常が!」

「私は大丈夫だ。だが、音速の戦闘は厳しい!」

「クソ!」『シャル! 船の待避は?』

『どのくらい逃がせば良いのか分からないけど、音速で3秒分くらいは離れた。』

『OKだ。シャル、箒とラウラが被弾した。今から2人とセシリアを帰すから、合流してくれ』「セシリア! 2人を援護しながら、待避しろ。シャルも直に来るだろうから合流してくれ。合流地点は任せる。俺は、此処で奴の足止めをする。」

「了解ですわ! お気を付けて!」

「大佐! すいません、直ぐに戻ります!」

「任せたぞ、一夏。」

ザバア・・・

「出たな!」

ズバババババババババババツ!

「うおおおおお!!」

ズドンッ! 【75731/99999】

「La!!」

「出来た……。」

「うおおおおおおお!!!!」【20012/99999】

〈来た……。〉

「La……La?」

ギリギリ、ヒュ!……ズドオオオオオオン!【87001/99999】

「La!?La!!」

ズドドドドドドドドドドドツ!

スザザザザザツ……スパツ、ヒューン……

ゴツ!【81042/99999】

「La!!」

ズドドドドドドドドドドドツ!

「いいでー!付いてこいー!」

ヒョイ……

「La!!……La!?!」

バシユツ!↑網

「うおおおおお!!」

ザクツ!【21533/99999】

「はあ、はあ……。」

「La!」

「!?」

ズドンッ! [2401/9999]

ゴロゴロゴロ……むくつ、ズ、ズ、ズ……ドサッ

「La♪」

へいいで、そのまま来い。〈

コッソッ

「La?……La?」

「来やがれ!どうした?殺れよ!殺せ!どうした、こいよ!俺はここだ!さあ殺せ!殺せ、殺してみろ!どうした!ここだと言ってるだろうが!どうした!さあ殺せ!殺してみろ!」

「……La!」

「いたぞおおおおお!!!」

ズドドドドドドドドドドドオオオオオオオオオオッ! [10144/99999]

「大佐!五分死ごぶじですか?」

「安心しろ!ピンピンしている。」

「一夏さん！」

「ああ、ありがとう。」

＼デエエエエエエエエエエン!!!／

「さっきのお礼だ！受け取れ!!」

ズドオオオオオオオオンツ！ズドオオオオオオオオンツ！ズ、ズドオオオオオオオオンツ！

【974／99999】

「チエストオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゴギッ！【0／99999】

—— 旅館にて ——

「いやあ、久しぶりに手応えのある良い敵だった。」

「ええ!!私も大佐をあそこまで追い詰めた奴は初めて見ました!」

「だな。私も、一夏とちふ——織斑先生以外で苦戦したのは初めてだ。」

「繰り返し聞くけど、一夏と篠ノ之さんは本当に民間人なんだよね?」

「ああ、そうだ。」

「ああ、今はな。」

「今、は?」

「知らないのか?ラウラがいつも俺のことを大佐と呼んでいるだろ?」

ていたんだ！」

「だよねー。．．．うえええええい!!??」

— 夜、砂浜 —

「おい、鈴！コレは何だ！寝ている間に俺をこんな紐でぐるぐるに縛りやがって!!」
「フッフッフツ、本当に海が蒸発するか試すだけよ！」

「よせ、鈴！止めておけ！」

「えい!!!」

ジャボンツ．．．

「．．．．．何も起こらないじゃない！一夏！嘔吐いたわね！」

ザブザブ．．．

「あ、いい湯加減。．．．?いい．．．湯加減．．．!?!?!?」

グイッ!

「ブハツ!?何しやがる、茹で死ぬところだったぞ！見ろ！海岸を！茹で蛸が上がってるぞー！」

「あ、美味しそう。」

「だろ？拾って帰って、夜食にしよう。セシリアは嫌がるだろうけどな。」

— その頃、岬の先っぽにて —

「うーん、赤椿のデータ領域にも筋繊維が……。でも、稼働率を維持するためには必要だし……。そもそも実体のあるデータって何さ！取り出せないし消せないじゃない！！」

「うるさいぞ東！近くに旅館があるんだ、静かにしろ。」

「えー、知らないよ。嫌なら、歩道脇の下水溝で逆さまに寝ればいいじゃん。静かだよ？」

「なら、試してみるか？」

「……。それより、ちーちゃん。今の生活は楽しい？退屈なら、私と一緒に新しい世界を作ろう！毎日が楽しいよ？」

「ふ、今の生活でも手一杯だ。遠慮しとく。……。それはおいといてだなあ。東、今日のあれは何だ？あんな安物の軍用機で——」

「!!じゃあね!!元気で！また会おう！」

シユバババババババツ……

「……。さて、タコが茹で上がったかな？ビールのつまみに分けて貰おう。」

第31話 バトルサマー

— 8月、夏休み —

ドン、ドン、ドン!

「二夏! いるんでしょ? 出てきなさい!」

ドン、ドン、ド、ガチャッ

「うるせえぞ鈴! そこは壁だ!」

「何でドアのだまし絵描いてんのよ!」

「提出し遅れたレポートの催促に山田先生が来るからだ。」

「くだらん。恐怖でおかしくなったか? 相手はただの先生だ。どうってことない!」

「なに、諦めてくれるまで気長に待つき。・・・あんまり空けているところを見られたくないんだ。中に入らないか?」

「そうよ、思い出したわ。お茶を飲みに来たんだった。」

「・・・自分で入れろ。」

「お邪魔します!」

バタンッ・・・

「それにしても、今日は暑いわね。」

「当然だ。山田先生が来ないように、寮棟の空調を全部暖房にしておいた。」

「アホか！アホなの!?! どんだけレポート書きたくないの!?!」

「そうか、お前は暑いのが苦手だったな。だが、安心しろ。留守じゃない部屋はクーラーにしてある。」

「ならいいわ。それより、飲み物頂戴。」

「何がいい?」

「何でもいいわよ。冷たけりゃ。」

「そうだな・・・、今じゃ、殆どの家庭に設置されている、コックを捻れば出てくる素敵なドリンクバーのお水なんてどうだ?」

「いいわ・・・浄水器の水じゃないのよ! お茶だ! お茶を出せ!」

バカッ

「待て鈴! 浄水器に茶葉を入れるな! お茶なら、ミネラルたっぷりの麦茶が冷凍庫で冷えてる。」

「最初から出さないよ、全く・・・。」

パカッ・・・ボタン、カキユッ・・・

「あら、キンキンッに冷え・・・凍ってるじゃない!」

「じき溶ける。」

「待つてられないわよ！」

ガタツ！

「分かった！悪かった！だから浄水器に茶葉を入れるな！！」

「茶葉じゃないわよ！お茶パックよ！！」

「分かったから、浄水器に入れようとするな！！」

ゴトツ↑たらい

「まったく、あるなら最初から出しなさいよ。」

チウツ、チウツ、チウツ・・・ズズズズ・・・

「・・・これ、アルバム？」

「ああ、そうだ。見ていいぞ。」

パラツ・・・パラツ・・・

「段々マツチヨになっていくわね。」

「ああ、俺の筋肉アルバムだからな。」

「・・・。」

「・・・いるか？」

「え？いる。」

ゴトツ

「あんがと。……って、お茶じゃないわよ！もうたらふくよ！このアルバム頂戴って言うてのー！」

「別にいいが……何に使うんだ？」

「知らない方がいいわ。」

「」

「……あ、そうそう、アンタ、夏の予定は？」

「そうだな……、筋トレとトレーニングと、体作り、それ——」

「分かった。筋肉を鍛えまくるのは分かった。ちよつとは遊びに付き合いなさい。」

「別に構わんが……何処に行くんだ？」

「聞いて驚かないでよ。ウォーターワールドよ！今月完成したばかりで、今月分の前

売り券は完売。当日券も、2時間並ばないと取れない代物よ！」

「そうか。」

「反応薄いわね。」

「遠泳じゃダメなのか？」

「いい分けられないでしょ!?焼けちゃうじゃない！この前の臨海学校でもやばかったのに。」

「悪かった。・・・で、チケットはあるのか？」

「寝ボケた事を・・・、私を何だと思ってるの？いつも突撃あるのみじゃなわよ？代表候補生で、しかもI S 学園に行かせもらえるレベルなのよ。さつさと前売り券を買いなは当然でしょ？」

「ああ、そうだな。で、お前のことだ。幾らで売りつけるつもりだ？」

「なあに、くれてやるわよ。」

「随分と気前がいいな。何か企んでいるのか？」

「別に。このアルバムと取り替えっこするだけだから。」

「そうか。で、いつだ？」

「土曜よ。明日のね。10時ぐらいに、ウォーターワールドのゲート前に集合よ。」

「OK、準備しとく。」

「約束だからね。」

チウツ、チウツ、チウツ・・・ズズズズ・・・

「ごちそうさま。じゃあ、帰るわね。」

バタンツ・・・

「・・・よく飲むな。」

— 職員室 —

「ふう、ようやく書類の整理が半分終わりました。にして、枚数多過ぎじゃないですかね？まあ、織斑君と篠ノ之さんのことを考えると妥当なのかも知れませんが……。」

バサアツ……

「ああ！書類が！……面倒です。」

ヒヨイ、ヒヨイ……トン、トン

「ふう。……え？こ、コレは!?」

ダラダラ……

「私は！自分のした事がなんにも分かってない！よくこんな事が出来たな……私が追い詰めたんだあ……。私はもうおしまいだあ！ギョワアアア!!」

バタアンツ……

――翌朝、9時――

「無い！織斑君の部屋のドアがありません!!お、織斑君!?出てきて下さい!!」

「喧しいぞ！山田君！此処は寮だ!!静かにしろ!!」

「す、すいません織斑先生!!し、しかしですね、織斑君にどうしてもして貰わなくてはならないことが出来まして……。」

「そんなものは、もっと早く済ませとけ！分かったら今日はもう休め。いいな!」

「は、はい!」

バタンツ

「お、織斑くん、出てきて下さい……。」

コンツ、コンツ……コツ

「!!織斑君!ドアの位置は分かりました。出てきて下さい!……合鍵で開けますよ???

嫌なら返事して下さい?……開けます!」

ガチャ……チュドオオオオオオオオオオオオオン!!!

「は、はずれ……。で、ですが、こんなことでは挫けません!!」

「……ハツハ、参ったよ。降参だ。」

「お、織斑君、こ、コレをして下さい。」

ピラツ。

「悪いな。今日は先約が入っているんだ。勝手にしろ。お前のミスだ。昇進し遅れても知らんぞ。」

ガシツ

「そ、そこを何とか!!」

「……。」

キョロキョロ……

「山田先生。」

「はい?」

ドベキシツ「オフィツ・・・」【1/2000】

ズルズル・・・ドサツ↑休憩スペースへPOI☆

「コレで片付いた。」

— 10時、ウオーターワールド前 —

「待ったか?」

「10分ぐらいね。入りましょ。」

「・・・何かあるのか?」

「直に分かるわよ。」

ピン、ポン、パン、PON☆

『これより、第1回ウオーターワールド水上ペア障害物レースを開催します。』

「成る程。で、お前が参加すると言うことは、何か裏があるのか?」

「そうよ。これに優勝すると、沖縄の旅5泊6日が貰えるの!」

「お前、焼けるのがどうのこうのいつてなかったか?」

「・・・気のせいよ。それより、アンタもシュロより椰子の木陰の方が好きでしょ?さ

あ、受付に行くわよ。」

「ああ。」

「・・・随分と視線が痛いわね。何でかしら？」
「さあな。さつさと受付を済ませよう。」

第32話 弾ける!テンション!飛び散れ、水!

「さあ!第一回、これぞTHE・液体派。水上障害物ペアの神髄レースの始まりだ!」

「二!うおおお!」 ↑ 歓声

「ルールを再確認するわ!この50×50の——優勝です。なお、コース——」

「鈴、要はあの旗を取っちまえば良いんだよな?」

「そうみたいね。よく分からないけど。」

「コースは、ペアでなければ抜けれられないように——」

「見ろ、ショートカットの見本市だ。」

「私達からすれば、こんなの真っ直ぐ進んで下さいと言っているようなもよ。」

「位置について、よーい。」

ドンッ!

ドンッ!

「何の音?」

「み、皆さん!!早くスタートして下さい!2回目の音は、あの筋肉モリモリマッチョマンの変態とまな板が——」

ドベキシツ「オフィツ．．．」【1/200】↑解説の人

「何してだ鈴。そんなヤツに構っている場合か？」

「そ、それは女のプライドよ。アンタには分かんないでしょうけど！」

「勝手にしろ。お前のミスだ。(ゴールに)遅れても知らんぞ。」

ダダダダダッシユ！

「速っ!」

「ヤツを抑えろ!!」

「邪魔だ!どけ!」

「は、速い!速すぎる!」

「構うな!ぶつけてでも止めろ!」

ワラワラ．．．

「ヌウウウン!!」

「「うわああああ!?!」」

バツシャーラッ!↑下のプールへダイブ

「あばよ．．．つち、遅れたな。」

「アンタがあんな雑魚に手間取ってるからよ。」

「無茶言うな。相手は天下御免の女だ。俺の筋肉でどうこう出来る相手じゃない。」

「珍しいわね、随分と弱気じゃない。まあ、いいわ。邪魔者も去ったことだし、追撃しましよ。」

バシューーンッ!

「見て、ジェット噴水だわ。」

「かき氷機の山に比べりゃ、どうってことないな。」

「ああ、全くだ。あれは、思い出しただけでもこりこりだ。」

「・・・お前、鈴じゃないな? 箒だろ。」

「む、しくじったな・・・。そうだ、私だ。」

「鈴はどうした。」

「急用ができたらしい。何でも、中国から代表候補生の総まとめが来たんだと。」

「なるほど。で、何で鈴の皮を被ってるんだ?」

「思いつきり暴れまわっても、私のせいにはならんだろ?」

「そりゃいい案だ。」

キュッ・・・

「これで完璧ですわ!」

『おお! マッチョマンは、実は女性だったようです!』↑復活

「どっから持って来たのよ・・・。」

「お互い様でしてよ！」

「・・・かなりセシリアだけど、中身が一夏って思うとキモイわね。」

「今の箒さんに言われたくはないですわ！」

「今は鈴だ！」

「戻ってますわよ！」

「うっさい、うっさい、うっさい！」

「良い感じですよわね。では、行きましょう！」

ダダダダダッシュ！

「あら？先行している方がいらっしやいますわね。」

「ささつと沈めちゃうわよ！」

『さあ、高校生二人組がトップに追いついた！どうする、木崎・岸本ペア。・・・お

？高校生を迎撃するようですよ！』

「あいつら、良い体格してんな。」

「ああ、倒し甲斐がある。」

〈へ・・・あぶねえ、声に戻ってた。〉

「岸本。追ってくるぞ、あの馬鹿。」

「ありや、マジの目だ。私達とやる気だ！」

「行ったかと思っただわよ!!」

「とんでもねえ、待ってたんだ!」

「!!お喰らいなさい!」

「あたし達のシヨットをね!」

『おお、高校生二人、果敢にもメダリストに格闘戦で挑むようです!』

バキッ!〔4999/5000〕↑木崎*防御

〔4999/5000〕↑岸本*防御

「グオツ!」

『おおっとお!?高校生が先手を取ったあ!』

「怖いかクソツたれ。当然だぜ、現レスリング金メダリストの——」

「現柔道銀メダリストの——」

「私達に勝てるもんか!」

「試してみる?」

「私達だって、IS学園の生徒ですわ!」

「「うおおお!!」」

バキッ!バキッ!グシャッ!・・・ガシャアアアアアアン!!

『わーっ、何を!わあ、待って!そこで格闘しちゃ駄目ですよ、待って!止まれ!う

わーっ!!』

「「もうやだ、夢なら醒めて!!」」 ↑参加者

チユドオオオオオオオオオオオオオオオン!!! 「0 / 5000」 ↑プール

—事務室—

「と、とにかく!この様なことは金輪際——」

「参加させたお前が悪い!」

「木崎さん。お待ち下さいませ。」

「そもそも、この程度で壊れるプールを作るのが間違ってるのよ!」

「てか、実況が煽ってたわよね。私らが戦うように。」

「「申し訳ございませんでした!!!」」 ↑従業員一同

「「分かってくれたのなら良いんだ。」」

「あ、あの・・・、IS学園の生徒さん。お迎えがいらつしやいました。あ、木崎さん。

それから岸本さん。タクシーの方呼びましたので、間もなく到着するかとおもいます。」

「「ああ、ありがとうございます。」」

「「迎え?誰が来たのかしら?」」

「「行ってみれば分かりますわ。では、ごきげんよう。」」

バタンツ・・・

スタスタスタ・・・

「待ってたぞ。遅かったな。」

「い、一夏!?」

「い、一夏さん!?何故ここに?」

「それだと疲れるだろ。一、二の三で戻ろう。」

シュバツ!

「おい鈴。俺の皮を何処で手に入れた。」

「前に写真集くれたでしょ?あれを見ながら作ったのよ。」

「なるほど。」

「つていうかモツ・・・篠ノ之さん。アンタ、何処で私の皮作ったのよ。」

「知りたいか?私もそう思う。」

「どういうことだ?」

「知らん、気が付いたら持っていた。」

「・・・そう言えば、つい先日ラウラが何か持ってたな。確か、睡眠剤と、シリコン。」

「言われてみたら、こないだ異様に眠くて昼寝したわね。そのときか・・・。」

「あいつも、シュ○ルツエネツガー級のでっかい肝っ玉があるんだな。」

「それよりも、一夏。アンタ、セシリアの皮なんか何処で手に入れたのよ?あいつ地味

に鋭いでしょ?」

「ああ、だからアイツの専属メイドに頼んだ。三日で来たぞ。」

「その手があつたか・・・。でも、セリアの皮なんか何に使うつもりだったのよ。」

「アイツの生家は有名企業の総本山だからな。有名人にも顔が利く。ちよつとした情報収集には持つて来いだ。」

「なるほど、私も一枚欲しいな。」

カキカキ・・・

「メイドの電話番号だ。」↑小声

「・・・オツケイ。これで作戦の幅が広がる。」↑同上

「今、何受け渡したのよ。」

「@クルーズのパフェ驕ってやるから、何もなかった。いいね?」

「よし、許す。」

「じゃ、行くか。」

第33話 偶にはショッピングでもするか

「ここがどこだかわかるかね？ラウラ・ボーデヴィツヒ少尉。」

「……。」へ精神的に……いや、筋トレができない分、筋肉にくるな。へ

「気分はどうだ、少尉。顔色が良くないわよ？」

「……。」

「3日間の不眠と断食はいかがだったな？典型的な尋問だが実に効果的な方法でね、大昔から使われてるのだよ。不眠と断食をさせ、永遠と水滴の音だけを聞かせる。」

「……。」

「さて、尋問を開始しよう。君は、愛国心を持ち合わせているのか？」

「誰がなくすものか、このクソツタレ。」

「どうかな？愛国心は欠片も持っていないんじゃないのかい？」

「さつさと失せな、ベイビー。」

「……仲間はどこにいる。規模と装備のレベル、バックアップを洗いざらい話してもらおうか。」

「ここから南方へ50km。規模は私の部下が3人。装備はテントとバーベキューコ

ン口。後は、ナイフとライフルだ。バックアップは日本に2人いる。」

「・・・何、キャンプでもしてんの？」

「そうだ。」

「・・・だったらこう聞くべきね。筋肉はあるの？」

「ある・・・じき手前をぶっ殺してやる・・・」

「あらそう・・・どうやって殺す気？」

「まず手前をとっ捕まえて盾にして、あそこにいる見張りの男を殺る・・・腕に乗っかってる軍事的な筋肉で。それから手前の首をへし折るつてのはどうだ？」

「どうしてそんな事があなたに出来ると思うの？」

「手錠を掛けられてるのに？・・・外したよ！イ、エアアア!!!」

「ア、アノ・・・、ラウラサン？」

「む、夢だったか・・・。」

『チユン、チユン』

「待てやタンパク質!!」

ズドドドドドドドドドドドツ↑OHit

「ら、ラウラ。そんなんで撃つたら、木っ端微塵になると思うよ？」↑慣れた

「そうか。では、次回は別のを使おう。」

「ところで、随分とうなされてたけど、どうしたの？」

「シャルロットは知らないほうがいい……。私だって、出来ることなら忘れたい。」

「そ、そう。……ところでラウラ。」

「なんだ。」

「服買いに行かない？」

「普段着の話か？それとも寝間着か？」

「寝間着。……幾ら体が強くても、風邪引くよ？」

「安心しろ、寝袋さえあれば冬の北極でも寝られるように鍛えてある。さて、シャワーでも浴びてくるか。」

「あ、僕も浴びようかな。冷や汗かいちやったし。」

「一緒に入るか？」

「それ脅してんの？」

「冗談だ。」

「バタンツ……ガチャ

「あー、スッキリした。」

「早っ!？」

— 食堂 —

「朝からステーキなんか、よく食べられるね。」

モグモグモグモグ……

「何を言う、朝だろうが昼だろうが、食いたいと思っただけそのときにそれを食べる。夕食の取り過ぎが太る原因とか言ってる奴らもいるがクソ喰らえだ。消費しきれなかったエネルギーは翌日使う。それだけだ。それに、戦場ではいつ次の飯が食えるとも分かんない。」

「最後の食事になったらとか思ったりしないの？」

「やられる前にブチのめせばいいだけだ。違うか？」

「……誰から聞いたの。予想は付くけど。」

「教官と大佐からだ。」

「だろうね。軍隊にあるまじき脳筋思考だもん。」

「……何だ？それは。」

「マカロニ。」

「見りや分かる。シャルロット、君は私をおちよくっているのか？私は、何故フォークにそれを通したのかを聞いている。」

「何となく。」

「面白い食べ方だな。気に入った。私は、フォークに全部通してから食べてるとしよ

う。」

〈やるんかい!〉

チクチク

「ところでシャルロット。買い物はいつ頃出かける予定だ?」

「うーん、10時くらいかな。1〜2時間お店を見て回って、それからランチしようよ。」

「よし分かった。そう言えば、大佐がこの間『服の通気性が抜群になった』と言ってたな。誘うとするか。」

「え、．．．んーまあ、そうだね。」

『おかけになった電話番号は——』

「くそ、この無能携帯電話が!!大佐の行くところぐらい、電波を飛ばしておけ!」

「そっち!?!一夏にじやなくて電話会社に怒る!?!」

「当たり前だ。何のための通信手段だ。ええい!まどろっこしい!プライベート・チャンネルで繋いでやる。」

「あ、待つて!よしなよ!ISの機能は一部使用でも勝手に使ったらまずいよ!」

「クソツタレ共のルールなんか守って嫌気がしないか?」

「いや、だとしても．．．。」

「・・・ああ、大佐！ I Sは携行して下さいとあれほど言ったのに！」

「どうしたの？」

「大佐のヤツ、部屋に I S 置いたまま出かけたようだ。あれ程便利な携帯電話は他にないというのに。」

「一応聞くけど、それを言ったのって・・・。」

「教官だ。」

「ですよー。」

「仕方ない。二人で出かけるとしよう。」

「う、うん。行こうか。・・・ところでラウラ、それって軍服じゃないの？」

「これは公用の服だ。動きやすいから私服代わりに使っている。」

「それって、勝手に着て本国の人に怒られない？」

「・・・ドイツの連中は睨めば黙るが、テロリストに目を付けられたら厄介だな。大人しく制服にしておくか。」

「バスの中にてー」

「 I S は比類なき世界最強の携帯電話だ。しかし、連絡網を築くほどの数はない。一般に普及している携帯電話や固定電話との連絡をとるには、かける側も同じ種の電話が必要となる。」

「あ、なんか変なこと考えてる。．．．あ、駅前だ。」

「折角ISは電波が整備されてないところでも使えるのだから、電話へと繋げる通信装置を開発するのは当然とみる。それだけでなく——」

「ラウラ、もうじき着くよ。考え事は帰りにしてね。」

「分かった。」

ゴソゴソ．．．ピラツ↑地図

「よし、この順路で行くのが効率的だね。」

「随分と下調べが良いな。どれくらい掛かったんだ？」

「この為に5日も無駄にした．．．。」

「ふむ。その努力をフイにするわけにはいかんな。今日は任せるぞ。」

「ラウラ、スカートとズボ——」

「スカートで。」

「そういうところ、一夏と似てるね。」

「教官と部下が似るのは当然だろ？」

「うーん、そうなのかなあ．．．。」

「ところで、何で階を上がっているんだ？下から見ればスッキリするのに。」

「逆だよ。上からの方がスッキリするの。」

「どうして。」

「上の階は夏の売れ残りをセールしているから、売り切れになる前に攻めるの。下の秋物は在庫があるから後回し。」

「秋物？服なんか羽織れて暑くなければ年中どれでも良いだろ。」

「季節感は大事に。それに、女子は季節を先取りするものなの。」

「そうか？教官や大佐は戦闘になつてから武器や装備の調達に行っていたが？」

「兵士は準備がいるでしょ？」

「単機で突つ込めば良い、違うか？」

「・・・普通の部隊視点で話してもいい？」

「ああ、そう言う考え方が。納得した。ところで、男物も安売りがあるのか？」

「？多分あるけど？男装でもするの？」

「いや、大佐への土産だ。」

第34話 バトル喫茶

—カフェにて—

「すまない、私が余計な買い物をしたばかりに予定が狂ってしまった。」

「いや、大丈夫だよ。誤差、誤差。」

「だが、良い買い物ができた。」

「折角良い服買ったんだから、着て帰ればいいのに。」

「駄目だ。」

「何で？最初は一夏に見せたいから？」

「最初に見たのはお前だけ。違うか？」

「そ、そうだけど・・・。」

「デザインは良いが、動き辛い。」↑やっぱり脳筋

「」

「——いは？」

「え？あ、ごめん聞いてなかった・・・。」

「午後の（予）定だ。帝を出せ！」↑誤午字ではありません

「生活雑貨を見て回ろうよ。そうだなあ、僕は時計を見に行きたいんだ。日本の腕時計は性能が良いって言うし。」

「時計？太陽の角度で分かるだろ。」

「いや、実用性のあるアクセサリとして。」

「なら、発光式のやつはお勧めしない。アレは地下で目立ちすぎる。敵に自分から居場所を教えることになるからな。」

「いや、普段使いだから・・・。」

「戦闘はいつ発生するのかわからん。用心するに越したことはない。OK?」

「OK!」

ズバンッ!

「誰だお前は。」

「ルームサ・・・、@クルーズの店長。」

「この紙は何だ。」

「求人票。」

「何の用だ。人の誘拐客引きならお断りだ。」

「うちの店でバイトしてくれない?今日だけで良いから!」

「悪いな、先約があるんだ。」

「そこを何とか!!」

「どうする。」

「(制服が) 上げ底に見えなくもないけど。」

「あー、違うなアレは本物だ。・・・間違いない。あんなのに袖を通してみてえ。」

「!!」

——@クルーズにて——
「いやゝ助かるわ!今日は、本社から視察が来るって言うのに、突然二人駆け落ちしちゃって消えたのよ!」

「全くひでえ話だ。」

「酷いけど・・・確かに酷いけど何で僕は執事の格好なのでしょう。僕もメイドの格好ならスッキリするのにな。」

「そこらの男よりも格好いい顔をしてるのはオメエだけ。」

「それ褒めてるの?」

「眨——」

「大丈夫よ!凄く似合ってるもの!!」↑大声

「そ、そうですかね。」

「店長!喋ってる暇あったら手を動かして下さい!」

「はいよ！」

——バイト中——

「デュノア君！主砲テーブルにアイスティー二つお願い。」

「主砲？」

「四番のことだろ？」

「へえ……へ……へ……」

「コーヒーとレモンティー。それからカルボナーラ入りました！」↑ 厨房

「手先ばかり達者なトーシローばかりよく揃えたもんですなあ。まったくお笑いだ。大佐がいたら、奴も笑うでしょう。」

「ラウラさんだっけ？うちのスタッフは、みな働き者だ。」

「ただのカカシですなあ。大佐なら瞬きする間に、調理できる。忘れないことだ。」

「是非紹介してくれない？うちの厨房に置いておきたいの。」

「1000年後ぐらいでどうだ？」

「直ぐだな。」

「二人とも！仕事して!!」

「今行く。おっと、客が来たな。」

「ようこ——」

「助けてくれい！」

「兄貴！違います！」

「ああ、ま、間違えた!!」

「ラウラ、本物に見える？」

「あー、違うなアレは上げ底だ。．．間違いねえ。私には分かる。シークレットブー
ツだ。」

「全員、動くんじや——」

「@クルーズにようこそ！ご入店の目的は？ポイントカードはお持ちですかあ？」

「一一」

「ポイントカードはお持ちでない。では、お水は如何?!」

「ザバアアアアアンツ！」「(100/500)」↑強盗

「何しやがる!」

「ガチャツ！↑拳銃はしきを構えた音

「面白い奴らだな。気に入った。ぶっ飛ばすのは今にしてやろう。」

「デエエエエエエエエエン!!!」

「あー、君達は警察に——」

「カチツ、ドガアアアアアンツ!!!」

「ら、ラウラ、警察来てたけど大丈夫なの？」

「いいんだ、観客観客が来ただけだよ。」

「店員さんですか？警察のものですが、先程の音は？」

「安心しろ、何でもない。」

「到着は早かったでしょうか？」

「手遅れだ、マヌケ……。ガクツ……。↑強盗

「コイツは？」

「ああ、『リア充爆発しろ』って言って、『あり得ないんだぜ。』って倒れた。」

「ああ、なるほど……。で、先程の音は？」

「花火みたいなものだ。気にするな。」

ダダダダダッシュ！

「ラウラ！今ここにテロリストが来なかったか！？」

「!!大佐！今ぶちのめしたところです。」

「……。違う、コイツは只の武器持強つただけの一般盗人だ。くそ、奴らめ何処へ消えた。」

「手伝いは？」

「千冬姉がいる。」

「なら安心です。」

「あまり遅くなるなよ。寮に門限はあるからな。」

「はっ！」

―夕方・公園―

「思ったよりも早く切り上げられたから、クレープでも食べていこうよ。」

「甘いお菓子が死ぬほど食いたかったんだよお！もう半日もマトモな菓子食ってねえやつてられっか！」

「・・・そう。で、この公園のクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになるっておまじないがあるんだって。」

「幸せになる？マツチョの方が嬉しいな。」

「・・・ま、まあ、食べてみようよ。」

テクテク・・・

「すいません！クレープ2つ下さい、ミックスベリーで！」

「ああ、ごめんなさい。今日の分は売り切れたんですよ。」

「残念・・・、なら僕は苺で。ラウラは？」

「なら、ブルーベリー・ブドウをくれ。」

「お買い上げ有難うございます。」

「お待たせしました。」

「ああ、どうも。．．．あそこに座って食べるとしよう。」

「うん。」

「．．．シャルロット、あの店は違うんじゃないか？ミックスベリーというのはなかったぞ？」

「よく見てるね。」

「当然だ。テロリストの偽装だったらどうする。真つ先に制圧する必要があるだろう？」

「グレネードが爆発したらとか考えないの？」

「爆発したら、携帯電話を盾にすれば良い。」

「携帯？．．．ISか！」

「そうだ。それからの、爆風を潰すのは、蚊を叩くようだぜ。」

「」

「おっと、もう一つ。あの店はベリーとつくものは苺しかなかったぞ。」

「そうなの？」

「そうだ。では、頂くとしよう。」

「ん！美味しい！」

「．．．中身は何だこれ？食べ覚えのある味だな。」

「え？そう？」

チユドオオオオオオオオオオオオン!!!

「!?」

「何してるんだ？こんな所で。」

「大佐！・・・ああ、大佐手作りのクレープの味だ。」

「だろうな。俺のレシピブックを盗んで商売してやがった。」

「もしかして一夏、テロリストって言うのは？」

「奴らのことだ。」

「・・・飯テロか！」

第35話 夏は花火に限る

―篠ノ之神社、夏祭り―

「よお、舞ってるな。」

「しばらくだな一夏。」

「ああ。」

「今夜は蒸すな、ええ？」

「参った参った。こんなひでえ熱帯夜は流石の俺も初めてだ……。」

「まったくだよ。チョー最悪だ。サウナが天国に思える。」

「ところで、仕事はいつ頃までだ？」

「ここにあるお守りとおみくじがなくなるまでだ。家柄でやってるが堅っ苦しくて

やってらんねえ！」

「セシリアの皮まだ来てねえのか？」

「身代わりにおいとこうってのか？」

「いや、金髪碧眼の外人が売ってたら物珍しさに飛びつくかと思ってな。」

「お前、頭良いな。」

—10分後—

「流石ですわ！」↑完売

「もう脱いでも良いんじゃないか？」

「お嬢様口調のせいで、ストレスがマツハだ！」

「この後の予定は？」

「ないな。」

「どうだ？一緒に祭りでも回らないか？」

「そりゃいいな。筋トレでもしながら待っててくれ。着替えてくる。」

「ごゆっくり。」

「待ったか？」

「腕立て1000回ってトコだな。」

「直ぐだな。ところで何処に行く。」

「金魚すくいなんてどうだ？」

「篠ノ之神社じゃそれは喧嘩を売る言葉だぞ、かかってこい！」

「怖がっているのは、俺ではなく君じゃないのか筈。君こそ、金魚すくいを恐れているんだ。おっちゃん、強い紙2枚。」

「負けたら飯奢ってやるよ。筋肉ビジネスにかけちゃあんたほど経験はないが、私は

学ぶのは早い。観客が求めているのはきつとこうする事さ！」
バリツ！

「この馬鹿！ヴァカ野郎！マヌケイ！」

「何でここの金魚は小さいんだ？鯉を入れておけばスッキリするのに。」
「枠に嵌めて取ろうってのか？」

「ああ、そうだ。・・・オヤジ！もう一枚だ！」

バリツ！

「トーシロがあ！さっきの失敗から何一つ学んどらん！金魚とはこうやって掬え！」
シュバババババババツ！↑金魚屋のオヤジ

「やるな。俺も負けてられねえ。」

シュバババババババツ！

——終戦後——

「悪いな、焼きそば騎つてもらつて。」

「人の金で食う焼きそばは美味いか？ええ？」

「驕ると言つたのは、おめえだぜ。」

「・・・くたばりやがれ。」

「一口いるか？」

「いや結構。遠慮さしてもらうぜ。」

「あれ？一夏さん!？」

「人違いでしてよ!」

ヒローン……

「変装しても無駄です。」

「どうして分かった。」

「チャック閉まってませんよ。」

「おい一夏。この妙に鋭いのは何だ?」

「五反田蘭、同級生の妹だ。ところで弾は?」

「今頃、家でグツスリでさあ。」

「会長!この筋肉つてもしかして……!」

「あなたたち、この人が伝説の男織斑一夏だ。」

「道理で、会長がどんなイケメンにもなびかないわけだ!」

「あ、こらソレは!!!」

「きゃー!怒った!」

「こえーよ!」

「じゃあ、また今度!!!」

「あ、逃げるな！待て！！」

「学校の友達か？」

「奴らは友達でも仲間でもない。生徒会のメンバー。仕事が遅れたら48時間は拘留される。」

「ソイツはご愁傷様だな。」

「ところで一夏さん。その女性は何？」

「篠ノ之箒だ。剣道界じゃ、結構有名な人物だ。」

「も、もしかしてISの開発者の妹!？」

「あんなゴミを作ったヤツが姉妹だと、恥でしようがねえ。」

「そうか？ラウラが言うには最強の携帯だつて話だぞ？」

「その使い方は予想外だったな。」

「・・・その使い方はマズくないですか？」

「クソツタレ共の作ったルールなんざ、守ってやる義務はねえ。そうだろ？」

「え、ええ・・・。」

「一夏、ここで立ち止まってもしょうがねえ。見て回ろう。」

「ああ、そうしよう。付いてくるか？」

「あ、行きます!!」

スタスタスタ……

「ところで蘭、何処か遊びたいところあるか？」

「え!? ……あ、あそこで!!」

「射的? 久々にやってみるか。」

「蘭とか言ったか? 得意なのか?」

「え、ええ、まあ……」へ私は! 自分の言ったことが何も分かってない! ぎよわあああ
! ↓

「へい、いらつしやい。」

「三人分頼む。」

「おお? 筋肉モリモリのマッチョマンの変態が両手に花持って来やがった。よし、オマケは必要ねえな。」

「賢明な判断だ。店を赤字にしたくないならな。」

「言いやがる。」

「お、いい構えだな。何処で撃ち方を習った。」

「そ、そこを書いてある通りです……。」

PON☆ベシ……ズドオンツ……

「倒す札が派手だねえ。ええ? 鉄板倒すか?」

「え?え?え?」

「液晶テレビ、当たりい!馬鹿野郎!何やってんだ!てめえ正気か!俺の店を潰してえのかてめえ!どつかし天井!てめえ何やってんか分かってんのかい!」

「は、はあ・・・?」

「赤字だ赤字。持つて行きやがれチクシヨウ!!」

「さて、私は・・・。」

PON☆ベシ・・・ゴロオンツ・・・

「お前等射撃でもならってんのか、おい?」

「いや、取った、取った。」

「あの、一夏さん。これ重いで持つて帰ります。」

「弾に取らせに来たら良いんじゃないのか?」

「!!ちよつと失礼。」

ピリリリリリ・・・

「出ないか?」

「流石に睡眠薬を盛りすぎたみたいです。」

「持つてやろうか?」

「い、いえ、一夏さんのお手を煩わせるわけにはいかないので、帰ります。」

「箒、花火は何時からだ？」

「もうじきだ。」

「折角だから、花火ぐらい見て帰ったらどうだ？」

「ですが、重いので帰ります。」

「そうか……。気を付けてな。」

「はい、失礼します。また会いましょう。」

「……。さて、例の場所に行くか。」

「ああ。」

——小移動——

「ここは意外と変わってないな。」

「おめえがブチ空けた空間だ。そう簡単になくなるのもか。」

ドンツ！ドドドオオオオオンツ！

「見事なものだ。」

「全くだ。」

ドンツ！ドドドオオオオオンツ！ガサツ……

「……。打ち上げ花火、下から見るか横から見るか。それとも、お前等がなるか？ああ？」

「見ろよ。あの女悪かねえぜ？」

「悪かねえ？最高だろ？」

「・・・何か偉い自信満々だな？どうする兄貴。」

「まずお前さんが横の男をとつ捕まえて羽交い締めにして——」

「まあ、チンピラに囲まれてしまいましたわ！」 ↑ セシリア×2

「「?!?!」」

「一夏、あいつら何話してたと思う？」 ↑ 一夏

「どちせろくでもねえ事だ。」 ↑ 一夏（中身は箒）

「「?!?!」」

「お！おい、さっきの女は何処に——」

「おめでどう、君らは花火にされた。」

「え？」

P i ! チュドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!! ↑ クレイモア

「お代わりだ！受け取れ！」

＼デエエエエエエエエン!!!／

ズドドドドドドドドオンッ！

「おお、汚え花火だ。」

「汚え？ 最悪だろ？」

第36話 お宅砲門

—織斑邸前—

へあつた、ここだ。．．．。く

ピーンポーン、ピーンPON☆

「!?」へ．．．出てこないな。．．．ん？出ないときはここを押して下さい？く

ポチツ．．．チユドオオオオオオオオオオオン!!!

「ふえっ!?」↑偶には原文リスペクト

「シャルか。どうした、何か用か？」

「派手に素早くか．．．。一夏らしいや。」

「ソレ褒めてんの？」

「え、ええつと．．．。」

「まあいい。ちよつとホームセンターまでひとつ走りしてくるから、入って待っててくれ。」

ドンツ↑↑一夏が走り去った音

へ．．．暑いし、言われたとおりにしよう。く

ガチャ・・・

「悪いな、待たせた。」

「いや、大丈夫だよ。」

「ところで、何の用だ？」

「え、えつと、・・・来ちやっただよ。」

「合いに来るほどか？」

「・・・近くまで歩いてきたから。」

「まあいい、何か飲むか？」

「プロテインとかしかないんじゃないの？」

「他にもあるさ。」

「例えば？」

「バリウムとか・・・後は液体金属。」

「・・・。」

「冗談だよ。今朝作りたての麦茶で良いか？」

「うん、いいよ。」

ザバアアアアアアッ！

「何か凄い音がするけど!？」

「ああ、鈴のヤツが来たらこのぐらないと足りたためしがない。」

「お待たせ。」

コトツ

「……。」

「どうした？」

「いや、コップあるんだなーと思って。」

「タライがよかったか？」

「い、いや、これで十分だよ。」

ピーンポーン、ピー——

ガチャ！

「一夏さん？いらつしやいますか？お邪魔しますわよ？」↑もう入ってる

「せめて呼び鈴が鳴り終わるぐらいまでは待て。後、玄関から入れ。勝手口は駄目だ。」

「あら、シャルロットさん。ごきげんよう。」

「聞いてるか？」

「話し終わるまでは待ちましたわよ。これ、おいしいと話題のケーキを買ってきました」

たわ。」

「ああ、どうも。」

「あれ？6個あるよ？」

「皆さん集合しそうな気がしましたので。」

「奇遇だな、俺もそう思ってたさっき皿を買ってきたところだ。」

「では、頂きましょう。」

「みんなが来そうなら、待った方が良いんじゃないの？」

「ケーキは鮮度が命だ。早く喰うに越したことはない。」

「そ、そうなの？」

「ああ、そうだ。それに、どうせ食べてたら皆来るよ。」

カチャカチャ↑配膳する音

パクッ

「うん、美味しいな。」

ピンポーン——

「ホラ来た。」

「」

ガタッ！・・・ゴトッ

「邪魔するぞ、一夏」

「一夏いる？」

「鈴、屋根から入るのは止めろ。」

「篠ノ之さん!?!何てところから入ってるの!？」

「シャル、そこは箒専用の床下入り口だ。」

「」

「大佐、いらっしやいますか？」

「ラウラだな。行ってくる。」

「バタンツ↑一夏の出でいった音

トットトット・・・」

「ガチャツ↑帰ってきた音

「む、靴は3足しかなかったが？」

「なーに細かいことまで気にしてんのよ！」

「お前が大雑把なだけだ。」

「」

「ケーキがあるんだが食べないか？セシリアが買ってきてくれたんだが。」

「「食う。」」

「ところで、家に何しに来たんだ？」

「何となく集まってそうだったので。」

「麦茶飲み。」

「寮の冷水機でも飲んでろ。」

「無理に決まってるでしょ！」

「腹出せ！出セツてんだこのお！腹かつさばいて冷水機ぶち込んでやるぜ！お茶パツク飲めば麦茶出来るようになあ！」

「まあ待て一夏。ケーキが台無しになる。」

「（取り乱して）すまないと思ってる。」

「ところで大佐。この後の予定は？」

「ない。」

「一夏、久しぶりに筋トレしないか？」

「いいな、乗った。」

「!!!よお。・・・よお待ちなさいよお！おたく等にいいゲームを見させてやろうってんだぜ？」

ドサドサドサツ！

「花札に人生ゲーム・・・それに何だこれ？」

「知らない方が良いわ。」

「だが、お前の好きなゲームばかりだ。違うか？」

「勝てるゲームを出す。ソレが鉄則でしょ？」

ワイワイ、ガヤガヤ

「そろそろ昼だな、何がいい？」

「大好きなスウエーデン料理はアザラシの子供、クジラのケツ、夏が旬だ。だが今食いたいの……チャイニーズだ。」

「……冷やし中華で良いか？」

「日本食じゃないソレ。少なくとも中国にはなかったわね。」

「そう言えば、中国じゃあ足が付いているものは椅子以外食べるって聞いたな。」

「椅子以外？なに寝言言ってるのよ。人間以外なら何でも……何言わせてんのよ！」

「言ったのはオメエだけ。」

「うるさい、うるさい、うるさい!!私を作ってやるわよ！」

「お待たせ。」

ズドンッ！

「酢豚か。」

「それ以外に何か作れると思ってんの？」

「いや。」

「良い匂いがすると思つたら、また随分と集まつてるな。ええ?」

「珍しいな。会議でも抜け出してきたのか?」

「休憩時間つてもものはある。」

「分かつてるよ。」

「食つてくか?」

「昼飯が死ぬほど食いたかつたんだ。もう半日もマトモな飯食つてねえやつてられつか!」

ガツガツ

「午後は?」

「クソツタレ共と会議だ。嫌気がするね。」

「適当にあしらつときゃいい。役人なんぞクソツツくらえだ。」

「そうするつもりだ。じゃあ、行つてくる。」

「教官!ご武運を!!」

バタンツ・・・

「さて、何時までいるんだ? 布団はないぞ?」

「寝袋で構わん。」

「なら、晩飯の買い出しに行かなくちや。」

「では、私が——」

「「お前は止めろ。」」

「・・・家の車をお出ししますわ。」

「どうも。」

——夜、駅前バー——

「山田君、何だそれは？」

「安定剤です、飲みます？」

「いやあ、どうせなら・・・酒がいい。」

「ところで、今日は帰省されるんじゃないやなかつたのですか？」

「仕事が増えたんでやめた。それに、奴らが集まってたんでな。逃げてきた。」

「奴らって、例のメンバーですか？」

「ああ。」

「ISが6機集結ですか。世界相手に戦争ができますね。」

「ISなんざなくなつて、私と一夏、それから篠ノ之がいれば宇宙ごと消せる。そうだ

ろっ。」

「」

「ところでな、この書類を——」

「どうせそんなことだろうと思っただよ。」

「い、一夏！何故ここに!？」

「料理ができるまで散歩だ。」

「・・・ここって織斑先生の家から10kmぐらい離れてますよね？」

「走ってくりやどうってことない。」

「・・・ランニングじゃないですか？」

「少し黙ってろこのスイカ野郎！ベラベラ喋りやがって！」

「まあ、落ち着け。氷バケツを向けられちゃあ、書類が濡れて・・・。」

「安心しろ。ここにある。」

「?!?!」

「酔い覚ました！受け取れ！イ、エアアア!!!」

「ウワアアアアアアアア!!!」

第37話 ああ駄目こんなの生徒会長じゃないわ！肩書きの付いた変態よ！

「でいやあああああああああああああ!!!」

ガキンツ!!!【500000/500000】↑雪片式型(OFF) *No damage

!

【350000/350000】↑双天牙月*No damage!

「逃がすもんかい！」

ズドンッ!【98999/99999】

「ウオオツ・・・。」

「二次移行したISはどんなだ一夏ア！」

「試してみるか？M A O D A S A 2 2 Cに負けず劣らずクソ燃費だ!!!」

—*数刻前*—

「ねえねえ、偶にはISで訓練しない？」

「お断りだね。」

「エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ

!?!?!?!?

」

「シャルロット、さつきから何を吠えてるんだ。おい!うるさいぞ!黙らないかこのお!」

「いや、みんなここIS学園だよ!ISを使わないなんて!」

「ISは心の中で生き続ければいいんだ。」

「」

「まあ、良いじゃない偶には。もう半月もマトモにIS起動してねえ!(国からの圧力が)やっつけられつかい!」

「お?何だこれは?前(臨海学校)と恰好が違うぞ!」

「凄いよ一夏!第二!」

「差し詰め第一形態で万策尽きたクソ機体つてことか。」

「いや、篠ノ之さん。第二形態になったんだよ?」

「メールもできるようになったか?」

「いや、電話じゃないからラウラ。まあ、ちよつとぐらい乗ってみたら?」

「よーし、派手に行くとするか。」

「私が相手をしてやろう。」

「待ちなさいよ。相手は私がやるわ。」

「(煽られてもいないのに率先してやるなんて)らしくないじゃないか。」

「アンタの悪い癖が移ったのよ。いいから行くわよ！」

—今に至る—

「お前はまだ余裕か？」

「この甲龍は燃費と安定性だけが取り柄の機体よ！かつたるくてケツ蹴つ飛ばしてやりたいくらいなのに、燃費まで悪かったら今頃焼却炉に放り込んでるわよ！」

「悪いな鈴。（装備のエネルギーをカットして）飛んでるだけなのにもうエネルギーがねえや。」

「そりゃ、そんなだけ装備ゴデ盛りにしてたらPICだけじゃ浮けないわよ。」

「何でこんなに装備があるんだ？両肩にロケットランチャーが付いてりゃスツキリするのにな。」

『もう、一夏つたら古いんだ！ISは自己進化するから——』

「だったらもげばいいのか！」

『!!』

ドンッ！↑シャルロットがイグニッションブーストした音

バキィッ！【15000／18000】↑シャルロットが殴り負けた音

「重いから止めとけ。」

「そういうのは先に言っ……。」

―食堂前―

「ああも早くエネルギーが底を尽きちゃ、ドイツと日本の間も行き来できやしねえ。」

「そう言えば大佐、週7でドイツにいましたが学校はどうしてたんです?」

「ちやんと行つてたぞ?なあ鈴。」

「ああ、いたわね。」

「え?じゃあ、どうやって行き来してたの?」

「そりゃ、空飛んで行き来してたさ。」

「自力で?」

「馬鹿言え。あの天災アホが寄越したISで――」

「……え?」

「(前から) ISに乗ってたの忘れてたあ!!」 ↑ウエ〇クのCM

「……前に使ってたヤツを白式にしたの?」

「とんでもねえ、持ってるんだ。」

「チャラ……」

「……」

「乗り心地はどんなだ大佐?」

「足だけは速い。試してみるか?」

「いいや結構。遠慮させてもらうぜ。」

「怖いのか？当然だ。俺だつてそうだったからな。」

「どのくらい早いんだ？」

「ドイツと日本なら1時間で往復できる。」

「マツハ10は超えてるわね。」

「ああ、銀の福音なんて目じゃない。」

「大気との摩擦で燃えないの？」

「燃えなかったからここにいるんだ。燃えてたら今ここで話している俺は誰だ？」

「」

「昔の話だ。とにかく今は白式だ。」

「諦めな。ありや手遅れだ。」

「そっこで東さん特製の赤椿の登場——」

「!!(ドイツ料理の)仔牛のカツレッツが死ぬほど食いたかつたんだ!(このメニューを)もう半年も待つてたんだ!」

「いや、赤椿——」

「ラウラ!そんなに食べたなら、午後ガス攻撃する羽目になるぞ!」

「さあ、その食券を半分渡せ!」

「次（食べられるときに）は命がないぞ！こんなのは一度きりだ！」

「だから赤椿——」

「少し黙ってろ、このウサ耳野郎！ベラベラ喋りやがって。」↑腹減って殺気立ってい

る

「」

「さて、飯にしよう。腹減りすぎて背中とお腹が入れ替わっちゃった。」

——ロッカールームにて——

「フンツ！フツ！」↑授業前のダンベル中

キラツ・・・↑光反射

「・・・」

バツ！

「だーれだ！」

「お前が誰だ！」

「!?アレ？丸太!?!」

「静かに素早くだ。お前は誰だ。」

「え？え？」

「時間切れだ。出てってもらおう。」

「ちよつと、お姉さんとお話——」

ドベキシ！「オフワイ……」【1/5000】

「織斑。授業開始を邪魔したくはないが、20秒遅れてる。」

「これでも窓が割れないギリギリで走ってきたんだ。」

「訳を聞こうか。」

「お前のサボり仲間に捕まってたんだ。」

「……よし分かった。始めるぞ。」

——翌日、全校集会——

「やあ、みんなおはよう。一年生は初めましてね。生徒会長の更識楯無しよ。」

「「わああああ!!!」」↑歓声

「今回集まってもらったのは名付けて『各部対抗織斑一夏争奪戦』の開催の予告よ！」

「ふざけやがってえ!!」

「落ち着いて。これは、我ら生徒会の声明。織斑一夏君も我々の力はもう十分わかつ

たはずよ。OK?」

「O——」

「生徒を救いたければ、無駄な抵抗はしないことよ。我々は、全員が死を覚悟している

！私がああのを回せば、この学園の200人の生徒が死ぬ。一瞬にしてね！」

「どのキーだあ?」

「あのキーだ・・・誰だキーを抜いたのはあ!」

「これをお探し?」

「よくやったラウラ。」

「い、いつの間に!?!」

「カカシには映らんで。」

／＼デエエエエエエエエエエン!!!／

「体育館を救いたければ、無駄な抵抗はしないことだ。俺達(1組)は、全員が(お前の)死を確信している!俺がこの引き金を引けば、このこの体育館の200枚のトタンが飛ぶ。一瞬にしてだ!」

「・・・お願いだから『各部対抗織斑一夏争奪戦』やらせて下さい。困ったことがあったら、何でも私に言ってくれていいから、ねえ?」

「困ったことがあったら何でも——」

「キヤー、会長良いわ!!」

「最高!最高よー!!」 ↑妨害

「ええい!静まれ!静まれ!この紋所——」

「一夏!他作、他作!!」

「!!」

「決まりね。」

「・・・もう会う事は無いだろうが、あんたの事は監視してる。」

第38話 水色の髪の変態女がいるんだけど、彼女まともじゃないの

—放課後、臨時HR—

「さて、学園祭の出し物は何にする？」

「はい！織斑一夏とアームレスリング！」

「いやいや、織斑一夏とボディービル対決でしょ！」

「そこは、ウエイトリフティング対決よ!!」

「(客が) くだばっても知らんぞ。」

「……間を取ってボディービル喫茶は？」

「……喫茶は何の間だ？」

「ソレを知ったら、死んじゃうぞ。」

「大佐、メニューは特盛りクレープで如何です？」

「飯トレ喫茶でもしようってのか？」

「だが、それでは客は喜ばん。違うか。」

「なら@クルーズみたいにメイド喫茶はどう？」

「!!!」

「シャルロット。お前、まだ根に持っているのか？」

「!?な、何のことかなラウラ？」

「まあ、いい。メイド喫茶で決まりか？」

「OK!」

ズバンツ！↑判子押した音

「——というわけだ。」

「OK。受け取ろう。しかし、こんなのを発案したのは誰だ？陛下か？それともリ

アーデのアホか？」

「シャルロットだよ。」

「なるほどな。じゃあ、この申請書に必要な道具やら材料を書いてこい。期限は学園

祭1週間前までだ。」

「よし、分かった。・・・失礼しました。」

バタンツ・・・

「やあ。」

「動くな！殺されてえか！」

「ど、どうして警戒されているのかしら？」

「最初の出会いでインパクトを与えすぎた。違うか？」

「それはどうかしら？」

「用は何だ？お前と立ち話している間にも筋肉が鈍っちゃまう。」

「じゃあ言うわ。私が君のISコーチをしてあげる。どう？」

「そりゃ良いな。気に入った。(燃費の良い) 乗り方を教えてくれ。」

「じゃあ、決まりね。早速——」

「覚悟おおお!!」

ドベキシッ! 「オフィッ」【1/100】

「踏み込みに無駄が多い。」

「ええ!？」

ヒュッ・・・バリインッ!↑矢

「学校を壊すな!」↑お前が言うか!!

／デエエエエエエエエエン!!／

ドゴオオオオオンッ! 【1/100】

「ちよ、殺しは——」

「してない。安心しろ、爆竹みたいなものだ。」

バンッ!

バタンツ！ガチャツ・・・

「そこ（掃除ロッカーの中）に立ってる。」

「織斑一夏君、あなた一体何者なの？」

「俺からしてみればお前の方が謎だ。俺の情報網で調べられないとはお前何者だ？」

「私は生徒会長よ。」

「そんなことは分かっている。お前が来た途端、なぜ俺が襲われているのかを教えてください。」

「知らないの？ I S 学園の生徒会長は、最強の肩書きでもあるのよ。」

「最強？ お前がか？ 全くお笑いだ。1組の生徒がいたら、奴らも失笑するでしょう。」

「それはどうかしら？ 生徒会長はいつでも襲撃して良いの。そして、勝ったらその人が生徒会長になる。そのシステムがあるのに私が生徒会長なのは、私が強いからじゃないかしら？」

「なるほど、そりやものぐさなイツらが喧嘩を仕掛けないわけだ。」

「そう言えば、昨日会ったときに気が付いたらいなくなっただけど？」

「お前が勝手に寝ただけだ。俺は何もしてない。」

「そう・・・。」

「で？ いつから（燃費の良い）乗り方を教えてくれるんだ？」

「生徒会室に寄ってからよ。」

「眠・・・夜——」

「しつかりしなさい。」

ガチャツ

「アホが寝てるんだってな？ 目覚ましのいい方法教えてやろうか？」

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「いいや結構〜！ 遠慮させてもらうのだ〜！」

「!!これからもお願いしていい？」

「今回が（最初で）最後だ。」

「残念です。・・・あ、会長。おかえりなさい。」

「そこにかけてて。虚ちゃん、織斑一夏君にお茶を。」

「はい。」

「おりむく、ケーキ食べる？ 賞味期限今日なんだけど〜。」

「ああ、どうも。」

「ところで会長。こちらの方は？」

「弟子よ。」

「弟子入りしたつもりはないが？」

「ねーねー会長、何でおりむく呼んだの？」

「それは、織斑一夏君が弱いからよ。」

「会長く、寝言は寝てから言うべきだよ。」

「本音、お嬢様が一般人相手に後れを取るとでも思ってるの？」

「只のカカシで——」

「まあ、待て布仏。俺だってISに関しちやトーシローだ。」↑誰も勝てないとは言っていない

「あら、随分と物わかりが良いのね。」

「俺だって馬鹿じゃない。」

モグモグ……

「おりむく、フィルム頂戴〜！」

「こんなんでいいのか？」

「これが良いんだよ。分かってないなあ。ありがと。」

ペロペロ……

「この意地汚い馬鹿妹が。」

ゴチツ【180/200】

「タコが。」

「・・・この紅茶美味しいな。種類は何だこれ？」

「何だったかしら・・・。」↑ど忘れ

「ローズヒップかと思ったよ。」

「いや違うな。」

「さて、食べ終わつたみたいだし、行きましようか。」

「會長。気を付けてね。」

「」

—豊道場にて—

「これは何だ？」

「袴よ。」

「そんなことは見れば分かる。俺が頼んだのはISの（燃費の良い）乗り方だ。」

「小手調べよ。まあ、ハンデとして織斑一夏君が私を床に倒せたら君の勝ちね。」

「随分と不利なハンデだな。」

「あら？まだ欲しい？」

「寧ろ緩めて欲しいね。」

「その余裕、良いわね。気に入ったわ。まあ、どうせ私が勝つけど。」

「・・・どうした？来いよ。」

「そこは男子からじゃない？」

「お断りだね。」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

ヒュッ！

スカッ！

「あれ？」

「どうした？俺はここだぞ？」

「・・・えい！」

ヒュッ！

ヒュッ！

スカッ！

スカッ！

ヒュッ！

スカッ！

「何で仕掛けてこないのよ!!」

「お前を倒したら、生徒会長をしなくちやならんのだろ？」

「今回は別よ！」

「そうか。」

ヒュッ……ズドオンッ!

「これで勝ちだな。」

「?!?!」

「帰って良いか?」

「ま、待つて。まあ、水でも飲んで落ち着きなさい。」

「……で、話は何だ?」

「そうね。あなたは一体何者なの?」

「俺か?……俺は……。」

「……した……?」

バタアアンッ!

——廊下にて——

〈大佐は何処に行った?電話にも出ない。〉

「どうした、ラウラ?」

「教か——織斑先生。大佐を見ませんでしたか?」

「一夏か?知らんな。ISで探せばすぐだろ?」

「(他の生徒に見られたら) 条約違反(で通報されるの)では?」

「なーに。見られたらちよちよつと記憶を消せば良い。」

「了解しました！」

ゴソゴソ・・・

「どうだ？」

「・・・部屋棟の保健室にいるようですよ？」

「アイツが？見てこい！」

「はっ！」 ↑ 敬礼

— 部屋棟の保健室 —

「・・・。」

「・・・睡眠薬よ。引っ掛かるとは思わなかったけど。」

「ここは？」

「地球よ。」

「」

「冗談よ。保健室。」

「死にたくなかったら、さっさと逃げるんだな。」

「？」

「時間切れだ。」

ガラッ！

「!!大佐ア！」

「あら？嫉妬？フフツ、可愛いわ・・・ふっ!？」

「動くな。殺されてえか！」

「試しみ——」

スパッ！〔0/200〕↑扇子

「次はお前のバラバラ死体が生徒会室に届くことになる。」

「ラウラ止めとけ。コイツに勝ったら生徒会長をやらなくちやならん。」

「!?そいつぁー面倒だ。」

第39話 ISの訓練なんて面倒だ！早いところ終わりにしようぜ！

—第四アリーナー—

「あら一夏さんにラウラさん。どうしてこちらに？」

「コイツがISの（燃費の良い）乗り方を教えてくれるんだ。」

「それは私達にはできんだろ？」

「そういうわけで、シャルロットちゃんにセシリアちゃん。『シューターフロア』で円状制御飛行やって見せてよ。」

「朝飯前ではありませんけど・・・？」

「？別に構いませんが、（燃費の良い乗り方に）関係しませんわよ？」

「一夏君の成績を見せてもらったんだけど・・・射撃はあまりよくないのよね。」↑ソレを千冬が付けたって知らない

「このところ射撃する機会がなかったからな。」

「だから、敢えて至近距離で——」

「ニツコリ笑って撃つのですわ。」

「・・・え?」

「違います?」

「いや、合ってるわよ・・・。」

「「??」」

「・・・あ、始めてくれる?」

「分かりました。」

「では、参りますわよ。」

シユゴオオオオオオオツ・・・

ギユウウウウウウウウツ!!↑高速シューターフロ

「!？」

「アレをすれば(燃費が)良くなるのか?」

「え?・・・ええまあ・・・?」

「セシリア!シャルロット!いいぞ。」

ヒューウウウウン・・・

「減りは?」

「早いですわね。」

「本当に(燃費が)良くなるのか?」

「?それは保証するわ。じゃあ、始めましょ。」
シユゴオオオ・・・

「そうね。さつき実演してもらった通り、バルーンを周回してもらうんだけど・・・流石にアレをやってもらうのは無理だから、手始めに1秒に大体1周の速さで回ってもらおうかしら。」

「1秒に1周?無茶言うな、そんなに速くは飛べん。」

「いいからやるの。早く!」

シユゴオオオオオオツ・・・

「もつと!」

「全開だ!(エネルギー切れで)落とす気か!」

「ISは君が思ってるほど柔じゃないわよ。」

「だが、限界を超えてまで飛べるガッツはない!もう半分を切ったぞ!」

「まだ10周としてないのにそんなわけ・・・あれ!」

「分かったか!コイツの極悪燃費が!トビウオでももつと飛べるのによお!」

「あれ?もしかして乗り方って・・・。」

「燃費向上の方法だ!それ以外にあるのか?」

「」

「帰らせてもらう。」

「あ!待って!」

「もう会うことはないでしょう。」

—翌日の放課後、1025号室前—

〈ああ、疲れた。風呂入って飯に行くか。〉

ピタッ・・・

へ・・・何かいるな。〉

ギョッ

ガチャッ

「お帰りなさい。お風呂にします?ご飯にします?それ——」

「何をしているんだ?更識?」

「お、織斑先生!」

「その格好は何だ?今すぐ男子生徒の部屋への侵入罪で生徒指導室に——」

「失礼しました!!」

バシューーンッ!

「・・・。」

又ギッ

「……アイツの家は本当に暗部か？」

——1時間後——

ガシヤアアアアアアン!!

「更識、窓を破るのは止めろ。ガラスが勿体ない。」

「そこ!?! 突っ込むところそこ!?!」

「何だ? 天井裏から入るのが普通のヤツを紹介してやろうか?」

「いや結構、遠慮しと——」

「一夏、麦茶ある?」

「ホラよ!」

「あんがと。」

ガタツ………

「今のだ。」

「足音しなかつたけど?」

「クソうるさいだろ。」

「」

「おっと、もう一人来客だ。」

ガチャツ!

「一夏!差し入れにチーズとペパロニの・・・何だ、そいつは?」

「丁度良いところに来た。コイツを追い払うのを手伝ってくれないか?」

「あら?私に勝てるかしら?」

「チエエエス——」

「待て箒、ラウラから聞いてないのか?」

ピタッ!

「危ないところだった。」

「隙あり♪」

ゴッ【1999/2000】

【4500/5000】

「避ける分は問題ないぞ。寧ろ避けてやれ。手を痛めたみたいだ。」

「そうか、では次からはそうしよう。」

「このピザ美味しいわね。」

「ピザだあ!?!ピッツアだ!この馬鹿!!!ヴァカ女!マヌケえい!」

「ところで、話して何だ?ピッツア食うための嘘だったら只じやすまさねえぞ?」

「赤椿のこ——」

シユカツ!!バシッ!

「止めろ！更識コイツに残基はない！」

「そうか……。」

チンツ……

「それで聞きたいんだけど、ワンオフ・アビリティの絢爛舞踏って発動させたことある？」

「ないな。」

「使う機会なんかあったか？」

「いや、IS自体必要ないな。今なら、福音ぐらい地上から始末できる。」

「」

「さて、飯も食ったし帰るとするか。」

「ああ、また明日。」

ガシツ

「ちよ!?放してええええ!!!」

ズルズル……ガチャ……

「また来——」

バタンツ!

「……。」

「と見せかけての!」

「除湿されてえか!」

「わあ!待って!止めて!これ水でできた分身だから!!」

「じゃあ黙つてろ。」

「。。。。」

「。。。。」

「そこは黙るのかよとか言わな——」

P i ☆

「ああ!?!水分が抜けちゃ。。。。」

スー。。。。

「これで静かになった。」

ガタツ↑天井板外し

「何で除湿するのよ!」

「!?!何処で習った!」

「M A D版を読んだのよ。」↑メタいんだよ!

「お前、案外頭良いな。」

「でしょ?そこでお願ひがあるんだけど。。。。」

「(天井裏をマスターするとは) 気に入った。一つだけ聞いてやろう。」

「上手いと評判のマツサージをお姉さんにしなさい!」

「・・・そこに寝ろ。」

「はい!」

ドベキシツ 「オフィツ・・・。」 【1/5000】

「・・・は! 私いつの間に寝てたの!」

「始めたら直ぐにコロツと逝ったよ?」

「あらそう・・・?」

—翌日、昼、1組の教室—

「一夏君! お昼作ってきたわよ!」

トンツ

「重箱五段? 前菜か?」

「え? いや、メインというかお弁当・・・。」

「そうか。いや、気にするな。」

「・・・?とところで何か避けられているのは気のせい?」

「お前に触れて倒れられでもしたら、生徒会長をしなくちやならんから離れてるんだ

ろ?・・・違うか?」

「それ以外にあると思う?」

「な。」

「」

「では、いただきます。」

パクツ・・・

「どう?美味しい?」

「ああ、上出来だよ。・・・俺に比べりやまだまだがな。」

「・・・あら、箒ちゃん。はい、あーん。」

パクツ・・・

「どう?美味しいでしょ?」

「ああ、確かに上手いな。・・・だが私ほどではない。」

「・・・みんなも食べる?」

「・・・」

「安心しろ。当たったぐらいじゃ生徒会長を押しつけられることはない。」

「じゃあ、一口。」

「返事を聞くのが怖いんだけど・・・美味しい?」

「ああ、美味しいな。だが、織斑君や篠ノ之さんに比べりや、足下にも及ばない。」

第40話 冥土喫茶

—お風呂にて—

ザアアアアア．．．

へスツキリするな。ヽ

ゴトツ．．．

「ん？」

「ちよ！一夏君！脱衣所のドアが開かないんだけど!？」

「？嘘つけ。鍵なんかかけてないぞ？」

「ええい、開けなさい！」

「自分で何とかするんだな。」

「．．．いいのね？」

「何がだ？」

「開かぬなら、バラしてしまえ蝶番！」

パラパラ．．．バツタアアアアアアンツ！

「グエツ!？」

ガチャ

「大丈夫か？」

「夏君！助けて！」

「そんだけ話せるなら大丈夫だな。」

バタン・・・

「ちよつとおおおお!!!」

「お前のミスだ。潰れても知らんぞ。」

「こんなの家庭用じゃないわ！金庫の扉よ！」

「・・・助けてやるから静かにしてくれ。」

ガチャ

「ワアアオ。凄い筋肉。私には分かる、鍛えてるだけじゃないわ。ソレは人を殺せる

筋肉よ。」

「まだ、殺したことはない。」

ヒヨイツ↑片手

「!?」

キュツキュツ

「これでいい。」

「・・・開かないんだけど？」

「そうか？」

ガチャツ

「・・・このドア立て付けが悪くない？」

「いいや、立て付けは悪くない。箒も鈴も、セシリアでも開けられる。」

―後日―

「會長。だいじょーぶ？」

「あら・・・本音ちゃん・・・。」

「お疲れだね。お茶飲もう？ ご飯食べられないなら、栄養ドリンク持ってくるよ

〜？〜

「栄養ドリンクとプロテインで・・・。」 ↑筋肉痛予防

ガチャ

「お帰り。ウエイトにするか？ ベンチプレスにするか？ それとも俺と一緒に体幹でも
するか？」 ↑逆転

〈もう嫌！〉

バタアアンツ！

―学園祭当日―

「織斑君！クレープ3つ入ったよ！」

「篠ノ之さん！炒飯2つ追加で！」↑喫茶じゃなかったのか？

「グウレイトオオオオ！」

「お客の回転が落ちてきたわ！」

「誰か厨房に行つて連中に急ぐようにハツパをかけて！」

「二人とも急いで！後、チーズとペパロニのグツチョマイピツツアも追加で！」

「やつてる！クソ！久しぶりすぎて、（料理の）腕が落ちてる！」

「だが、今はやるしかない！」

「ねえ一夏。僕はメイド服がいいって——」

「良いとこに来た、それ運んでくれ。」

「……。」

——前日——

「一夏さん！私は燕尾服が良いと思いますわ。」

「ああ、いいな燕尾服。」

「燕尾服……。」〈僕はメイド服が。〉

「燕尾——」

パッカーン☆

「服を買うならレゾナンス!!!新作!人気作!!!充実です!」

「?!?!」

「今日に至る」

「なあ、何か匂わないか？」

「2組が中華でもやってるんだろ?これは酢豚だな。」

「大佐ア、篠ノ之!代わりませ!」

「ラウラ、大丈夫なのか？」

「セシリアにも手伝わせませ。」

「!?大丈夫なのか？」

「勿論です。死ぬ気で仕込んでおきました。」↑死にかけて

「よし、任せた。」

テクテク・・・

「ちよつと良いですか？」

「何だ？」

スッ・・・

「私こういうものです。」

「IS装備開発企業?お宅も暇だねえ。」

「まあ、そう言わずに。」

「カタログを見せてくれ。」

「ええ、どうぞ。」

「・・・ロケットランチャーはないのか？チェーングンも書いてないな。」

「え、ええまあ、追加装甲や補助スラスターの企業ですので・・・。」

「お前ら一体俺に何の恨みがあるんだ！先祖様でもお墓にブチこまれたのか!?寄つて集つて俺を落とそうとしやがる！手前、空飛ばしてやろうか!?!」

ガシッ！

「ホラよ！」

POI☆

「ウーワアアアア!!」

ベキッ☆

「・・・そろそろか。」

—3日前、五反田食堂2階—

ピリリリリ↑弾の携帯

『弾か？俺だ。』

「一夏か。どうした？」

『学園祭の入場券があるから送——』

ブツッ……

ジリリリリリリイーン、ジリリ↑固定電話

「はい、五反田です。……一夏さん!? はい、行きます!!」

「まで、蘭!!」

「お兄い、一夏さんが学園祭の招待状くれるから行くよ!!!」

「」

——I S 学園、正門前——

ズルズル……

「やめろ! 放せ蘭!!」

「すいません! 1年1組の教室って何処ですか?」

「誰かの招待ですか? チケットを確認させて貰える?」

「はい。」

スッ

「……織斑君のお知り合い? あら? 招待は一人一枚の筈なんだけど……?」

「よく来たな弾に蘭。」

「織斑君これは?」

「一枚は鳳鈴音の登録じゃないか？」

「あら、ホント。ごめんなさいね。」

「・・・あ、あの！」

「？何ですか？」

「散歩には良い天気ですね!？」

「？そうね。」

「何してんだ弾？」

「いや、何でも・・・。」へしくじったああ!!!<

「そうか。そう言えば美術部が面白いことやってたな。最初はそこだな。」

「何があるんですか？」

「聞かねえ方が良いぞ蘭。何があるのか・・・。」

「黙ってて！」

「いわれなくても。」

「爆発は芸術だ！」

「!？」

「ホレ見たことか・・・。」

「一つやらしてくれ。」

「?君にできるかな?」

「・・・これとこれと・・・それからこれだな。ニツパーを。」

「はい。」

「どうも。」

プツンツ!

「待つて!まだ死にたくない!」

「安心しろ。この大ききならかき氷山盛りぐらいの威力で済む。」

「ソレは済むとはいわねえ!」

プツンツ!プツンツ!

「これで良し。」

「」

「クソツ、やられたわ!」

「聞くのが怖いんだけど、ソレって失敗したらどうなるんですか?」

「見るか?」

「いや結——」

プチンツ!ブンツ!↑投擲

チュドオオオオオオオオオオオオオオオ!

「ああなる。」

「何処がかき氷だ！」

「埋め込み式かき氷器に比べりや大したことはない。」

「埋め込み式って・・・地雷・・・ですよ？」

「気にすることはない。さあ、鈴のところに行こう。」

「・・・。」

「よお、流行ってるな。」

「久しぶりです、鈴さん。」

「あら、蘭じゃない。元気そうね。弾は、まあいいわ。」

コトツ

「水が冷えてるな、ええ？」

「溶鉱炉がお望み？」

「お前等のが言うとシヤレにならん。」

「ところで・・・すまん、電話だ。」

『大佐ア！交代お願いしたいのですが！』

『篠ノ之さん!!!そろそろ限界ですわ!』

『直ぐ傍にいる。待っててくれ。』

『よし分かった。』

「用事ができた。後は適当に見て行ってくれ。」

「あの、一夏さん。」

「何だ？」

「ISの使用は国際法で禁止されているのでは？」

「クソツタレ共の作ったルールだ。守る価値はない。」

「」

スタスタ・・・

「オーダーは？」

「ケバブが3つですわ！ラウラさんは?!」↑喫茶店の要素は？

「ピロシキは今できた。焼きそばが今から、1つだ！」↑同上

「よし。分かった。」

シュバババババッ！

「篠ノ之さん！抹茶点てられる？」

「それは茶道部に行ってもらえ！織斑先生が何とかしてくれる!!」

第41話 I S過撃団

—午後、1組—

ガラガラ・・・

「一夏君いる？」

「厨房にいらつしやいますわ！」

「あら、ありがとう。」

スタスタ

「一夏くん、いる？」

「フロアにいらつしやいますわよ！」

「あら？ そうなの？」

クルッ

「・・・!？」

「何やってんだアンタ？」

「あ、一夏君。さっきフロアと厨房に同じ人が・・・。」

「それが普通だ。俺なんかしょっちゅう（厨房と往復）だ。」

「ところで一夏く——」

「この馬鹿！ヴァカ女！マヌケえい！
ベリッ！」

「楯無！なんだこのザマは！この私の安物の仮面に騙されやがつてえ！
」

「まあ箒、そのくらいにしといてやれ。で？用は何だ？」

「今から演劇をやるから来ない？」

「炎撃？いつちよ派手に殺るか。」

「流石！分かつてる。」↑勘違い

「その炎撃は私も参加して良いのか？」

「ええ、どうぞ。他の人は？」

「勿論です。」

「やりますわ！」

「何か間違つてる気もするけど・・・みんながするなら僕も。」

—20分後、更衣室—

ガチャ

「一夏君、開けるよ？」↑もう開けてる

「開演か？」

「何その格好……。もう時間がないわね。はい、これバンダナ。」

「……。ラソボーでもしようってのかい？」 ↑ 隠語

「間違えたわ。はい王冠。」

「付けろってのか？」

「そうよ。それから台詞はアドリブだから。頑張つてね。」

— 開演前、舞台上 —

『昔々、あるところに——』

「茶番はいい。早く始めろ！」

『こういうのは雰囲気作りが大事な。シンデレラという——。否！ソレは最早——群がる敵兵を——ふさわしい称号！それがTHE☆肉体派シンデレラ！出でよ！猛者達！』

「もらったわよ！」

ドベキシツ 「オフィツ」 [1/1600]

「鈴、お前にやれるほど俺は柔じゃない。」

パシユツ！パシユツ！

パシツパシツ！

「俺に当てたきや、気付かれないようにゼロ距離から撃つんだな。返すぞ！」
ブンッ！

バズッバズッ！〔1/1500〕

「く、この私が……。」

ドサツ……

「大佐ア！腕（の調子）はどんなだ？」

「こつちへ来て確かめろ！」

「いいや結構。遠慮させてもらうぜ。……大佐あ、頭出してみる。一発で、王冠をぶち抜いてやる。古い付き合いだ、苦しませたかねえ」

「ラウラ、楯無の劇は関係ない、無視してやれ！目的は俺だろう！」

「ハハハハハハハ！」

「……来いよラウラ。銃なんか捨てて、かかってこい！楽に落としちやつまらんだろ。ナイフを突き立て、俺が苦しみもがいて、王冠が落ちていく様を見るのが望みだったんだらう。そうじゃないのかラウラ！」

「てめえを倒してやる！」

「さあ、台本を放せ、一対一だ。楽しみをふいにしたくはないだらう。……来いよラウラ。怖いのか？」

「ぶっ殺してやる！台本なんて必要ねえ！へへへへっ……。台本にはもう用はねえ！へへへへっ……。ハジキも必要ねえや、へへへへっ！誰がてめえなんか、てめえなんか怖かねえ！……。野郎、ぶっ殺してやあある!!!」

ドベキシツ「オフイツ」【1／8000】

「さて、次はシャルか？」

ブンブンブンブンッ!!!↑脱兎

「さて、楯無！」

『何かしら？』

「校舎は何棟まで潰して良いんだ？」

『I Sの重爆撃にも耐えられるように造ってあるのよ？壊せるものなら壊してみなさい。』

「言質は取った。やろうじゃないか。箒。」

「久しぶりだなあ。お前と本気でやり合うのはいつ振りだ？」

「前は剣道場を壊さないようにセーブしてたからな。篠ノ之道場以来だろう。」

「では……」

「行くぞオオオオオ!!」

チユドオオオオオオオオオオオオオオン!!!

ドゴオオオオオオオオンツ!

バキヤツ! ガシヤアアアアアアアアン!!

ガラガラ・・・ガシヤアアアアアン・・・↑校舎崩壊

『?!』

〈クソツ、砂埃が。〉

パカッ

「!?」

ズサアアアアア・・・↑落下

「いらつしやい。」

「どっかで見えた顔だな。」

「午前にお会いしましたわ。」

「ああ、あのマヌケか。何でまだいるんだ?」

「ええ。この機会に白式を頂こうと思ひまして。」

「欲しいのか?」

「とつとと寄越せやガキイ!!」

「面白い奴だな、気に入った。殺すのは最後にしてやる。」

「へ、その余裕がいつまで持つか楽しみだなあ。ええ?」

バキッ！ [2800 / 3000]

「……。」

「てめえ、どんな体してんだ？もう手加減なんてしてやらねえ！こいつを使ってやらあ！」

「I Sか。」

「刺激が欲しいかええ？ズキズキするような刺激だ！刺激が欲しいだろ！お前にも痛みを味わわしてやる！」

ヒョイツ、ヒョイツ

スカッ、スカッ

「一つ聞きたいんだが、お前何者だ？」 ↑ 余裕

「ああ!? 教えてやるよ！悪の組織……秘密結社『亡国企業』のオータム様だ！」

「亡国企業!? 滅ぼした筈じゃあ。」

「残念だったな。トリックだよ。……お前かあ!! 第2回モンドグロツソのときに私達を地獄に送ってくれたヤツは！あんとときの仮を返してやらあ！」

「できるならな。」

「へ。ところで何か気付かないか？私の動きをよ。」

「糸を張ってんだろ？知ってるぞ？」

スッ

「勿体ないから集めておいたぞ（ニッコリ）。」↑ぐう畜

「

「さて、俺も少し遊ぶとするか。」

ブオン↑I S 展開

「!!待ってたぜえ!?!そいつを使うのをなあ!」

バシツ・・・バシユウウウウウ・・・。

「!?!」

「これをお探しい?は!大したことねえな!」

「オータム!そのアツシーは関係ない、放してやれ!目的は白式だろう!」

「へハハハハハハ・・・は?」

「お前の狙ってる白式はここにある。」

チラッ

「は!そんな嘘に誤魔化されるかよ!」

「なら、返してもらおうぞ!」

「どうやってだ?」

「こーうやってだ!」

ダダダダダッシユ!

「フハハハハハッ!? 手前はもう終わりだ! I Sに正面から突っ込むなんてよ! この馬鹿! ヴアカ野ろ——」

バキッ! 【200000/300000】

「馬鹿野郎! 何やってんだ! てめえ正気か! 死にてえのかてめえ! どっかし天井! てめえ何やってんか分かってんのかい!」

「お前がわざわざ構えて待っててくれたんだ。正面からぶっ飛ばす以外の方法があるのか?」

「」

「アッシーは返してもらったぞ。」

「手前!」

「約束だ。白式をくれてやろう。受け取れ!」

「おわ!」

パシツズシイイインツ!!

「何してんだ?」

「手前、舐めてんのか!? 展開状態の I Sでもこんな質量はないぞ!!」

「だから聞いたろ? こんなのが欲しいのかって。」

「ああ、笑えない冗談だ。手前、マジで何者だ？ I S はぶっ飛ばす、I S で持ち上げられないものを（片手で）ぶん投げる。てめえ人間なのか!？」

「残念だが、お遊びもここまでだな。」

第42話 I S乗りの典型だな!過激派もいい所だ

「こんなところに隠れてたのね。」

「ああこの部屋がそうだ、ここが悪党の隠れ家だ。」

「!?手前エドつから入って来やがったア!どつかし天井、お前何やってんのか分かってんのかい!?今ここは全SYSTEMをROCKしてんだぞ!?!」

「・・・まあ、一夏君の部屋に入ることになればまだ、ねえ・・・。」

「まあいい、見られたからにはお前もブツころつしやああああああ!!!」
ザクッ!

「お前目エ付いてるか?」

「手応えが・・・ない、だと・・・。」

「この馬鹿!ヴァカ女!マヌケえい!水でできた分身攻撃してどうする!」
「何なんだよ手前らはああああああ!!!」

「織斑一夏だ。よろしく。」

「更識楯無よ♪よろしくね?」

「うるせえええええええ!!!ヤロオオオオブツコロツス——」

「オータム、知ってるか？コイツは学園祭学園最強今日でね、勝つと生徒会長やらなくちやならないんだが、良いのか？」

ピタッ

「一夏君、それ適用されるのは生徒だけよ？」

「マジか。」

「シヤアアアアアアアアアア!!!油断したなあガキイ!!!」

「うるせえ、黙れ!ぶつ殺すぞ!」

ズドーンッ!〔150000/300000〕

「グホアッ!」

「ところで楯無、さつきからやけに暑いんだが?」

「うーん、そうねえ。ええ焦ったわ。いきなりあなたが重火器をぶつ放すんだもの。」

「?」

「一夏君、水蒸気爆発って知ってる?」

「なるほど、その為に部屋の湿度を上げてたってんだな?F o o !ええぞお!あんた頭良いじゃねえか!それでここのクレイモアを起爆させようってんだな?こんな時こそ頭を使わねえとな!」

「え・・・?エエ!?一夏君なにそんな危ないものを仕掛けて・・・!」

「チクショー! (このまま) やられてたまるかあ!」

ズドー——チユドオオオオオオオオオオオオン!!!【100/3000】↑引火

「げほっげほっ・・・私を巻き込む気!」↑*筋肉支援防御

「俺の影に隠れといて何を今更、楯無の名が泣くぜ。それとオータム、お前見た目よりアタマ悪いな。」

「このままやられるかああああああ!!!」

ポチッ!↑自爆スイッチ

「あばよ!」

ダダダダダッシユ!

「これと、これと、これ・・・めんどくせえええええええ!!!」

バキィツ!!!【0/30000】↑アラクネ停止

「やる事が派手ねえ・・・けど、逃げられちゃったわ。」

「逃げられた? 安心しろ、地球上にいる限りは完全に射程圏内だ。いつでも捕まえられる。」

「ああ、そう・・・ところでこれなーんだ♪」

「俺が鼻かんだティツシユだろ?」

「へ? アレ!?!」

「お前が探してるのは王冠だろ？安心しろ、ここに仕舞ってある。」

「――I S学園近く（当社比）の公園――」

「なあにが簡単な仕事だチツクシヨウメエ!!!」

テクテク・・・

〈水飲み場があるな・・・飲んでくか・・・〉

「よう、飲んでるなあ。」

「ああ・・・。」

「今日は暑いなあ、ええ？」

「あー全く・・・!?クソガキ!？」

「逃げられると思ったか？逃走中にバカでけえ声で叫ぶヴァカがどこにいる。」

「クツ・・・!」

「おい、どうした？水飲んでいいぞ、喉乾いてんだろ？邪魔なんかしやしねえつて。」

「けつ、どうだか。」

「お前なんか何処にいたって捕まえられる。」

「・・・。」

ゴクゴクツピタッ！

「!?」

「ラウラ、止してやれえ。溺死体でも作ろうってのか?」

「いや、なに変な汗掻いてるから水浴びさせてやろうってんだ。」

スツ↑解放

「クソツッ!手前何しやがる!」

「二つ聞きたいんだが、お前のI Sはアメリカの第二世代だなあ?そんな燃費の悪い玩具で何しようってんだ?・・・何処で手に入れた?」

「・・・」

「何処だ答えろ!」

「・・・」

「見上げた忠誠心だオータム。だがな、お前の命を張るほど値打ちのある携帯か?」

「け、携帯!」

「何だ?お前遅れてるのか?I Sは最強の携帯電話だ。今の学生じゃ誰でも知ってる。」↑大嘘

「」

『「夏さーん、一機来ましたけど、どうします?」』

「通してやれよ、テロリスト同士感動の再開をさせてやろうじゃないか。」

『了解ですわ。あら？一夏さん、こちらに攻撃を仕掛けて来るのですがどうしまし
う？』

「OK、落として良いぞ。」

『了解ですわ♪』

—公園上空—

ギユウウウウウウウウン!!!

「レーザーが曲がる!?何てエネルギー効率の悪い!私が真つ正面に構えているので
から真つ直ぐ突っ込んでくれば良いものを・・・仕方ありませんわね。」

ガチャツズババババババババババババ!!!【30000/40000】↑チエーンガン

『!?貴様、何故ビットを使わない!?』

「ビット・・・?ああ、あの特攻用の・・・何でしたっけ?」

『』

『おい!エム、私を迎えに来たんじゃないのか!?』

「あら、お迎え!?!大変ですわね、どうぞお通り下さい。」

『』

シユウウウウウウウウウン・・・↑降下中

カチャツズドオオオオオオオオオオオオオオ!!!【8000/8000】↑*NO DA

MAGE!

「フンツ、片手間に沈黙できるとはドイツの遺伝子強化素体、口ほどにも——」

「大佐ア!火薬が炸裂してはいないはずなのに砂埃がやけに臭いです!」

「!?!」

「安心しろ、ラウラ。お迎えの保護者が戯れにBB弾手榴弾を投げただけだ。そうだとろ?」

「な、何・・・!?」

「ああ、BB弾か・・・全くビツクリさせないで頂きたい。」

「エム!こいつらは異常だ!さっさとずらかるぞ!」

「うるさい!おめおめと引き下がれるか!」

＼アエエエエエエエエエ!!!／【500000^ゴ000^マ】／500000^ン【500000^ド】

「どうした?来いよドM女!怖いのか?」

ダラダラ・・・

「帰るぞオオータムウウウウウウウ!!!」

「だから言つたろうがあああああ!!!」

ヒュウウウウウウウウウウ・・・

「さて、学園祭を楽しむとするか。」

ゾロゾロ

—後日、秘密の部屋—

「失礼します学園長。」

「ああ、ご苦勞様。報告をお願いします。」

「何から話すべきでしょうか．．．では、織斑一夏君についてですが．．．彼の素性は知れば知るほど逸般人でしょうか．．．校舎は崩す、地雷は仕掛ける、挙げ句にテロリストを玩具にする。戦闘能力も私の力が及ぶ範疇にはありません。」

「そう、ですか．．．織斑先生といい全く．．．。」

「次に亡国企業フアントムタスクですが．．．一夏君が我々の見方である限りはカカシ．．．を燃やした塵に等しいでしょう。」

「更識君には苦勞をかけますねえ。」

「ええ、おかげさまでガタガタです．．．。」

「」

「ところで、虚ちゃんが入れてくれたお茶を．．．私用のプロテインでした．．．。」

「．．．くれぐれもエキサイトしないように、無理もしないように．．．。」

—某所—

「あなた達のような猛者がどうしたのよ．．．。」

「奴らはヤバイ奴らはヤバイ奴らはヤバイ奴らは野蛮……………」

△この二人をここまで追い詰めるなんて一体……………」

「お前は……………知ってるか……………アイツの恐ろしさを……………」

「私は怖い……………」

「オータム、疲れてるのね、髪を洗ってあげるわ……………エムは機体を再調整——」

「人のユメ……………ヒトノゴウ……………このすばら……………」

「……………暫くは駄目そうね……………」

第43話 軍には強いように見えても、一夏には勝てん

―第16国防戦略拠点―

「展開……。」

ブオンツ……

「あ、IS!？」

「報告書にあつた組織のヤツか!？」

「お前!この基地に侵入して何が目的だ!」

「銀の福音はどこにある。」

「!?!何故それを!?!」

バキツ、ドカッ! [(1/1000)]

「見上げた愛国心だ。だが、手前の命を張るほど値打ちのある話か?」

「誰が……喋るかクソツタレ……。」

ガクツ……

「おい、兵士!」へっち、気絶しやがった。↘

バンツ!ズドオンツ!バババツ!

「ウオウ、うっ！」

「ああっ！」

「おいこつちだ！」

「・・・ウーっ。」

「生まれー！・・・!?うわーっ!?」

「本部！本部！至急増援を！うわああ!?」

「・・・ただのカカシですな。>」

ヒュンツ、ガツ！【38000/40000】

「なに!?」

ドオオオオン！

「遅かったな。待ってたぞ。」

「!?お、織斑一夏!?何故ここに!?」

「お楽しみといこうじゃないか！」

「ウギヤアアアアアアア!!」

バシューーンツ・・・↑撤退

「・・・。」

ベリッ

「一体彼は何したのよ……。」

——1週間前——

「ナターシャさん、お届け物です。」

「あら、どうも。」

「パタンツ……。」

「何か頼んだかしら……。差出人は……。織斑一夏!?!」

「パカッ」

『*月*日に亡国機業が第16国防戦略拠点に攻め込む。これを送るから被っておけ。魔除けになる。』

「……彼の皮?」

「——今日に至る——」

「ナタル!!無事か!!」

「手遅れよ。何も取らずにもう帰ったわ。」

「」

「——1025号室——」

「ガチャ」

「何だ、筋トレでもしに来たのか?」

「違うわよ!!」

「じゃあ、何だ。」

「すこしお話しがね。」

「？」

「非公式の情報筋から、アメリカのIS保有基地が襲撃されたという情報が来たのよ。」

「ああ、知ってるぞ。亡国機業だろ？エムが単独で襲撃するって手筈だ。」

「!?何で知ってるのよ!」

「話してたからな。」

「何処で!？」

「アジトだ。」

「何処にあるのよ!」

「教えてやるから突くなよ。引越しの手間取らせちや悪いからな。」

カキカキ……

「ほれ。」

「」

コンコン

『一夏いる?』

「いるぞ。開いてないか?」

『開いてるよ。』

ガチャッ

「お邪魔します。」

「いらっしやい。」

「・・・一夏何してたの?」

「何って、雑談だ。」

「ふーん。じゃあ、何で入っていいって言ったの?」

「シャル、臨海学校の時から思ってたがお前ポンコツだな。」

「!?僕がポンコツだって!?」

「ああ、そうだ!」

「」

「じゃあ、帰るわね。」

「ああ、頑張ってくれ。」

ガチャッ、バタンッ

「で、何か用か?」

「あ、うん。今度の終末に駅前へ買い物に行かない？」

「壊物？」

「お・か・い・も・の。シヨツピング！」

「分かってるさ。」

「もう……。前に一夏にブレスレットをもらったし、一夏の誕生日ももうすぐでしょ？お返しもしたいからどうかなーっと思つて。」

「OK。行こう。」

「ほ、本当!?約束だよ！」

「ああ、約束だ。守れなかつたらかき氷機飲んでやるよ。」

「・・・クラスター爆弾でいいよ。」

「そんなもんじゃ、俺の腹は下せんぞ。」
「」

「あ、いたいた。一夏！」

「何だ、鈴。」

「この終末、出かけない？」

「悪いな、予定があるんだ。」

「そう、残念。じゃ、またね。」

「ああ。・・・時間は？」

「駅前のモニユメントの前に10時で。」

「よし分かった。」

―週末、9時30分―

へうー、早く来過ぎちやつた・・・。どうしよう。く

「へいへい女だ。悪かねえぜ。」

「暇かい？遊びに行かねえか？」

「無理。約束があるから。」

「おたくにいい夢を見せてやろうってんだぜ？」

「いらぬ。見たくも無いもの。」

「俺さあ、フランス車持つてるの。」

「ル〇〇？シト〇エン？」

「〇ノー。」

「公道でラリーでもするの？」

「ようシャルル。待たせたな。」

「!!一夏！」

「誰だお前！」

「シャルル。お友達か？ボディランゲージで愛情を示してら。」

「「!?」ごめん用事思い出した!」

スタコラサツサ・・・

「聞きたいことがあるんだけど、僕をここでゲイに見せかけたのは一夏のアイディア?」

「おかげで安全だろ?」

「まあ・・・ナンパする人からは。プライド（だけは）あるチャラ男はゲイには死んでも来やしないもんね。」

「さて、ちよつと早いが行くでしょう。」

「うん。」

スタスタ

「!」 「よお、蘭。」

「い、一夏さん!」

「丁度良いところであつた。今度キャノンボール・ファストがあるんだ。チケツトを誰も要らないって言うから、やるよ。」

「え、う、あ、有難う・・・ごぎいます・・・。」

「じゃあ、また会おう。」

「は、はい……。」

—夕方、IS学園—

「ん？一夏にシャルロット。何処かに行っていたのか？」

「ああ、駅前に買い物だ。」

「何だ、誘ってくれればよかつたのに。」

「何か用でもあつたのか？」

「ああ、シャンプーが切れそうなんだ。」

「俺の部屋にストックがあるが、持ってくか？」

「いいのか？頂戴する。」

—火曜日、第6アリーナ—

「はい、みなさん！今日は高速機動の授業を行います！では、早速実演してもらいましょう。えーと、ストライク・ガンナー装備のオルコットさんと、織斑く——」

ゴツ！

「馬鹿者！アリーナを吹っ飛ばす気か！」

「ええ!!」

「ああ、いや、何でもない続けてくれ。」

「?では、お願ひします。」

「山田先生、正気か?」

「何でですか織斑君。」

「見せてやるよ。セシリア、行くぞ。」

「了解ですわ!」

シユゴオオオオオオツ・・・

「あれ・・・?何か遅くない・・・?」

「しかも様子が変?」

プツツ!ヒユウウウウウウウウウウウウウウウウ・・・

「おおい、落ちてくるぞあのマッチョマン!!」

「潰す気だ!危ねえ!!」

ズドオオオオン!!!↑*着地

「山田先生と一緒にしないでもらいたいね。」

「お、織斑君酷いですね・・・それはそうと、今のは一体・・・?」

「タコがあ・・・見て分からのか、アレが白式の高速機動(当社比)だ。あれ以上の速度も滞空時間も出んぞ。」

「エエエエエエエエエエ!?まさか、ISですよ?」

「ISウ?ISを何だと思ってる!戦う道具じゃないぞお?高性能でしかもメツセー

第44話 あつら〜? (ISの) アマチュアだあ

—火曜日、第6アリーナ後半戦—

「山田先生。ISを貸してくれ、スラスターがでかいヤツだ。それがいい!」

「待つて下さい織斑君!これは一般参加生徒用の大気圏離脱用のスラスターを流用した機体なんです。専用機を使って——」

「織斑、アツシ……ンヴ。山田先生、貸してやれ。予備があるだろ。」

「織斑先生……。ちゃんと返して下さいね!壊したら始末書ですからね!」

「ありえないね。」

ガツシヤガツシヤ……

「あれ?織斑君、ラファールになんか乗ってるの?邪魔じゃない?」

「俺だつてマツハで走り回れるわけじゃない。」

「そっか!」

「まさかISを借りる羽目になるとは。」

「一夏。珍しいものに乗ってるな。」

「学園に借りを作るとは」

「最低の気分か？」

「ああ・・・箒、赤椿はどうだ？」

「速度なら誰にも負けはしないが、燃費が悪すぎる。BB弾ほども飛びやしねえ。何か良い考えあるか？」

「山田先生にコレみたいなのでつかいスラストに変えてこい。アレが良い！」

「!!よーし、ちよつと待ってる。ちよちよつと手先を動かせば死に損ないのスラストーとバカでかいロケットエンジンはパーっと入れ替わる。」

タタタタタタタツ!!トントントン

「山田先生。」

「何ですか?篠ノ之さん。」

ドベキシツ「オフィツ!」【0/3000】

ガシヤツ!

「箒、(ISは)元気か？」

「絶好調!」

「大佐ア!私の飛行を評価して下さい!」

「よーし、いいだろう。チャネルは305のままか？」

「待ってくれ、しばらく使ってなかったから・・・そのようだ。」

「エエエエエエエエエエエツ
!??!?!?!?!」

「うるさい！」

ベキツ [100/3000] ↑手加減

「よしとけ山田先生、恥を掻くだけだ。」

「織斑先生！私だつて教員です！仕事をさせて下さい！私はメチャ腕の立つ操縦者なんです！！」

「なら試してみろ。織斑。」

「分かったよ。」

「!!じゃあ始めますよー!! 3・2・1 GO！」

シユゴオオオオオオツ・・・

「山田先生、上昇しよう。」

「え、それは私が言うことで・・・」

「四の五の言うな、時間を無駄にしたくない。サツとやってサツと戻ろう、スピードが肝心。」

「わ、分かりました。」

シユーン・・・ピンツ！ガガガガガガツ!!! ↑マシンガン

「!!!」

スカッ! 【999999/999999】 ↑回避: No hit!

「良い腕だ山田先生、だがグレネードは俺に向かって投げなきやな。」

「へっ?」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!! 【0/30000】 ↑グレネード爆発

「これで分かったら? 山田君、どっちが腕の立つ操縦者だ?」

「うう・・・。」

「何か良い匂いするな。何、これ?」

「ロケット燃料。」

「ロケット燃料。・・・良いね、好き。」

スーハーシューハー・・・

「相川、お前いつからおかしくなったんだ?」

「やーねえ、冗談よ。」

「・・・恐らく友達は俺だけだろうな。」

「いっばいいるわよ。」

「バレーコート隅に逃げ込まれちまうくせに。」

「」

「ほらてめえ等、さっさと並べ。はい、礼。」

「よし、飯にしようぜ！見ろ、千冬姉の背中と腹が入れ替わっちゃまいそうだ。」

「ああ、相当気が立ってる。」

「お前らは後10周だ。」

「OK！」

ドンツ！↑ロケットスタート

「よし、今度こそ飯だ！」

「食堂で食う気じゃないよなあ！」

「食うとも！」

「行こうぜ！」

——*——

「ラウラ、珍しい服着てるな。」

「ISより身軽で良いぞ。」

「なるほどな。その考えがあつたか。」

「なら、明日から大佐はブリティッシュスタイルだな！」

「止してくれえ、日本じゃただの変態だ。」

「言うと思った。」

「なら良い。」

「晩飯何にする。偶には爽やかにチーズフォンデュでも食うか。」

「そうだな、なら私も爽やかに、鯨のケツ、アザラシの子ども……。」

「……朝どれだつてよ。」↑何であるんだ……

「夏が旬だ。」

「それだけで足りるか？」

「肉が食えりや文句はねえ。腹の事考えな、言いたいのはそれだけ。」

「はい、お待ちー!」

「どうも。」

「大佐ア、いよいよ明日だな。」

「亡国企業か？」

「キャノンボールファストで仕掛けて来るんだつてなあ？」

「ああ、愚かだ。だが、手は抜くな。」

「観客の期待を裏切っちゃ悪い。」

「観客? 亡国企業の、だろ？」

「ああ、その通り。」

——当日——

「IS使つて何してる？」

「天気見てるんだ。悪いか。」

「空見れば分かるだろ。」

「晴れ、時々弾丸って所か。」

「何発外す気だ？」

「相手のだ。」

「安心したよ。」

「一夏、そろそろ開始だ。準備しろ。」

「ああ、花火が上がってるな。」

「見えるか？」

「見えるわけあるかよ。昼間だぜ？」

「ああ、のろしにもなりやしねえ。亡国の連中気付くかな。」

「なかなか、鈍いからな連中。」

『ワアアアアアアアアッ!!!』

「盛り上がってるな、あのサラ・ウエルキンっての何モンだ？」

「私にISの操縦を教えて下さった方ですわ。」

「なるほど、流石セシリアの師匠だな。紅茶の匂いがするよ。」

「本当かよ、オイ。」

「嘘に決まってるだろ。」

「安心したよ。筋肉モリモリマッチョマンの変態からただの変態にジョブチェンジして無くて。」

「さて、そろそろ俺達の番だな。」

「ああ行こう。」

『皆さーん! スタート位置について下さーい!! 行きますよー! 3・2・1・GO!』
ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ!! [1/300] ↑地面(ロケットスタート)
シユゴオオオオオオオオオツ・・・キラツ!

「ん?」

ビシユン! ビシユン!! [99997/99999]

「ウオツ!」

ガシヤアアアアアアアアアア!!

「おいでなすつたか・・・。」

「撃たれまして?」

「ああ2発。」

「一夏さんでよかったですわ。」

「嬉しいね全く・・・。」

「ああそうだ!」

ドベキシツ「オフィツ」【0/40000】

「行こう、生徒会長様じや歯が立たん。」

「一夏、これ放つて置いて良いの!？」

「ん? プールに突き落としたいのか?」

「へっ?」

「もつと泳がしとけば良いのにつて事だろ?」

「違うよ!!!」

「シャルロット、日本には放生会という文化があるんだ。ですよね、大佐!」

「その通りだ。行くぞ。」

「はっ!」

「放生会つてそんなのだったかなあ……」

—スタンドにて—

「我が亡国企業の自慢は全てが超一流最強の戦闘部隊だつて事です。ISは軍用、操縦者は強化人間、NATO主要国は全てを網羅、U.S.NEVYに、DELTA FORCEに、そしてもちろん……レインジャーも。」

「殆どアメリカじゃない……。」

「あら、そうね。でも、私の戦闘部隊と貴方の学園の生徒達、どちらが強いかしら？」
「下を見なさい。」

「？」

「下を見ろ！見えたでしょう？短い戦闘。どっちが強いか、私達の方に10000ドル。始めましょうか？」

「・・・今、作戦中。」

「あらそう。じゃあ見逃せないわね。」

「そうは行くもんですか！」

「シャッ！カキンツ！！ズドオオオオンツ！【4800／5000】」

「チッ・・・逃げ足の速い・・・。」

「爆発でびくともしなくなっただけ大したもんだ。奴らはこのまま逃がしてやれ。」

「何で。」

「言つたら、引つ越しの手間取らせちゃ悪いって。」

「」

「会長、当てたかよ。」

「ええ、暴言を二発。」

「大したもんだ。見直したよ。」

「私、なんだと思われてるのかしら？」

「ロシア人。」

「いつから・・・。」

「ヘボ会長。」

「犬。」

「ブラックバード。」

「ジャパニーズ。」

「トロイ女。」

「止めてやれ、傷つくだろ。」

「・・・。」

「帰るぞ! 飯だ飯イ!!」

— 誕生日会 —

「せーっの!」

ズドオオオオオオオオオオオンツ!!!

「? 誕生日おめでとう!!!」 ↑ 一組

「?!?!」 ↑ その他

「あ?! がとよ。」

「いくつになつた。」

「16。さあ、みんな腹はち切れるまでじゃんじゃん食ってくれ!!!腕によりを掛けたんだ。」

「「イエエエエエエエエエエイ!!!」↑↑(ry

「「(私達の女子力って一体・・・)」↑↑(ry

「鈴さん。ちよつと背が伸びました?」

「デカすぎると早死にするらしいわよ。」

「で・・・。」

「何想像してんのかしらあ・・・?」

「ヒエ・・・。」

「やれやれ。」

「一夏さん。コレを。」

「ティーカップか?」

「ええ、イギリス王室御用達の。一等茶葉も一緒に入れておきましたわ。」

「そうか、なら茶葉はみんなで頂こう。俺一人には勿体ない。カップは、大事に使わせて貰うよ。」

「ええ♪一夏さんの紅茶を楽しみにさせて頂きますわ。」

「年だな一夏。」

「なんの、人生はこれからだ。」

「ふっ、そうだな。これはプレゼントだ。」

「着物か。」

「ああ、余裕があるし、小物も入れやすいだろう？私とおそろいだ。」

「チェーンガンを懐に入れてたヤツだな？」

「そうだ。」

「そいつあいいや。今度寮で着させて貰おう。」

「(汚え) 花火大会の時に？」

「ああそうだ。」

「お取り込み中失礼しますわ。あちらで良い雰囲気の方々がいらつしやいますのでその辺で……。」

「・・・弾と、布仏さんか。よし、離れよう。飲み物買ってくる、何が良い？」

「お赤飯。」

「お汁粉。」

「チャーハン。」

「ホットドッグ。」

「チャイニーズ。」

「ホットドッグとお汁粉は見逃してやるがそれ以外は飲み物か?」

「二夏の喉はどうなってるのかな?」

「二シャルロット、そのぐらい普通だろ(でしてよ)。」

「ええ・・・。」

—コンビニ—

「有難うございましたー!」

生まれたてのく自主規制く

「世界の誰より、お前に優しい。コンビニに用があるのか?マドカ。」

ガチャツ

「今日は世話になったなあ。」

「今日は世話したなあ。・・・そんな似合わないものは仕舞え。足を撃つのがオチだ。

銃は止せ。」

「クラシックに?」

「ああ・・・。」

スツ↑ナイフ

「やり合いたくてウズウズしてた。」

スッ

「持ったな？」

「死ねえ！織斑一夏！」

「OK！」

ズドーンッ！「グアッ！」【1／4000】

「学ばんヤツめ……。」

「貴様……！クラシツクにと……。」

「クラシツクだよ？ウインチェスターM1887だ。」

「1887年製……か……。」

ガクッ

「誰かの指示か？」

「どうか……。」

「マドカ、下らない一生だと思って、悔いを残すな。」

「手術頼めるか。」

「余裕だな。」

シュパッ！【2000／4000】

「ヴァカめ！」

「誰から聞いた。」

「亡国企業からクレームの電話が来たのよ。」

「・・・返り討ちにしただけ。襲われたのは俺だ。」

「でしようね。」

「それだけのために、ここに来たんじゃないんだろ？」

「ええ、私の妹を鍛えてくれない？」

「子守は得意じゃない。」

「謙遜しすぎよ。あなたは良い子守になれる。」

「で、何をさせるつもりだ。」

「簡単なことよ。今度の全学年合同のタッグマッチで妹とペアを組んで。だけど覚えておいて、妹に何かあれば・・・ササクレだろうと何だろうと、預けたときと寸分違わぬ姿で戻らなかつたら、あなたも、仲間の筋肉軍団も、おしまいだ。」

「お前も含まれてるよな？」

「・・・残念なことだね。」

「まあいい・・・だが、俺達に兵器マニアは必要ない。」

「きつと気に入るわよ。」

「だどいいが。」

—*自主規制*ビル—

ガチャッ

「おりm・・・」

「ヒトノユメ、ヒトノゴウ・・・ソノスバラ・・・」

「もおおおおおお・・・またあああああああ
!?!?!?!?」

—一年四組—

「更識 簪つてのどこだ。」

「あそこ。」

カタカタカタカタツ・・・

「中々やるな。椅子借りるよ?」

カタカタカタカタ・・・

「何か用事・・・?」

「専用機開発してらって聞いた。本当か?」

「そう・・・あなたのせいだ。」

「オイ待て更識、(倉持は) まだ絡んでねえ。」

「えっ・・・?」

「俺の機体は・・・名前何だったかな。何て呼んでた・・・。」

「白式。」

「ああ、そうだ。そう、倉持はIS開発に乗っかって、道草や寄り道や油を売りまくってた。すると突然出てきたのが初の男性IS操縦者だ。倉持の連中はこれを好機とみて更に納期を延ばそうとした。そして倉持は倉庫の旧型機を引つ張り出した。事態は最悪、多くの技術が消えていった。開発計画も一緒にな。白式はその混乱の中で篠ノ之束に弄くり回されて出来た機体だ。倉持は・・・ただものぐさなだけさ。お前の機体を作ろうと思えば作れていたはずだった。」

「・・・。」

「・・・やはり無駄足かな。」

ガタツ

「待って。無駄足じゃないわ。」

「・・・。そのようだ。」

スタスタ・・・

—整備室—

「・・・駆動系の反応が悪い。何で・・・？」

「アイヤイヤイヤどうしたんだ、アイヤイヤイヤ何で〜♪」

「!?どこから入って来たの!？」

「奥から。なあおい、一人で抱え込むなってこの大馬鹿野郎！」

「……。」

「けど、手を貸せるのも私達しかいませんわ。」

「!?」

「IS何て携帯電話だ。助言が欲しいか？」

「助言って何。」

「口の利き方を知らん女だ。」

「俺もそう思う。」

「良く言うよ。」

「助言って何だ。」

「同じじゃない……まあ良いわ。あのロシア人……あれ、トロイ女……？何だっけ。何て名だ。……何て呼んでた……まあ良いわ。アレだって一人でISを開発したわけじゃない。行き過ぎた感情は身を滅ぼすわ。」

「……。」

「ISは作れる。だが、俺達が一つのチームになれば、だ。お前にその気があるか？更識。」

「……苗字で呼ばれるのは好きじゃない。苗字で（私のことを）呼ぶヤツは凡人、学

園の屑よ。呼び方は・・・学ばないとね。」

「何て呼べと?」

「簪でいい・・・。」

「「オーケー、分かった。」」

—夕方—

「蘭、今度学園祭があるんだってなあ。」

『!!あ、あれですか!中止になりました!』

「そうか、それは残念だ。」

『失礼しまーす!』

ブツツ! ツーツツツツ...

—四組—

「簪、飯食いに行こう。」

「うん、でも一人で。」

「奢ってやるから。」

「行く。」

「」

「おい、あの織斑筋が閉口したぞ。」

「あり得ないね。」

「まあいい。さつさと飯食いに行こう。」

「今日はチキン南蛮か。簪はどうする。」

「素うどん。かき揚げ付きで……。すごくヘルシー。」

「ほう？ かき揚げか。簪、私と勝負だ。どっちが早くかき揚げを食べるか、テキパキサクサクと。」

「私、全身浴派なの。」

「む……。」

「ラウラ、一本取られたな。」

「……。」

「どこが開いてる？」

「隅っここが良い。奥の方のテーブル……あそこが良い！」

「簪、お前見た目より目良いな。」

「これはただの携帯用ディスプレイだから。」

「成る程な。値段を抑えたわけだ。なあ、壊物のコツを教えようか。」

「いい。どうせロクでもないんでしょ。」

「ああ、全くその通り。」

「……。」

「おい、このチキン南蛮出来たてで美味いぞ。簪も一つどうだ？」

「……そうやって女の子（の女子力）を墜としてるの？」

「いいや！」

「馬鹿め！」

「バサーー！」〔220/200〕↑チキン南蛮（激辛化）

「んー、良い感じだ。美味そうだ。」

「ああ……やり過ぎだが、良い。」

「」

「おい簪、とうとう簪から一本取ったぞ。」

「ああ、やったな。」

「なんでそんなに私に構うの……？」

「歓迎会みたいなもんだ。気にするな。」

「そうだ。私だって入学したときは量産型だった。」

「今は？」

「もつと使い物にならんヤツが来た。」

「簪、あなたの機体は第四世代よ。」

「只のカカシですなあ。私達なら、瞬きする間に粉碎できる。忘れないことだ。」

「第二世代のほうが頑丈だって言いたいの？」

「その通り。使いたいのか？使って良いぞ。」

「いらぬ。そんなカカシ。」

「結構。」

「ああそうだ簪、今日がタッグマッチの応募締め切りなんだが、放課後空いてるか？」

「ISを整備するつもりだったけど、その前のちよつとの時間なら。」

「OK。職員室の申し込みについてきてくれるか？」

「分かった。」

「それはそうと、トーナメントまでにISを完成させないと。私達も放課後からサ

ポートに入ろう。」

「良いの？」

「簪、これまでのことを考えて、行事がまともに進むと思うか？」

「いや。」

「ああ。そのとき、戦力は一つでも多い方が良い。敵はカカシに変わらないが、準備は

万全にしとかないと。」

「敵さんの期待を裏切っちゃ悪いってこと？」

「そうなんだよ。」

第47話 このISのボルト2、3個ぶつとんでんじや
ねーの？

—第二整備室

「ISはどのくらい出来上がってるんだ？」

「このぐらい……。見た方が早い。」

「パアアツ↑IS展開

「どこで組み方を習った？」

「まだ、武装が……。」

「例えば？」

「マルチロツクオンシテムと……荷電粒子砲。」

「何でそんなおもちゃを……。」

「おもちゃなのは……仕方ない。」

「代わりにこれを積むか？」

「何？」

「レールガンってやつだ。」

「・・・あなた、一夏じゃない。」

バリツ！

「参ったな。もうばれたか。大佐のフリは難しい」

「分かる。EM銃の使い手はあなただけ。」

「ラウラはもう行つたぞ。」

「!?」

「だが、お前はお前の姉より、ずっと見込みがある。」

「それは慰め？」

「俺は嘘は言わん。」

「・・・」

「装甲の組み付けが甘い。だが、そこさえ何とかすれば、後は大丈夫だ。」

「分かるの？」

「分かるさ。お前も、じき分かるようになる。冷えたジュースを買ってこい。作業は

それからだ。」

「うん。」

スタタタタタツ・・・

「おりむく、女の子はいつでもダイエット中なのだ。」

「それがどうした！」

「ジューズなんか勧めちや駄目だよ。」

「だったら運動すれば良いだろ！」

ガッ！【9988／9999】

パキンッ！【0／2000】

「そういうことじゃないのさ。」

「スパナで俺を殴るのは止せ。スパナが勿体ない。それに、修理申請をするのはお前じゃない、俺だ。」

「うい！」

「ただいま……。あれ、スパナが折れてる……。」

「おじようさまー、ごめんなのだ。」

ギロッ！

「本音、今すぐ買いに行つて！」

「うええく……。」

「早く行け！ 簪の気が変わって、退学書を書かれる前にな！」

「!!」

ダダダダダッシュ！

―夕方―

「ふう・・・完成した・・・。ありがとう、織斑君。」

「慌てるな。まだ終わっちゃいない。」

「？」

「おりむら、第六アリーナ取れたよー！」

「テスト飛行する気じゃないよな!？」

「・・・やるとも。」

「行こうぜ！」

―第六アリーナ―

「スラストー出力、正常。・・・織斑君はチェックしないの？」

「チェック？何を。」

「・・・油圧とか。」

「どの油圧？おめでどう。データラメのガバガバだ。」

「じゃあ・・・先に上に行つて。」

「OK！」

「パアアッ

「・・・それは何？」

「固定砲台^白だ。」

シユゴオオオオオオオツ!!!

「どうした、上がれ！」

ゴオオオオオオオオオツ!!!

「・・・どうしたの？上がらないの？」

「上がりやがれ！」

ゴオウオオオオオオオオオツ!!!

フツ・・・ズドオンツ！

「駄目そうだ。」

「上昇するってことが？」

「まあ、そんなところだ。・・・ラファールを借りてこなくちゃ。」

「駄目。・・・出払ってる。」

「諦めるのはまだ早い。あそこを見ろ。」

「・・・何？」

「誰かが置きっぱなしにしてる。」

「!!だめ、それは止めた方が・・・。」

「グラウンドへの無断駐機は高くつくもんだ。」

「

ガチャッ

「急ごう。ダイナーの時間がなくなっちゃまう。」

シユゴオオオオオオオツ！

「簪、（I Sの）調子は？」

「（バグが）多すぎだけど、・・・良い。」

—5分後—

「・・・大体できた。・・・今日はありがとう。」

「帰ろう。腹ペコだ。」

「うん・・・。」

シユウウウーン・・・ボンツ！

「!?!」

〈何で!?!反重力制御が!!〉

「ウオオオオオ!!」

ガシャアアアアアアアン!!【103/3000】↑タワー外壁

「（このタワーも）年だなあ。」

「お、織斑君、大丈夫・・・？」

「柔^タらかいクツ^ワシヨンのお陰で無事だ。」

『ちよつと！その生徒！今の音、何!?!こつちにはタワーの破損^壁つて出てるんだけど
!?!↑先生

「お気になさらず！タワーの点検です。」

『ほ、本当に!』

「今直す!」

ゴンツ!バキツ!【0/3000】

「・・・あ、壊した。」

「予備がある。」

ドスウン!

「これで(交換)出来た。」

『直ったわ。疑ってご免なさいね。』

「」

「帰ろう。食堂が閉まっちゃう。修理は明日だ。」

—同じ頃、武道館—

バキツ!

「楯無、もう終わりか!?(武道館の)使用料を払った。もっと見せろ!」

「いやあああつっ！」

バキッ！

「また寝てるのか？」

「イエ、エエエエアッ！」

ガボッ！

「(プロテインは) 美味しいか？」

「もつと頂戴！」 ↑ 筋肉痛

「今日の訓練はここまでだ。」

「はあ、はあ……。時々思うんだけど、箒ちゃん達って一体何もの？ 教えて頂戴！」

「駄目だ。」

「駄目エ!? 何でよ！」

「教えないんじゃない。教えられないだけだ。実はな、私達もよく分かってないんだ。気が付いたら、強くなってた。」

「」

「行こう。飯の時間だ。……悪いが、二年生の寮食堂案内して貰えるか？ 一年の所は混んでいてな。」

「いいわよ。行きましょう。」

「ああ。」

トコトコ・・・

「・・・ねえ、箒ちゃん。あなたはお姉さんのことどう思ってるの？」

「逝かれた天災。」

「亡霊かしら・・・。」

―翌日の放課後、第二整備室にて―

「編集長、調子は？」

「悪くなかったけど、織斑君がこんな所に呼び出すなんて。何の用事？」

「ISを弄れるか？」

「整備でも改造でも何でも出来るわよ。」

「修理を頼む。これでどうだ？」

「・・・OK。これで修理できるわ。」

「・・・織斑君、この人誰？」

「黛薫子。新聞部の部長だ。」

「へー、君がたっちゃんの妹さん？」

「・・・一応。」

「流石は織斑君が手を掛けるだけはあるわね。たっちゃんの100倍は賢そうだわ。」

「1000? 1、000の間違いじゃないのか？」

「言われてみればそうね。始めましょ。」

「速さが肝心。」

— 一時間後 —

「ま、こんなところね。．．．つち、一時間。かかりすぎね．．．。」

「!？」

「簪は知らないだろうが、編集長は精神的におかしくなる前、I Sの整備資格を取った。」

「何で学生を？」

「ブリュンヒルデ織斑千冬に惚れちまってさ。」

「(あんなのに) 惚れるとはな。」

「嘘だとも?」

「ああ、常識的じゃない。非常識。」

「仰る通り。」

「．．．あの、テストフライトに．．．。」

「駄目だ。」

「駄目?! 何で！」

「外を見る。外を見ろつて。見えたる暗い空。シールドバリアに激突する方に1000円。始めようか？」

「・・・今、作業中。」

カタカタ・・・

「おや、そうかい。」

「調子の良いことで・・・。」

第48話 どの馬鹿だ、無人機寄越したのは

―夜、1025号室―

コンコンッ

「誰だ？」

ガチャッ

「ちやおー！」

ドンッ！

「・・・何これ？」

「茶だ。」

「何で？」

「『茶を』って言ったろ。違うのか？」

「いや、挨拶の方の・・・。」

「じゃあな！」

ズドオオオオオオオオオオオンッ!!!
〔4000／5000〕

「ゲホッ、ゲホッ！何するのよー！」

「チャオつてのはサヨナラって意味の方が強いぞ。知らないのか？」
「あら、そうなの……。」

「辞書読め。」

「そうするわ。」

「で、何の用だ。」

「雑談よ。一夏君と織斑先生は仲が良いなど思つて。」

「腐れ縁。」

「織斑先生は君にだけ厳しいでしょ。」

「嫉妬しているだけだ。」

「分かってないな。死んでほしくないから、厳しくしてるんですよ。」

「死ぬ？俺が？あり得ないね。」

「そうかしら……あら？」

「これか？」

バツ↑扇子

「そう、その『油断大敵』扇……。」

「まだやるか？」

「……疲れたわ、マッサージして。」

「俺の部屋に来て言うな。」

「ええ、君が一番上手いもの。．．．あれ？一夏君？」

—1025号室前の廊下—

「簪。丁度良いところに来た。」

「．．．何？」

「俺の部屋に水色のGがいるから、荷電粒子砲で消し飛ばしてくれ。」

「分かった。」

チャキッ

「開けるぞ！」

ガチャッ！

ビシューーンッ、ビシュッ、ビシューーン!! 【1000/5000】

「あっつ、あっつ！ちよ、一夏君」

!?!?!

ガチャーンッ．．．

「窓割って逃げたか．．．。」

「．．．今の声？」

「さあ、誰だろうな。ありがとう。これで今夜はぐっすり寝られる。」

「そう、．．．良かった。．．．あの、これ作ったから．．．その、．．．食べてみて。」

「カップケーキか。」

「嫌い？」

「いや。」

パクッ

「・・・中身は、何だこれ？」

「知らない方が・・・良い。」

「」

「じゃ、じゃあ、おやすみ！」

ダダダダダッシュ！

「・・・？寝るか。」

——タッグマッチトーナメント開会式——

「それでは、生徒会長の話です。」

「おはよう、皆さん。今日は——タッグマッチトーナメントですが、——勉強になると

——

「あのお方、いつまで喋る気ででしょうか？」

「止しなさいよイギリス。アンタの何もそうでしょ。」

「な・・・。」

「・・・やったのはどなたかしら？」

「私は弾切れよ。」

「・・・誰がこんなことを？」

「知らん。だが、私達を殺る気なら、もう撃ってる。」

「おい、鈴！あれを見ろ。」

ヒョロロ〜ファンファンファン

ヒョロロ〜ファンファンファン→

「落ち着け、みんな。」

スツ↑グラサンを取った音

「日本は狭いなあ、鈴、一夏。」

「御手洗じゃない！噂じゃ死んだって聞いたわよ！」

「それは俺も聞いた。調子はどうだ？」

「まあまあね。・・・全部一人で？」

「今は一人だ。知ってただろ。」

「聞いてたけど、信じてなかったのよ。」

「うん、信じたな。・・・学友か？」

「ええ、篠ノ之、セシリア、ラウラ、シャルロット。それに更識簪よ。」

「御手洗。」

スンッ

「お前は一匹狼というやつか？」

「そう呼ばれてきた。(一夏と鈴が居なくなつて) だいぶ丸くなつたが。」

「・・・そうでもなさそうね。別の噂を聞いたわ。あんた、ママシに噛まれたつて？」

「ああ噛まれた。その後5日間苦しみのたうち回つて・・・ママシが死んだ。」

「だろうな。会いたかつたぞ数馬。」

「こんな狭いところで何してるんだ？」

「知ってるだろ？」

「気が付いたらお前が居なくなつてた。」

「新聞読め。」

「興味ないな。」

「んなことだろうと思つた。・・・何でここに来た。」

「誰のものでもないISが飛んでいるのを見つけてな。あれは携帯の中の携帯だよ。売つて大分稼いだ。」

「出所を知ってるか？」

「篠ノ之束つてヤツだよ。」

「それは知ってるんだな・・・。」

「生きて連れ帰るんなら人数が必要だ。」

「ああ・・・数馬、手を貸すか？」

「悪いが一夏、俺は一匹狼だ。」

「ああ、悪いな・・・。」

「うん。じゃあ元気でな、一夏。」

「ああ、また会おう。」

「そうだ一夏、忘れるところだ。」

「?何だ。」

「乱暴者の友に、友情の印を。今日は、弾の妹の学園祭だそうだ。」

「中止って聞いたが？」

「学園と、生徒はそう思っていない。これが招待状だ。弾から預かった。」

「そうか、分かった。ありがとよ、数馬。・・・そろそろ試合に戻らなきゃ。」

「良いさ、ガンバッテ。」

シユウウウウウウン・・・

「・・・私、何を見逃したのかしら？」

「試合しながら語ってやる。さあ、行こう！」

え？・試合？一夏と箒が決着着かずで日没ワールドになりました。

―翌日、夜―

「ん？織斑、散歩か？」

「まあ、そんなところだ。」↑招待状あったのに学園祭の入場を拒否された

「迷子になったような顔だ。」

「ほつといてくれ。・・・丁度良い。思い出したついでに言っておく。」

「何を。」

「家族のこと。」

「なぜ。」

「家族がいた。」

「おい、一夏。夏バテでボケたのが私だけじゃないのは嬉しいが、奴らはもうあの世だろ。」

「妹がいた。」

「・・・ソイツは可哀想に。」

「そう思うか？」

「ああ、思っている。」

「俺もだ。」

「織斑、そつとしておいてやれ。」

「心に誓おう。」

「まだ心があるなら。」

第49話 E（えらい）O（漢らしい）S（装備ですね）

—放課後の食堂にて—

「で、話しとは何だ？」

「」

「ラウラ、そんなに威圧しちゃ駄目だよ。ね、簪さん。」

「・・・。」

「はい、冷えたジュースに替えよ。それ、もう温いでしょ。」

「それで、答えは決まったか？」

「・・・。」

「話にならん！お前は唇にリップクリームと間違えて糊でも塗ったのか！」

「!!わ、私は・・・何て言うか・・・。」

「ハッキリと言え！」

「そ、その、希望がないって言う嘘・・・。けど、何て言うかそんなのでは・・・ない。」

「何だ、ハッキリと言え。」

「感謝は……してる。けど、そこまでしたいわけじゃない。」

「このやり方には馴染めない。」

「……うん。」

「……。」

「そうか。……気が向いたらいつでも来てくれ。待つてる。」

——身体測定の日——

「織斑君、遅くなりました。書類の整理に時間がかかって——」

ズドオオオオオオオーンツ！【1／3000】

「待つのは苦手でね。」

ガラッ

「山田先生……。織斑、こいつはどうした？」

「ここに来るなり、ばったり。夢の世界に旅立ちちゃった。」

「んん。おい！山田君！起きないか、このお！」

バキッ！【0／3000】

「あ、殺した。」

「（残基に）予備がある。」

バチッ！↑AED

「はっ！こ、ここは？」

「いつまで寝てる、さっさと測定席に着け！」

「は、ひゃい！」

「いいぞ、入ってこい！」

ガラッ

「ん？測定つて織斑君がするの？」

「う、嘘!？」

「ほ、本当だ！昨日の晩ご飯おかわりしちゃった！」

「安心しろ、少しの脂肪なら腕力で誤魔化してやる。」

「胴体真つ二つにならない・・・よね？」

「さあな。」

「」「」

「始めよう！山田先生。記録ミスをしたら、溶鉱炉で溶かすぞ。」

「あ、ありえませんが・・・。たぶん・・・。」

「じゃ、行こう。」

「はーい！一番！相川清香！入りまーす！」

「相川、（臨海学校から）見ないうちに貫禄が付いたようだな。」

「そ、そう？織斑君は、随分と締まったみたいだね。」

「友の忠告だ。」

「な、なに？」

「ジム通った方がいいよ？」

「・・・あのー、織斑君と相川さん。そろそろ初めて貰えませんか？」

「ああ、悪かった。始めるぞ。」

「お願いしまーす！」

ギョムツー！【150／200】

「グエツ！」

「バスト65、ウエスト40、ヒップ80。次。」

「た、タイム。」

「どうした。」

「か、体がちぎれる。」

「「「チェンジで！」」」

「「「そうか・・・。」」」

トボトボ・・・

「惜しかったな。あと一歩だった。」

「ああ、やり過ぎた。」

「なに、また機会があるさ。」

「お断りだね。」

—数日後、一年合同実習—

「おい、筋肉に自信のある手前ら。前へ出てこい。」

「何だ。」

「先日の襲撃事件の迎撃（とその後のトーナメント戦）で、お前達がアリーナを滅茶苦茶にしたな。よって、当分の間ISの使用を禁止する。」

「そうか。いつも通りだな。で、何をさせるつもりだ？」

「ああ。山田君、頼むぞ。」

「はい！じゃあ、こちらに注目してください！」

「何が入ってるか知ってるか。」

「悪いが知ってる。」

「まあ、そうだろうな。」

「黙ってる。」

「はい、では、オープン・セサ——」

「焦れっつてえ！さっさと開けっつてんだこのお！」

バキイイインツ！【42／200】

「やっぱりEOSか。」

「おお、ハニー。」

「ようやく筋トレ道具のお出しました。」

「鬼に金棒つてヤツ？」

「そうだ。乱暴者の生徒に、友情の印を。・・・乗れ。」

「ありがとよ。」

ガチャ、ガチャツ・・・

デエエエエエエエエエエ！【999999／999999】

「馬鹿なこと聞いて悪いが、ISの時よりフィットしてないか？」

「バツチリだ。余計な補正がないお陰で、乗りやすい。」

「じゃ、山田先生。その他の生徒の指示は任せた。」

「はい！」

「手前ら、並べ。」

「何をさせる気だ？模擬戦でも使用つてのかい？」

「そうだ。文句でもあるのか？」

「クラシックに？」

「織斑、それはよせ。デュノアとオルコットと更識が死ぬ。」

「そうか。じゃ、何でする。」

「ペイント弾。」

「おいおい、ス○ラトウーンごっこでもさせる気かよ。」

「なに、楽しいアート製作だと思えばいい。」

「報告書は？」

「山田先生で。」

「OK。始めよう。」

ノタノタ・・・

「お、重い。」

「動かしづらいですわ。」

「これ・・・重すぎる・・・。」

ヒュンヒュン！

「ば、化け物ですわ・・・。」

「僕もそう思う・・・一夏達つて、本当に何者？」

〈やっぱり、断ろうかな・・・。〉

「大佐ア！その程度ですか!？」

「今行くよ！」

ガガガガガガッ!!!

「つく、流石だメイトリクス！」

「その呼び方は止せ！」

ズドオオオオオオオオーンッ！【14／16000】

「やるじゃない篠ノ之！」

「来いよまな板。怖いのか？（ペイント）銃なんか捨てて、かかってこい！楽に倒しちやつまらんだろう。ナイフを突き立て、私が苦しみがいて、転がる様を見るのが望みだったんだろう。そうじゃないのかまな板！」

「てめえを殺してやる！」

バキッ！【1／3200】

「こいつを仕留めるなら、怒らすのが一番だ。」

「ああ、全く。」

「じゃ。」

「始めるか。」

「ペンキぶちまけアート作品の製作を！」

ズババババババッ！

「ソイツは良かった。じゃ、片付け任した。」

シユババババババババババツ!

「ああ!織斑君、片付けは手伝って!・・・篠ノ之さーん:・・・いないですね。オルコツトさーん:・・・いないのか。デュノアさーん:・・・もないのか。更識さーん:・・・は二年生か:・・・。」

〈忘れられてる:・・・?〉

番外編 アウトレイジ

この日、1年1組ではクラス代表を決める会議が開かれていた。

「手前らは黙って座っているだけなのか！」

教壇に立つ織斑千冬は、痺れを切らし怒鳴る。けれど、それに萎縮しているのか一向に立候補する者は現れない。

「出せってんだよこの野郎！自薦・他薦は問わんぞ！」

痺れを切らした千冬は、生徒に向けて更に檄を飛ばす。

「はい！織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「んじゃ、私も織斑君で！」

すると、次々と織斑一夏がよいという意見が出た。確かに他人になすりつけるのは楽だ。

「おい、待てや！」

しかし、当の本人はその限りではない。

「手前、一体誰の許しを得て推薦してんだこの野郎！」

怒号がクラス中に響き渡る。

「そうですね！納得がいきません！」

そして、それに賛同する者もいた。もつとも、彼女の場合はもつと違う理由がある。「あなた方は何をやっているのかお分かりでして！……、誰の学園だと思つてらっしやるのか……。」

セシリア・オルコットは、まるでIS学園を自分が仕切っているかのような口調で語り始める。

「何だこいつ。」

急に割り込まれて、一夏は少し目を丸くする。

「腕っぶしで言えば、この私以外には適任はないでしょう！珍しいと言うだけでクラス代表を選ぶ？私が、こんな極東の島にまで出てきているのです。もつと私を敬うべきではないですか？」

急に侮辱されたことが、推薦されたこととのストレスと合わさり一夏の怒りが頂点に達した。

「ガタガタウルセえんだよ、馬鹿野郎！ぶち殺すぞ、ゴラア！」

「あなた、一体誰に向かって喋ってるのですか！」

「ぶざけんなこの野郎！」

しかし、一夏の怒号にセシリアは一步も引かず応戦する。

「調子に乗ってますと容赦しなくてよー!」

「だからやってみろつってんだよ、この野郎!」

その瞬間、セシリアはスッと一步引いてニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「そうでした。では、決闘が手っ取り早いですわ!」

「決闘? (教室では狭すぎて) 決闘できないよ。」

相手に少しばかり流れを持っていかれた。一夏は、トボけた振りをしてその流れを取り戻そうと試みる。

「もつと血が見たいのでして?」

「うるせえ! こつちが決めんるんじやポケエ!」

「な! ただじゃおきませんわ! ぶち殺して差し上げましてよー!」

セシリアは、プライドの化身といって差し支えない。煽られれば、本能で反応してしまふのだ。

「殺れよこの野郎! おもちやかそれ!」

セシリアが耳にぶら下げる、待機状態のブルーティアーズを一夏は指差して更なる挑戦を行う。

「殺つて差し上げますから道具持って来なさい、東洋の猿!」

「だから（まずはISSで）殺ってみろっつんだ！」

「やめてください！」

「ああ?!・・・。」

しかし、罵り合いは山田先生の一声により妨げられ、急速に終焉を迎えたのだった。それから一週間後。なんとか抗争に発展するような事態だけは避け続け、決闘当日になった。

「なあ、山田先生よ。」

しかし、まだ問題だらけのままであった

「どうしました?」

「俺のISSは?」

そう、ISSが届いていないのだ。いつもの筋肉の方は必要としない・・・いや、寧ろ邪魔なぐらいなのだが、この一夏はヤクザである。流星に素手でISSをぶちのめすほど強くない。

「え、えつと・・・。」

「出せっつてんだこの野郎!これじゃ（決闘が）できねえじゃねえか!」
常に強気であるが、むぎむぎ命を捨てるようなことはしない。

「織斑!そこまでだ。ISSが来たぞ。」

そこへ織斑先生がやって来て、そう一夏に伝えた。

「ああ。わかった。」

ゴンツという鈍い音がした後、扉が開いてISが現れる。それは白一色の、飾り気のないというよりは無地といった方が正しいような白いISがそこにいた。

一夏は特に迷うこともなくそれに乗り込む。

すぐにISが一夏の体を包み込んだ。

「乗ったか？」

「ああ。」

「乗ったらさっさと行け！」

「行ってやるよこの野郎。」

「だから行けつつてんだ！」

千冬は回し蹴りを嘯まし、カタパルトの代わり一夏をグラウンドへ蹴り出す。

「あら、ようやくお出ましでして？」

それが丁度、待ちくたびれたセシリアがピットに戻ろうとしたタイミングと重なってしまふ。

「手前から吹っ掛けておいて、今更逃げるのかよ。」

「あなたがトロイからですわ！どういふ教育なさっているのか・・・。」

「ウルセえんだよ馬鹿野郎！」

「タダじやおきませんわ、ぶち殺して差し上げます！」

その瞬間、開始の合図が鳴った。

「汚えお嬢様だな？」

セシリアが奇襲気味に放った一発目を避けつつ、一夏は武器の確認に入る。

「調子に乗っていると、容赦しなくてよ！」

機動力を生かし距離を取った一夏だったが、武器が刀一本であることに気付く。

〈鉄砲玉になれってのか？〉

「さっさと（武器を）出しては如何でして？」

「お前こそ出セッてんだこの野郎！」

しかし、どうやらこのレンジはセシリアの得意とするレンジだったようで、一夏はレーザーの雨に晒される。

それでも、被弾は最小限に留めて反撃の機会を窺う。

「（威勢が悪いことに）文句あるんかい。」

「ありますわ、チンピラ風情が！」

「誰がチンピラじゃ。」

セシリアは、一夏の地雷を踏み抜いてしまった。一夏は、隠し持っていた拳銃でブ

ルーティアーズのビットの一つを撃ち落とす。

「やっつたろうやないかい。」

破裂音が連続して三度響いた。そして、ものの見事にビットを三機破壊した」

「な！ チンピラ一人やれないなんて・・・とんだ欠陥武器を寄越したものですわ。」

セシリアは、操縦の未熟さを棚に上げて人に責任をなすりつけようとする。

けれど、それが致命的な思考であつた。

彼女が気付いたときには、一夏は彼女の真後ろで銃を突きつけていた

「つく、降参ですわ。」

「悪いと思つてるのか？」

「ええ、あなたがね！」

バツと、セシリアの腰部から棒が二本せり上がり、ミサイルを発射した。堪らず退散する一夏。

「あなた、誰に向かつて口を利いていらつしやるのかしら？」

「何だお前、調子に乗りやがって。」

「あなたはいつもトロイのですわ！」

「調子乗つてると容赦しねえぞ！」

一夏は逃げるのを辞め、刀でマイクロミサイル2発を切り落とす。

そして、瞬時加速で以てセシリア肉薄。体当たりするようにつつかると、そのまま壁まで押し込む。

「い、言うとおりにしますので。」

喧嘩を売ってすいませんでしたと、セシリア。

「悪いと思ってるなら、指詰めろ。」

一夏の気迫に気圧されてセシリアは機体のカラーよりも青くなる。

「ゆ、許してくださいませんか？」

「かっこつけてんじゃねえ！」

一夏が、刃物を振り下ろす。

「ア、アアアア……あれ？」

しかし、痛みが来ない。セシリアが恐る恐る目を開けると……。

「な、これは何でして!？」

無数の折れた刃物が、グラウンド内に散乱していた。

〈絶対防御のお陰ですわ!〉

以降、セシリアは指の恩としてブルーティアーズを大切に扱ったのであった。

第50話 子守は得意じゃない

—倉持技研の前にて—

へーんがそうか。走ってくるにはちと遠いが、いい運動になった。だが・・・面倒だ。▽

—3日前の夜—

「織斑君、倉持技研からオーバーホールの——」

「山田先生、任せた。」

POI☆

「グエツ!」

「・・・分かったよ。」

—今に至る—

「ドアノブがないな。・・・OK!」

ズドオオオオオオオオオンツ! 【0/200】

「んー少年、イイ威力だ。」

「そう思うか?」

「もう少し派手な方が好みかな。」

「俺もだ。」

「ああ!? 所長! 何やってるんですか!!」

「いやいや、私じゃなくてこの少年が——」

「いい大人が責任転嫁しないでください! で、君が織斑一夏君だね? 大丈夫だつ・・・大丈夫そうだね。」

「ああ、早く案内してくれ。不審者の子守は得意じゃない。」

「すまないね、所長は見ての通り変態で。」

「私は変態じゃない!」

ブンツ↑モリを投げた音

パシツ【9999/9999】

「今度投げてみる・・・殺すぞ。」

「悪い悪い。しかし、少年、イイ反応だったぞ。それより、私の部屋でイイコトしないかい?」

「断る。」

「ババ抜きとかさあ?」

「二人でか? 抜いてる暇もねえよ。」

「じゃあ——」

「所長黙ってください。申し訳ないね。少し待ってて貰うようになるけど、冷えたジュースでも飲みながら待ってて。」

「ああ、できるだけ早くしてくれ。」

スタスタ

ベシャベシャ・・・

「所長！体拭けッてんだこのを！」

「又ハハハ！気にしたら負けだ!!」

「後で掃除しなくちゃいけないでしょうが！」

「そうかそうか。では乾くまでここにしよう！」

「どれだけ時間を——」

「すぐ乾かしてやるよ！」

ゴオオオオオオオオオオッ！【100/200】↑火炎放射器

「これで乾いた。」

「おお、いい感じだ。採用するよ、織斑君。」

「少年。女性はもう少し優しく扱うものだ。」

「そうか、心に誓おう。」

「心はあるのかい？」

「実を言うとは持つてない。」

「ふははは、そう言うと思つたよ。」

「分かつたなら、早く来てくれ。」

「ういー! すぐ行くから待つててナー。」

—それから30分後—

「お待たせ、待つた?」

「遅刻だ。」

「少年、一つ教えておこう。女性に待つたつて聞かれたら、今来たところだつて言うものだよ!」

「本当にそうか?」

「?」

「少なくとも俺の知り合いには、そんなヤツはいない。」

「それは君が思っているだけさ。乙女の美学を分からないやつはモテないぞ?」

「それで結構。初めてくれ。」

パアアツ↑白式展開

「ふーん、張り合いがないナア。」

「そいつは、お互い様だ。」

「そう言えば、挨拶がまだだったね。私の名前は——」

「篝火ヒカルノ。倉持技研、第二研究所で所長を務める。違うか？」

「んー、惜しい。少し足りない。」

「千冬姉と天災の同級生ってことか？高校の。」

「良く知ってるね。どこで仕入れた情報？」

「手先をチョコチョコと動かせば、この程度の情報は手に入る。……知り合いが言っていた。誰だったかな。忘れちゃった。」

「まあ、いいかあ。それよりもISだね。どれどれ……セカンドシフトしたって聞いてたけど、まさかここまで変化するかなあ？」

「ああ、重くて使い物にならない。全部取っ払っちゃまってくれ。」

「んーダメージの蓄積は……ないね。使った？」

「2〜3時間ぐらいは。」

「」

「取り外せるか？」

「できるさ。こつちの技術者を総動員してやるよ。」

「どのくらい掛かりそうだ？」

「明日までには余裕っしょ。完徹するからね。」

「ああ、余裕だな。帰って良いか？」

「ん？ I Sがなくてもいいなら。」

「永遠に持つててもいいぞ。・・・暇なら明日取りに来る。」

—その頃 I S学園では—

「かつたるいわ。」

「鈴、どうしたの？」

「シャルロットは分からない？」

「？」

ガラガラガラ・・・カシャンツ

「非常シャッターが!?!? どういうこと!?!」

「避難訓練の話は聞いてないし・・・何かしら？」

「よ、余裕だね。」

「しつ、千冬さんから指示が出るわよ。」

『聞こえるか？ 専用機持ち。地下のオペレーションルームに集合しろ。マップを送

る。各自で確認しろ。極力ドアは壊すな。OK?』

「どうしよう・・・。」

「行くわよ！シャルロット！」

「行くって、どうやって!? ドアは全部閉まってるよ!？」

「こーやるのよ!」

ズドオンツ! 【0/500】 ↑衝撃砲

「こ、壊すなって織斑先生が!!」

『『ドアは』でしょ? 床と壁は言ってなかったわよ。』

「」

ガシッ!

「時間がないわ。行くよ!」

「あ!? ま、待って!!」

ピョン!

「ギヤアアアアアアアアアア」

!?!?!?!?

「楽しい?」

「もうごめんだよおおお!!」

「更識姉妹。折角の友情を壊したくないが、20秒の遅刻だ。」

「これでも早いほうです。と言うか! みんな学校を壊しちゃ駄目でしょ! 織斑先生が

言っただじゃない!」

コクコク↑簪

「私はドアを壊すなど言った。違うか？」

「違いが分かりません！」

「そうか。では教えてやる。ドアは可動する。修理が面倒だ。だが、壁や床はどうだ？ 所詮鉄筋とコンクリでできている。直すのは容易い。」

「ケールとか切つたらどうするつもりなのですか？」

「何だ？ お前たちは壁の向こうに何かあるかも分からないのか？」

「！」

「時間が惜しい。状況を説明する。ハッキングされた。」

「そりや大変ね。」

「ああ。どうせあのアホの仕業だ。身内として恥ずかしい。」

「それより、侵入者の方が問題だな。」

「「!?」」

「何を驚いている？」

「お、織斑先生。今侵入者って……。」

「ああ？ 前から潜水艦で潜んでたろ。知らないのか山田君。」

「初耳です！ 何で言わないんですか！」

「ほ、僕も初耳です！」

コクコク・・・

「そうか。では更識簪、デユノアはハッキングの対処に当たれ。鈴はここに残ってこいつらの子守だ。」

「・・・え？」

「得意じゃないけど、しょうがないわね。」

「残りは私と侵入者狩りだ。行こう。」

「教官！」

「先生と呼べ！」

「ハッ！織斑先生！奴らの場所が分かりません！」

「学園が無駄に広いせいで私にも分からない。手分けして探す。篠ノ之、お前は区画（仮称）1、オルコットは2、ラウラは楯無と組んで広い3に行け。私は4に行く。歓迎してやれ。七面鳥を撃ちに行くぞ。」

第51話 ようこそ！ I S 学園ドツタン☆バツタン☆大騒ぎ！

—区画（仮称） 3—

「おかしいわね……。」

「何がだ？」

「カメラが写らないのよ。」

「そうだろう。停電しているのだからな。」

「違うわよ。私個人で仕掛けていたのよ。」

「……お前のか？」

スッ……

「いつの間に……。」

「変な電波が飛んでいたから、テロリストのものかと思って取り外した。三日前の話
しだが。」

「」

「ん？ どうやら、私達はついていってるぞ。近いな。左か？ いや、右からも音がする。どっ

ちがいい。」

「じゃ、右で。」

「分かった。後で会おう。」

—五分後、ラウラー—

「んん!?!大佐!ここで何を!!」

「帰ってきてても迎えはなし。シャッターを壊そうにも、こういうときに限ってI Sもロケットランチャーも持ち合わせてない。素手でやつても良かったが時間がかかる。仕方ないから、側溝に飛び込んでここまで来たんだよ。」

「なるほど。」

「ところで何の音だ?・・・銃声か。サプレッサーを使っているな。」

「!大佐、生徒会長のヤツが行った方向です!」

「携帯を持つてるだろ?大丈夫だろ。」

「そうでした。」

「まあ、行つてやるか。」

—その頃楯無は—

「もう、何で私ばかり外れを引くのかしら!」

パスツ、プシュツ、プシュツ、パツシュツ

「うわあああああああ!?!?!?」

「その頃千冬は——」

ズガアアアッ!

【48000/50000】

「つく!!……ブリュンヒルデ!? 生身で来るとは、本気か?」

「悪いな。まだ、ウォーミングアップ中だ。」

「……。」

「どうした。一対一だ。楽しみをふいにしたくはないだろう。来いよ。怖いのか?」

「今行ってやる!」

——因みに箒——

「……誰も居ないではないか。外れか。」

——シヤルロット&簪IN電脳世界——

「うーん、凄い学校だね。さっきの部屋の耐久構造なんて、核シエルトの比じゃないかな」

かったし。」

『……私も……それは見た。』

「ねー。……でも、何だろう。鈴とかラウラとか、篠ノ之さんに至っては竹刀で破壊

しちゃうし……。本当に人間なのかな?」

『それは・・・間違いない。』

「はー・・・。じゃあ、僕らもやろうか。何をすれば良いの？」

「参ったなあ、急がないと。」↑白ウサギ

『捕まえてもら・・・それを捕まえて!!』

「ええ!?!こ、これ!?!」

『早く!』

「分かった!」

ガシツ!〔199/200〕

『』

「これでいいのかな？」

『・・・シャルロット。・・・あなたも大概人間じゃない。』

「ええ!?!」

—子守中の鈴—

「ちよつと!誰も来ないじゃない!暇!!一人ぐらい、ここまで抜けて来なさいよ!へ

たれ!!」

—夏とラウラ—

「この部屋なんだ?分かるかラウラ。」

「いえ! 知りません!」

ガラッ

「激アツ! 大当たりです!!」

バババババババババババババツ!

「遅い、これが本当にバルカン砲か?」

「ラウラ、戦闘機の乗りすぎだ。ガトリング砲だ。」

「! そうでした。」

「お、織斑君とボーデヴィツヒさん!」

「山田先生! そのクソツタレガンを超越せ! 俺の気が変わって、クアッド・フアランク

スを剥ぎ取る前にな!」

バキッ! 【280000 / 300000】

「ああ、報告書が!!」

—その頃、千冬は—

ゴスツ! 【45021 / 50000】

「いい加減にして貰おう。」

「何を?」

「貴様! 素手で I S と殴り合うなど常識的じゃない。非常識。」

「そうか。・・・目的は無人機の残骸とコア。それから白式だろうか？」

「そうだ。場所を吐いて貰おう。」

「第一倉庫の中だ。」

グッ・・・

「あ、職員室の机の中にしまったかも知れないな。」

「どういふつもりだ？」

「いや、道義心に駆られて意地悪なＩＳ委員会からＩＳを持たせてもらえない貧しい国に配っちまった記憶もあるな。」

「・・・貴様！」

「吐かしたきや、力づくでやってみる。」

「ふん、その強気がいつまで持つか楽しみだ。私には特殊部隊がバックについている。それでもまだ、生身で挑んでくるか？」

「部隊？もう、ほとんど残ってないだろ。」

『↑無線機

「・・・ヤロオー、ブッコロツシャアアアアアア！」

ズドオオオオオオオンツ!!【39701/50000】

「ＩＳなどに乗るから動きが鈍くなる。クラシックが一番だ。」

第52話 いたぞ！いたぞおおおおお!!!

——夏の戦闘から時を置いて楯無——

ギユツ・・・パンパン☆

「こんなところね。・・・やった片づいたわ。さて、行きますか。」

へこ、この程度のことです。・・・」
「化け物めえええええ!!」

プシツ【4901/5000】

「隙を見せたなあ!!」

「ちよ！痛つ!?!痛つ!?!」

「?!?!」

「ああ!!プラズマカッター！持つてるなら最初から持つてるって言いなさいよ！」

「」

「ちよつと、モルヒネとか持ってないわけ？痛いですけど。」

ヒソヒソ・・・

「武器を捨てて投降すれば渡してやる。」

「しなかつたら？」

「急がないと、まずい。」
「……これが束様の言っていた……暮桜のコア。」
「その頃、オペレーションルームでは――」

「暇、暇、暇!!」

「鈴……うるさい。」

「何よ！私だけ誰も相手していないのよ！」

「篠ノ之さんも同じ。」

「ふん、そんなことなんか知らないわよ。」

「コツツコツツ……」

「!!来たわね！喰らえ！」

「ドゴオンツッ！」「19801/20000」↑ドロップキック

「……やった？」

「手応えがありすぎるわね。まるで一夏か千冬さ……いや織斑先生で間違いなさそう
ね。」

「相手をよく見ってから蹴りを入れろ！」

「は、はい！」

「……命拾いました。」へつまらない。<

――IS学園近くの臨海公園にて――

〈任務完了・・・さっさとここから離れないと。〉

「おい、待てよ。おたくにいい話しを聞かせてやろうってんだ。」

「!!」

「相席させて貰うぞ。・・・そんなに身構えるな。そら、ホットミルクだ。」

「織斑・・・千冬。」

「あまり長話は好きじゃなくてな。要件だけ言うでしょう。束に言っておけ、無駄なことはするな。」

〈殺すしか・・・殺せる?〉

「止めておけ。お前の戦闘能力じゃ、私のクラスの生徒すら倒せはしない。間違っ
てチエーンガンを使ったとしてもな。」

「そう。けど私にはISがある。」

「ブワッ!」

「黒鍵。生態同期型のIS。精神への干渉は電脳世界で、現実世界では大気
の物質を変化させて幻影を作る。・・・実に下らない発想だ。」

「!?・・・なぜ、そこまで知っている。」

「アイツの考えそんなことだ。すぐに分かる。」

「ヒュッ・・・カツッ【200000/200000】」

「ナイフはよく研げ。でなければ、目玉にも刺さりやしない。……このナイフ、バランスが悪いな。」

グサツ！【17441/21000】

「さつさとやめたらどうだ？ 決るぞ？」

しゅうううううう……

「いい子だ。そう言えば、ラウラが会いたいって言っていたぞ。」

「あれは、なれなかつた私。私の妹じゃ……え？」

「写真も沢山持っていた。いつか姉に会うって言ってたぞ？」

ダラダラダラ

「いつか会ってやれ。悪い奴じゃない。少し行き過ぎることもあるがな。また会お

う。」

スタスタスタ……

ズズツ

「……甘!!」
ああんま

―某所ホテルのスイートルーム―

「あら？ M ったら、食事会に行くのがまだ不満なのかしら？」

「相手は篠ノ之束。私が同行しても意味がない。」

「あるわよ。私の身代わりが必要でしょ?」

「・・・弾よけか。」

「さて、行くわよ。・・・少しくらい笑いなさい。篠ノ之東の機嫌を損ねたら、あなたはおしまいよ。」

「終わり?ここまで生かしておいてか?」

「ええ、そうよ。」

―夜、そのレストランにて―

「このお肉は一級品?」

「ええ、当然です、東博士。」

「ん、最っ高!・・・このところ、どこの食堂行つても鉛弾ばかりで。」

「お気に召しましたか?」

「うんうん、気に入ったよ。けど、隠し味の睡眠薬はもつと入れるべきだね。インパクトが足りないよ。」

「」

「おお、わいーん!ひっさしぶりい!」

「ところで、あの話しは考えて頂けたでしょうか?」

「どの話しい?」

「我々に専用のＩＳを建造して頂く話です。コア込みで。」
「断る。」

「そこを何とか、お願いできませんか？」

「ルール１。契約厳守。」

「契約を交わした覚えはありませんか？そもそも、契約なんてありましたっけ？」

「んん？昨日考えた。」

「お断りしまゝす！あ、ケーキとカレー、それから冷やし中華追加で。それと、イノシシのステーキもよろしく。」

「どうしても断るのですか？」

「うん、面倒じゃん？」

「では、こちらは如何です？」
ズルズル・・・

「よかつたら、子鹿のステーキでも用意しますけど？」

「どの子鹿？」

「あの子鹿で・・・誰だ！子鹿を逃がしたのは！」

「アハハハハッ！トロイ！！」

「オータム！」

「おうよ!」

ヒュッ・・・スカッ・・・バキッ

「フー危なかった。今の私でなきや、あの世に逝つてたぜ。織斑一夏とその他に感謝だな。」

「いい反応だったよ。だから、教えてあげるね。私は天才天才って言われるけど、思考と頭脳だけじゃないよ? 肉体も細胞単位でオーバースペックだから。」

「あつそ。」

ドゴオンツ! 【0/200】↑レストランの壁

「動くな!」

「エム! やつちまえ!」

バキッ、バキッ!ゴスツ! 【34211/40000】

ビシューーンツ、ビシューーンツ! 【14999/15000】

「ふうん!やるじゃ・・・あつつ!」

「喰らえ!」

「させないよ!・・・君、ちーちゃんに似てるね!名前は、『まどか』かな?」

「!?!」

「あ た つ——」

ズドオオオオオオオンツ!!「↑2000/200」↑レストランの壁

「?!?!」

「騒がしいと思って覗いてみたら何のことはない。」

「ほ、箒ちゃん!?!」

「悪いな、亡国企業。うちの馬鹿が迷惑かけた。飲食代と・・・慰謝料と言っちゃ何だが、ほんの気持ちだ。受け取ってくれ。」

スツ・・・

「中身は?」

「見りや分かる。では、これで失礼する。」

「さて、ソイツには私達の専用機を——」

「何で? 必要か?」

「待って! 箒ちゃん待ってえ!」

「口開ける! あげやがれこのお! 舌あ引っこ抜いてハーグに送ってやるぜ、舌が証言出来るようになあ!」

「アガツアガツ!!」

ズルズル・・・

『わあああああ!!』

『支えてるのは左手だ。知っているだろう! 利き腕じゃないぞ!』

『子牛の煮込みが死ぬほど食いたかったんだよお!』

『残基は後幾つある。』

『知らないよ! ねえ、箒ち・・・ウワアアアアアアツ・・・』

—その頃、IS学園では—

「あの馬鹿が寄越したプログラムの正体は分かっている。暮桜、お前の強制解凍プログラムだろ?・・・今度動いてみる。溶鉱炉で溶かすぞ。」

『!?!』

カチッ!

「おい!」

「何だ? まだいたのか。」

「私をどうするつもりだ?」

「帰れ。」

「人質位の価値はあるのに、か?」

「くだらねええ。お前程度なら、そこら辺にゴロゴロいる。」

「そうか・・・。x x x 0 8 9 1—D A。私の秘匿回線だ。」

「脳のストレージに余裕があったら覚えといてやるよ。じゃあな。」

スタスタスタ
・
・

第53話 キャプテン一夏のワークアウトだ!

—保健室—

「楯無、傷は治ったか?」

「前から言おうとは思っていたんだけど、一夏くん。せめて『さん』くらいは付かない?」

「何で? 必要か?」

「いや、そう言うんじゃないんだけど。」

「じゃ、刀奈か?」

「?!?」

「安心しろ。誰も聞いちやいない。」

「ちよつと待って! 何で知ってるのよ!?!」

「役所に行つてチョコチョコと手先を動かすだけで、その程度のごことは調べられる。違うか?」

「私の戸籍は存在してないはずなんだけど?」

「そうか? だがあったのは事実だ。」

「」

「ところで怪我は？」

「弾を一発も撃ち込まれたのよ？ 遺体に決まってるでしょ。」

「そうか？ じゃあ、AEDがいるな。あのオレンジのヤツだ。」

「あ、あの一夏くん？ 冗談だよ？」

「刺激が欲しいかええ？ ビリビリするような刺激だ！ 刺激が欲しいだろ！」

「いやー！ 結構！ 遠慮させて貰うわ!!」

「安心しろ。急所は外してやる。」

「しなくていいわよ！ 弾ももう取りだししたし!!」

「分かったなら、体の調子がどうかを答えるんだ。」

「もう傷口は塞がったわよ！」

ガバッ！

「見なさいよ、ほら！」

「分かったよ。分かったから腹を仕舞え。」

「ちゃんと見なさいって言ってるでしょ!! ホラホラ!!」

「見てる。あまり騒ぐな、傷口が開くぞ。」

「あつそう。じゃあ、本当に塞がっているか、触ってみなさいよ!!」

「お前もセラピーが必要だな。」

「なあ!—夏くんは、私がおかしいって言うの!?!分かったわ!だから触ってみなさい!—そうすれば、治っているって分かるから。」

「分かった。だから仕舞え。」

「そうやって逃げ——」

「時間だ。」

「何をやつとるんだ、楯無。」

「お、織斑先生!?!」

「い、いけませんよ!教育的指導で——」

「山田君、黙っててくれ。話しがややこしくなる。」

「織斑先生!!女子生徒と男子生徒が、鍵が掛かっていなかったとは言え密室で——」

ドベキシ!「オフィ……」【1/3000】

「この手に限る。」

「いい感じだ。」

「へこうなったら、アレをするしかないわね。」

—それから何日か後の、夜の一年生寮食堂にて—

「面倒くさい前置きはなしにして!ここに宣言するわ!」

「OK！」

ズドオオオオオオオオンツッ！【4801/5000】

「水でできた化身よ！」

「腕を上げたな。見破れなかった。」

「ふっ、これからは楯無お姉さんを甘く見ないことね。」

「で、宣言って何だ。」

「無粋なんだから。一夏くんは、口の利き方を学んだ方がいいわよ。」

「あたしもそう思うわ。」

「良く言うよ。」

「宣言って何よ。」

「・・・一週間後。」

「何が？」

「一年生対抗一夏争奪代表候補生ヴァーサス・マッチ大運動会を開催するわ!!」

「よく一息で言うな。」

「ええ、わたくしでもあの長さを噛まずに言い切る自信はありませんわ。」

「で、何の詠唱だったのだ？」

「さあ、長くてよく分かんなかったわ。」

」

「宣言は終わりか?」

「ええ。今から説明するわ。」

「まだ喋るのか。」

「目的は二つ!優勝者には一夏くんと同じ一組になる権利を与え、それ以外の代表候補生は別クラスに移動。そして、一夏くんと同じ部屋で暮らす権利を与える。」

「待て待て待て、最後の大佐と同じ部屋で暮らすというのは何の拷問だ?」

「おいラウラ。俺はそこまで鬼か?」

「アンタの筋トレ、篠ノ之さんしかついて行けっこないわ。」

「慣れればどうと言うことはない。」

「篠ノ之さんだけですわ!」

「というか、誰得なのよ。その何たら運動会。」

「・・・。」

「ずっと温めていたってところかしら。」

「みたいだね。でなきや、こんなこと思い付くはずがないと思うもん。」

「・・・。」

「どうした、冷や汗なんかかいて。」

「・・・注文しちゃったわ。」

「」

「とうわけ——」

「断る。」

「」

「だが、手伝いだけならやってやる。」

「私達を参加させない。それが条件だ。」

「し・・・仕方ないわね・・・。」

「契約成立だ。」

——週間後——

「それでは、これよりIS学園大運動会を開催します！」

「ワアアアアアアアツ！」

「それでは、選手宣誓！織斑一夏！」

「・・・。」

「大佐、呼ばれました。」

「契約違反だ。」

「安心して。競技には出場しなくていいから。てか、しないで。」

「全くですわ。どうしてIS学園に入っただけで油断するのでしょうか。わたくしでも努力を怠っていないというのに。」

「まあ、織斑筋が相手だし・・・仕方ないわね。」

「・・・デュノア社のテストパイロットは、これに耐えられるかな。」

「・・・何で、これだけで私を仲間にしようとするの？」

第54話 空母を爆破して帰る、丁度ティータイムだ

—体育祭の翌日、楯無—

へう……。分かるわ。起きたばかりの私でも寝たいと思うもの。〈

コンコン

「!!……」

カタツ↑天井板外し

「楯無、ちったあ編めるようになったかよ。」

「どこから入ってきてるの!?!」

「いつもやってることだ!今更御託を並べるな!」

「

「落とし物だ。」

「お、落とし物?私?」

「ああ。ほらよ。」

ポイ☆↑パンツ

「!!?!?きやあああああつ!か、返しなさい!!」

「今返したろ！」

「そういうことじゃないの！」

「いつものキレはどうした！熱でもあるのか？」

「ないわよ！」

「じゃ、何だ。疲れが抜けてないのか？」

「疲れてる？私が？あり得ないわね。」

「(パンツ落としといて) よく言うぜ。」

「ば、馬鹿！一夏くんの変態！」

「今度落としてみろ、溶鉱炉で溶かすぞ。」

「聞くのが怖いんだけど、何を？」

「知らない方がいい。それを知っちゃったら、殺されちまうぞ。」

「」

「じゃあな。」

「ま、待って！」

「何だ！」

「この後買い物に行くから付き合いなさい！」

「付き合いが必要なのは分かっているんだが、出かけてる暇がねえ。」

「いいから!」

「その後、シヨップにて—

「あつら—? あべこべだあ。」

「んー、確かにロシアでは通用しないわね。」

「ああ、あそこ(オイミヤコン)はクソ寒いなの。」

「春とか夏は結構平気だけどね。」

「ふふーん、だどいいがあ?」

「あ!一夏くん!私あそこへ行ってみたいわ!」↑ゲーセンを指差して

「駄目だ。」

「駄目エ!?何で!」

「出禁だ。」

「何したのよ。」

「パンチングマシンを手玉に取り、法と道徳に背く——」

「もういいわ。近くで見るだけにしましょう。」

「楯無!危ない!」

「グインツ!」【4999/5000】

「ギャツ!?何するのよ!」

「危ねえだろ！車が壊れたらどうする！」

「そっち!?私の心配をしなさいよ！」

「いつまでお硬い女ぶってるんだ！お回りから交通教育を受けなかったのか！」

「この筋肉にだらしないヴァカ男が。」

「いやあ、その通り。それが悪いのか？筋肉には興味ないのか。」

「一夏くんがあまりすぎるのよ！」

—時間は過ぎて夕方—

「よく買うもんですな。全くお笑いだ。箒や鈴がいたら、奴らも笑うだろう。」

「沢山のバックを見てきたから分かるわ！これは企業の陰謀よ！」

「(これだけ買い漁って) よく言うぜ。」

「消費者の脳みそにサブプリミナルメッセージを送って、嗜好を操作してるのよ！」

「そこまで分かってなぜ買う。」

「・・・。」

シーーーーー

〈秘匿回線テレックに緊急メッセージだわ〉『手短に。・・・言え。・・・ええ、分かったわ。』

「一夏くん、ごめんね。急用ができちゃった。今日はここまで。」

「すまねえ、ロシア語はさっぱりなんだ。」

「日本語なんだけど・・・。」

「一人で（仕事を）抱え込むなってんだ、この大バカやろう！けど、手を貸せるのも俺
しかないぞ。」

「分かったわ。勝手にして。」

「さっさと行って、さっさと帰ろう。」

「ちよ、一夏くん!?何してるの!?!」

「ISを展開するんだ。悪いか。」

「悪いわよ！というか、どこに行くか分かってるの?」

「沖にある、アメリカの秘匿空母だろ?」

「よくご存じで。でも、ISは無しよ。」

「いつもやつてることだ！今更御託を並べるな!」

「駄目！そんなことをしたら、日米双方のIS部隊が飛んできて包囲されちゃうわ
よー!」

「どうなるか試してみるか?」

ブオオン【99999／99999】

「IS部隊は来る。俺のところにも来るし、お前のところにも来る。」

「」

「!?」

「いつもやってることだ！今更真に受けるな！」

「何しに来た特ダネ屋。」

「今夜、この空母を爆破しようって連中がいる。」

「何も聞かされてないが？」

「そうだろうな。テロリストは丁度ここを爆破して帰る、丁度ティータイムだ。」

「どこにある！答えろ！」

「無理無理、無駄なことだよ。全員退艦させる。死体が増える前にな。」

「分かった！」

ガチインツ！

「どうした。」

「鍵が掛かっている。」

「退け！」

バキイイイイインツ！

「これでできた。」

「聞きたかないが、お前の連れはどこに行った。」

「・・・小娘め！クソオ逃げたか！」

「あの機関銃娘、どうにかならんのか！」

「無理無理、無駄なこつたよ。」

—そのころ、楯無は—

カタカタカタカタ・・・

「嘘！スコール・ミューゼルは死んでる!？」

「残念でした、外れ。」

「しかも今の方が若い!？」

「言葉遣いを知らんヤツめ。」

ドカアアアアアアアンツ！【0／99000】

第55話 死ぬときや芋づる式

ドカアアアアアアアンツ！〔0／99000〕

「何だお！」

「爆弾が炸裂したんだろ。逃げるぞ。」

「あちー！あちちー！ああつー！くそつー！息子がやけどしちまったじやねえか！ちつくしようもうー！バツカ野郎！クソツタレが！どうしてくれんだよこのザマ！海は汚れる！（I S）スーツは台無し！ おまけによおタマはゆで卵になっちまった！」

「お前男だったのか？」

「違う、ストレス解消法だよ。ボディビルの観賞、筋肉へ栄養をやり、特別な発声法に無意味な罵倒、そしていい木霊を聴く。気が落ち着く。くだらない気休めだと思うかもしれんが、心臓のバイパス手術を受ける羽目になるよりはマシだ。」

ドボオンツ・・・ドボオオオンツ↑入水

「ブハツツ！おい、織斑一夏！お前が居てこの様か!？」

「これはちよつとした手違いだ。傷つけるつもりはなかった。」

「傷つくどころか沈んだ！」

「そうかい、じゃ、俺はうちに帰つてのんびりして、テレビのトレーニングモノでも見て勉強するさ。」

「おいおい、お連れさんはいいいのか？」

「ん、どらどら？」

「見たことが無いISだ。．．．どうした織斑一夏。」

「．．．そんな。」

「何だ？」

「．．．殺したはず。」

「どうした。」

「スコール・ミューゼル！あんのヤrrrrルオ！生きてやがったか。おい、アイツを倒せ！」

「アイツって、某国野郎の事か？いい考えあるか。」

「何か思いついたか？」

「私も聞きたい！」

「クソツ、チエーンガンを寄こせ！」

「．．．チエーンガンって何だ？」

「ミニガンだ！」

「ああ!? ミニガンなんかねえよ! ヌンチャクならあるけどな!」

「そいつを寄せ! 早く!」

「どうする気だ?」

「スコオオオオオルウウウウウ!!」

ブオンツ!

「ふふつ、無駄よ、更識楯無。あなたのISじゃ私を・・・ん?」

ガインツ! 【30000 / 35000】

「ぶっ!」

「えっ!? ちよ、ちよつと織斑君!」

「来やがれ! どうした? やれよ! 殺せ! どうした、こいよ! 俺はここだ! さあ殺せ! 殺せ、殺してみろ! どうした! ここだと言ってるだろうが! どうした! さあ殺せ! 殺してみろ!」

「チイ・・・! 織斑一夏・・・。」

「織斑君、生身じゃ無理よ! 逃げて!」

「もう遅いわよ!」

チウドオオオオオオオン!! 【29000 / 35000】

「うっ・・・!」

「おーい、友達が来たぜー。」

「か、簪ちゃん!?」

「更識さんだけではありませんわ!」

「ここまで来て俺は一匹狼だなんて言うなよ!」

「死ぬときや一緒、二度と言わせるな。」

「セシリア!俺の武器あるか?」

「魚雷!ドイツのアサルトライフル!マグナム44!なんでもありましてよ!」

「セシリアちゃん、何でそんなもの揃えてるのよ!」

「テメエをK O R O S U道具だ!」

「えっ!?!」

「冗お談だよオ!真に受けるな!」

「隙だらけね!織斑一夏!」

ズドオオオオオオオオオオン!!!【25000/35000】

「クツ・・・!?!」

「アタシ達がいるのを忘れてもらっちゃ困るのよねえ!」

「くつ、中国の候補生・・・生身の癖に調子に乗って・・・!」

バババババババババツ!【23000/35000】

「寝ボケた事を・・・私達を何だと思ってる。福祉団体じゃないぞ？ I S 学園の生徒でしかも、人殺しの道具を持ってる。 I S が相手となったら、生身で戦うのは当然だろ。」

「そっちは・・・まさか篠ノ之博士の・・・」

「お言葉を遮るようで申し訳ないけど・・・」

ガゴオンツッ！【17000 / 35000】 ↑魚雷投擲

「よし良いぞ簪！今だ！」

「爆破ですよお！」

チュドオオオオオオオオオオン!!!【7000 / 35000】

「クソオ・・・仕留め損なつた・・・」

「あの体・・・やっぱりサイボーグ・・・。」

「ターミネーターみてえだ。腕がなるよ。」

「簪ちゃん・・・ばらす気？」

「そうは行かない！」

バツ！

「簪ちゃん！」

ドオオオオオオオン！【45000 / 50000】

「クソつたれ・・・逃げられたか。会長、五分死ですか。」

「え、ええ・・・まあ・・・。」

「よし、パーティーは終わりだ、みんな家に帰れ。」

「おいおい待って待て」

「？」

「ここまで助けに来たんだ。何かあつても良いんじゃないかねえか？」

「・・・ラーメンでいいか？」

「飯がぐえりや文句はねえ。」

「晩飯が死ぬほど食いたかつたんだよお！もう半日もまともな飯食つてねえ、やつてられっかい！」

「おーい、友達が来たぜー。」

「何でえ、一の字・・・えらく花抱えてやがるな。」

「花？花なんか抱えてない。抱えてんのは腹だけだ。」

「こんだけいてそれつてのもどうなんだ・・・てもどうすんだ、こんなにいっぺんに屋台に入らねえぞ。」

「ああ・・・ちよつと待つてろ。」

「・・・ガゴオン・・・！」

ガシヤンツ！

「これで出来た。」

「一の字……これどっから持ってきたい？」

「後で返す。」

「ああ……そうかい。千の姉御の弟離れは遠いなあ……。」

「弟離れ……?ありえないね。家事の一つもこなせないんだ。誰が手綱を握つとくんだ?……姉貴頼めるか?」

「……ちよつと待つてろ、スープが沸いてる。」

「どうなんだ答えろ!」

「え!?ラーメン六つな!」

「無頼めえ……!クソオ、逃げたか!」

「アンタ、往生際が悪いわよ!大人しく答えなさいよ!」

「イエアアアアア! 麺どうだ!? 早いとこ湯切りしようぜ! 伸びちまう。」

「鈴、諦めろ。毎度のこつた。」

「ところでヌンチャクさんよ。ラーメンの食い方分かるか?」

「……私の事?」

「違つたか? 最新のチェーンガン、いや違う。弓だ、間違いない。……セイバーか?」

「私は刀奈よ! カ・タ・ナ!」

「Katana?」

「セシリアちゃん、発音良くしなくていいから。」

「あら、これは失礼。」

「はいよ! ラーメンお待ち!」

「はい、ナイフさんお箸。」

「刀奈よ。」

「マジで怒ってるな?」

「残念だが、刀とナイフとは大変良く似ている。」

「サイズが違うでしょ! サイズが!」

「サイズって、なんの事かしらあ・・・?」

「ちよ、鈴ちゃん、そっちじゃ・・・!」

ガインツ! [4900/5000]

「麺が伸びる・・・。」

「か、簀ちゃん・・・なんで私だけ・・・」

「一緒にいる時間の長さより中身の濃さだよなあ?」

「簀ちゃんに友達が出来たのはうれしいけど、なんだか複雑だわ・・・で、これどうやって食べるの?」

「これか？これはこうするんだ。」

ズズッ！ズゾゾゾゾゾゾゾゾッ！

「え、す、すするの？」

「私も、すするのは少々苦手ですわ……。」

「お嬢さん方、ラーメンってなあ、気取って食うもんじゃねえ。本能だ本能！思いつきり

音立てて食ってみなア！激ウマだでえ！」

「うつ……。」

ズッ、ズゾゾゾゾゾゾッ！

「あら、美味しいですわ！」

「うう……わ、私も……。」

ズゾゾゾゾゾゾゾゾッ！

「本当、美味しいわ！」

「気に入ってもらえたようで何よりだ。」

「……そういえば織斑君、後二人はどうしたの？」

「お使いを頼んでる。」

「お使い？」

「ス、スコール……。」

「オータム、がっかりした？」

「いや、体の事は分かった。」

「あら、そう。」

「敵は私が討つ。今度こそ……」

「邪魔するぜえ！」

「友達が来ましたよ？」

「お、お前ら、ドイツの軍人にデユノア社の娘……！どうしてここが!？」

「いやー、一夏が片腕だと可哀そうだから早いところ腕を取りに行かざるを得ないよう
にしてやれってえ……。」

「クソツ……スコール、逃げるぞ！織斑が来たらマズイ！」

「え、ええ……！」

「あの二人……ただの仲間かと思ってたが……もつと深い関係だな？」

「ラウラそれ、二人の前で言わなきゃ。」

「……手遅れ。」

第56話 修学旅行って何だ？

「ふう．．．あの子たちには困ったものねえ．．．」

「コキツコキツ」

「は、そうだ名案！ 思いついちゃった！」

「ヒッ！」

「もしもし織斑先生ですか？ 少しご相談したいことが．．．」

「ふう．．．ま、厄介な人たちはまとめて置く方が得策よね♪」

「あら、簪何でここに？」

「渦中の日本人を救いに来た。」

「そう．．．妙ね私もよ」

「ダブルブックキングと言う訳．．．」

「何してる？ 二人とも。さっさと教室に入れ。」

「と、言うわけでよろしくね一組の諸君。」

「山田君、例のもの．．．ゲフンゲフンツ。説明を。」

「はい。えーとですね、この度生徒会長が、一年生の専用気持ちはペテン師だ。泥棒、人

間のクズ、チンピラ、ゴロツキ、犯罪者だ！と、言うことで、全て一組に集めることになりました。」

「あんの野郎オ・・・」

「今度会ったら撃ち殺すぞ。」

「いい年こいてお姉さんぶってる連中がどういいう奴か、わかってるぞー！」

「今度絶対アイツの尻尾捕まえて酷い目に合わせてやる」

「ふむ・・・歴代最凶にして最大の問題クラスの誕生だな・・・どうしてくれるんだ？

楯無、この愚の骨頂としか言いようのない大問題を。」

「じゃっジャーソン！これがマドちゃんの機体だよー！聞いて気絶するんじゃないぞ？こ

れは手製のISだ！」

「あんたが作ったのか？」

「私が作るわけないだろ？ 広告読まないのか？ 毎日郵便物に部品が仕込まれてる！それを一つずつ貰って組んだのさ」

「ふざけやがってえ！」

「じよおだんだよお!？」

「今度ふざけた真似をすると、溶鉱炉で溶かすぞ。」

「いやーマドちゃんの愛情表現は過激だなあ。それより、これが！マドちゃんのISだ

よー！」

「初恋のネエちゃんに形がソックリだ。」

「名を『黒騎士』！それで最初のターゲットだけどね？」

「何だオ！」

「いっくんが良いと思うな♪」

「「駄目だア!!!」」

「………」

「えー、皆さん、これまで延期になっていた修学旅行ですが……待って織斑君、その口ケットランチャーを私に向けないで？」

「俺はお前に生き地獄を味わわせるために来た……。」

「マジで怒ってるな？」

「あの時俺たちがなんと言われたか……。」

「ア……何と言ったんだ？」

「『お前たちはペテン師だ。泥棒、人間のクズ、チンピラ、ゴロツキ、犯罪者だ!』」

「私そこまで言っていないわよ?!」

「山田先生めえ！クソオ！盛りやがったか！」

「ま、まあ落ち着いて。そう怒鳴られたんじゃビビって話もできやしないわ。」

「で、俺たちを呼び出した要件は何だ？」

「十八時間前我が学園のヘリが・・・ああ待って！帰らないで！・・・えー、様々な事情で延期になっていた修学旅行ですが、また何がしかの介入がないとも言いきれませんが、そこでこの場に、前もって君をお仲間ごと呼んでおいた。」

「前乗り視察つてわけか・・・なんでここに居る教員を使わず、俺たちを呼んだんです？」

「どこかのヴァカがお前が適任だと推薦したんだよ。」

「ほう・・・？更識イ・・・教員をヴァカ呼ばわりとはいい度胸だな？」

「ひ、ヒイイイイイイイ！！！」

「よおし、クソツたれども！ポーンナスが欲しけりや気を緩めるなよ？いいな？」

「俺たち専用機持ち全員送り込む気か？」

「ああそうだ！オルコツトと嵐、更識は織斑と。篠ノ之、デユノア、ボーデヴィヒは別行動だ。」

「どうにも、一夏に避けられてるって、気がするんだな。」

「き、気のせいだよ。」

「ふっふーん？だと良いが？」

「では、本来の目的を話します。」

「亡国企業の掃討作戦か？」

「ハメやがったな!? このクソツツタレ! 嘘つきみい! 修学旅行だの視察だの、あれは私たちを引つ張り出すための口実か!」

「なあ、儀式を遮るようでも申し訳ないけど、そっちのお二人何者だ?」

「今回の戦力よ。ダリルとフォルテ。」

「んまっ、俺のヘルハウンドも2、8になったしな?」

「私の最後の警告は無視された。亡国企業は命に替えてこの償いをしなければならぬ。諸君の手腕に未来を掛けた。多くのI Sが死ぬだろう。この無意味な死は、テロリストの無知に対する代償だ。もはや哀れみなど無い。もう彼らは逃げられないのだ。亡国企業が、この戦争の代償を払いきれないと真に気付くまで、我々が攻撃の手を緩める事は無い!」

「怖いわーテロリストよー。」

「・・・どっちがテロリストだって?」

「決まってるでしょ、アナタ。」

「私が何したってのよお」

「複数の殺人。」

「誘拐」

「強姦」

「恐喝」

「通貨法違反」

「それに、麻薬の密売だ。」

「・・・お姉ちゃん、最低」

「待って簪ちゃん！私そんなことしてないわよ?!」

「一番目は？」

「~~~~やりましたッ！」

「よく言つたあ！それでいい！」

「・・・もう、なんだか疲れるわ。兎に角、各自出撃に備えて解散！」

『まもなく、京都です。We'll soon make a brief stop

at Kyoto.』

「この間逃げられてからずっと復讐を思い続けてきた・・・。よやくその日がやつてきた。長かつたぜ。」

「笑つてる・・・人を殺す前だというのに・・・」

「お前ら気が早すぎるだろ・・・。」

「各自、状況に備えよ。解散！」

「おーい・・・。」

「今のところ証拠はまだ固まってません。」

「そそ、ふにやふにやでしてね。」

「更識、山田君……。確証を掴め!誰かが核弾頭を乗せた車で一夏の前に乗り出してから騒いでも遅いんだ!」

ズドオオオオオオオオオオン!

「あのYrrrrルオオ!先におっぱじめやがったな!!」

「お、織斑先生、これは!?!」

「急げよ、例のものも準備しろと伝えとけえ!」

「は、はい!」

「古都をランニングつてのも、良いもんだ。・・・ん?」

チユンツッ!パチツ [9998/9999]

「やってくれるよ!堂々と正面からか?ぬへへ」

「やつべえ、見つかった。」

「アンタ何考えてんだよ!せつかく誘い出した獲物を逃がしちまって!話してるのに目を逸らすな!アンタテロリストとして恥ずかしくないのか!」

「テロリストの典型だな!過激派もいい所だ!」

ドゴオン! [1800/2000]

「ぐえ!? アンタ、まさか・・・!?」

「我がテンペスタに抜かりはないんだナア!!」

「でえい! これが黙っていられるか! コルドブラッド!」

「おつとお、そつちが二機ならコツちも考えがあるのサ! アーリイテンペスト!」

「へつ、三体二つて訳か? それで互角にやれるつもりか? ばあさん。」

「婆あがその口潰してやるのサ。」

「フォルテ! あれをやるぞ!」

「成功するかはアンタ次第だ。オツケイ?」

「OK! アイス・イン・ザ・ファイア!」

「私のテンペスタはその程度突破するのサ!」

「残念でした、ハズレ」

ズドオオオオオオオオン!! 【34000 / 35000】

「ずらかるぞ!」

「イエツサ!」

「やれやれ、珠のお肌が焼けるじゃないのサ。ま、やることやったし、見物でもいくかな」

「お前・・・!」

「よう、相変わらず脳みそまで筋肉か? 織斑一夏。」

「うちの学園の生徒が二人そっちに寝返ったって聞いた。まさか違うよなあ？」

「生憎だが、本当だ。」

「そうか・・・残念だ。あんたは逃がしてやりたいが、生憎こつちも手札がいる。」

「ああ？」

ドベキシツ！「オフィ・・・」【1／3000】

「捕まえrrrrr口お」

「話しながら仕留めたのか。」

「毎度会ってそうそうさよならじゃ相手が気の毒だ。」

「・・・思いやりがあるなあ。」

第57話 何か匂うな？

「こいつは最高のイベントだぜ！逃す手はない。流石は亡国企業の実働隊だけあってクソ真面目によく働いてるよ。しかも待遇がイイと来た！叔母さんも贅沢過ぎじゃないのかあ？」

「ダリル・・・いやレイン。叔母さんはやめなさい、正体がバレるわ。」

「何か臭うな」

「金のニオイだよ金の」

「それにしてもオータムは遅いわね・・・織斑一夏くんを招待するよう言っておいたのに。」

「オータムは今朝捕縛された。・・・ブリュンヒルデの弟とやっちまって。」

「!？」

「一戦な。ドンパチ言わなかったから気づかなかったろ。」

「オータム、迎えに行くわ・・・！」

「よしなよお、相手は一組だけ？IS学園最凶最悪の。」

「クツ・・・。」

「あーらら、柄にもなく取り乱しちやつて、じゃ、私らも行くか、ベッドに。」

「後はアンタと二人でしつぽりか? 悪かねえぜ。」

「この女は何だ?」

「いやまあ、保険みたいなもんかな、邪魔が入った時だけ役に立つ」

「ただだど!?! このオータム様が! “だけ” だど!?!」

「違あう!」

「こつちだこつち。」

「NE☆KO☆DA」

「アタシの事そつちのけでシャイニイ見てるのサ? それよりこの子、いい匂いするのサ。

「これ何の匂い?」

「航空燃料。」

「航・空・燃・料。いいナ、好き。」

「アンタさ、それ以外に香水ないワケ?」

「鈴さん、航空燃料は香水ではありませんわ。」

「一人で(一夏を)抱え込むってんだ、この大馬鹿野郎!」

「ふふん、久しぶりサね、ブリュンヒルデ。腕はなまってるのサ?」

「試してみるか、ハツハツハ」

「いや結構。遠慮させてもらうのサ。」

「そいつあ残念。」

「どんな匂いがした？」

「バラのようないい香りだ。」

「バラの匂いに酔ってる場合じゃないってんだスケベ！」

「今は、抜けたフォルテとダリルに注意を割かなければ。」

「あの一、自己紹介から良いのサ？」

「駄目だ」

「いらん」

「後にしろ。」

「だと思つたのサ。」

「ならいい。」

「で、ナニモンなんだ？」

「アリーシャ、テンペスタのアーリイと言えばわかるのサ？」

「サイボーグみてえだな、腕がたつよお。」

「サイボーグなのサ。」

「マジかよ〜」

「おい、いい加減このオータム様を開放しやがれ！」

「ア、ア？」

「ごめんなさい！」

「さて、こちらの戦力はマイナス二、あっちもコレが抜け、マイナス一とは言え、あちらはプラス二でこちらはプラス一だ。」

「だが、あっちの二はこっちの一だ。違うか？」

「いやあ、その通り。」

「ともかく、やれればなしじや私の名前に関わる。こちらから仕掛けるわ！」

「敵の潜伏先は、市内のホテルか、あるいは空港の倉庫ね。」

「じゃ、アーリイは篠ノ之、凰、オルコットを連れてホテルへ行け。織斑はデュノア、ボーデヴィヒ、更識妹は倉庫へ行つて私の自称妹をつかまエロオ。」

「お任せを！」

「我々は本部で待機だ。何かあれば連絡しろ。」

「了解！」

「ふう、さっぱりした。叔母さんもおです？カリカリしたって仕方ねえよ。」

「年上に対する口の利き方を教えてやったほうがよさそうだ。」

「おい、怒ることあ無いだろ？なあフォルテ。」

「ちよ!？」

「うあつ・・・!」

「駄目です! テッターイ!

「ちつくしよもう!」

「私たちは(空) 港湾労働者組合のもんだ。」

「ここに亡国企業が潜んでるって聞いた。まさかちがうよなあ?」

「そのまさかだ!」

「サイレントゼフィルスウ!ぬおおおおお!!!」

「そうそう何度も簡単に!」

ガゴオン!!【38000 / 40000】

「ぐうつ・・・」

「一夏!加勢するぞ!」

「・・・ん?」

ズシツ!

「うわ・・・!?!」

【15000 / 20000】
【14000 / 18000】

「にやーん！黒騎士のお披露目は邪魔させないのさ！」

「これは・・・重力でしょうか？」

「ンよくご存じねえ、正確にはキングス・フィールドだよ。出力高めは好き？」

「ええ、ゾツコンですよ」

「もつと強くていい。」

「トレーニングに丁度良いぜ。」

「あ、アレ・・・？」

「束え！」

「やあ！やつと来たね！ちーちゃ・・・」

「フンツ！フンツ！フンツ！ヌオオオオオオオ！！」

ドカッ！ベキッ！バゴッ！ガゴオオオオオオオン！！

「うあああ・・・!!!」

「小娘め！クソオ・・・逃げたか！」

「フンツ！」

ズガアアアアアンツ！

【30000 / 40000】 ↑零落白夜

「ええい！この燃費どうにかならんのか！」

「無理無理無駄なこったよ。」

「くそつたれい！」

ブオンツ！スカ！

「見せてやる、私の新しい力を！」

「セカンドシフトか！」

「これで・・・この力でお前を倒す！行くぞ、黒騎士！」

「でえい！邪魔だクソつたれ！」

ガインツ！

「な、ISを蹴り飛ばし・・・」

ガコオオオオオンツ！！【40000／43000】

「うわ！」

ボフツ！モワンツ

「ヘロインのにおいがするな？」

「随分粒が細かいぜこりや。」

「ぶっ飛ばべ！」

チュドオオオオオオン！！【10000／43000】 ↑粉塵爆発

【8999／9999】

「チクシヨウ痛かった！」

「生きてるだけでラッキーだよ！」

「ああ、爆発が上手くいったのもな。」

「エム！ずらかるぞ！」

「スコールミューゼル！チクシヨオしくじったのか！」

「織斑一夏・・・もう二度と会うのは御免だ。」

ドシューッ！

「逃げたか・・・だが、二度と会わないって訳に行かないんだろ？」

「ね、ねえ・・・一夏あれ・・・。」

キーン・・・【999999／999999】

「ISが動いてる・・・人が乗っていないというのに・・・。」

第58話 おおい、怒るこたねえだろ!?

「Z z z . . .」

「いびきをかき続けたら撃ち殺してやる . . .」

「Z z z . . .」

「山田先生!」

「ねえ!ターミネーター4のサイボーグがいた!」

「起きねえとぶつ殺すぞお!!」

「あ、ゴメンネエ」

「さて、山田先生。一つ派手にやってくれ、学生時代にキリングシールドを名乗った時のように。」

「あ、あはは . . . 私は忘れたい。」

「結構、では行きましょう。」

「く . . . なんて無人の白式が白騎士に . . . ?!」

「一夏! I Sでもどうにもならないわよ!?!」

「だったら殴ればいいだろ!」

「そんなぁ・・・」

「大体お前は・・・(ISが)チームメイトになろうとしたのに、友達になろうと言ったのにアンタはよおろ、聞く耳も持たなかっただろうが！」

「そんなセリフあつたか!?!」

「残念だが、ない。」

「クソオオオオオオ!だましやがつたなぁ!?!」

「おおい、冗お談だよお!?!怒ることあねえだろ!?!」

「みんな、お待たせ!」

「山田真耶、行きます!」

「F o o ! ええぞお! あんた気前良いじゃねえか! こんな時こそISを使わねえとな
!」

「ヤツチマエ」

「お任せを! シャッタードスカイ!!」

「よおし、派手な葬式といこうか。」

「え、ちょ織斑君!?!」

「くたばりやがれえ!!!」

ガゴオオオオン!!! 【0 / 99999】 ↑落ちてた雪片弐型

「あんたさ、偶には人に手柄を譲ろうと思わないワケ？」

「同じ状況ならお前もそうする。」

「いやあその通り。それが悪いのか？」

「皆さん・・・酷いです・・・。」

「俺が悪かったよ、熱い場面について我を忘れちまって・・・。」

「お帰りなのサ。」

「アンタ何考えてんだよ。せつかくのホシを逃がしちまって。」

「・・・これよりイタリア代表アリーシャジョセスターフは、亡国企業に下るのサ。」

「え？」

「畜生！マジカー、誰もこんなこと言っただけ、驚きだ！」

「驚いているようには見えないナ」

「ブリュンヒルデと戦いたければ直接言えば良いだろ。」

「私はあくまでISで戦いたいのサ。その舞台を用意するのが亡国企業なのサ。」

「・・・ガンバッター。」

「逃がして良かったの？」

「・・・俺たちは知らぬ存ぜぬで通すんだ。」

「私たちはまともなことをやってないって、気がするんだな。」

「気のせいだよ。」

「千冬姉、酒まだあるか？」

「ちよ、ちよつと織斑君!?!なにしれつと入って来てるんですか!?!」

「何だー一夏、お前にはまだ飲ませんぞー。」

「ただの補給だ。・・・大分酔ってるな？」

「おおともよ、それがどうした？」

「いや、あとの連中が気の毒だ・・・。」

「?・・・一夏、本当に酒を注ぎに来ただけかあー?」

「アリーシャが逃げた。」

「KOROSE☆」

「俺に仁義を破れというのか・・・?出来ねえ相談だ。」

「だろうな・・・だが最後、やらなければならぬことは分かっているな？」

「・・・追いかけて見つけ出して殺す」

ガラッ!

「たくもー一夏つたらどこに行ったのよ!」

「や、お嬢さん方ご機嫌いかがですう?」

「ご機嫌さ、目の前の目障りな筋肉バカが消えつちまえばな。」

「随分冷てえじやねえか。」

「一夏、今夜暇かい?」

「糞して寝な。」

「あ、どーも。最近の一夏キツイや。」

「つて、あ!千冬さん酔ってる!」

「おおいおおい・・・勘弁してくれえ!」

「酒に酔ってる場合じゃねえってんだこの元代表!」

「それじゃお嬢さん方、ごゆつくり?」

「待って、生まれ!ウワアアアアアアアアア!!」

「にやつはつはつはつは!」

「あー二日酔いだ。」

「飲みすぎだ。」

「飲ませたのは誰だ?」

「何でしょー聞こえませんよー?」

「」

「一夏、私達あの後ひどい目にあつたんだからね?」

「出来立ての小籠包・・・やるYO」

「いやった！」

「意地汚い雌猫が！」

「それより皆さん、好きなお弁当は買えましたかー？」

「スタミナ丼！」

「すっぽん定食！」

「プロテイン弁当!!」

「この筋肉にだらしのない、ヴァカどもが！」

「いやあその通り、それが何か悪いのか？」

「束様、紅茶が入りましたよ。」

「やったあ！クーちゃんの紅茶だあ！」

「お茶請けはいかががしましたよう？」

「リガトーニが食えりや文句はねえ。」

「分かりました。」

「あ、ねークーちゃん。すこーりゆんが持ってきた生チョコ八つ橋はー？」

「あれは毒物反応があつたので処分しました。」

「そつかあ、河豚毒だつたら舐めてあげても良かったんだけどなー。」

「……ご機嫌ですね？」

「んんんん? 白式というオンボロが悉く私の予想を裏切っていくのに困惑せざるを得ないにやー」

「困惑? しているようには見えませんが。．．．そういえばどうして東様はISをお作りになったんですか?」

「私に目標なんかない! 女の子を羽ばたかせたいだけなんだ!」

「それから?」

「んん、アメリカ、もらっちゃおうかな♪」

「やつほー、おりむーお帰りなのだー」

「あ、あの、織斑君、向こうで弾君に会いませんでしたか?」

「俺は忙しかったから会ってません。セシリアとラウラが会いました。しばし遅れを取りましたが、今や巻き返しの時です!」

Pii!

『おー、一夏か! お前の友達のおかげで虚さんにプレゼントが買えそうだよ、随分弾んでくれて、何だよまるで大統領だな。』

「ちよつと弾君! 私の誕生日プレゼントなら無理しなくていいって言ったのに!」

『え、虚さん!?! ちよ、一夏おま．．．』

「ごゆつくりどうぞ?」

「そいつは残念。」

「・・・織斑千冬には気を付けなさい、倉持技研にも。」

「それ脅してんの？」

「さてどうかしら？」

「・・・」

「織斑一夏君、必ず戻ってくるわ。」

「スクールミューゼル、楽しみに待ってるぜ。」

第59話 彼女に演技させる方が楽だもんな。違うか？

「ババーン、おりむーの隣の席争奪！ババ抜き大会〜！」

「私帰るね、マツチヨの遊びには付き合えないや。」

「（織斑君の隣は）破壊的だつて、評判悪かったぞ。」

「あれは酷いのなんのつて、ベトナムが天国に思える。」

「よーし、何人かライバルが減ったぞ〜。」

「一夏の隣は私が・・・！ち、ババだ。」

「生まれの違いを、教えて差し上げますわ！あ、ババ・・・」

「ふん、アンタらの実力なんざそんなもんだあ！ババア!!」

「もーみんな猜疑心の強いんだからあ、あつらー？ババだあ。」

「私は直感を信じる！・・・おいおいおい、ふざけんなこんなのアリかよマジで契約違反だ。顔面にバツテンつけて頼んだのにこんな札よこしやがつて！ペパロニのピッツァ頼んだら台湾ソーセージのつけてきたようなモンさ！サギだよサギ！」

「ホンつとドイツ人は怒りっぼいんだから〜w・・・ババ・・・。」

「おく私上がり〜。よーわっ」

「十年前だったら素手でぶっ殺してたぜ!!!」

「ぶっ殺してやる!」

「やく。まだ死にたくないよお!」

「小娘めえ!逃げたぞ!」

「追いかけて見つけ出して殺せい!」

「これで人数分・・・」

パサッ

「おっと・・・集合写真か・・・。ダリル、フォルテ・・・いい兵士だった・・・。」

「のんびりやるさ、古都の中でな。」

「いつてらっしやい、織斑君。お土産はよろしくお願いしますね。」

「お任せを!」

「えへへくおりむくの隣の席く。私愛されてるっ」

「寝言言ってるんじやねえよ。」

「本番は京都だ!」

「ああそうだ!」

「行こうぜ!」

「おりむく駅弁何買う?」

「スタミナ丼！」

「一夏、ソレはこの間も食べただろ。今日はこらえろ。」

「お〜い勘弁してくれえ。」

「お〜富山のますのすしだ〜。西欧テクノロジーの結晶、200ドルもする。」

「富山じゃなかったのか!?!」

「ジョークが好きなんです、気にしないでください。」

「あー、布仏さんいいな〜。」

「っていうか、くっ付きすぎじゃない?」

「まあ、本音だし。」

「・・・おおい、(あんなのの隣が良いなんて) よしてくれえ。」

「よお〜しくそつたれども、新幹線が来たぞ、乗り遅れたくなかったら、気を抜くな。い

いな?」

「へいへーい、IS学園だ、悪かねえぜ。」

「織斑一夏君は!?!織斑君を出せい!」

「アンタもミーハーよねえ。」

「モオチロンです。(野次馬) プウロですからあ?」

「お〜おりむ〜人気者〜。」

「ほっときや良いき、野次馬なんぞクソツッ食らえだ。」

「よし、全員乗ったな。」

「OK！」

「まつすのすし、まつすのすし♪」

「あん？何だそりや。」

「なんだそりやつて・・・分かつてんだろ・・・。竹とゴムで押さえつけて鮮度を保つて
るんだよ〜」

「へえ・・・」

「おりむ〜外していいよ〜。」

「そんじゃ、お言葉に甘えて。」

バシツ 【9999／9999】 ↑No Damage！

「ヤロオオオオ!!!」

「わあ待って！止まれえ！おりむ〜、食べ物を粗末にしちや駄目だよ〜。」

「随分と楽しそうじゃねえかあ。」

「ひよこ・・・ひよこ・・・」

「ラウラ、どうしたの？」

「金とヤクに、未練たつぷりだ。」

「ラウラ、ひよこどこでも売ってるから……。」

「はく新幹線楽しかったねえ。」

「そうかあ?」

「織斑くん!写真撮って、写真!」

「任せとけえ!」

パシヤッ

「写真が出来たら送ってあげるねえ!」

「いらねえ!写真は嫌いだ。」

「そんなこと言ってたか!」

「さー、次は京都観光DA!」

「お前は、もう一働きだ。お前は撮影の天才だ。IS学園記念撮影の歴史を根底から覆してしまった。アカデミーで汗を流して学んだテロリストの心理、写真現象に光度分析、張り込みに人質解放交渉のテクニク、犯罪心理学、あれは一体何なんだ?観光気分ドライブして、『ああこの家がそうだ、ここが悪党の隠れ家だ』って指差して済むと思ってるのか?!」

「最初は清水寺でいいかい?」

「……行ってこい。」

「おりむく飛ばう。」

「よし来た任せとけ。」

ガシッ

「え？」

ドンッ！【0／300】↑アスファルト

「地面が無くなっちゃったわ。」

ペシペシッ【200／300】

「これで出来た。」

「アイツ、ナニモンなんです？」

「のほほんさんずるい！」

「未だにこんなこと言う奴がいるとはなあ……。」

「私たちも飛ばぞ！」

「皆さん、座れ。そのISも閉じてろ。どうしても行くというなら、私を倒していつてく
ださい☆」

「OK！」

ドベキシッ！「オフィ……」【1／300】

「まあ、行かないけどね。」

「おい山田君。立って歩け。」

「腰にロープでも繋いどくんだなダンナ」

「なるっほど、ソイツあ良い。」

「・・・」

「わ、わあゝ一瞬だあゝ。」

「そりや当然。」

「清水寺きれいだねゝ」

「それがおかしいんです少佐、どう見ても人っ子一人いないんですよ。」

「ちよつと、あなた達、どこから入ってきたの?!今は映画の・・・てアナタは織斑一夏!!」

「先に行かせてもらおうぜ友達い!!!」

「急?おりむゝ!?!」

「逃がすなあ!捕まえrrrrrrrr」

「え?・・・ええ!?!織斑一夏だ!」

「すっげえ筋肉、今も鍛えてんの?」

「もおち論ですう。プロですからあ?」

「捕まえた。」

「いつけね、やつちまった。」

「よおしくし、間抜けども、ボーナスが欲しけりや気を緩めるなよ、いいな？」

「了解！！」

「よし、織斑君！主役は君だ！ヒロインは・・・君に決めた。」

「セリフはどうしようかしら・・・そのままでも良いけど・・・。」

「動くな！大人しく銃を捨てないと脳みそを周りに撒き散らしてやるわよお？」

「それだ！」

「大丈夫かあ？この映画。」

「それより二人ともお着換えね。」

「断る！俺は（ロケバスから）降りるぞ。」

「織斑君、サイン頂戴！」

「I Sだ！I Sを出せ！」

「写真撮らせて！」

「又オオオオオ！全員纏めてかかってこんかい！」

「「きやあああああ！！」」

「さあ嫁をくれ！なあいい子だ、お前だつて死にたくはないだろう！」

「あの人はとどまることを知らない：私帰るよ。マツチヨの遊びには付き合えないや」

「と、飛びおりた!？」

「残念でしたハズレ。」

「な・・・!? 逃げる気か!？」

「それが何だつてんだ! 誰が何しようが俺には関係ない! デカイ声を出すな! 耳があるんだ! 台本どおりにただ喚き散らしやがって、それしかできんのかこの大根野郎! 俺を何だと思ってる! ヒーローだ主役だ! 俺に怒鳴るな!」

ギユウウウウウウン・・・

「くそお・・・逃げられた・・・!」

「カアーーーーーッ! お疲れ様でしたー!」

「スカツとするほどキレイに演じた上に、俺たちが一個のミスもしてないことは皆が見てた。上手いやり口だ、俺から学んだのかな? フッフッフ・・・」

「あれ、二人は・・・?」

「クソオオオオオオ! 逃げたか!」

「やってくれるよぬへへ!!!」

第60話 何をするう!何故撃った!

「どこ行つてた、フランスまでか?」

「それが何だつてんだ!俺が何しようがお前には関係ない!デカイ声を出すな!耳があるんだ!テンプレどおりにただ喚き散らしやがつて、それしかできんのかこの大根野郎!俺を何だと思つてる!ヒーローだ主役だ!俺に怒鳴るな!」

「もうお夕食も終わつてしましましたわよ。」

「お前がブツ壊したアスファルトの件で、市議会に嘯み付かれっぱなしだぞ!お前が駅前でやらかしたスタンドプレーのお陰で先生には意地悪されるし、一体何を企んで何をやってるのか隠さずに報告しろ! わかつたか!わかつたら言つてみるオ!」

「適当にあしらつときゃいいさ、役人なんぞクソツくらえだ。」

「お前もドジだなあ、飯を食い損ねるなんてよ。お気の毒?」

「子羊の煮込みが死ぬほど食いたかつたんだよ!もう半日もまともな飯食つてなかつた!やつてられつつか!」

「食つてきたのか。」

「いやあその通り、それが何か悪いのか?」

「じゃ結構、好きな時に帰るがいいさ。男ってこれだもんな・・・。」

「おーい、どうしたんだ？」

「いや・・・真耶のIS輸送、ご苦労だった。」

「もおちろんです。プロですからあ？」

「良かったのか？極秘部隊とは言えその隊長が勝手に抜け出して。」

「アンタの為なら文句も言わずに我慢するけどさあ、いくらキツくても身になるからなあ。」

「冗談はよしてくれ・・・。」

「いや、冗談ではない。」

「だったら、バラの匂いに酔ってる。ロマンが分かる。」

「分かりました。・・・ありがとう千冬。」

「それはこちらのセリフだが・・・。にしても随分冷てえじゃねえか。夜は冷えるなあええ？」

「ワル同士が手を組む分には大歓迎だ。ね、*“元”*イタリア代表アリーシャジョセスターフ。」

「あ、どーも。」

「言つとくが私は、人とは組まないのサ。対織斑千冬以外はパスさせてもらうのサ。」

「何だこのクソアマ!」

「クソアマって誰? 私的事サ?」

「ほかにいるか?」

「ぶっ殺してやる!」

「おおい、落ち着けえ。オータム、私はそれを織り込み済みで誘ったのよ。2〜3人ひっかけて掛け持ちさww」

「!?!」

「んんっ・・・兎に角、次の作戦は、オペレーション・エクスカリバー。覚えとくんだな!」

「Ring Gong・・・Ring Gong・・・I will tessyu♪」

「デイジー、ねえデイジー・・・教えてほしいの。」

「うるさいなあ! いちいち質問ばかりしやがってトークショーの司会のつもりか? 黙つてろ。・・・モード、エクスカリバー起動・・・。」

「いたぞ! 見つけたあ!」

「フォルテつす、いたぞお、いたぞおおおおおお!!」

「これは・・・」

「バッテリー切れですう・・・」

「いえーい!!!」

POON! POON!!

「何だこれは!?!」

「もう十二月だよ? クリスマスが来るから、席を空けないと。」

「イブになつてからでいいだろ!」

「アンタさ、他に言うことないわけ?」

「クリスマスの準備も、生徒会の仕事だよ。」

「何でクリスマスの準備が生徒会なんだ? 各生徒でやればすつきりするのにな。」

「もくおりむーたら古いんだあ。兎に角、一緒に買い出しに行くのだよ」

「ねえ本音、一緒に連れてってくれ」

「OK!」

「いよつしやあ! それじゃ、日曜日に。」

「了解。」

「生徒会で出かけるのも久しぶりだな。」

「久しぶりい? 初めてじゃねえか?」

「き、気のせいだよ。」

「ふっふくん? だと良いが? ところでおりむ、服は洗濯中か? それで着るものがな

い。」

「着るものがない、そうだな。」

「制服? フツ、裸よりひでえぜ。目立ってしょうがねえや。」

「ああ、もうサインを数枚に、写真を数十枚盗られた。」

「おりむく、お前さん目立ちすぎだ、服屋に行こう、な?」

「オツケイ! 二人に連絡してくれ。」

「よし来た任せてくれ。」

「おく二人ともく、今おりむく着替え中く。」

「間に合った……。」

「(遅れてたら) 間違いなく死ぬな……。」

ガチャツ、キュツ、ガシヤン……デエエエエン!
【500000/50000】

「待たせたな。」

「織斑君、それ野戦服……。」

「一夏……余計目立つ?」

「えく? そうかなあ?」

「そんなことないだろ? ほら本音、服のお礼だ。」

「やったく」

「あー、本音!ずるい!」

「私も・・・欲しい・・・『インディゴ・フリート』のBDBOXで、良い・・・。」
「会長にはこれをやる。」

ポイツ

「わ、ありがt・・・重ツ!?ナニコレ?!」

「西欧テクノロジーの結晶、200kgのダンベル、2000ドルもする。YARUYO
☆」

「あ・・・ありがとう・・・」

「お姉ちゃん・・・ドンマイ。」

「簪はコレだ。」

「この中に、エロ動画入れて持つてるんじゃないの?」

「救いようのない女だな・・・。」

「お姉ちゃん、最低。」

「酷い!私は変態じゃない!簪ちゃんを守ろうとただけなんだ!」

「・・・からかうのはこのくらいにしとこう。」

「で、これ・・・何?」

「コマンドー、吹き替えの帝王、完☆全☆版!!!よく見て勉強しとくだなダンナあ」

「……ありがとう／＼／＼」

「それでも嬉しいのね……簪ちゃん……」

「見ろお! バーガー屋だ! 牛肉の塊が死ぬほど食いたかったんだよ!」

「大好きな具はアザラシの子供、クジラのケツ、夏が旬だ。だが今食いたいのは……チャイニーズだ。」

「……飢え死にするしかない……」

「そういえば、たつちゃんはさく、昔オーダーは取りに来るとおもって聞く耳持たなかつたじゃねえか!」

「やだ! またその話!?!」

「さすがはお嬢さんだな、全くお笑いだ。」

「うるせえ黙れい!」

「それによお、コイツ、ハンバーガーを硬いナイフとフォークで食おうとしやがった。」

「それはいけねえ、バーガーてのは、一口で! 飲み込むもんだ!」

「スペシャルバーガーお待たせしましたあ!」

「口開けるお! 開けやがれこのお! バーガーねじ込んでやるんでえ! 食い方が分かるよ
うになあ!」

「……あ」

「かんちゃん、無理に一口で食べなくていいんだよ。冗談が好きなんです。」
「・・・そう。」

「二人とも助けてよ！」

「え〜？ いや〜イチャイチャしてるから〜」

「お前さん病気だ、医者に行こう、な？」

「コロすぞ。」

「冗お談だよお!？」

「飯食ってる時ぐらい静かにできんのか!？」

「「アンタが言うか!？」」

第61話 見たら絶対その気になるって

—ハンバーガー屋の外にて—

「向こうにIS学園の制服を着た大男がいるんだけど、彼、一般人じゃないわ。」

「ビックス、いるの？ビックス。頭のいかれた大男がいる。一人では手に負えん。」

「!!すぐ行くわ。・・・かつこいいとこ見ましよう!」

「ウフフツ!!」↑ヤバ目のヤツ

「全女性客へ。3階で非常事態よ。敵機来襲、大型機だ。髪は茶、筋肉モリモリマツ
チヨマンの変態よ!」

「女を引つ掛けるにはいい場所だな。かすがゴロゴロして・・・もう一人増えたぜ。
じゃあ、行くか。」

「ここで何をしてる?」

「友人を待つてる。」

「一緒に生きましょ!・・・えいつ!うわっ!」

「こいつつ!きやあつ!」

「何の騒ぎかしら?・・・あれ!?一夏くん!」

「俺はここにいます。」

「……あれは……誰？」

「篠ノ之さん辺りかしら？」

「俺の知り合いになまぐらはいない。ハーレムでも作りたいペテン師が、俺の格好をしてウロついてんだろ。」

「ああ、道理で……。」

「圧死しそうなのだ。」

「裏切りに陰謀、セックスに決闘、錯乱に幽霊、そして最後には皆が死に果てる。」

「フッフウーン、だと良いけど？」

ぴんPON☆ばんPON☆

『間もなく屋外展示場でヒーローショー〈アイアンガイ〉を開始します。』

「一夏、行こう!……OK?」

「簪ちゃん!?もしかしなくても最初からこれが目的だったのね!嘘つき!買い物だの食事会だの、あれは私たちを引っ張り出すための口実だったの?!?」

「いやあ、その通り。それが悪いのか？」

「まさか一夏君、グルなの?!」

「いやあ、その通り。それが悪いのか？」

「ハッ！まさか本音ちゃんも？」

「これは最高のイベントなのだ！見逃す手はないよ。今から行って、いい席をとるのだ！」

—アクションガイ、会場にて—

「みんなー元気かな？」

「「はい！」」

「それじゃあ呼んでみよう！アイアンガイ！」

「「アイアンガイ！」」

「ちびっ子のみんな！待たせたなあ！俺がアイアンガイだ！」

「操り人形だよ！」

「早速、敵さんのお出ましか。全く、ヒーローには休日がない。お前曆は持ってねえのか？ユダヤ教の休日だ。」

「ガツハツハツ！アイアンガイ！君の今のような反応が命取りになる！」

「そんな・・・マスターX！殺されたんじゃ・・・。」

「残念だったなあ・・・トリックだよ。てめえに舞台を追い出されてからずっと復讐を想い続けてきた。よおやくその日がやって来た・・・。長かったぜ！」

「来やがれ！どうした？やれよ！殺せ！どうした、こいよ！俺はここだ！さあ殺せ！」

殺せ、殺してみろ！どうした！ここだと言ってるだろうが！どうした！さあ殺せ！殺してみろ！」

「フハハハハハッ！これを見ても、それが言えるか？」

「おのれマスターX！卑怯だぞ！」

「「ブー！ブー！」」

「静まれ静聞れえい！この紋所が——」

「おい！」

「ん、ゲフンゲフン！俺は悪の幹部だ！アイアンガイ、お前自分のあだ名知ってるか？
ついこの間までは鉄のアゴだったが、今じゃ鋼鉄マンだつてよ。あっちの方も鋼鉄並か？」

バキツ【190／200】↑アイアンガイ

「グアア！」

「アイアンガイ、腕はどんなだ？」

「こつちへ来て確かめろ。」

「いや結構。遠慮さしてもらうぜ。……アイアンガイ、顔出してみろ。一発で、眉間をぶち抜いてやる。古い付き合いだ、苦しませたかねえ」

「マスターX、その子達は関係ない、放してやれ！目的は俺だろう！」

「へへへへへへへへ．．．．．！」

「右腕をやられた、お前でも勝てる。．．．来いよマスターX。銃なんか捨てて、かかってこい！楽に殺しちゃつまらんだろう。ナイフを突き立て、俺が苦しみもがいて、死んでいく様を見るのが望みだったんだろう。そうじゃないのかマスターX。」

「てめえを殺してやる！」

「さあ、子供達を放せ、一対一だ。楽しみをふいにしたくはないだろう。．．．．．来いよマスターX。怖いのか？」

「ぶっ殺してやる！」

「いやあつ！」

「ガキなんて必要ねえ！へへへへつ」

「キヤー！」

「ガキどもにはもう用はねえ！へへへへつ．．．ハジキも必要ねえや、へへへへつ．．．誰がてめえなんか、てめえなんか怖かねえ！．．．野郎、ぶっ殺してやあある!!!」

「みんなー！ヒーローに力をあげて！大きな声で呼んでみましょう！せーの！」

「コマンドー！」

「／デエエエエエエエエン!!!／

「本音！ハメヤがったな!!このクソツタレ！嘘つきみい！ヒーローだ主役だの人質だ

の、あれは俺を引つ張り出すための口実か!?

「そうなのだー!」

「あれは……織斑一夏!」

「嘘!それならそっちの方が良いわ!」

「断る。」

「ルール1、契約厳守、か。」

「……何だこいつ。どういうこと?」

「さあ……。」

「さて、みんなで呼びましょう!織斑一夏!」

「やるならギヤラ上乘せ。」

「危険手当ってヤツだな。」

「さあ、もう一度!織斑一夏!」

「イピカイエーか……。」

「もう一度!織斑一夏!」

「俺は知らねえぞ……今行くよ!」

チルドオオオオオオオンツ!【0/1000】↑建物

—12月4日、夜—

「ふーっ……。いい湯ですわ。」

「バババントツ！」

「!? ……誰も居ませんわ？」

ガツシャン！ 【188/200】

「待つてろケモノ、今行くからなあ！逃げるんじやねえ！サシで勝負だ！チキシヨウ、待てエ今すぐ行く！勝負するんだ、逃げるんじやねえぞ、サシの勝負だ！待ちやがれエ！」

「一夏さん？」

「セシリアか！良いところにいる！シャニーが行った！」

「お任せを！」

ガシツ！

「ニヤア？」

ザブーンツ！

「ギニヤアアアアアアアアアツ!!!」

「いやあ、助かった。」

「後でお連れしますわ！」

——時間後——

「フミヤア・・・。」

「この茹でダコは何だ？」

「知らない方が良いでしょう。」

「」

「ところで一夏さん。お暇でしたらここでも如何です？」

「いいね、行くとしよう。」

—週末—

「セシリアのヤツ、遅いな。」

「お待たせしましたわ！」

「なあ、友情を邪魔したくはないが、20分遅れてる。」

「道が混んでいましたよ。」

「フツフウン？だどいいがあ？」

—その背後から—

「見た目はオトコ、心も漢！これが、ザ・名探偵（シャルロック・ホームズ）の真髄だ！！三輪車に轢かれても、チェアーから落ちてもビクともしねえ！PON☆骨ラフアール乗りはお子様設計！！愛する友を救うため、一人、敵のアジトに忍び込む。その賢さ、もとうどうにも止まらない！全員まとめてかかってこんかい！！これぞ豪快スーパークイズア

クシヨン!!」

「名探偵しやーろて．．．しやるるく．．．あれ？」

「シャルロック・ホームズだよ。」

「名探偵シャルロック・ホームズ．．．あなたは、一体何だ？」

「アナタハイツタイ．．．ナンダ．．．？探偵さ．．．じゃないよ！つて言うか、
なんで僕たちこんなことしてるの？」

「トレーニングだ。」

「トレーニング？どこが？」

「この人混みの中から大佐を見失わず、見つからないように尾行するトレーニングだ

！」

「」

「さあ、行こう。つまらん茶番のために見失った。後は更識姉がどこまで行けるか、
だが。」

「そ、ソウデスカー．．．」

第62話 特攻野郎？

「おいおいおいおい、どこ行く気だあ？」

「いい天気なので、密売人を殺しに。」

「そいつはいい。」

「冗談言ったのに・・・」

「ふざけやがってえ!!!」

「あ、あら、このドッグパークというのは、楽しそうですね。」

「犬みたいによだれ垂らしてすり寄って来るんだぜ、たまんねえよw」

「」

「忘れてくれ・・・。」

「では、行きましょう！」

「OK!・・・ん？」

『ふもっふ!』

「あら、マスコットのドボン太くんですわ。」

「シヨットガンをバッグから出しなよ。」

ガチャン! \ デエエエエエエン!! / 【50000 / 50000】

ガシャツ! 『ふもつもふもつもふもつ!』 【10580 / 10580】

ガチャツドン! ガチャツドン! 【38000 / 50000】

チユドオオオオオオオオン!! 【580 / 10580】

「良い腕だ、みんな急所だ。」

『ふもつ．．．ふもつふ．．．(先制できなければ危なかつた．．．)』

「謙遜しすぎだ、お前はもつと大物になれる。こんなところで燻ってちやだめだ。」

「ふもつ!」

ガシイ!

「よしセシリア、行こう．．．どうした?」

「いえ、向こうで似たようなのが転がっている気がして．．．。」

「ふも．．．(気のせいだよ)」

「ふつふーん?だと良いが?」

「ワンちゃんたら。んう可愛いんだからあゝ」

「どうかしてる．．．。」

「グルルルルルルッ．．．」

「よーし良い子だ。こつち来いって大丈夫。どうした、怖いのか?」

「ガウツアウツ!!」

「又オオオオオオオオオ!!!」

「キュウンキュウン・・・」

「一夏さん、それ虐めてませんか? ほら、こつちにいらつしやいな。」

「ハツ、ハツ、クウンクウン」

「俺も久々頑張ったのに、なんだよいい役持っていきやがって!」

「妬いてやんの!」

「クソツたれが・・・自分がどんなに孤独か分かったよ・・・」

「犬でもお飼いになつたら?」

「くそつ、ふぎけやがって・・・」

「飯食おう。腹減って仕方がねえ。」

「そうしましょう。」

「ほら」

「これは何です?」

「昼飯だ、野菜も食えよ。」

「・・・プロテインの匂いがするな?」

「警戒しすぎだ。仔牛の煮込みが死ぬほど食いたかつたんだよ!」

「で、では半分ずついただきましょう。」

「ええぞお! あんた頭良いじゃねえか! こんな時こそ頭を使わねえとな!」

(半分つて言わないと何されるか分からない……)

「やお二人さん! 今日にはホラーアトラクションが男女二人組ならなんと無料! 見逃す手はない。というわけでこちらのチケットをどうぞ。」

「楯無、青筋立ってるぞ、大丈夫か?」

「ええお氣遣いありがと……彘?」

ドベキシツ! 「オフィツ」【1/5000】

「さてどうする?」

「せっかくくれたんだ、チップを弾みたい所だが、あんたに(楯無が)ライフ取られちまつた」

「おお、中は暗いな。」

「(足元が) 見えないんだ……。」

「何もないじゃないか! ホラーだの何だの! あれは俺を引つ張り出すための口実か!」

「その通りですわ。」

「やれやれ……あまり私を怒らせるな……。」

「まあまあ、夕日の見えるスポットがありますからそちらに行きましょう?」

「まあ、きれいですわね（夕日）。」

「クソ汚いだろ（東京湾）。」

「そこは、わたくしの方が奇麗だと言う場面でしょうにアナタは史上最底の出来損ないだよー!」

「・・・え?」

「い、いえなんでもありませんわ。」

「そうか・・・ん?」

チユドオオオオオオオオオオ!!

「「「きやああああああ!!!」」」

「「夏さん!!あそこに子供が・・・!」

「!!ふざけやがってえ!!!」

ブオンツ!【0/200】↑観覧車

「あつ」

ガシャンツ!【1000/1500】

【9990/9999】

「・・・攻撃、止みました。」

「嘘だろお」

「信じられない、(あれが届くなんて) 夢みたい。」

「何もありません。人的被害はゼロです。血痕も死体も、何一つありません……。」

「つまり?」

「犠牲者はありません。」

「お嬢様、こちらでしたか。」

「それがどうした! 私が何しようが他人には関係ない!」

「意見の相違とあればやむを得ない。」

「ブオンツ【270000/270000】」

「また会いましょう。」

「ええ、イギリスでね。」

「よーしくズども、ボーナスが欲しけりや気を抜くなよ、良いな?」

「「OK!」」

「そういうえば皆さん、遊園地では何をなさっていたのですか?」

「「何もねえよ? 悪いけど。」」

「嘘をつけ……。」

「……おいこの機体は対赤外線装備はついているのか?」

「熱線追尾ミサイル以外じゃ役に立たん。」

「それはどうかな？」

ズドオオオオオオオオン!! [600 / 1200]

[27000 / 27000]

[40 (ry)

「お前ら何やってんだよ。お前らって連中がいなけりや、パイロットも仕事が楽なのに・・・エンジンが片方吹き飛んだぐらいで逃げ出しちまって！なんのための

双発機だ！一基でも平落としぐらいできる！おいそうだろ！」

「勿論です、プロですから？」

「

私を無視とは良い度胸DEATH☆

「面倒なのが来ますが。」

「ああ・・・全くだ。」

「とつととぶつ殺せ！」

「お任せを！」

「楯無！遅れを取るなよ！」

「私だって始末書書きで余生を送りたかないですからね！」

「ううっ・・・」

「何故泣くんのだ？」

「自然に・・・涙が出るんDEATH。傷ついたときやなんかに。」

「怪我が痛むから？」

「さびしかつたDEATHお姉さま！また会えて嬉しいわ！」

「ええ、私もよ。本当によかった。生きててくれたお陰で君を自分の手で始末できる。満足だ。」

「そんナ！つれナイ／＼／」

「顔真っ赤にして言うことかい・・・。」

第63話 ホントにドイツ人は怒りっぽいんだから

—東欧境界線付近の空中にて—

「オイ、一夏。千冬さんは放してやったらどうだ？」

「駄目だ。」

「ダメエエ?!」

「私のことは気にするな、一夏。私は置いていつてかまわわん。」

「お前を置いていくとでも？」

「随分と優しいじゃないか。どうした？」

「勘違いするな。お前をこの森に放してみろ。自然保護区が消滅するだろうが！」

「!!」 ↑ 凶星

—その頃、ドイツの特殊空軍基地—

「ラウラ隊長、遅いですなあ。」

「隊長のメンツを潰したくないが、もう三〇分以上遅れてる。」

「……」

「クラリツサ副官！心配ではないのですか!!」

「馬鹿者！どうせ隊長のことだ、ドーナツ屋でサボってんだ。」

「私はいつ、ドーナツ屋でサボるキャラになつたんだ？クラリツサ副官。」

「?!静かに素早く・・・。お変わりないようで安心しました。」

「隊長！お待ちしておりました！ところで織斑教官の様子が見えないのですが・・・何かあつたのですか?」

「そう焦るな。まだ終わつちや居ない。」

「隊長の仰るとおりだ！あの織斑教官だ。さぞかし威風堂々と現れると相場が決まつている。それもI・S学園の小娘共を引き連れて・・・なんあ!?!」

「諸君！お出迎えご苦労。」↑逆さ吊り

「隊長、アレは一体。」

「紹介する。これが伝説の教官『織斑千冬』だ。」

「この野郎！この私を忘れたのか！この馬鹿！ヴァ鹿野郎！間抜けエい!!」

「た、大変失礼しました！三六〇度も回っておられたゆえ、気が付きませんでした!」

「あー、それを言うなら三八〇度だ。このマカロニ黒ウサギ。そんな単純な計算もできんのか！三六〇度ひっくり返つてみる！始めと同じ位置に戻つてひっくり返つた事にはならんだろ!」

「……そうかなあ。」

「なあ、乙女の友情を邪魔したくはないが、それを言うなら一八〇度だ、この歴史的馬鹿モンどもが。」

「この声は……まさかメイトリクス?!この野郎生きていたのか!教官も元気そうで安心しました!」

「久しぶりだな、クラリッサ!……なんだ、その似合わない(眼)タイは?」

「ほっとけ、余計なお世話だ。」

ガシッ! [9999/9999]

[8000/8000] ↑クラリッサ

「ヌウ!」

「どうした?隊長業務(代理)のデスクワークで鈍ったか?」

「いやあ……。参った降参だ。相変わらずだな、メイト——」

ポンッ

「……クラリッサ。」

「何です隊長。」

「私のキャラと被るのでその台詞は変えろ。」

「それが何だってんだ!誰が何しようが私には関係ない!デカイ声を出すな!耳があ

るんだ！台本どおりにただ喚き散らしやがって、それしかできんのかこの大根野郎！私を何だと思ってる！（臨時）隊長だ副官だ！私に怒鳴るな！」

「……クラリツサ！」

ドベキシツ「オフウイ……」【1/8000】

―オペレーションルーム―

「状況については、諸君らの知るところだから割愛する。作戦だ。」

「作戦？俺達に作戦なんかいるかよ。」

「お前らを纏めとくと、過剰戦力になるからな。それと、実に迷惑な話だがデユノア社から最新装備の受領命令があった。」

「適当にあしらうときやいいわよ、役員なんぞクソツくらえね。」

「いや、鈴。俺達は別件でデユノア社に用がある。」

「？珍しいこともあんのね。」

「それは私と織斑、ラウラ、デユノアで対処する。いや、電子戦に更識、お前も来い。篠ノ之。後の連中を最速でイギリスに送れ。ついでに悪さをしないように見張つてろ。」

「ちよい待ち。アタシ達はお荷物なわけ？」

「ああ、そうだ！」

「ならば、シュヴァルツェ・ハーゼ隊の副官である私もお伴しよう。戦力不足だ。」

「既に過剰だ。これ以上子守りが増えたら、篠ノ之がパンクする。」

「おいおいおい、私がこんな連中に手こずるとでも?」

「連れて行きたくないだけだ。」↑耳打ち

「教官! 私は、こんな小娘ごとに気に負けはしません!」

【24000/24000】↑IS展開

「ブレードはしまつてろ。そのISも閉じとけ。山田君! あいつの装備全部持つて行きなさい!」(・・・ん?)

「はい、かしこまり:ゲフンゲフン。放してください! これも私の仕事なんです!」

「あ! 何をやる貴様! 放せ! ええい、決闘だ!」

「クラリツサ。そいつに勝ったら連れて行ってやろう。」

「織斑先生!?! ハメましたね!?! このクソツタレ! 嘘つきみい! 装備を奪えだの連れて行きたくないから説得しろだの、あれは私を引っ張り出すための口実なんですか!?!」

「いやあ、その通り。それが悪いのか?」

—特設戦闘アリーナ—

「これより、山田先生とクラリツサのバトルを始める。開始。」

「手加減はなしだ!」

「分かりました!」

ゴツ!ガキイツ!バキ、メシツ!!

シユドドドドドドドド!

「・・・よし、こいつらここで戦闘しているって言うてるから、さつさとイギリスを指そう。」

—駅のホームにて—

「ねえ、感動の別れを邪魔して申し訳ないけど、列車なんか乗らないで走った方が早いんじゃないの?特に一夏。」

「行こう行こう、いつも先を急ぐ。そしてある日死ぬ。たまには足を止めて人生の楽しみを味わうべきだ。」

「ふっふくん、だいたいが?」

「おっと、列車が来た。じゃあ箒、子守りを頼む。」

「私は子守りなんて得意じゃない。」

「謙遜しすぎだ。君はきつととても良い子守りになれる」

プシュー・・・ガタンッ

「さて、織斑。」

「飲み物か?」

「買ってこい。」ピラツ（五千円札）

「……ここはユーロだ。」

「……間違えた。酒頼めるか？」

「今は移動中だ。抑えろ。」

トコトコトコ……

「……」

「さて、デユノア。」

「は、はい。何ですか織斑先生。」

「なぜ、我々が列車で移動しているか分かるか？」

「え？」

「一人で抱え込むってんだこの大馬鹿野郎！けど手を貸せる馬鹿も私達しかいないぞー！」

「で？その作戦は？」

「まず私がサーバーに侵入、ドン。動作感知器と生体認証センサーを切る、ブチツ。そしてさらに監視カメラシステムを無効化……あとはみんながババーンと潜り込める。簡単でしょ……？」

「ドン、ブチツ、ババーン、か。……一夏、飲み物は？」

「本場のチーズとペパロニのグッチョ美味しいピッツアだ！激旨だでえ！」

「・・・一夏、ピッツアは飲み物じゃないよ。」

「私も・・・そう思う・・・。」

「・・・え？」 ↑ 飲んだ後

第64話 フレンチはもてはやされすぎだ

—引き続き列車内

「シャル、お前の家はこのあたりだったな。」

「そうだよ・・・何で知ってるの？」

「ちよちよつと手先を動かせば、そのぐらいのことは直ぐに分かる。」

「」

「おい、このニュースを見ろ。ロシア代表、候補生を手玉に取り、条約と有徳に背く何たらかんたら、だとき。」

「流石・・・お姉ちゃん。」

「それより一夏、腹減らないか？」

「飯なんか作ってないぞ。」

「私もだ。」

「同じく。」

「・・・車内販売来た。」

「ボンジュール。サンドイッチは如何ですか？激うまだでえ？」

「これは・・・フランスパンのサンドイッチか。」

「ン、よくご存じですねえ。正確にはサンドウィッチですが。この料理はお好き？」

「ええ、ゾツコンですよ。」

「・・・知ってるぞ！君は織斑一夏だね！」

「どこで聞いた。」

「どこでもそこでも、みんなが知ってる。サイン頼めるかな？」

「書くならギャラ上乘せ。」

「サンドウィッチーパツクオマケでいかが？」

「乗った。」

「カキカキ・・・」

「これでどうだ？」

「へー、これが君のサイン。上手いね、よく書くの？」

「滅多に書かん。飾ってくれんから。」

「そいつあめでたい。とにかく、君は世界で唯一ISを使える男子。僕みたいに立場の弱い男達の希望の星だよ。」

「俺を貶すつもりか！いっぱしの強者を気取っていても、俺から見れば聖歌隊のガキ以下だ！誰が怖がるか！」

「いよ、遅しい！ああ、それだ。あれとかこれとか、それとかつて——」
——二〇分後——

「いや、今日はいい話が聞けて満足だよ。これ、お札にサービスする。」
「いくらだ？」

「俺のおごりだ。食つてくれ。じゃあな。」

「俺の名が知られているとはな。」

「大佐は有名人だからな。」

——夜——

「三人部屋が二つ？」

「六人部屋を頼んだはずだが？」

「そんなにでかい部屋はなかったです。(キリッ)」

「仕方ない。ここは私とシャルロット、そして更識が同じ部屋で寝るとしよう。」

「おいおいおい。それじゃ、私の晩酌はどうなるんだ。」

「今は作戦中だ。控えろ。」

「仕方ない。ラウラ。織斑と同じ部屋で寝て良いぞ。」

「!!……あ！あそこにプロテインが！」

「えっ……？」

バタツ!!ガチャンツ!!

「!!小娘めエ!?クソ、逃げたか!!・・・ぬううう、うおおおつ!!」

バインツ【199/200】↑列車のドア

「よせ、人の備品だ。今回は我慢しろ。」

「仕方ない。寝るか。」

ガチャツ

「三段ベッド。参った参った。こんなひでえベッドは流石の俺も初めてだ・・・。」

「まったくだ。チョー最悪だ。カプセルホテルが天国に思える。」

「さっさと寝ちまおう。」

「ああ、そうしよう。」

「・・・俺達、ドイツにいるんだよな?」

「ああ?寝言言ってるじゃねえよ。とつくに国境は越えたよ。」

— 翌朝 —

「ここがパリか。暑くてやってらんねえ。」

「え?今、一二月だよ?」

「デュノア、さっさと降りろ。」

「お嬢様、お待ちしております。お時間が迫っておりますので、お早く車に。」

「ああそうだ！」

「おい、本題を」

「ふざけやがってえ!!」

ドカツメキツグシヤツ! 【9990/9999】 【18990/20000】

「本題・・・」

メキツドゴツベキツ!! 【9000/9999】 【18000/20000】

「・・・」

「父さん、あの二人はほつとこう?」

「社長と呼べ・・・」

ドベキシツ「オフィ・・・」 【1/800】

ガンツ! 【7000/8000】

「今度私の邪魔したら殺すよ?」

「ちよつと手助けしたただけだ。」

「私はその気がないんだ。」

「で社長、本題というのは?」

【9999/9999】 【20000/20000】 ↑リフレッシュ!

「・・・」 【1/800】

「アルベールつたらまた床で寝てるのねえ。んう可愛いんだからあ。」

「やめろ！気持ち悪い!!」

「ほら起きたぞ。」

「よくやった。社長、本題を。」

「……。」

「社長？」

「ほんの少しではありますが、ISの第三世代機を入荷致しました!」

「第三世代機!? やったあ! フランスバンザイ!」

「……と、俺達が言うと思ったか？」

「俺のダチが面白がって乗ってみたがよ、危なく廃人にされるとこだった。新世代機はイジるモンじゃねえよ、馬鹿を見らあ!」

「……それ、私のこと言ってる？」

「いやあ、その通り。」

「シャルロットにはこの機体へ乗り換えを行ってもらおう。」

「おおいエイエイエふぎけんなこんなのアリかよマジで契約違反だ。目の前で話してんのにこの野郎無視しやがって! ピザのトッピングにチーズとペパロニ頼んだらトーフと魚醤のつけてきたようなモンさ! サギだよサギ!」

「オイオイオイオイ待てよ待てつたらう ホントにドイツ人は怒りっぽいんだからあ
w」

「・・・私はトーフも好きだよ？」

「嘘をつけ。」

「おい、行くぞシャルロット・デュノア」

「二つだけ教えといてあげる。リヴァイヴはこれまでで最高のIS。第三世代機では
勝てない。」

「よろしいならば模擬戦だ。」

「!!主戦主義者だ!コロセ!」

「では、打ち破ってもらおう、我が社の誇る第三世代機。その名も、昴」

「おいおいおい、ちゃんと言うてよ」↑研究員

「ああ、そうか。昴と言えば、宇宙で一際美しく輝く星。宇宙と言えば、そう秋桜」
ドベキシツ【0/800】

「やる気あるんかおっさん!」

「Foooo!ええぞお!あんた腕つぶし良いじゃねえか!こんな時こそ拳を使わねえと
なあ!」

「あのろくでなしの暴言社長を殴った気分はどうだった?」

「それは・・・最高です」

「あんた最高だよ、きつと大物になれる」

「マジかよ」

「もちろん。こんなところでくすぶってちやだめだ。」

「やっぱりそうか俺もずっと前からそう思ってたんだ！」

「・・・模擬戦は？」

第65話 小僧に口の利き方教えてやる

「つく、強い……。」

「リヴァイヴを作った技術者もこれほど勝ちがつかなくなって思ってもなかったらうね。安物のI Sにただ適当に装備をくっ付けまくっただけ。はあくししょうもない……。」
で、結論は？」

「分かった！分かった！リヴァイヴに乗ることを認める。」

「結構。よろしく。」

「で？お前はいつまで寝てるんだ？オータ……ゲフンゲフン。シヨートニング・シヨートケーキ。……？」

「……一夏。それ、どっちもお菓子。」

「ああ、それは分かっている。で、マジでこいつの名前なんだっけ？」

「シヨツパイナ・シヨツポイナだ。違うか大佐。」

「シヨコラデ・シヨコラータだ！」

「黙ってるオータム！」

「オータム？もう12月だよ？」

「今度はクリスマスにでもするか？」

「ああ?! 手前から人の名前を出世魚みたいに——」

「真ん中に寝てなきや。真ん中に。」

「私は真剣にいつてるからな？」

「何? もう良いじゃない。」

「クソが! 私も久々頑張ったのに、なんだよ! いい役持っていきやがって!!」

「吹雪OKね? それでは、オータムさん、どうぞ!」

「ヤロー、ぶっ殺っしやー!!」

「(本性が) 見えたぞー! 待ちやがれ!」

ズババババババババババ!! ↑チエーンガン

「へっ! ガキの動きなんざ単調なんだよ! この最新鋭機は頂いた!」

「なにか忘れてませんか?」

「あ? 忘れるわけが?! 何だ?! 身動きが!!」

「見ろ、蜘蛛が自分の糸に絡まってら。」

「………ダサイ。」

「手前エ!! 何だこれは! この私をこんな安物の糸で捕捉しやがってえ!」

「お前の忘れ物だ。受け入れる。」

「な、何と言うことだ。私はまた娘を危険にさらしてしまったのか!」

「娘を危険に? 社長、お前、オータムの親だったのか。」

「違う! あんな出世魚は知らん! 私の娘はシャルロットだ。」

「なら、大丈夫だ。今の情けない格好を見る。おかげで安全だろ?」

「まあ・・・テロリストからはな。」

「疑ってるのか?」

「実を言うと・・・あれは何だ!!」

「あ? クロエだ。遠くから見てることしか出来ないチキン野郎。」

「こつちに向かっているように見えるが?」

「大佐、命中させておきました。」

「ご苦労。」

ガシャーッ!! [10001/21000] ↑クロエ

[13400/30000] ↑オータム

「あ、切れた。」

「(糸の) 予備がある・・・あ、なかった。」

「そ、それどころじゃない! 避ける、避けるんだ!! シャルロット!」

「ん、そいつはどうかな?」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ!! 【300/3000】↑オータム

【18000/18000】↑シャルロット

「シャルロット!!」

「もしかして?!」

「私達!!」

「入れ替わって・・・ないね。」

「ないんかい! って、あれ?」

「あ、何かISもらっちゃった。」↑一人勝ち

「ああ?! 何起きてやがる?!」

「何が起こっている!？」

「コアが融合したんだろ?」

「クソが! こういう時は逃げる!」

「おい、逃げられるぞ!」

「ほつとけあんなもん。それよりクロエだ。」

「おう、クロエ^姉。このときを待ちわびてた。」

「初めまして、完成品の『付きの落とし子』。私はYOU。YOUになれなかった、も

う一人のYOU。」

「何だって？」

「差し詰め、誰かさんの変換ミスさ。」

「誰かって誰だ。」

「その男。」

「社長、呼ばれてる。」

「違う、隣の男。」

「だってよ、技術者。」

「まあじかよお！」

「・・・織斑一夏。YOU。」

「俺に何の用だ？」

「YOUは完全なるイレギュラー。ママのため・・・オエエツ！我がマスターのために消えてもらいます。」

「」

「？」

「大佐、見事な消え方でした。私から学んだのかな？」

「YOU達が見ているのは幻影。」

「幻影？奇遇だな。俺達もだ。」

「・・・?!?!」

「二つに一つだ、今すぐ立ち去れば何も無かった事にする。嫌ならここを爆破して帰る！丁度ティータイムだ！」

「やめてくれい！」 ↑社長

スーツ・・・

「クロエは帰った。俺達も帰ろう。」

— パリの空港にて —

「世話になったな。」

「小僧に口の利き方を教えてやる。」

「私もそう思うな。世話になったな！」

「学ばん小娘が。」

「じゃあ、行つてきます。」

「お嬢様、お気を付けて。」

「おおいエイエイエエふぎけんなこんなのアリかよマジで契約違反だ。辞書にマーカ線引いて挨拶したのに、こんな塩対応しやがって！ピザのトッピングにエスカルゴ頼んだらデンデンムシのつけてきたようなモンさ！サギだよサギ！」

「……何を言ってるんだこの男は？」

「あは、あははは……。特に意味のない、挨拶みたいな者だから気にしない方がいいかも？」

「貴公、織斑一夏と言ったな？ご学友とは言え、お嬢様にバカが移っては困る。ささ！離れて、離れ……離れ！離れエエエエエッ！」

「おじいさん、似合わないことはおよしなさい。指を脱臼するのが落ちだ。」

ポコッ↑肩の関節が外れた音

「ほら、言わんこつちやない。」

「一つ伝えとくね。一夏はバカじゃないから。ちよつと織斑筋な所があるだけで。」

「おつと、飛行機の時間だ。じゃあ、行くぞ。」

—— イギリスの空港にて ——

「ああつつ！何だここは！北上してるのにパリより暑い！」

「ああ?!手前正気か？馬鹿野郎！何言ってるんだ！てめえ正気か！死にてえのかてめえ！どっか天井！てめえ何言ってるんか分かってんのかい！」

「気温について、感想を言ったまで。違うか？」

「あの一、一夏さん。こちらの方は？」

「バカでちよっぴり大ドジな、クリスマスだ。」

「クリスマス？もう12月だよ？」

「もうじきクリスマスじゃないか！」

「ウルセえ！手前ら、このオータム様を何だと思ってやがる!!」

「複数の殺人。」

「誘拐」

「強姦」

「恐喝」

「通貨法違反」

「それに、麻薬の密売だ。」

「・・・最低。」

「テロリストだからな。いや、待て。私はそこまでワルじゃない。」

「ISを奪うつてのは、重罪なんだがな。」

「ISぐらい・・・いや、そうか。お前達といると、どうも感覚が・・・。」

「で、一夏さん。何故この方を連れて？」

「可哀想なことにな、俺達が放流してやったあとすぐにフランスのIS部隊に囲まれてたんだ。」

「おお、可哀想にくw」

「何だところのクソガキ・・・！」

ドベキシツ「おふい」【2500 / 3000】

「クソガキってどなた？私のこと??？」

「全く容赦のない・・・」

第66話 この世にある小説(要出展)番組の中で、何と
いっても一番面白いのはく？ 〱デエエエエエエエエエエツ

！／

— 引き続き空港にて —

「ちいちゃああああああああん！」

ドドドドドドドドドドドドドドドツ！

ドドドドドドドドドドドドドドドツ！

「なんだ？走り去っていったぞ？」

「さしずめ、幻影でも追っかけてるんだろ？」

グモツ！

「なんで空港のロビーで電車に突っ込むんだ？」

「身内として恥ずかしい・・・。」

「ところでシャルロット。新聞の一面を独占した気分はどう？お偉いさんたちはあり得ないって否定してるみたいだけど。おめでとう。」

— イギリスのIS空軍基地 —

「よう、青少年。また、締まったみたいだな。」

「そっちは、貫禄がついたみたいだな。」

「? 昨日の時点じゃ2kgは減ったはずなのにやー?」

「・・・腕を上げたな。」

「そりやどーも。それより、IS貸して。改造するから。」

「任した。」

「んー、了解、了解。」

ヒョイツ

「待て待て待て、そいつはアホみたいに重いはずだが?」

「んにや〜? 重い?」

「貸せ!」

ズシーンッ!!

「お前、アホだな。」

「んなこつたろうと思った。」

「じゃあ、いっくん。どっか行って。ここにいられたら邪魔だから。」

「そうさせてもらう。」

「イギリス観光を楽しんでリラックスしな。調整には時間がかかりそうだしねー。」
チラッ

「おーい、セシリアちゃん。いっくんどどっか行っておいでよ。」

「？」

「おいおいおい、それは筈だ。」

「何？実の妹もわかんないワケ？この人。」

「妹どころか、自分の名前もわかってない。」

「それでよく名前を呼べたわね・・・。」

「手に書いてる。いつものことだ。」

「よく、それでISが作れたわね。」

「知らないんだ。自分にはISを作れっこないってことを。」

「」

— ロンドン市内にて —

「で、一夏さん。」

「何だ？」

「大人しく観光に来ただけというわけではありませんわよね？」

「ああ、そうだ。」

「目的は何でして？」

「こいつに、ちよつと洗礼を浴びせに。」

「??? チェルシー? なぜ I S 何か・・・。」

「捕まえてご覧——」

ブロロロオオオオオオツ・・・↑車

「——なら。」

「奈良が何だつて？」

「観光にでも行きたいのでしょうか・・・。」

「C A T C H m e , i f あな た c a n .」

「何だつて？」

「申し訳ありませんわ。ルー語はサツパリですの。」

「」

「捕まえてご覧なさい、できるものなら！」

肩トントン

「?。」

ブスツ【1999／2000】

「そいつは幻影だ。」

ダラダラ

「アーーーーー!!!」

「Try to run away. If you can.」

「何だって？」

「逃げ切ってみて下さいまし。出来るのらですけどね。ですわ。」

— そのころ空軍基地では —

「集まれ。これからさつき配った付録について説明する。」

「ちったあマシな装備だと良いが。」

「はいはいー！ここからはヒカルノお姉さんが説明するねー！」

「要領よく、簡潔にな。」

「まっかして！この装置はねく、少量のエネルギーを、増やして、ひっくり返してビツクリするようなエネルギーを引き出せるんだ！」

「まるで『赤椿』のワンオフ・アビリティーの絢爛舞踏のようだねえ！不思議な偶然があつたものだよ。そう、赤椿のコピーを作ったみたいに。」

「・・・赤椿って何だ？」

「知らねえや、そんなもん。かきつばたなら知ってるが。」

「酷いセシリアちゃん！」

バキツ！【150／15000】

「顔よく見てから名前を言え。」

「酷いつくくん！」

ドベキシツ！「オフウイ・・・。」【0／15000】

「マジなところ、赤椿のコピーか？」

「赤椿が何かしららないにやー。でも、そうなら赤椿は、真空管のコピーってことになるにやー。」

「MIG—25かよ。」

「そんなちやつちなものじゃないのさ。」

「事実だ。受け入れろ！」

「酷おい！ちい・・・箒ちゃん！」

ズドンツ【15／15000】↑出席簿、クリティカルヒット

「いい加減にしろ！束！」

「おー、いてててて。ま、そんなことより、そんな面白そうなことを束さんに黙ってやろうだなんて、一万年と1999年早いのさ！」

— 何やかんやあって、迎えのヘリコプター内にて —

『作戦のおさらいをする。』

「俺とラウラに、箒と鈴。この四人で突っ込んでドカンッ。」

『以上。まあ、何だ。その他も暇になるだろうから仕事をやる。セシリア。狙撃の準備をしておけ。』

「分かりましたわ。」

「あの一、一つよろしいでしょうか。」

「何だ!」

「エクスカリバーについてです。」

「安心しろ、お前の妹は、俺達が救い出してやる。」

「はい、お願いしま・・・何で知っているんですか?!」

「妹紹介してくれるか?」

「手を出すなあ!分かったか!」

「大佐ア、そんなに怒ることないではないですか!」

「ふん。お前との決着は今度付けてやる。」

「今でも良いぞ?」

「……」

「到着した。降りよう。」

「何だ一夏。そつとしてやおいてやるんじやなかったのか？」

「仕方ない。乗つたらいたんだ。」

「そうか。早速だが、作戦を開始する。配置に付け。」

「いつでも良いぞ？」

「では、カウントダウンを始める。」

『10, 9, 8——』

「ねえ一夏、アンタのISって宇宙まで上がるわけ？」

「上がらなければ、それはその時。クロールでもして上がるさ。」

「小説だからって、アンタいくらなんでも。」

「小説？ 鈴、恐怖で頭でも逝ったか？」

「うっさいうっさい——」

『ゼロ！ 定価OFF!!!』

第67話 テキパキサクサクと

— 宇宙空間にて —

「急ごう！サツと行つて引き上げよう。」

「早さが肝心。」

「見えた。あれだ。」

「待て、様子がおかしい。」

ビシューーンツ!!

「何だ！この出力は！」

「肌を焼くにも物足りない。折角こんな所まで来たつてのに。」

「行こう。長居するだけ無駄だ。」

「ところで、さつきからハエがうるさいな。」

「バカね、アンタ。これは宇宙ゴミよ。」

ボンツ！【399999／400000】↑箒

「あ、壊れた。」

「所詮、IS何てこんなものだ。大気圏に向かって投げとけ。」

「そうしよう。」

「ちよつと待ちなさいよ！ここ空気ほとんどゼロなのよ？なんで音がするわけ？」
「だつてお前、これは小説だつて言つたじゃないか。」
「」

— 地上、管制室 —

「あれ？織斑君のバイタルサインが消えた?！」

「気にするな。どうせ白式のガス欠だろ。」

「それつて大変じゃないですか!!」

「予備がある。」

「予備つて何ですか?！」

「しらののか？アツ——」

バタンッ

「残念だねえ！ちいちゃん!!いっくんは死んだのさ!」

「そりゃご苦労。」

「あれ？驚かないの？実の弟が死んじやつたのに。」

「死んだ？お前には一夏は殺せない。」

「白式に細工をしたんだけどなー。」

「言つたら。予備がある。」

「予備？ そんなのはあり得ないのさ。なんたつて、この世界は私が描く小説の世界なんだからー！」

「操り人形だよ！」

「これがその装置。ちいちゃんなら何の装置か分かるはずだよ！」

「自爆装置だろ。付け忘れた。」

「そうそう。つて、あつれえ?!」

「ぶっ飛べ！」

チユドオオオオオオンツ！【150/15000】

「ゲフツ……。」

「なんで今ので生きてるんですか？」

「細胞単位でオーバースペックなのさ。」

「私達ほどじゃないがな。」

「あは、あははははは……。あ、織斑先生。それでさっきの続きなんですけど、予備つて何ですか？」

「アツシーだ。」

「アツシー?」

「I Sだ。織斑の。」

「ちよ、ちよと待って下さい!!織斑君のI Sは白式ですよ?」

「だから予備だと言ったろ。」

「何で、一人でI Sを二つも?」

「デュノアもそうだ。違うか?」

「違いますけど、おかしいですよ! I S二つなんて。」

「だって山田先生、これは小説だって(束が)言ったじゃないか。」

「」

「え?作ったかな、そんなI S?」

――再び宇宙空間――

「行くぞ!」

「待て!分列したぞ!」

「構わん突っ込め!」

「各機、大佐に続け!突撃イ!やちゆらを片付けろ!」

「私が二つ片付けよう。」

「ラウラ、鈴。一個片付けるか本体に突入。どっちを選ぶ。」

「決まってるでしょ。アンタが片付けて。」

「大佐が突っ込む。以上だ。」

「思いやりがあるなあ。」

ドカッ、ベキッ、ボキッ、ゴリイ！〔0/2000〕×4↑攻撃衛星

「クリア！」

— 再び管制室 —

「!! エクスカリバーのエネルギーが急上昇！」

「あ？一夏が落としたんだ。攻撃衛星を。」

「攻撃衛星？」

「資料読め。」

「で、でもこれは!?! ISの速度を遙かに超えた物体が移動中！」

「デブリか一夏君か、2つに1つってところね。」

「楯無。それは違う。デブリと一夏だ。」

「?!?!」

— B T 加速器内部 —

「そろそろ終わる頃ですかしら。」

ドツタン、バツタン

「・・・賑やかですわね。」

『『ダイブ・トウ・ブルー』を寄越せ！チエルシー・ブランケット！』

「お断りします。」

スーッ・・・

「逃がすか！」

ドカアッ！ 【0 / 200】 ↑壁

「出てこいくそつたれえ!! うわああああああああ!!!」

チュバババババババツ！ 【0 / 200】 ↑ドア

「そこー！」

「くっ！」

「こいつで強制解除してやる！」

「いやあ！お代官さまあ！」

ブチッ

「うるさくつてよー！」

チユドオオオオオオンツ！↑ロケラン

「はい……。」

「おつくれて登場、楯無お姉さん。取り敢えず、一斉爆破でいっちゃおう？」
スザザザッ！

「どうしてセシリアちゃんが逃げるのよ！」

「あなたに勝ったら、生徒会長をしなくてはならないからですわ！」

「まだ有効なの?!」

「寧ろ有効ではないのですか？」

「いや、有効だけど……。」

「クククツ、相打ちになればISが三機も！」

「どうやって?」

「こうやってな！」

パツパツ

「え?! ISが?!」

「ルームバーですわね。」

カチャ、ズドオオオオオンツ！
【0 / 40000】

「この手に限りますわ。」

「

「あら、保護者さん？」

「ま、そんなところね。」

「す、スコール・ミューゼル?!」

「口の利き方を知らないのね。」

「私もそう思いますわ。ところで、御用は何でしょうか？」

「奴らはヤバイ奴らはヤバイ奴らはヤバイ奴らは野蛮……。」

「エムに加勢、と言いたいところなのだけれどねえ。またこんな状態になっちゃったから、今日は引き上げるわ。」

「また会いましょう。」

「最新刊でね。」

—— 何度目かの宇宙 ——

「これが衛星の中か。」

「見ろ、誰か倒れてる。」

「おかしいわよ！一夏。真空でも音は聞こえるし、挙げ句、無重力なのに人が倒れてる。説明して頂戴！」

「だってお前、これは小説なんだから？」

「おおやだ！」

「こいつら、ダリルとフォルテか。」

「何故こんな所に？」

「生きてるか？」

「あ、ああ……。裏切り者だ、コロセ。」

「俺達はレスキュー部隊だ、殺し屋じゃない。ここを爆破して地上に戻るちようど
ティータイムだ。」

「一夏、せめて舌の根くらい乾かしなさいよ。」

「もう一人いるぞ？」

「いえええあ！面倒だ！衛星ごと持って帰ろう。」

―― 後日、セシリアの誕生日会場の外 ――

「で？何で中には入れないわけ？」

「俺達は網の外だ。」

「蚊帳の外だよ。」

「マジな話し、何で？」

「俺達がパーティーを滅茶苦茶にすると思ってる。」

「仕方ないわね。」

「何だよ、久しぶりに頑張った手に。」

「それにしても、中は良いな。暖かいし、美味しい料理もあるんだろうし。」

「なあ、シャルロット。」

「何、一夏？」

「ここイギリスだよ？」

「あつ。」

第68話 病気なんて私には関係ないもの

— 大晦日 —

「なあ、千冬姉。」

「何だ？」

「俺達、なんで自宅に籠もってるんだ？」

「自粛要請が出てるから。」

「何で。」

「新型コロナが流行っているから。」

「なんだってそんな外の病気が来てるんだ？」

「決まってるだろ？書くのが面倒くさいんだ。」

「つまり。」

「カットしてやった。」

— 1月4日、IS学園 —

「先生！質問があります！」

「どうした。」

「昨日まで猛威を振るってたウイルスはどこに行っただんですか？」

「新型プレミオに置き換わった。」

「????」

「さ、手前から正月らしいことしてないだろうからおみくじを引かせてやる。」

「わー！これやってみたかったんだ！」

「あ！大吉！あなたは？」

「私、末吉。」

「わー中吉だ！」

「勝った、吉！」

「知ってる？中吉の方が強いところもあるんだよ？」

「それがどうした！」

「織斑君は？」

「(字が) 見えないんだ。」

「ん？どらどら？・・・見えないね。」

「マジで、見えない。」

「あれ？篠ノ之さん引かないの？」

「滅多に引かん。当たらんから。」

「まあ、そう言わずに一回。」

ジャラジャラー、ジャラジャラー

PON☆

「んゝ、何？」

「大凶。」

「あつ。」

「……」

「どうやらこれでも底らしい。ホントなら今年は絶好調だな。」

〈〈〈それもそれで恐ろしい。〉〉〉

ガラッ！

「早く紹介せぬか！」

「嫌だね。」

「断る。」

「断るだと！ 静まれ、静まれ！ この紋章が目に入らぬか。ここにおわすお方をどなたと心得る。恐れ多くも先の女王『アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルク』にあらせられるぞ！ 頭が高い、控え——」

チヨイチヨイ

「何ですか、女王陛下。」

「まだなっておらぬ！」

「!! 静まれ、静まれ！」

「「お前だ！」」

「で、そんなヤツがここに何の用だ？」

「知らないのか？ 特別留学生だ。」

「へー・・・偉いの？」

「王女だが、所詮、七位だ。」

「所詮は失礼じゃない。」

「まあ、見てろ。」

「わらわのこと、しっかりと説明してくれなくては困るぞ。織斑千冬。」

「・・・。」

ドベキシ「オフウイ」【0 / 1000】↑アイリス

「先生を付けろ。」

「そのようだな。」

「言つたら。」

「な！貴様！アイリス様に手を出すとは！」

「手は出してない。」

「叩いたろ！出席簿で！」

「安心しろ、峰打ちだ。」

「峰？峰って何だ？」

「ここは日本だ！郷に入っては郷に従え！」

「おいおい。」

「どうした織斑。」

「ここは日本じゃないぞ。」

「似たようなもんだ。」

「う、うーん？なぜわらわはここで寝ておるのじゃ？」

「この女が殴ったのです！」

「何と!!死刑じゃ！」

「やってみろ。できるならな。」

「近衛騎士団！懲らしめてやりなさい！」

シーン

「近衛騎士団？」

「控え室でひっくり返ってたぞ。」

「何?!」

「私の（酒）じゃないだろうな。」

「お前の（酒）は消毒だって正月に全部飲み干したろ（怒）。」

「・・・。」

フイツ

「もうよい。それより、そこうるさいの。」

「呼ばれてるぞリアーデ。」

「え、何?」

「お主じゃ!」

「えく、私かあw。」

「呼んでおらぬ! 誰じゃお主!」

「岸原理子だよ!」

「ウザイ!・・・この匂いは何じゃ?」

「航空燃料。」

「航空燃料。いいのう、好きじゃ。」

ガシッ!

「同士よ！」

「・・・ハツ！離さぬか！無礼者！
ずかずか

「お主じゃ！織斑一夏。」

「何の用だ？」

「お主をわらわの召使いにしてやる。光栄であろう？」

「めしつかいって何だ？」

「ご飯作る人。」

「なるほど。」

「違いますわ！ご飯を操る人のことでしてよ！」

「流石英国貴族。言葉の重みが違う。」

「おぬし、それでも貴族か！それとも召使いも雇えぬ貧乏貴族であるのか？」

「お生憎様。当家にはメイドしかおりませんので。」

「もうよい!!わらわの身辺を護衛せいと言っておるのじゃ！」

「子守りは得意じゃない。」

「子守りじゃと?!わらわを子ども扱いするでない！」

「俺をコケにするもりか！いっぱしの王女を気取っても、俺から見ればそこら辺のガ

キだ！誰が専属で面倒を見るか！」

「貴様！王女殿下に対して無礼であるぞ！」

ドベキシ 「オフウイ」 【0/1000】

【0/200】 ↑フロレンス

「教室では静かにしろ。さもなければ去れ。」

「上がり目しかねえ……。」

—— 午後 ——

「王女の意向だ！これを着ろ。」

「断る！」

「異論は認めん！」

「授業だ。お前も受けろ、ためになる。」

ガシッ

「は、放せええええええ！私には近衛騎士団長を迎えなければならんだ！」

「支えてんのは左手だ。利き腕じゃないんだぜ。」

「あわわわわわっ……！」

「空飛ぶか？そら！」

「うわああーっ!!!」

「傾注!」

「・・・ああああああああああ・・・」

「フローレンス!何を遊んでいる!」

「・・・たんです!」

「何を言っているのか分からん!」

「・・・ああああああ!!」

ガシッ!

「すまない、助かった!」

「殿下はどこだ!」

「教室で授業を受けておられる。市街を散策されたいと申されておられたのに、織斑

一夏め!強引に授業に連れて行きおって!」

「何と!この私が直々に成敗してくれる!」

ヒョロロ〜ファンファンファン

ヒョロロ〜ファンファンファン→

「・・・何の音だ?」

「誰だ!!お前は。」

「一夏に頼まれてる。」

「くそ！あの男、どこまで外道だ！」

「底を退け。さもなければ与えられし権限により、ナイフと結ばせてやる。」

「・・・。」

「なるほど。ならば死ね！」

ズババババババッ！

【1/2500】

「お、お前は一体・・・何者だ。」

ガクッ

「・・・。」

スタスタスタ・・・

――週末――

「で？結局、アンタはついて行ってやるわけ？」

「ちよつとした事情があつてな。」

「なるほどね。」

「大佐、お気を付けて。」

「ああ、行ってくる。」

「・・・ねえ、一夏はトラブルを引き寄せるの？」

「違あう！逃げるトラブルを追いかけ、見つけ出して殺す。」

「・・・本当は面倒くさがってない？」

— 廊下にて —

「これはこれは、ジブリルさん。ご機嫌如何です？」

「ご機嫌だ。目の前のマツチヨマンが消えつちまえばな。」

「それは出来ぬ相談にございます。」

「王女殿下の身に何か起こってみろ。溶鉱炉で溶かすぞ。」

「それも出来ぬ相談にございます。」

「何?!」

「お宅にスパイがいる。」

「どういうことだ特ダネや。」

スッ

「この時間にここにいる。」

第69話 怖いか?当然、クソツタレ!

— 正門にて —

「遅いぞ!織斑一夏!」

「道が空いてた。」

「ならば尚更早く来ぬか!」

「行こう行こう、いつも先を急ぐ。そしてある日死ぬ。たまには足を止めて人生の楽しみを味わうべきだ。」

「そうかも知れぬが、そのせいでわらわは何度も生徒に間違われたのじゃぞ!何度も!それも中学生じゃと!」

「お前の国がどうかは知らんが、日本じゃ一四歳は中学生だ。間違われたくないならドレスを着とくんだな。」

「わらわを馬鹿にするか!死刑にするぞ!」

「やってみろ。返り討ちにしてやる。」

「ふん、嫌みなヤツじゃ!早く車を回せ!」

「OK!」

クルクルクルクル．．．

「

「喜べ、いつもより速く回してるんだ。」

「お主、人間か？」

「おうともよ。それがどうした。」

「もうよい。歩いて行くぞ。」

「ところで、何と呼ばば言い。」

「名前か？いつも姿を隠すときは、アリスと名乗っておる。そう呼べ。」

「あなたは稲妻のく。」

「???

「何でもない、気にするな．．．。」

―― ショッピングモール ――

「この城は何じゃ？今からお主が攻め落とすのか？」

「バカ言え。ここはショッピングモールだ。服を買うならレゾナンス。新作！人気作

!!!
なぁーんでも揃ってる。」

「そうか。随分と大きな施設じゃな．．．。」

「バカ言え。IS学園はもつと大きい。」

「そうか。ところでじゃが、わらわはそばというものを食べてみたいのじゃ。」

「奇遇だな。有名なそば屋を予約してある。」

「随分と気が利くではないか。褒めて使わずぞ。」

ズルツ

ヒョイ

「転けるなよ。脚を痛める。」

「お主、心があつたのじゃな。」

「そうみたいだな。」

— そば屋 —

「これがわらわの待ちわびた天ざるそばか!」

「違あう! 厳選素材の天ぷらと繋ぎなしのグッチョ美味いそばだあ。激うまだでえ

!

「なんじゃ、あの店員。」

「気にするな。」

「それよりお主、世界に興味はないか?」

「世界はもう見てきた。」

「そうか。わらわの国に興味はないか？」

「ルクーゼンブルクか？いい国だった。十年前までは、な。」

「わらわの祖国を馬鹿にするのか？」

「違う。」

グイッ！

バタアアンツッ！〔25669／30000〕

「こいつが滅茶苦茶にしたからだ。どうした、やることなくってこんな所でバイトか？」

「ひい！いい、いっくん。こ、これは！」

「篠ノ之博士ではないか！久しいのう！」

「は？あんた誰？興味ないんですけど。勝手に話しに入ってこないでくれる。」

「・・・お主には今後一切、時結晶は差し出さぬからな。」

「ひっどおおい！フローレンスが虐めるよう！」

「気にするな。こいつは名前なんて覚えたことがない。自分のも、な。」

「そうか。」

「ねえ、束さんが呼んだんだから返事をしなよ！」

「死刑にするぞ!」

「できっこないのさ! 私はオーバースペックだからさ。」

「織斑一夏!」

「お任せを!」

「わあ!! なしなし!! 謝るよおう!」

「分かったら店の邪魔をする前に帰れ。」

シユババババババ……

「折角の美味しいそばがのびちまう。早いところ喰おう。」

「そうじゃな。」↑悟った

ずぞおおおおおつ

「そうやって音を立てて食べるのか?」

「ああ、そうだ。日本じゃ、イタリアン以外の麺はこうやって食べる。」

「う……むむむ……。難しい。」

「気にするな。食べ方なんて、美味しく食べて人に不快な思いさえさせなければ何だつ

ていい。」

「なるほど。」

クルクル

「美味しい！ミヤビじゃなあ！」

「それは良かった。」

「……ん？わらわは目が回……。」

「……。」

バタンツ

チラツ

「お客様、大丈夫ですか？お休みされるなら、どうぞこちらに。」

— 某所 —

「う……ここは？」

「お目覚めですか？王女殿下。」

「おぬし、何をしておる。」

「あなたには人質になってもらいます。利用価値が大いにありますからね。」

「どうする気じゃ？」

「心配ご無用です。どうでも良くなりますから。今から、ね。」

「見くびられたものじゃ。最後に三秒だけ時間をくれてやる。」

「？」

「いいや、必要ない。」

「では、参る！」

ドベキシ「オフウイ」【0/200】

「これで片が付いた。巻き込んでしまつてすまないと思つてる。」

「べ、別に構わぬが・・・お主、この数を一人で？」

「まさか。来たときには寝てたのさ。」

— I S 学園、寮 —

「なんたる失態！なんたる無様！」

「介錯はしてやる。いつでもいいぞ！」

「その刀は何だ！」

「今から切腹するんだろ？介錯は私がしてやると言つてるんだ。」

「ここだけの話、篠ノ之は剣術の達人だ。」

「お前のことだ！織斑一夏！貴様が付いておきながら、誘拐されるとは！」

「だから事前に伝えたる！スパイがいると！あぶり出して殲滅するためにはこの手が最善だ。いわゆるコラテラルダメージというものに過ぎない。軍事目的の為の致し方ない犠牲だ。」

「犠牲者は、出でないと思うけど?」

「王女殿下を巻き込んでおいてどの口がほざく!織斑一夏!貴様はルクーゼンブルク本国へ連れて帰り、然るべき罰を受けてもらう。」

「無理無理、無駄なこつた!」

「真耶!貴公、IS学園の教師だろう!この生徒を引き渡せ!」

「私如きじゃ、この人達の処遇については対処出来ません。」

「上に取り合うくらい出来るだろ!」

「織斑君達に言うことを聞かせられると思いませんか?」

「そうやって逃げるのか!前もそうだった!逃げるといふなら、今度は捕まえるまで

追いつけてやる!イエエエエエア!」

「ドカ、ベキ、ボキイ!」【1/2500】

「私だって、伊達に織斑君達と生活してゐるわけじゃないんですよ?」

第70話 銃弾や砲弾の傷じゃない……

— 引き続き、寮 —

「ジブリル！織斑一夏をルクーゼンブルクに招く。近衛騎士団としてわらわを守ってもらおうのじゃー！」

「「はあ??」」

「異議のあるものは名乗り出よ！」

「ある。」

「なんじゃ？申してみるがいい。」

「一夏がルクーゼンブルクを守ってないと思ってるわけだな？」

「？」

「一夏に千ふ……織斑先生、それに私がいなければ、今頃、ルクーゼンブルクは海の底だ。分かっているのか？」

「どういう意味じゃー！」

「篠ノ之束を放っておけば、時結晶を掘り尽くしたさ。それを止めたのが俺達だ。」

「!？」」

「だからまあ、一夏に地上の場所なんて関係ないのよ。」

「ふん！そんなバカな話があるわけがない！わらわに織斑一夏を取られるのが悔しいのじゃな？わらわには分かるぞ！」

「別に？あんた達じゃ連れて行けないし、連れて行けてもすぐに帰ってくるし。」

「よろしい！ならば織斑一夏の所有権をかけて女同士、ISで真つ向勝負じゃ！」

ガシツ！【874／1000】

「痛い痛い痛い!!!」

「俺はものじゃない。」

「分かったから！手を離すのじゃ!!」

ズキズキ

「まあ、勝負するって言うなら受けては立つわよ？」

「舐めおって！格の違いを見せてやる！」

「いけません、王女！このような下せんのものとの決闘など！」

「言葉を慎め！ジブリル！」

「王女殿下！」

「黙れというておる！」

「!!」

「鈴、ハンデをやれ。そつちは二人で来い。」

「舐められたものじゃ！二対二で勝負をするのじゃ！」

「よせ、オーバーキルだ。」

「ふ。泣きを見ることになるぞ？」

「どうしてもって言うなら、セシリアかシャルロットか。」

「いや、私が行こう。いつ、誰が仕掛けて来るか分からん。私達とて、完全ではない。」

「それもそうね。じゃ、決定で。」

「決まったの。では時間は一週間後の日曜日。第三アリーナじゃ。」

— 鈴の部屋 —

ピンポーン

「お届け物です。」

「はいどうも。・・・あ、また追加パッケージ。んー、どちら？重い割りに微妙ね、これ。」

ポイ・・・ガシヤンツ

「あ、壊した。」

「じきに次が来るわよ。」

「あ、来た。」

「早っ!」

「違う……プリンセスのスペック……」

「一夏から?」

コクコク

「ん〜どらどら? 第4世代。勝ったわ。」

「油断は禁物。……相手の機体には重力を操る装備や高圧高電流を操る剣に盾がある。」

―― モニタールーム ―

「久しぶりだな楽さん。」

「少し見ないうちに一段と遅しくなったな。」

「それにしても、随分と急な話だったな。鈴の姿を見たいなんて。」

「ああ、そのことなだがな。健康診断は?」

「?……少し前にやった。」

「筋密度は高かった?」

「ああ。1000%」

「だろ。実はな……肺がんが見つかったんだ。かなり悪いらしい。」

「おおい、本当は？」

「意外も意外だ。」

「……それで？どうするんだ？」

「取り敢えずは稼げるうちに稼ぎまくる。鈴のためだ。会ってはないがな。死んだあと、いい父親だったと思われたい。……哀れだろ？」

「同情するよ、全く。」

「……何て全部嘘だよ。」

「何？」

「まだ心があつたか。へっへっへ。」

「はっは、はは。」

「完璧騙されたろ。」

「ああ、まんまとやられたよ。もう信じない、なにを言われてもな。」

「おっと、試合が始まりそうだ。」

— 第三アリーナ —

「ルールを確認するわよ。アンタが勝ったら一夏を連れて帰る交渉が出来る。OK

？」

「違う！わらわは連れて帰ると言うておるのじゃ！」

「言うは易く行うは難しよ。悪いことは言わないから、交渉権にしときなさい。」

「お断りじゃ！」

『試合始め！』

ヒュンッ

「よく見切ったの！」

「あ、攻撃？挨拶だと思つた。」

ドガンッドガンッドガンッ

ヒヨイヒヨイヒヨイ

ドガンッドガンッドガンッドガンッ

ヒヨイヒヨイヒヨイ

「狙つてる？」

「逃げるのは弱者のする事じゃ！掛かつてこぬか！」

「それじゃお言葉に甘えて。」

ドンッ！↑衝撃砲

「ふっ！わらわには効かぬ！今度はわらわの番じゃ！」

ズシッ

「これが重力攻撃ね。ラウラから聞いたわ。」

「ふ、その余裕がどこまで持つかの？」

ズウウウウウウウッ!!! 【375/2000】 ↑地面

「お、お主人間か?!」

「?まあね。」

「アイリス様! 私が参ります! アイリス様はもう一人を!」

「任せたぞ! . . . ジブリルよ、篠ノ之はどこへおるのじゃ?」

「箒? あそこでせんべい食ってるわよ。」

「!」

「さて。」

シュババババツ!

「う、動けるじゃと?!」

「そりゃ、この程度なら。」

「お下がりに下さい!」

「ダメじゃ! 引くわけにはいかぬ!」

バキッ! 【23874/25000】

「グアア！」

「大丈夫か！」

「こ、この程度！」

ドカカカカカカカカッ!!↑衝撃砲

「……?地面を打ち始めたが、何じゃ？」

「気でも狂ったか？」

「時間の無駄じゃ!一、二の三で突撃して片づけるぞ！」

「はっ。かしこまりました。」

「一、二の三！」

ドカッ!ドカッ!

ベベベベキッ!

ズドオンツ!ズドオンツ!

「せんべい食うか？」

ボリン、ボリン

「ん、あんがと。」

「小学生じゃあるまいし、砂埃を立てるのは寄せ。」

ボリン、ボリン

「常に相手するほどの敵じゃないのよね。」
ボリン、ボリン

「なるほど、同士討ちか。」

ドコッ！〔0/25000〕

「アイリス様！ エネルギーが！」

「ジブリル！ 大丈夫か！」

「そろそろ戻るわ。せんべいあんがとね。」

「ああ、怪我させないようにな。」

「おのれえ、姿を隠しておって！ こうじゃ！」

ズシッ！ ↑重力制御

「まだまだだね。私の敵じゃないわ。・・・ゲフツ。」

「うぬぬぬぬ！ もう一度じゃ！」

「アンタ、他に攻撃はないわけ？」

「全力じゃ！」

ヒュンツ！

「あと、攻撃に集中するのは良いけど、足動かした方がいいわよ。」

「?!」

「この距離で打てば私の勝ちだけど、どうする？続ける？終わる？」

「続けるがよい！私を打ち倒すのじゃ！」

「はいはい。」

「!!お主！距離を取るとは舐めておるのか！」

「いや、続けたいって。」

ブチッ！

「ああああああああっ！」

びよーん、びよーん、びよーん

「逃げるでない！」

「はいはい。」

びたっ

ズウウウウンッ!!!

「どうじゃ！最大出力じゃ！」

「うん。……で？」

「」

「何か忘れてません、か？」

「……？え、エネルギーが！」

フツ・・・

『ジブリル、アイリス王女、両名エネルギー切れにより、この試合、凰鈴音の勝利！』

第71話 これぞアイリスの真髓

— 食堂 —

「で？親父さんは何だつて？」

「大真面目なところ、病気になったと思つてたけど健康その物だつたんだつて。」

「それは聞いた。どうするかつてことだ。」

「結局、お母さんまで来たのよ。」

「よく学園に入れて貰えたな。」

「よく言うわね、お父さんを手引きしといて。同じことをしたのよ。何やかんや再婚するみたい。」

「そうか。」

「まさかあそこまでバカなことを考えているとは思わなかつたけど？」

「誰にだつて、間違いはある。鈴の親父さんだつて、不幸になりたかつたわけじゃない。」

「そうなんだけどね。ま、難しいことを考えるのはやめやめ。」

「いつまでわらわを放つておるのじゃ！」

「何だ、帰ったんじゃないのか？」

「負けたのでな。残ることにしたのじゃ。」

「なんで、また。」

「勝つたら連れて帰るの逆じゃ。負けたから残る。それに、お主をわらわの師匠に任命する。どうじゃ、嬉しかろう！」

「道理で不自然な時期に転入申請書が出たなど。」

「とにかく、これからは学友じゃ！よろしく頼むぞ！」

「なあ、山田先生。14だが転入できるのか？」

「ま、まあ特例と言うことで。あははは……。」

「ところで？何でこつちのまで制服を着てんだ？」

「罰ゲームです。」

「どうだ。まだ十分、学生に見えるだろ？」↑ヤケクソ

「優しいクラスメイトに恵まれたようで何より。」

「同情されているみたいに言うな！」

「というより、山田先生。一度卒業したんだろ？いいのかよ。」

「え？あゝ、まあ、これ小説だって織斑先生も仰つたので。」

「「それ、マジで思つてんの？」」

「・・・え？」

— アイリスの部屋 —

「のう、ジブリルよ。」

「何でしょう。」

「わらわは、兄上達にも姉上達にも愛されておったのじゃな。わらわを政治から遠ざけるために、ISを与えてくれたのじゃな。」

「アリス。きつと素晴らしい王になれるでしょう。」

ガタツ↑天井板

「you're king of kings。」

「Queenじゃ！」

「あ、そうか。」

ゴトンッ

「・・・?!一夏!お主どこから現れておるのじゃ!!」

パか↑天井板

「うっさいわよ!夜よ!静かに!」

「鈴!お主もじゃ!」

「仕方ないわよ！消灯時間を過ぎたら廊下に出ないって決まりなんだから。」

「何故そこは守る！というより、それは部屋から出るなど言う意味ではないのか?!」

「細かいことはいいのよ。それより静かにね。お休み。」

カポッ

「・・・ジブリルよ。」

「はい。」

「わらわ達は夢でも見ておるのか?」

「・・・と、言うことにしておきましょう。」

— 整備室 —

「「うーん。」」

「どうした、マズいのか。」

「マズいつて言うかなんて言うか。一夏君、ほんつとうに使ってないんだよね?」

S。

「いやあ、その通り。それが悪いのか?」

「いや、悪くはないんだけど・・・何で第三形態にシフトしたのかな・・・。」

「どさくさに紛れて大気圏目掛けて投げたんだが・・・いつの間にか戻ってきてた。」

「うん。誰かが拾ったら戦争の原因になるからやめてね。」

「・・・システムもほとんどブラックボックス。これじゃ、何も出来ない。」

「そうか。世話んなったな。」

「あ、そう言えば一夏君。シャルロットちゃんが相手して欲しいって。」

「どこでだ。」

「第三アリーナ。」

「よし、分かった。」

— 第三アリーナ —

「ん？あれはまさか・・・メイトリクス！」

「え？一夏？」

「話があるって？」

「あ、うん。ちよつと面白い技を見つけて。」

「どんな技だ。」

「こんな技。」

ブオオンッ

「リヴァイヴとすば・・・コスモスを分離できるの。まあ、コスモスは半自動なだけ

ど。」

「なるほど。久しぶりに腕が鳴る。」

／＼デエエエエエエエエエエ！／【999999／999999】

「それ、腕から出てるの？」

「ああ、そうだ。」

「」

— 一時間後 —

「どうした！もう終わりか！」

「うーん、エネルギーがなくなっちゃった。」

「そうか。」

「それより一夏！すっごい強くなったんだね！僕、驚いちゃったよ！」

「ああ、シャルは随分と成長した。」

「先生が良いからだね。」

「『良い』だと？『最高』だろ？」

「あは、それもそうだね。」

ヒュッ！

パシッ！

「大佐ア！調子はどんなだ？」

「こつちに来て確かめろ！」

「いいや結構。遠慮させてもらうぜ。」

「来いよラウラ。怖いのか？恐怖心なんか捨てて掛かってこい。」

「手抜きは無用だ。行くぞ大佐！」

「来いラウラ！」

ズドオンッ！ズドオンッ！

ドオオオオオオンッ！

「弾切れ！」

——夏の自室——

コンコン

「織斑一夏。おるか！」

ガチャ

「どうした。」

「クツキーを焼いたのでな。お裾分けじゃ。」

「そりやありがたい。早速頂こう。中へ入れ、紅茶を煎れる。」
コポコポコポポポ……

「良い匂いじゃな。種類は何じゃこれ？」

「何だったかな……。セシリアにもらったんだが。」↑ど忘れ
「ローズヒップではないかと。」

「いや違うな。」

コトツ

「早速頂く。」

ポリツ

「アリスは、クッキーだと言ったな。」

「そうじゃ。どう見ても、美味しそうなクッキーじゃ。」

「あれは嘘だ！」

「バタアアン！」【0／9999】

「織斑一夏が倒れるほどの旨さ！このジブリルも頂きます！」
パクツ

「……ありす。」

「何じゃ？」

「クツキーだと言いましたよね？」

「ど、どうしたお主まで。」

「あれは、U・S・O・D・A☆。」

「ドサツ！」【0/2500】

「ど、どういふことじゃ！ま、まさかマズいのか！」

「チョビツ」

「う！．．．．．ううううううう！マズい！」

— 医務室 —

「セシリア以来、3回目ね。一夏を完膚無きまでに叩きのめしたのは。」

「その前はなんじやったのじゃ？」

「自爆に巻き込まれただけ。今なら、余裕だろうけど。」

「そうか．．．。やはりこやつも人間じやったのじゃな。」

「あ、目が覚めた見たい。」

「ここは、保健室か．．．。」

「残念だったね。クリニックよ。」

「そうか．．．。」

「で、何を食ったの？」

「鈴は知らないほうがいい……。俺だって、出来ることなら忘れたい」

「下らないわよ、恐怖でおかしくなったわけ？ 相手は只のクッキーよ、どうってことはない。」

「腐るよなあ」

「まったくですわ。サンドイッチならともかく、クッキー一つにこれでは、大げさすぎますわ。」

「大佐、何をビビってんだ。」

「試してみるか？ 俺が意識ほどを失うほどのクッキーだ。」

「いや、結構ね。遠慮させて貰うわ。」

「いい判断だ。俺から学んだのかな？」

番外編：暮桜が散るとき I S 学園は沈没する。

暴風雨の吹き荒れる海。

その上空で織斑千冬は戦っていた。その相手は I S 『赤月』の力に溺れ、我を忘れ暴走した友人の妹。

I S を使用しての戦いは、パワーでも技術でも千冬が上回っている。それでも千冬は押されていた。

理由はただ一つ。無傷で救い出さなければならぬというミッションがあったから。

彼女は、持久戦に持ち込むことで相手の消耗を待っていた。

作戦は上手く進んでいるようで、徐々にではあるが赤月の動きが鈍っていく。

目の前の相手に全力で当たる。千冬はいつの間にか……背後の警戒が手薄になっていた。

「グあッ?!」

不意打ち。

何者からか背中に攻撃を受ける。吹き飛ばされ、そして受け身を取る間もなく砂浜に叩きつけられた。

千冬は攻撃の飛んできた方角を見る。そこには無機質な全身装甲の I S が浮いていた。

敵の姿を視認した。しかし立ち上がる間も与えられずに二機の I S から集中砲火を浴びる。

〈ダメだ、エネルギーが……。〉

織斑千冬、絶体絶命のピンチ。

その時、赤い炎に包まれ颯爽と赤い I S が飛来する。

それは飛んできた勢いを使い全身装甲の I S を蹴り落とし、その反動を使って赤月も後ろ蹴りで蹴り飛ばした。

赤い I S は、先に蹴飛ばした全身装甲の I S に向かっていく。

千冬のすぐ近くの波打ち際へと赤月が墜落する。それはすぐに立ち上がり赤い I S へ向かっていこうとしたが、織斑千冬は最後の力を振り絞って赤月にしがみつく。

パンチ、キック、投げ技。まだまだ荒削りな戦い方だが、半身を海につかりながらも圧倒的な身体能力で全身装甲の I S を翻弄する赤い I S 。

その姿に、千冬は負けてなるものかと奮い立った。

やがて劣勢と見たのだろう。全身装甲の I S は距離を取ったかと思うと煙幕の中に隠れ、そして赤月に食らいついていた千冬に荷電粒子砲を撃つ。

モロに受けてしまった織斑千冬は、発生した衝撃に吹き飛ばされる。赤い I S が全身装甲の I S を追いかけて煙幕へと飛び込むが、そこに何者の姿もなかった。

ほとんど間を開けることなく、赤月も同様にして消えていった。

砂浜に倒れる千冬は、辛うじて自分の意思により I S 『暮桜』を解除する。

赤い I S は、彼女から少し離れた場所で飛び上がると、両ひざを抱えて空中で回転を始め、I S を解除して波打ち際に着地した。

そこから現れたのは、少年であった。

彼は倒れて動かない織斑千冬へと駆け寄る。

「織斑さん大丈夫ですか、しっかりと下ささい！」

彼は倒れていた千冬の頭を支えながら起こし、そして呼びかけた。

荒れ狂う波が、今にも二人をさらおうとする。

彼の呼びかけで千冬が目を開く。少年は千冬に肩を貸し、その場から離れた。

岩礁の陰に隠れ波と風を凌ぎつつ、レオは千冬の手当てを行った。

処置が済むと、千冬は苦痛に顔を歪めつつも立ち上がる。

「私を織斑千冬と知って助けてくれたのか？」

先に言葉を紡いだのは千冬の方だった。

「あなたは白騎士であり、日本の I S の代表選手、操縦者の第一人者であることも知っ

ています。」

「君は一体誰だ。」

前者の情報は、自身と友人以外に知るはずのないもの。千冬は正体不明の相手に警戒心を抱く。

「レオです。」

「レオ。」

「僕のふるさとは、あの龍座たつにはもう一つの星が見えていました。」

彼がとある方角の空を指さす。その箇所箇所の空がスーツと暗くなり、一つの星が浮かび上がった。

「二カ月前まで、あの龍座にはもう一つの星が見えていました。この地球のように美しい自然に恵まれた、R77星です。ところが、正体不明のロボットにR77星は全滅させられてしまいました。父も、母も、そして兄妹も。それから僕は故郷にそっくりの星、地球で生きようと決心しました。地球は僕の第二の故郷です。市賀いちかゲンと名乗って平和に暮らしてきたのに、またあのロボットがやって来た。」

語り終えたとき、レオは哀しく、そして険しい顔をしていた。

しかし千冬は敢えて厳しい口調で語りかける。

「ゲン。お前は愛する地球を、お前自身の手で守るんだ。」

「愛する地球を僕自身の手で?」

意味が分からずオウム返しする。

「I S 学園へ入学するんだ。」

「だって織斑さん、あなたがいるじゃないですか。」

「私にはお前が必要だ、しかも。お前にも私が必要だ。」

「しかし、白騎士があるではありませんか。」

数々の戦いを潜り抜けてきた彼女が、何故自分のことを必要とするのか。レオはまだ分からない。

だから次に千冬の言った言葉を、すぐに信じる事が出来なかった。

「白騎士も暮桜も、もういない。」

「何ですって?!」

「見るか?・・・はっ!」

千冬が待機状態の I S、暮桜をレオが見える位置に掲げる。それは光の粒子となつて千冬の体に向かい始める、その瞬間だった。

突如として暮桜が火を噴く。千冬の手から離れたそれは、ひどく焼けただれていた。

その衝撃か、千冬がバランスを崩しよろめく。

「白騎士! 千冬さん! 大丈夫ですか?!」

慌てて駆け寄り、レオは彼女の体を支える。

「やってくれるな?……やってくれるな?」

「はい。」

レオの力強い返事を聞くと、千冬はよろよろと立ち上がり、西の方角を向いた。

レオもそれに倣って西を見る。

重く垂れ込めていた暗雲はいつの間にか消えてなくなり、赤く大きな太陽が沈みつつあつた。

「あそこに沈む夕陽が私なら、明日の朝日は市賀レオ。お前だ。」

「やらせて下さい。」

レオはもう一度決意を固め、力強く返事をする。

千冬が手を差し出す。レオもそれに応じ二人は固い握手を交わす。

「ティエエア!」

と、千冬がその手を思いつき振り上げた。

とてもけが人とは思えない力強さに、レオはたまらず投げ飛ばされる。

「何をするんですか?!」

何もしなければ後頭部を地面に打ち付けていただろう。レオは、バク転することで転倒を免れ、そのまま距離を取り驚いた顔でそういった。

「どんなときでも油断は禁物だ。分かったな。」

少し笑みを浮かべつつ、千冬はレオのもとへと歩み寄った。かくして、二人の知的生命体が心を一つにして戦う事になった。

スツ↑カロメ

「・・・!!よせエ!」

チユドオオオオオオンツ!【1/200】

「どういうことだ?」

「腹が減った筈は、スニーカーズでしか戻らない。」

「・・・え?そういう?」

―数時間後、ISの地下区画―

「で?筈はまだ見つからないわけ?」

「おおよその位置は分かっている。」

「じゃあ、行きましょ。」

「慌てるな。山田君、例の人を。」

「かしこまりました。」

スタスタ

「ヒカル火篝ノじゃないか。どうしたの、その似合わない(包)タイは。」

「んーほっとして欲しいんだな。って言うか私の名前、篝火ヒカルノなんだけど・・・。」

「冗談だよ。」

「で？マジで何だ、その（包）タイは。」

「分かんないねえ。仕事してたら、突然ドカンッだもの。気が付いたときにはこの有様。ま、君達にしてみれば価値のないモノだけど、昨年 of 年末に使ってもらった、例の試作品の量産品が盗まれた。」

「あれだろ、赤椿の量産型。」

「犯人はただ一人。束だ。」

「？質問いいかな？」

「ダメだ。」

「言うな。」

「後にしろ」

「……言われると思った。」

「まあ、待て。質問ぐらいさせてやれ。何だシャル。」

「なんで篠ノ之博士が、今、関係あるの？」

「決まってるだろ。篠ノ之束をしばきに行くからだ。」

「??篠ノ之さんを探しに行くのは？」

「??誰が行くって？」↑一夏・ラウラ・千冬・鈴・セシリア

「「え?」」 ↑シャル・楯無・簪・他多数

「だって、さつき嵐さんが・・・。」

「アレは箒の居場所の確認よ!それとこれとは話が別。」

びーびーびー

「何の音?」

「探知機のブザーだ。やはりそうか。箒のスニーカーズを束が奪ってる。」

「なん、何でそんなことが???」

「GPS仕込んだからな。」

「「」」

「これで分かったろ。箒は束を追えば必然と捕まる。以上。出撃!」

「速さが肝心。」

「「・・・ええ?!」」

—太平洋上空—

「みて、洋上に人工物が浮いてる!!」

「ああ?よく見ろ、そりゃブイだ。」

「いや、メガ・・・もつと大きい!ギガフロートだよ!!あの大きさは!」

「ラウラ！ 箒の反応はあるか？」

「いや、ISの反応が多数出ているだけです！」

「篠ノ之さんは?！」

「箒がいるなら、スクラップの山が出来ているはずだ。」

「つまり。」

「ここにはいない。」

「・・・え、どうするの?」

「どうするも何も、取り敢えずこいつらをぶっ壊す。話しはそれからだ。」

「それはいいんだけど一夏君。なんだかIS、重たくない?」

「そうか? 俺は快適だけだな。」

「これは・・・?!」

「どうした簪。」

「コードレッド発令。コマンド・・・ISの出力を制限する裏コード?!」

「「ええ?!」」 ↑ シャル、楯無

「「道理で動きやすいと。」」

「「馬鹿野郎！ 何言ってるんだ！ てめえら正気か！ 死にたいのかてめえ！ どっかし天井

！ てめえ何やろうとしてんのか分かってんのかい?!」」

「決まってるだろ。」

「突撃して。」

「ぶちのめす。」

「それだけですわ。」

「二私達、帰るよ。マツチヨの遊びには付き合えない。」三

「慌てるな。まだ終わっちゃいない。」

「大佐!携帯電話が群を成してこっちに。」

「ちよつと多いわね。」

「だから?」

「言っただけよ。」

チラッ

「ホントに多い。」

「言っただでしょ?」

「殺る気じゃないわよね?」

「殺るとも。」

「よろしくつてよ!」

「銃はよせ。」

「クラシックに？」

「ああ。」

「これを使いたくて、ウズウズしてましたわ！」

ドボーオオオオオッ!!!
【(0/1000)】↑敵IS

【0/10000】↑ギガフロート

「なんだを！」

「お主らには借りがあるのでな。これぐらい、バチはあたんであろう！」

「(俺(私)も久々頑張ったのに、なんだよ!!!いい役持っていきやがって！」

「待って！アレ何?！」

ザバアッ

「マツテ・・・アレ・・・ナニ。」

「どうやら、スニーカーズを追って中に居たらしい。・・・ここで待ってろ。」

ヒューンッ

「ほら、スニーカーズ。」

パシッ・・・モグモグ

「どうだ。」

「これ美味しいな」

「クソ不味いだろ」

「I'm back。」

—ISS学園地下特別区画

「一夏、ここにいたのか。」

「おおとも。それがどうした。」

「ここで何してる。」

「見れば分かるだろ。スニーカーズの搬出だ。」

〈何・・・?!〉

「想像してみろ、スニーカーズは2.7キロで箒のプレデター化を防ぐ可能性がある。それが5トンあればどうなる?とても興味深い。」

「そいつは深いな。」

「ふんふん。そんないつくんとちーちゃんに、東さんが興味深い話しを持ってきたよ
!」

「何だ、話してみろ。」

「そうだねえ、ちーちゃんが今までいつくんに黙ってきた君達の両親のことを教えてあげるよ!いつくんの誕生はとおっても大事なんだよねー!」

「独り言、言いながら説明するのがいいな。とぉーっても大事なんだよねーって。」

「ん？何だろうこれ？・・・!!これはですね、織斑一夏、織斑一夏のバイタルデータなんだよ！今ならですね、これにちーちゃんのバイタルデータまで付けまして発売してるとよー！」

「……………」

「でね、この織斑計画って言うんだけど、ある時を境に、パタリと止まるんだよ。何でだと思っ？何でだと思っ？それはね、この完璧超人の束さんが生まれたから何の意味もなくなったからなんだよ。でもねえ、君達二人は生き残った。究極の人類に匹敵するスペックだったからね！だからさあ、君達に両親なんていないのさ！ぴったりの言葉を、君達に贈ってあげるよ！」

「この馬鹿者め。」

ピクッ

「つまり嘘をついて相手を騙すって事なんだろう？俺にはできない。」

「どの口が言ってるのかな〜？」

バサッ!!

「それはな、束。お前を創造したのが俺達だからだ。」

「?!?!嘘だあああああ!」

ダダダ……

「なあ、一夏。嘘をつくのは出来ないんじゃないのか?」

「そんなセリフあったか?」

「ところでマドカ。いつまで隠れてる。」

「……織斑一夏あ、調子はどんなだ?」

「こつちへ来て確かめろ。」

「いや結構。遠慮さしてもらうぜ。顔出してみろ。一発で、眉間をぶち抜いてやる。

私達は兄弟だ、苦しませたかねえ。」

「マドカ、それは関係ない!目的は俺を殺ることだろう!」

「へハハハハハハ!」

「右手を使わない、お前でも勝てる。……来いよマドカ。ISなんか捨てて、かかってこい!楽に殺しちゃつまらんだろう。ナイフを突き立て、俺が苦しみもがいて、死んでいく様を見るのが望みだったんだろう。そうじゃないのかマドカ!」

「てめえを殺してやる!」

「さあ、ISを放せ、一対一だ。楽しみをふいにしたくはないだろう。来いよマドカ。

怖いのか?」

「ぶつ殺してやる!……野郎おおお、ぶつ殺してやああある!!!」

